

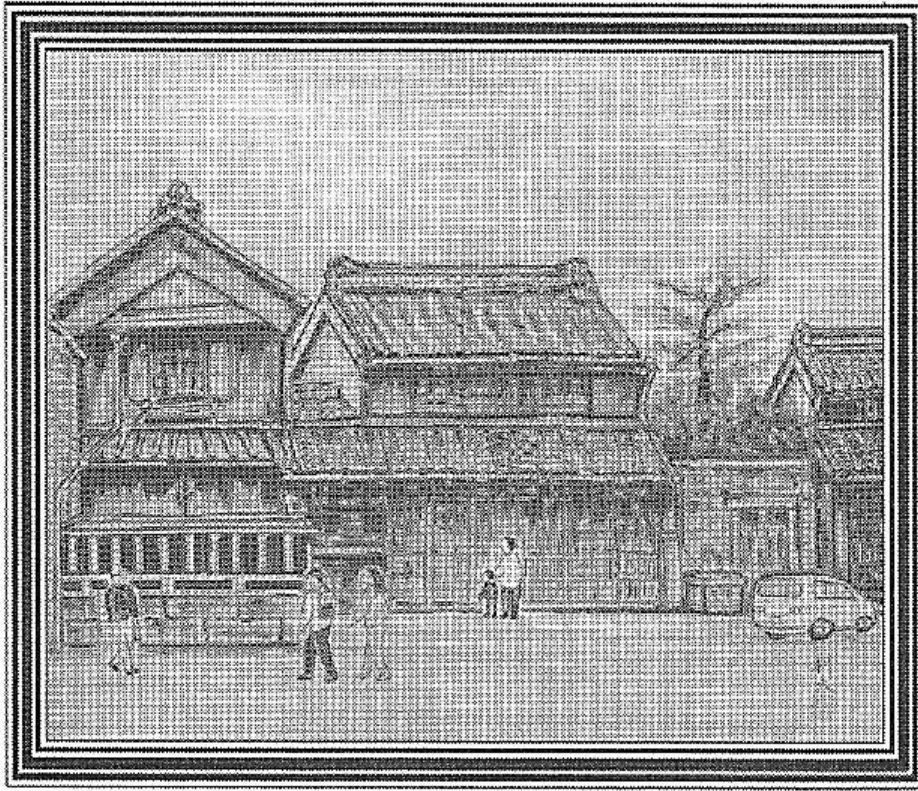
越谷市郷土研究会会報第十五号

古志賀谷

平成二十一年七月刊

日光街道・越谷宿

墨絵・安西利夫



巻

頭

言

NPO法人 越谷市郷土研究会
会長 宮川 進

会員の皆さまのご協力と編集委員の方々のご尽力のおかげで、会報「古志賀谷」第15号を刊行することができました。有難く、お礼を申し上げます。

昨年は越谷市の市制施行50周年の年にあたりました。会報も、その記念として、「50年前の越谷を語る」と「高崎常任顧問の足跡をたどる」という二つの聞き書きと「50年前のあなた」というアンケートを特集させていただきました。

以前、越谷市にお勤めの方から、「越谷なんて何もない」といわれたことがあります。そんなことはないのです。たった50年の間にも、二つの聞き書きとアンケートで語られたような、いろいろ、面白いハナシとコトがありました。

(同じ年に50周年を迎えた都市でも、市や行政の歴史だけではなく、そこに住んでいた人々のことをこんなにいっぱい、記録したところはないのではないのでしょうか。)

古代から始まった越谷の歴史には、もっともっと、面白いハナシとコトがいっぱいあるはずですよ。それを探し、記録するのが、この会報の役割の一端でもありましょう。お殿様もいなかった、超有名な社寺もない越谷ではあります、「何も無い」まちなではなく、面白いハナシとコトがいっぱいのまちなのです。越谷と越谷市郷土研究会、万歳。

古志賀谷 第15号

目次

巻頭言

会長・宮川 進

聞き書き 50年前の越谷を語る

聞き書き 高崎常任顧問の足跡をたどる

大吉村の香取神社と松伏溜井図

越谷市内の渡し場

中町 浅間神社の懸仏

越谷ふるさと話 越谷吾山と越谷の方言

「久」か「興」か― 吾妻鏡 建久五年六月三十日の条

越谷「焼き米」の方が草加煎餅より古い

四国で亡くなった越ヶ谷の六十六部行者

新発見！越谷在住の絵馬師たち

日光道中ぶらぶら歩き 第2回

火の見櫓を訪ねて

川口の「お女郎仏」と大沢

わたくしの夢、観光都市越谷

田中利昌

岩瀬静江

三浦栄市

和泉 守

木原達也

加藤幸一

宮川 進

宮川 進

増岡武司

水上 清

篠原陸郎

鈴木進志

87

86

82

76

72

58

56

49

45

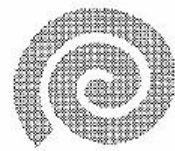
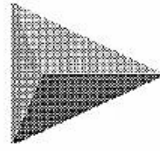
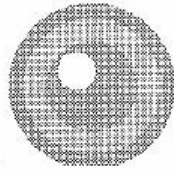
42

35

31

13

1



越谷の史跡紹介 塩かけ地蔵

絵図と古地図と写真でたどる大沢橋

中世東国水運史から見た

『吾妻鏡』建久五年六月三十日条の問題

越谷市内を流れる元荒川は元・利根川だった

増林の勝林寺本尊と岩付の渋江氏

大相模地区 文化財パトロール

当会主催の講演会報告

昔の遊びを体験し学びました 大間野町旧中村家

史跡めぐりの記録一覧

史跡めぐり報告 第371回〜第391回

アンケート

展示会作品一覧

会員名簿

役員名簿

会報掲載基準 あとがき

墨絵 日光街道・越谷宿 阿波踊り

菅波昌夫

原田民自

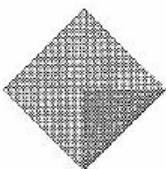
秦野秀明

秦野秀明

山本泰秀

安西利夫

165 164 162 161 139 116 115 114 112 111 110 106 100 91 90

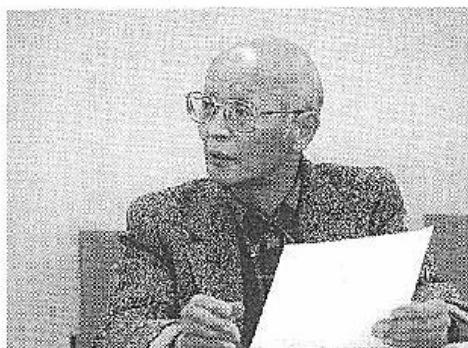


聞き書き

50年前の越谷を語る

平成20年(2008)12月6日

越谷市中央市民会館



渋谷さん



岩瀬さん



野口さん



北川さん

— 四名の方のプロフィール —

(五十音順)

岩瀬静江さん

越谷市大沢に生まれ育ち、現在は
越谷市赤山本町にお住まいです。

北川義男さん

北葛飾郡松伏村で生まれ、現在は
越谷市千間台西にお住まいです。

渋谷正芳さん

越谷市蒲生に生まれ育ち、現在も
越谷市蒲生にお住まいです。

野口祐許さん

越谷市谷中町に生まれ育ち、現在も
越谷市谷中町にお住まいです。

本日はお忙しい中お集まりいただき、ありがとうございます。
昭和三十三年（一九五八）十一月三日、文化の日に越谷市が誕生して五〇年の歳月が流れ、その間、現在に至るまで越谷市は大きく飛躍を遂げてきました。また、町の様子も市民をとりまく環境も大きく変貌してきました。

そこで今日は当時の越谷をご存知で、その変貌を見守って来られた、岩瀬さん、北川さん、渋谷さん、野口さんの四名の方にお集まりいただき、五〇年前（昭和三十三年当時）の、のどかな越谷についての思い出や体験談を語っていただこうと思います。四名の方、どうぞよろしくお願いいたします。

越谷駅周辺の思い出

岩瀬

元の越谷駅の武州大沢駅、現在の北越谷駅前には大きい木がありましたよ。自転車預かり屋さんなんかもありました。駅前広場はそれほど狭くなかったですね。小学生で遠足に行く時なんか大きい木の前に並んで電車に乗って行ったことありますから。駅舎は平屋建てだったので電車がホームに入ってくる時にかげ足で行けば乗れたんです。下りの方に行くには線路を渡って行きました。

北川

春日部、越谷、草加、西新井以外の駅はホームから二、三段下りて線路を歩いて渡って向こう側へ行きましたね。蒲生とか北越谷とか大袋なんかみんなそうでしたよ。

野口

ほとんどの駅は線路を渡って向かいのホームに行ったんじゃないですか。

渋谷

駅全般的にいうと日比谷線の開通により本数が増えたために、電車の発着が増加し今のよう高架橋が出来たの

野口

じゃないかと思えます。

そうですね、そのころ線路が今の税務署の方へ行っていたのです。当時、近所に鉄工所があってそこへ線路が引かれていたんです。もう一つは越谷駅前に丸通の大きな倉庫がありまして、そこに停車させるために別に線路が引き込まれていた。それを利用していたのはわずかだったと思うのですけれど。

渋谷

蒲生にも引き込み線がありまして、化学肥料、燃料、建設資材等を都内から運んで来て、こちらから積み出すのは米だとかワラ製品など、そういう関係の物を積み込んでいました。

野口

赤山県道を越谷駅に向かって行くとまず踏切を通りすぐ右折すると駅方向へ行くんですけれど、すぐそばがドブみたいな所でイチジクの大きな木が一本あって、通るたびに熟した実が欲しくて欲しくて、と思ったことを今でも覚えていっています。駅近くになると自転車預かり所があって、その隣が黒田電器という電気屋さん、当時のプロレスの放送を見せる見せろと道路いっぱい、その時間帯になると寄って来て、「何けちけちしてるんだ早く見せろ」と威張っていたもんなんです。

岩瀬

大沢の駅には街頭テレビがありましたよ。当時ののはやりの番組を見た覚えがあります。

北川

私は通学で越谷駅をよく利用しました。一番覚えていたのはこの中央市民会館の通りは日通倉庫の脇の通りだったんです。駅から二方向に道が分かれるが、この通りは余り人が通らないんです。この道は前から細い道路があったんですが、どつちかという農道を少し広げたよ

うな道でしたね。

駅左側の通りがバス通りなんです。バスが吉川行きと野田行きバスと浦和行くバスと三つあったですよ。駅のはじの大沢寄りの方に交番があって、交番の所にあるバス停が国際興業で浦和へ行くバスでした。三つのバスが全部そっちの道を通って旧道に出てから三つに分かれる。

当時、東武鉄道の電車は山手線の払い下げの電車ですよ。下の番号を見ると東武電車が書き込んだ番号の他に省線何番という番号があつたんです。床は板張りでコールタールを塗ったような。連結器のところがたまり場なんですよ。そこで酒を飲んだりたばこを吸ったり、車内放送で「混んで来たのでたばこはご遠慮ください」と車掌のアナウンスがありました。

また、農家の副業としては養鶏が盛んだったんです。バタリと称してアパート式の三層とか四層の鶏小屋を造って傾斜があつて卵を産むとコロコロと転がって落ちてくるんですね。一軒の家で三千羽以上の数でないと採算が合わないんです。早朝から、水、餌、卵の収集、鶏糞の後始末等の労働があるので、自分の朝ごはんの時間が少ない。一息入れると鶏に昼御飯をやる時間になるんですね。水とやかんで注いで歩いて行った奴がスイッチを入れるとサーッと流れたりするようになってきたんですね。ともかくも臭いといったらなかつたですね。

野口 鶏のバタリから出る餌を食べるために越谷市にはシラコバトがたくさんいたんですね。ですからバタリが消えていくようになるとシラコバトもだんだん少なくなつてきたのです。

北川 風が強いとまともに来るんですね。

野口 それに伴いドブネズミが増えましてね。鶏のえさを食べに。道路にもちよるちよると出て来てすごかつたんですね。今は見かけないでしょう。

北川 鶏がたくさんいたので出羽の何んとかつていう家が「焼き鳥御殿」つていわれていましたね。焼き鳥専門のお店になつたんですね。食べに行つてみようかなーと思つているうちになくなつてしまいました。

野口 あれはですね。都内の方が土地を借りて営業していたといふことです。一時はすばらしく繁昌したらしいですが、それほど長くは続かなかつたです。

北川 ところで、今のヨーカ堂の前身は小暮ゴムという工場だったんですよ。ヨーカ堂の近くに大きな池があつたんです。ゴムの会社をつくるために土を掘り上げてそこに工場をつくつたのです。

北川 越谷では元荒川や綾瀬川が流れてますけれど、水が引けないんですよ。日光街道とかが遮断してですね。越谷駅の蒲生寄りのところは大きな池をつくつて雨水をそこにためてそれを引いて田んぼにしたんですね。その池はよく子供が泳いでいたんですよ。

野口 あの頃はほとんど何でもかんでも土地が低いために掘り上げてそして高台にして家を建てるんですね。掘つたところが池になって魚がたくさんいて時期になるとそこへみんな寄つて魚をとるんです。

野口 今の南越の住宅地帯もほとんど掘り上げて田んぼにして作つたのです。掘り上げた周りに柳を刺しておくことでそれが育つて土を川に流れるのを止める役割をしていたんで

すね。そこへ行く細道は天秤棒を担いで行ったんですね。いわゆる農道っていうやつです。

野口 その当時の屠殺場、これが今の南越谷の駅の近くに駐車場があるんですけれど、そこがかつての屠殺場だったんですね。そこがうるさくなつたので今の税務署の近くへ越したのです。馬、豚、牛です。

北川 赤山街道から牛などが荷物を積んで引つ張つてくると動かなくなるんですね。血のおいでね。だから赤山街道に牛などを引つ張つてくるんじゃないといわれたものです。終戦後はあそこはパチンコ屋になつたんですね。屠殺場の跡がパチンコ屋になつて屠殺の怨念でパチンコ屋がつぶれてそこに税務署が建つたので、だから越谷の税務署はうるさいぞ、と血の匂いのする所に構えているんですからね。

野口 そういふ話の一つとして、建てて間もなく雨漏りがするんです。建てて間もなく雨漏りがするのはおかしい、これは動物の怨念ではないかとの噂も大分出ましたね。何やってもですね、怨念がこもっているから駄目だといわれていました。

野口 殺した時の血が羽堀方向に流れます。その堀っていうのは今の越谷駅のところに鉄板が引いてあるんですけれど歩道になつているのが、それが元荒川からつながっているんです。観音横丁に流してそのまま真っすぐ出羽方向へ赤山街道の傍を流れていて出羽堀のT字路の所におつかつてそれが左方向に行くんですけれど、その間今の屠殺場から出る血液がそのまま回りにくつついて臭いの臭いのって、すごかつたんですよ。それでもほとんど回

りが農家で田んぼですから苦情もほとんど出ませんでした。

北川 越谷市内にある駅の近くには川がないですからね、駅のすぐそばに。蒲生の駅で例えますと下り線のすぐ反対側は川がありましたからね。その川が用水で元荒川の方から流れている水が瓦曾根堰を通過して国道を横断して国道沿いにずーっと蒲生まで流れて綾瀬川まで行ってますからね。学校の裏にも用水があつたのが瓦曾根堰から流れた水で、元荒川から流れた水が綾瀬川まで行っているんですよ。

北川 綾瀬川っていうのは排水専門だったのですよ。元荒川が用排水で。

北川 越谷の鴨場のことなんです、私たちが子供のころは学校は国道沿いであつたものだから、政府の高官や外国の王室や外交官の方々の来訪の際は、何月何日の何時頃、皇族のだれだれが来るっていう情報が入るんです。その度にそれに準備して、来られる国の旗を自分たちで作つて日の丸も作つて旗をもつて沿道に並んでお見送りをしたものなんです。

岩瀬 大沢駅にあつた貴賓室を使ったのは汽車ですすよ。私たちのころは自動車なんです。東京から国道を通過して来るとですね。私たちは国道の傍に並んで旗を振つた記憶があります。昭和三十七年ごろでもまだ旗を振つていたように思います。

北川 越谷市内でも国道から遠く離れた生徒はしないんです。あくまでも国道沿いに近い学校がそれをやりましたね。武州大沢駅は東武鉄道をつくつた時の起点の駅だったん

ですよ。あそこから東京の方向や久喜の方向に向かって敷設して行っただけですよ。

蒲生駅の前には目印として大きな銀杏の木と桜の木がありましたね。桜の木は引き込み線沿いに何本か植わっていました。その大きな銀杏の木は東武沿線では一番大きな木ではなかったでしょうか。駅前広場っていうのはかなり広がったんですよ。そこは地域住民の集会場みたいなものでしたね。盆踊りなんかはその広場で行われていました。

草加と越谷が分かれる境の綾瀬川を利用した場合に川に向こう岸に行くとき草加、すなわち新田側に入ってしまうためにいつも対立という喧嘩ばかりしていた。こっちへ来るなよ、蒲生の人は向こうだろう。泳いでいても子供のうちからたわいのない喧嘩なんかもありましたね。でも綾瀬川の土手には遊び場があつていろんな意味で相撲でもつくし採りでも一部の人は土手を利用して家庭菜園をしている家もあつたようです。土手が大きく広がっていましたがね。実際は東京浴衣の染め工場とか、なめし皮で革製品関連の工場も多かったから干潮満潮があつたものだから水もかなりきれいに感じていました。

越谷近辺からどこかへ出かけるというとき自転車が主体なんですよね。電車に乗って大袋駅に行くという人はいませんでした。すぐ、自転車か歩きですよ。

大袋駅を利用するという時はたまたま小学校にプールができたので各町内または越谷地区学校でプールのない生徒たちが一緒にそこへ順番に泳ぎに行つたことぐらいしか記憶にないですね。先ほどの蒲生の話ですが、やはり

渋谷

北川

野口

蒲生は藤助河岸を中心に発展したものですね。したがって今の瓦曾根を過ぎると両方がずーっと田んぼだったので、やつとにぎやかな所に行くには藤助河岸に向かった所の茶屋通りに行けば酒屋でも豆腐屋でも家具屋でもお店がたくさんありました。

商店街はいかがでしたか

越谷は商店がそろっていました。何屋さんでも。にぎやかでしたよ。大沢は飲み屋さんなんかがたくさんありましたね。

野口 何だかんだっていつでも商店はほとんど越谷の町と大沢の一部だけ、そこへ近郷近在の人たちが寄つて来たんですよ。したがって越谷の町はにぎやかだったんですよ。

岩瀬

今はレジ袋で買い物はしますが、むかしは買い物かごがありました。結婚した時に新しい籠を買いましたよ。

渋谷

籠を持つていくのはまだ高級な方です。ザルですよ、われわれは。ザルを持つて魚屋さんに行つても卵を買いに行つても、何にしてもザルを持つて行きましたね。ザル

北川

がない時は新聞紙なんかでくるんでもらつていましたね。買物籠っていうのはずいぶん後になってからのものです。肉屋さんとか魚屋さんとか、ちゃんとしたお店は越谷の旧日光街道しかなかったんですよ。だから「今日は魚を食べるから越谷まで行って買ってこい」と言われると小学校低学年の子どもが大人用の自転車で三角乗りでハンドルの下から顔を出して越谷まで買いに行くんですよ。よくやりましたよ。魚を買う時は目玉をよく見て来いっ

てね。魚屋さんは水をぶっかけてね新鮮味を出すんですが、眼はごまかせない。でも、わからないですよね。「こんな腐った魚買って来て」と怒られましたよ。よくね。

豆腐を買いに行く時は、新聞紙を豆腐の上に乗せるんですね。そうすると新聞紙のしみで動かずに豆腐が壊れずに済むことを豆腐屋さんで教わりました。

岩瀬 肉とか魚は経木（きようぎ）でしたね。

北川 農村ではちよつと離れた所で物を売っているお店を探そうと思つたら火の見やぐらを目当てにするんですよ。その下によくお店があるんですよ。

野口 何にしても町は越谷しかなかったですね。全部ここへ集中してたんですよ。だから二七の市が非常に盛んだったんです。毎月二と七の付く日に開かれる二七の市は越谷市に四百年も前から続いていたんですが、都市化現象と交通量の激増でいまは消滅してしまいました。日光街道をはさんで常に百軒を越える出店があつてにぎわっていったんですが。農作物を中心に衣料、雑貨、駄菓子まで持ち寄る品数は多くて、庶民生活の重要な場として二七の市は栄えていましたけれど。

北川 何か買物をして来いと言われると越谷でしたね。大沢で買ったつていうのは余り覚えていないですね。バスで行つていいかつていうとバカ者と言われてね。バスなんか乗るもんじやないと言われてね。また、バスはおばあちゃんに乗るもんだと言われてね。自転車がよく納豆売りなどが自転車でチリンチリン鳴らして来ましたね。

―― 娯楽はどのようなものがありましたか

野口 村芝居がありましたね。神社等を基地にしまして、その土地にいる青年団が中心になって、はやりの踊りそれに、好きな方がいて先生としてやつて来てくれるんですよ。その教わつた結果を秋口に神社なんかには舞台をつくつて発表するんですよ。

北川 何人が興行師がいたから、旅回りの役者の一団体を呼んで三日間なら三日間興行したものです。

野口 長谷川昇という長谷川一夫の十六番目の弟子という、いわゆる時代劇をやる旅芸人がいましたね。この辺では東武劇場が一番の公開する中心地でしたね。相撲の土俵が常設されているのは瓦曾根の観音様と大相模不動様ですね。

野口 わたしが小学校にいる頃ですが、九州山というお相撲さんがやつて来て十か町村の子供たちを集めてそこで興行をやつたんですよ。大沢小学校にも池のすぐそばに土俵がありましたね。

岩瀬 学校からもよく東武劇場にでかけたことがありましたね。東武劇場は最初は芝居が中心だったんですが、だんだん映画に変わつて来たということですね。とにかくあそこの町のそばに風俗営業の所がありましたね。

野口 また、巡回映画というのもありましたね。学校へセールスに来て生徒一人いくらくらいくらと学校の先生が交渉したのでしようね。

岩瀬 増林の小学校までも映画を見に行つたことがありましたね。学校からね。風があるとスクリーンがゆがんでしま

って大変でしたよ。

北川 小学校の校庭を開放して無料で映写会をやりました。地域の娯楽という形で行われていましたね。巡回で映写の機材が回ってくるんですよ。中には一般の業者が来て金を取ってやるものもありました。金払って見ることはありませんよね。校庭だったら垣根の所から見えますから。ほとんどが無料映画でした。マメにやっていた所は、だいたい月に一回くらいの割合でやっていたような気がします。

岩瀬 越谷でのテレビの普及は皇太子の今の天皇の結婚を機に増えたようです。

野口 一般の農家の方の家はほとんどテレビは入ってなくて、ちよつといいところに勤めている方の家はやつぱり買える力があつたのでしよう。そこに見に行つたつていう記憶がありますね。

夏の盆踊りも盛んでした。だいたい二日にわたつて行われました。本格的にやぐらを組んで提灯を張つてやりました。ただ大字単位で行われましたから、どこどこではいつやつて、どこどこではいつと、多少、日をずらしててやりました。

渋谷 蒲生の駅前をやつた時があつたんですね。準急電車がノロノロ運転したという位に派手だったんですね。各駅停車の電車は発車時間が遅れたということも聞いています。乗り降りできない状況だったようです。駅の真前でやっていますものですか。

北川 大きな神社とか学校の校庭でも盛んにやりましたね。

かたりぐさ

野口 まず肉ですね。ほとんどの家が常時買うという事はまづなかつたですよ。親戚の方が来るとか特別のことがない限りなかつたです。

渋谷 同じ肉でもその家で飼っている鶏を潰して食べることはありましたが、ほとんど買うつていうことはないです。

野口 あとは野にいる鳥とか、それも雪の降つた時なんかは最盛期でバタリというもので、そこだけ餌をまいてよく捕りました。ムクドリも田んぼを耕している時に長い柳の棒で叩いて殺せるくらいいっぱいいたんです。それで何度も食べました。夏の間は葦の間に巣を作っている鳥の卵を取つて来て、とにかく食べられる物といつたらその位でしたから。

北川 バタリは入つたのを見たら追っかけて行って足で踏みつけないと上げる瞬間に逃げられてしまうんです。

野口 イタチもいましたね。鶏を取りに来るんですよ。

北川 ことわざというか言い伝えでよくいうんですよ。下間久里のイタチは人をだます。そういう言い方をしていたんですよ。だから下間久里ですとやうと昔は嫌われていたんですよ。

野口 食べ物といえば戦後はジャガイモ。これを田んぼで作りましたね。よく買いに来てくれましたけれど。また、一生懸命作つたんですね。買いに来て古着と交換していったとか。せつかく買った物が途中で電車をストップさせられて官憲に取られてしまったということもありました。

ね。

渋谷 蒲生の方面は米が主だったから畑を作っているところが少ないんです。庭先で畑を作るぐらいでほとんどが田んぼが多かったからね。私の家は花田に親戚があつてその家では土地があつたから畑を借りてイモとか白菜とか大根をリヤカーを引いて歩いて行つた記憶があります。小麦を作つた家はうどん屋へ行くとうどんと交換してくれるんですよ。それで食べていたんですよ。

岩瀬 家庭の燃料はほとんど薪でした。農家の家はワラを燃やしていました。カマドとか七輪とかがありました。タドンとか練炭とか豆炭も使いました。

渋谷 炭は高かつたんですよ。豆炭はもつんですよ。炭よりもごみの処理は自分の所の敷地内の一番人の寄りつかない場所へ穴を掘つて埋めちやつたものなのです。

岩瀬 町の中のゴミは、リヤカーに箱を積んで時々集めに来ていましたね。

北川 水源はほとんどが井戸でしたね。昭和三〇年ごろもそうじゃなかつたかな。井戸で物を洗うと流れていくでしょう。そうすると貯めがあつてそこへ貯めてうわ水だけ流すんですよ。いずれ川に流すんですが、一旦プールして流していたので川は汚れなかつたんですよ。おおきな貯めがある家はそこに鯉などを飼つて餌をやる必要はなかつたようですよ。

野口 ドブっていうものが作つてあつてそこへなんでも流し込んで、うわ水は確かにそのように流していましたね。

北川 どこの家でも畑の側に結構大きな穴を掘つて生ごみを発酵させ堆肥代わりにしていました。

渋谷 市内の畑の一所にはほとんど穴があつたそうです。

野口 穴を掘つて置いてあるんな物を棄てて一杯になったら埋めてまた次の所を掘つて行くんです。

北川 下肥は肥だめといつて貯めて置いて農家の方はね。町場の人はお金を出して引き取つてもらうことがありました。町場では農家の人が汲み取りに来たものです。その時お礼として野菜などをもらった記憶があります。気をつけないと肥だめには落ちる危険がありましたね。我家の犬が落ちたことありました。母親が洗つてくれたのですが、

岩瀬 しばらく臭くてたまらなかつたことを覚えていますが、

北川 吉川橋の所から東京湾に捨てに行くんですよ。「おわい船」がいますね。収集した下肥をね、船に積み込んで下つて行つて東京湾に出るでしょ。本当は外洋の近くに行つて流すのですが、帰ってくるのに油がかかたり、

時間がかかるつていうんで東京湾に入つたら栓を抜いちゃうんですよ。東京湾に入つた瞬間からタラタラ流しながら走っているわけ。それは千葉県、埼玉県、東京都、

神奈川県もみんな同じだったんですよ。だから東京湾が臭かつたのですよ。

野口 何しろ藤助河岸にはくそ船がやつて来てそこから潮来土手までかついで、みんなそういうことをやつていたんですよ。

北川 東京の知事と埼玉県の知事が大喧嘩したことがあつたんですよ。埼玉県知事が言ったんですが、埼玉県で朝トイレを使わずに東京へ行ってやれと言うんですよ。朝ひと電車早く行って東京に行つてやれと言うんですよ。東京から東京湾に棄てに行くんだから距離が短いでしょ。埼

玉県でやられたら埼玉県から東京まであるから費用がかかる。だから勤め人はみんな東京でやれという言い方をしたんですね。そうしたら東京都知事が反発してね、「それはふるさとでやるべきだ」、そういう論争をしたことがあるんですよ。

学校給食の思い出

野口 五〇年ほど前の給食にはパンがありましたね、戦後すぐに脱脂粉乳のミルクはありました。アルマイトの食器でそれだけの給食でした。パンはありませんでしたね。昭和三〇年ごろも脱脂粉乳はあつたんじやないですか。

渋谷 パンはずっとあとで、その前はご飯のお弁当でした。麦が多い場合には意識して持っていないんですよ。麦が少ない日だけ持って行くんですよ。おかずは大体限られているからごまかして行くには、上に海苔をのせて、お新香でものせてご飯を見えないようにして持っていったのが昭和三〇年頃ですね。麦が見えちゃうと友達に恥ずかしいと考えたのですね。中学校になると学級単位でパンの申し込みを受けて、それをまとめてパン屋さんに頼んでそれを加工して、甘いのが好きな人はコッペパンにジャムをつけるとかで、時間になるとパン屋さんで学校に持って来てくれるんですね。

北川 昭和三〇年となると食糧難は解消していましたね。贅沢をいわなければそこその物は食べられた。私の覚えて

いるのはコッペパンですがあれは券で買いましたね。顔見てね、中に付けるジャムが違うんですよ。私のことをよく思っているおばさんは、こうやってまたもう一つ塗ってくれるんですが、にくがっている人は見てね、すくった奴をまた半分にしちやんですよ。(笑い)

私なんかパンを初めて食べた時、世の中こんなおいしいものがあるのかなーと思いましたよ。昭和二十四、五年頃ですよ。

渋谷 私は聞いた所によると学校のカバンは軍服をほどいて作ったとか、外套ですか、今でいうオーバーを利用して作ったと聞いたことがあります。

北川 私は中学卒業したのが昭和二十六年でしたが全員が軍隊のお下がりのカバンでしたよね。女の人は布で作ったものでしたよ。学生服なんで詰襟ですが一五〇人の同級生の中では一人もいませんでした。半分以上が軍服ですよ。先生が兵隊のヨレヨレの軍服で生徒が新品の将校の軍服を着て、そういう格好ですよ。

野口 そのころの学校の一教室の生徒の数は五〇人ぐらいでしたね。ところがたまたま先生が赤ちゃんを産むとか何かでお休みになると合併しちゃうんですよ。一番多く持ったのが六十四人でした。

渋谷 昭和三〇年ごろは蒲生の方は人口が少なかったからクラスで四十五人程度だったですね。それで二クラスですね。私が小学校から中学校を通じてですね。

岩瀬 疎開で生徒が多かったので教室では三人掛けはいい方で椅子が無いから椅子と椅子の間に板を持って来て渡すんです。何かを書くといつても大変な思いをして書いたこ

とがありましたね。

北川 書くにしたってまともなノートがあるわけじゃないしね。

子供たちの遊び

渋谷 実際に子供の遊びは郷土研究会で県民の日に旧中村家で

昔の遊びと違って体験学習したイベントがあったんですけど、けれど、それと全く同じようなことをやっていたですね。ただしその当時、五〇年前までは越谷市内でも空き地が多かったから今見られなくなった遊びとしては凧揚げとか、羽つきだとか、グライダーを飛ばす、こういう遊びというのがなくなりましたね。昔はお正月近くなると盛んにあげていましたね。駄菓子屋があつて店先で売っているんですよ。お正月まで我慢せいやなんてね、正月になつたら買ってやるよと、そういう思い出がありましたね。

野口 女の子はお手玉ですね。小豆なんか入れてやった人もいましたね。ゴム段跳び、ビー玉とか面子、危険な遊びの馬跳び。

渋谷 馬跳びは中止になっちゃったからね。背骨を痛めるからつてね。

岩瀬 ゴムまりをつきながら手まり唄を歌った覚えがあります。野口 柳の棒を切つて来て刀の代わりに「ちゃんばらゴッコ」。それが大分はやつてね、男の子の遊びは。

北川 よくやりましたね、ちゃんばらゴッコは。それと戦争中は戦争ごっこですね。だれが大将になるかって、それで

喧嘩になるんですからね。

渋谷 遊び道具は結構あつたんですね。ちゃんばらゴッコするには木の枝にしても柳にしてもケヤキでも何でも豊富に生えていたから。川の淵に行くと葦があつたり竹藪に行けば笹竹もあつたし。

北川 何でも自分で作つてやつてましたね。

野口 葦の細いのを使つてゴムをはめて紙鉄砲なんかよく作つて、そういう竹のない時にはよく取りに行くんですね。だいたいどこでも普通に生えていましたね。

北川 農家の家なんか防風林の代わりに竹が植わつてたんで、田んぼには行つていないです。そういう時にそつと切つてくるんですが、綱を引いてある犬ならいいけれど、どこまでもついてくるんですよ。持っていた竹の棒でひっぱいたら竹が割れちゃつてね。

渋谷 竹やぶから竹を切つて来て今でもやつているオビシヤジやないけれど、弓矢を作つて遊んだことがありました。岩瀬 パチンコというYの字になっている木の枝にゴムの管を付けてそれを引つ張つて小石を飛ばす遊びがありました。

野口 男の子の遊びでスズメなどを狙つたりしていました。むかし、につきの木というのが屋敷内に植えてあるんですよ。木の根っこをかじるとすっぱいとか辛いというか独特な味で。あれをそつと行っちゃ持つて来て、

それで木が枯れちゃつてね。

岩瀬 ああいうのは駄菓子屋で売っていました。

野口 そう、売つていたんですよ。我々は買うのができませんからとつてきちやうんです。苦情が来るですけれど。北川 中学生の時に野球の練習をやつて、腹減つたなつて

言うとな人がバーンと畑の中にボールを打ち込むんですよ。ボール拾い行ってさつまいもをかつぱらって来るんですよ。それで川の水がきれいだから洗ってね、ポリボリ食べてね、アー腹減ったもう一回やるか、そんなこともありました。そうすると農家の方が押し込んでくるんですよ。それで一俵食われたというんですね。その中にその人の子供がいるんですよ。お前の親父さんいい加減だ、おれ一本しか食わないのに、さつまいも一俵分食われたと文句を言いに来るんですよ。だけど二く三〇人いたんだから結構食べてますよ。

野口

瓜も食べましたよ。生で食べられる物ですからね。

ナスは食べなかつたけれど、キュウリは塩を付けて食べましたね。日くじらたてた怒る人は余りいなかったですね。

渋谷

川遊びの時は泳ぐんですが、川の淵に畑なんかがあるからキュウリ、サツマ、トマトをかじりながら泳いでいましたね。あそこの家にスイカがなっているよと、どこの家の畑だということになって、そこの畑の持主の子供を泳ぎに誘うんですよ。泳ぎを教えてあげるのを口実にスイカをとって食べたりしましたね。

北川

高等学校へ行っている時、袋山を白転車で通っていましたね。高く片手を上に白転車をこいでいる時に「おじさん、一つもらうよ」と手にあたってたやつをとるんですが、どこにいるか知らないんですけど、返事が戻ってくるんですよ。「腹こわすな、この野郎」ってね。取るなどは言わないですよ。腹こわすなあってね。じゃ、腹をこわさなければいくつ食べてもいいのかな、なんて思いまし

たね。そういう理屈でね。そういうやりとりでしたから、のどかでしたよな。

渋谷

腹をこわすななんて「ばたんきゅー(果物の一種)」だね。

冠婚葬祭はいかがでしたか

渋谷

結婚式は最近では会場を借りてやっていますが、今でも場所柄によってはね、内々でやる所もあるんですけど、ほとんど見られなくなりましたよな。昭和三十二年ごろは人寄せでどこの家でも自宅ですてましたね。

岩瀬

子供たちがお嫁さんを見に来ると、お菓子などを配ってました。

渋谷

近所の方が野菜の煮つけを担当するとか役割分担が決まっていた共同でお手伝いしたものなんですよ。

野口

それがまた唯一のごちそう。村でいただく一つのしきたりだったんです。

北川

結婚式があるとよく見に行ったものですな。そうすると振舞いが出るんですよ。

蒲生駅の思い出

渋谷

蒲生駅には外側に靴置場がありましたね。今はほとんどの道路が舗装されているんですけど、その当時は駅前では一等地だから砂利が入っているんですよ。砂利が入っているだけまだ恵まれているんですよ。だけど、それから

外れると本当にぬかるんでいるんです。蒲生駅まで来るのに長靴を履いて来て、電車に乗って行かなくちゃいけない。そうするとやはり靴でないといけないから駅まで長靴で来て駅の靴置場があつて、ちようど小学校のげた箱みたいな感じでフタがなくてそのまま置けたんですよ。それでも持つて行く人はいなかったようですよ。そういう時代ですよ。

「こしげ」って、何ですか

「こしげ」っていいましたね。越谷に行くことを。蒲生に行くことを「かも」がそうですよ。なまっただい方です。大体が「かも」なんです。よ。「がもう」とはほとんど言わない

野口 簡単に言うと「こしげ」「こしげ」って言っていましたね。越谷のケの付いた方です。文字にするとすね。「こしげ」という人と「こしけ」という人がいましたね。なまりみたいに言い方をしましたね。うちらなんか親戚の人が来る時「かもの家」に行くからついでにいわれましたね。

長時間にわたり貴重なお話を聞かせていただき、ありがとうございました。

東武鉄道唱歌

(鉄道唱歌) 明治三十三年(一九〇〇)

「鉄道唱歌」の東海道編第一番の歌詞である「汽笛一声新橋を…」はよく知られている。東武鉄道でもメロディーは同様で、始発の千住駅から終着の久喜駅までの歌詞がつけられた。

1. 千住町より始まりて 久喜に至るは東武線 その名は武蔵の東方の 過ぐるが故と悟るべし
2. 開けて通いしその年は 三十二年葉月なり 二十五哩(マイル)あるところ サーチーワン銭擲(なげう)てば
3. 瞬(またた)くの間に飛ぶがごと 端(はし)より端(はし)に至るぞや 大師に名高き西新井 過れば直ぐに竹ノ塚
4. 次なる草加のあたりには 形屋晒屋(かたやさらしや)数多し 新田出でて蒲生村 連なる稲田見るにつけ
5. 神の御恵み思い出で 涙にむせぶ程もなく 声のあたりを眺むれば 雁(かり)鴨(かも)鷺(さぎ)や鳩(はと)雀
6. 彼方(かなた)此方(こなた)に下り立ちて 群れ居る様ぞ面白き 千歳の命延ぶる蝶 越ヶ谷駅の桃の花
7. 見るも一興(ききょう)その次は かねて音にも聞きつらん 武里村と名を呼びて 呑龍(どんりゅう)上人生れけり
8. 東武埼玉第一の町 粕壁に着すれば 岩槻町へ二里あまり 第四中学ここにあり
9. 藤に名だたる牛島は またこの付近と知りねがし 急ぎ急ぎて杉戸には 足もとみめず忽(たちま)ちに
10. 和戸の駅へと着きねれば 施餓鬼(せがき)を以て著名なる 高野の村の松林に 高き櫓(やぐら)が見ゆるなり
11. こはこれ三角点といひ 陸地測量器械なり 次は端(はし)なる久喜の町 久喜は東武端(はし)の町

聞き書き
高崎常任顧問の足跡をたどる

平成21年(2009)3月14日(土)

越谷市中央市民会館

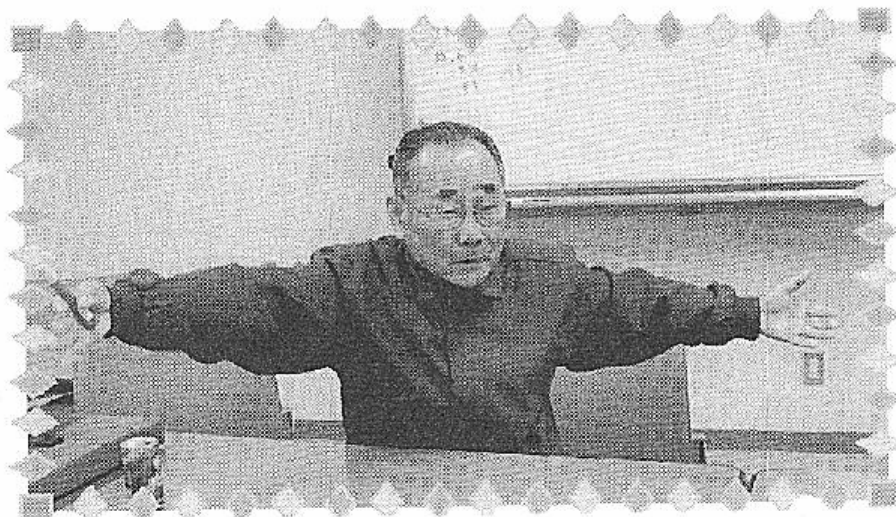
高崎力常任顧問は、越谷・桜井地区の村長を勤めた旧家に昭和2年(1927)に誕生された。昭和22年(1947)に教職に就き、越谷・八潮の学校で教鞭を執られた。

越谷市史編さん作業に携り、そのかたわら多くの調査・研究を行う。「見田方遺跡の発掘調査」「三ノ宮卯之助」「斉藤豊作」「太郎兵衛もち」「越谷生まれ江戸町人の活躍」

「越谷周辺の諸巡礼」「越谷の力士と行司」「越谷音頭」等々、講演会で報告をされた。

また、越谷市文化財調査委員会の委員として活躍、平成14年(2002)から16年(2004)までの3年間は同会の委員長をされた。

越谷市郷土研究会では昭和40年(1965)の立ち上げに関わり、以来44年、現在も調査研究の第一線に立たれている。



高崎力常任顧問には2時間半にわたり貴重なお話をうかがいました

本日はお忙しい中をお越しいただき、ありがとうございます。
今回は高崎常任顧問のたどってこられた足跡をお伺いすると共に、昭和初期から長年にわたり越谷に居住され、昔日の面影もないほどに変貌した越谷の現代史を語っていただければと企画したものです。どうぞよろしくお願いいたします。

一週間だけの昭和元年生れです

桜井地区の今でいうと大泊というところで生まれたんです。実は私の本当に生まれた日には判らないんですよ。大正・昭和の境目に生まれて、大正天皇が亡くなって一週間で昭和二年になって、一月を迎えるんです。そういうドサクサの中で生まれたもんだから、おやじが面倒くさいのと、役場も混乱しているのとで何だかわからなくなるので、しかも正月休みが間に入っちゃうでしょう。そのために年号が変わって次の天皇が即位したらちゃんとなるから、それに新しい年号の方がわかりやすいと、数えやすいというんで届けなくて昭和二年となってしまうんです。今から思えば一週間しかない昭和元年の方が貴重でしたね。そういうわけで昭和二年一月十九日になったんですね。でもこれは本当ではないんであまり使いたくなくなかったですね。

子供のころの思い出―

小さいころは、川をはさんで春日部の向こうの豊野村という土地の子供なんかとよく喧嘩しましたよ。石の投げっこやった

り、たまに頭に当たってこぶを作ったりしました。不思議なことがあるんですよ。その豊野地区の赤沼の子供と喧嘩をやったんですが、古利根川に架かる橋がなく水がなかった時は真ん中の「ミオ(滞)」が狭くなって懐に石をいっぱい入れて行って、「ミオ」に向けて投げっこをやるんですよ。そうすると向こうの赤沼の子供たちが「イシラー」っていうんです。石を持っていくから「イシラー」なのかな、と思ったら違うんですね。大人になって判ったのですが「おまえら」「君たち」ということなんです。と、言うことは日常会話の言葉自体が違うんです。

何故そうなのかと考えたら、あれは国境なのです。国の境、古利根川の向こう側、いわゆる今でいう千葉県側ですよ。こっちは武蔵なのです。そういう川ひとつで国が違うと用語まで違う。これには驚いたですね。それに風習・習慣、これも従って違う。いかに昔の国境というのは、あるいは川の境というのは違いが激しかったかと思えますね。

夏は水泳、水浴びやっつて向こうもやっつていますよ。向こうが水からあがっていなくなると、向こう岸へ泳ぎついて、砂丘がたくさんあるもんだから桃がある。川幅は広いですよ。それを泳いで葦がいっぱい生えていて、その中から覗いて人がいないなあーと思えば上陸して桃や梨を取って食べて、やがて見つかって川に飛び込んで、「やーい」と言いながら戻って来ちゃんですよ。そういう何と何とのか喧嘩はするし、いたずらはするし、とにかく向こう岸の相手と気が合わなかった。

対岸は桃林でしたが梨など、くだものは何でもありませんね。

砂丘ですからスイカも作っていました。銚子口からずっと桃の栽培地なのです。砂丘がブーツと春日部のどこまで続いていたかなあー。

藤塚橋という橋があるけど、あれは砂丘地帯から出る桃を出荷する関係でどうしても橋が欲しかった。それで「賃取橋（ちんとりばし）」から始まったのです。お金を取る。個人が橋を作って渡る時に金を取ると、金が入って橋を作った代金の収入になれば橋を県へ納めてしまうのです。それで埼玉県が橋の利用権を持つわけです。

そのもとつてというのが砂丘にある桃なんです。そのために東武線の一ノ割駅というのは、藤塚の桃の出荷とか春先の桃の花の咲いた時の観光客のために、一ノ割駅の所に臨時停車場として停まるのです。東京から来る観光客が降りて、それで「賃取橋」を渡って桃の花を見たいんです。昭和ひとけたの話ですね。

私は一応、四男なんです。一番上の兄貴つてというのが大正十二年の震災の時に庭先で馬を洗う「馬だらい」という大きなもので、それに入って水遊びをしていた。お袋は後ろのお勝手の方でご飯の支度をやっていた。地震になつて揺さぶられて一歳くらいの時だからね。まだ立って歩くかどうかというところで。

「馬だらい」の中へひっくり返ってしまったんです。そのあと余震が続いて起きられない。お袋はすぐかけて行こうと思っただけけれども歩けない。ようやくすくい上げた時には水は飲んで目はひっくり返つていて結局翌朝に命を失ってしまったんです。長男はそういう悪い時に生まれちゃったんですね。それで二男、三男、四男が私なのです。

四男なので親たちも期待していないんです。もう三人も男がいるんでそろそろ女の子が欲しいと実家のおばあさんなんかもいつになったら女の子ができるんだい、という調子で。次に生まれたら「また男か」というわけなのです。

私の名前は「力」と書いて「つとむ」なのです。この名前がどうしてこうなったかっていうのも、親父に聞いた話だと、親父は「時三郎」という三文字なんです。これが嫌いだっつらしい、長すぎるつていうんです。簡単なのが人も覚えやすい。それで簡単にしてしまったのです。「だったら『一』にすればよかったのに。」といったら「おまえは四男のくせに初めの『一』にしたら笑われる。」と言われたけれどね。

「つとむ」と呼ばれたことはないんです。あだ名も「リキさん」というんです。それから兄弟なんか「ともちゃん」ですね。「つとむ」というのを「つ」をなくして「ともちゃん」。身内ではほとんど「ともちゃん」と呼ばれましたね。大きくなってからは「リキさん」。だから本当の名前を呼ばれたことはないんです。学校で出席を取る時だけでしたね。いつでも担任に聞かれますよ。「何て読むんだ。」つてね。

私は「親父は偉いなー。」と思うんですが、親父の兄が旭村の村長をやつて、弟の親父が桜井村の村長をやつたんです。だから兄弟で村長同士でね、「兄弟村長」として当時は話題になっていました。親父にしてはその時代が黄金時代だったんじゃないですか。それが私が生まれたころですね。

わんぱくだった小学校時代のこと

小さい頃はいたずらばかりやっていたのですが、なんとか小学校へ無事に入学したんですね。桜井尋常高等小学校というところに入ったんです。紺（かすり）の着物を着て、麦飯とみそ汁と漬物で朝食を済まし迎えに来た友と一緒に学校へ向かうんです。普段は裸足で砂利道のゴツゴツした道を行くけれど、それが冬の下駄履きよりは気持ちよかったですね。雨の時は番傘をさしました。学校へ着くと井戸水を汲みためてある足洗い場に行く。間もなく小使いさんの振る時鈴（じれい）がチリンチリンと鳴って授業が始まるんです。

学校では勉強はしないし、喧嘩ばかりで。そういうえば、学校で弁当の時間は教室で食べているのに自分は仲間七、八人を外に引っ張って行って野原で食べていたんです。そうしたら見つかって担任の先生にしごかれ、この件が黒板に書かれちゃいました。それを親父がたまたま学校へ来て外から見たら「お前の名前書いてあったけれど、あれは何だ、何かいいことやったのか。」と。言えないですよ。悪いことやって名前を書かれてるって。本当のことがわかって随分殴られたですよ。親の立場も考えるってね。

でも、当時の私にはわからない。「どうして弁当を持って外で食べちゃいけないのか。」「同じ弁当を食べるのなら、外で食べると（とても質素な弁当でも）うまいんだけどな。」「大勢を連れて行くと目立っちゃうからかな。」「などと思っていました。当時は貧しくて学校に弁当を持ってこられなかったり、中に

は弁当箱が梅干しで腐食して穴があいて使えなくなったりして、家に帰って食べる生徒が三分の一くらいいたんです。持って来るっていつてもアルミの弁当箱で、梅干し一つ真ん中に入れてくるだけです。おかずがないんですよ。麦飯ですからポロポロで、箸でつまんで食べられないから、弁当箱の端に口をおっつけて食べないとポロポロこぼれちゃうんです。箸ではつかめないんです。ねばりがいいから。それだから外へ出て野原で食べると空気はいいし植物のいい匂いもするし、そういうことをしていましたね。

遊びは友達が集まる寺の境内へ行くんです。かくれんぼ、兵隊ごっこをして暗くなるまで遊んで一足先に帰った兄の沸かした風呂に入り、ようやく家族全員が一緒に、薄暗い裸電球の下で楽しい大家族の夕餉が始まるんです。親たちは食後の休みもなく、土間で夜業（よなべ）を始めるんです。

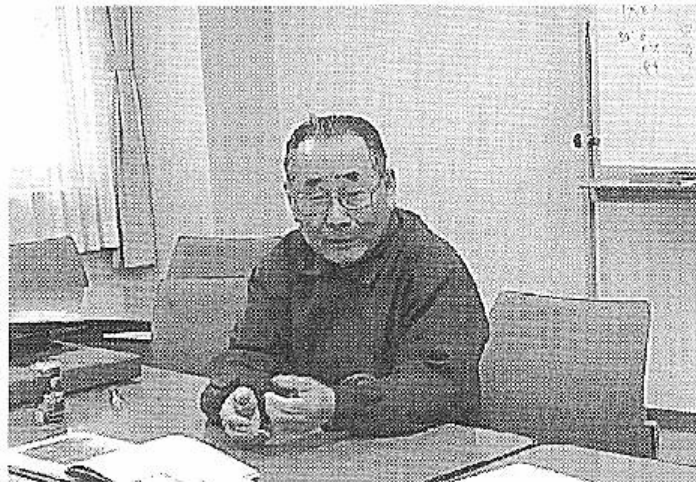
当時の家の周辺は古利根川の自然堤防があって、その自然堤防上に一列にズーンと集落が並んでいたんです。一番高い自然堤防の上に本家が並んでいるんですよ。その前の低い田んぼと自然堤防との境あたりへ分家が出るとですよ。そうすると下に「下（した）通り」というのができるんですよ。ですから二列の平行の形で集落は構成されていたんです。

うちの場合は本来は後ろの本家だったんですが、本家の親父（注・力氏の先祖にあたる）が分家したのですよ。昔は分家という子供がするわけで、長男が跡をとって次男以下が分家であるというのが普通なのです。

ところがうちの場合は本家で生活が始まって子供ができて、ちゃんとした生活になったけれど、分家を親がしちゃったので。せがれに財産から家からみんなやって自分たちだけで分家として外へ出たんです。それを分家本家っていうんです。こういうことは戦国時代を通じてあるんですよ。子供が分家とは限らないですよ。子供を残して自分が一種の隠居の立場で分家をやるんですよ。「隠居分家」ともいい、これは気楽なのです。本家の跡を継ぐというのは祭祀する権利や、お墓参りとか神様を祀るとか、それにプラス財産なんです。今は財産が中心で、そういうものは考えないけれど。家督を倅に譲って隠居ですよ。面倒くさいことは、倅がやれとね。ところが分家した私の先祖のおじいさんは百姓をあまりしなかったんでしょね。

屋根を葺く茅というのは集落の共同の入会地を持っていたんです。集落で屋根を葺く茅を育てる場所を村の共有財産にしていたんです。それが安国寺の後ろの一本松の周辺にあったんです。一年に一回、秋になると刈りますね。その刈った茅をもらう権利というのが順番で回ってくるんです。小さい家は全部使いきれないんです。そういう残ったものを売るんです。大きな家は一回では屋根を葺く材料が足りなんです。「譲ります」という家から買って屋根裏にしまっておくんです。すでに茅の色は赤黒くなっていますけれどね。

我が家では三年分ほどためないと葺けないんです。厚さが大分ありますから。五層ほどになっているんです。葺くのは村の仲間同上でやるんです。どこでもそういう共同入会地を持っていたんです。下間久里・上間久里・大里でも。元の元荒川の河



長時間にわたりお話しをされた高崎常任顧問

れど、それは生活形態、財産系統が違うからなんです。共有財産というものを持っていたからなんです。

したがってうちの場合は二十年に一回ほど葺けばよかったです。二十年に一回屋根の葺き替えをやるんです。二十年間の間に少しずつ茅を集めて屋根裏にしまっておくんです。だから葺く時に色がみんな違うんです。その色が違うのが屋根屋さんの特技なのです。それを一層、二層、三層と順番に合わせていって、切った後、下から見ると色が違うのです。縞模様なんです。家の周りを下から見ると見えるのです。芸術品なんです。ですから厚さが厚いほど財産家なんです。貧しい家などは二層

川敷にいったばい生えていたから、それぞれの集落で使っていた。町になるとそういうのはないですよ。町場にはそのような空き地で茅がはえているところは無い。だから草屋根じゃ維持できないんです。やがて瓦に変わってしまうんです。だから町は瓦で農村は茅葺きだとよくいうけれど、それは生活形態、財産系統が違うからなんです。

か三層で終わりなのです。薄いんです。だから早く終わってしまふのです。それもある程度を過ぎると道楽の一種にもなりませんね。そういうものも昭和四十年代にはなくなりましたね。

新方川に、しじみと共に烏貝（からすがい）というのがいたんです。これを探って炭火で焼いて醤油かけて食べると、こわいけれどもうまいんです。大きいやつを二、三十個採って家に持って帰れば弁当のおかずに着てもらえますよ。

小学校五年生の冬休みの時に烏貝は普段は手で採るんですが、その時はものぐさで足で川底を探したんです。そしたらザツクリ足を切ってしまったんです。貝殻で切ったか何で切ったかはわからないんですが、兎に角サーツという感じがして、痛いな一と思った。上にあがってみたら足がふやけていたから痛みが緩かったんですね。足を見たら口が開いてしまつて骨が出ちゃつたのです。家に帰ったら母親はびっくりしちゃつて、出血多量を見て失神しちゃつたのです。「あれ、死んでしまつた。」と思つたそうです。

親父が帰つて来て「まだ温かいから生きてるんじゃないか。」と医者に連れて行つて消毒して縫つた。ところが今の時代じゃないでしょー。村医者なんかね、赤チン付けて終わりだ、みたいなことやつていたので、膿んでしまつたのですよ。それで一か月くらいしたらパンパンに膨らんじやつて。色が違つと、それを見て医者がこれは消毒が足りなかつた、また切つて中を消毒して縫つた。今度は大丈夫だろうと思ひ「学校へ行つてもいいかなーあ。」と言つた。そうしたら、「まだ無理だよ。」と言われた。それが五年生の正月休みですから、それで二回目の

手術が三月なのです。とにかく歩けないですね。これには一番困りましたね。トイレに行くこともできなく参つたんです。

しばらくしたらまた膿んでしまつて、それで六月が過ぎて医者がこのまま置いたらどうにもならないから、手術をもう一度やりますよというんですが、それほどの技術がないでしょ。それで医者が最後に何と言うかと思つたら「私には手に負えない。」と。それを聞いて私は一生が終わりかとも思ひましたよ。五年生の冬休みから学校は休学ですから、それで治らないんですからね。

母親の実家のおばあちゃんが心配して神頼みしかないということになつて、成田の不動様へ願掛けと祈禱とそれから、鶯色した粉薬を大きな貝殻の中に詰めて貰つてきたんです。これを水に溶いて傷口へベタベタ塗つておけば治る。「それでしようがないなあ。」と思つただけけどね。それを毎日自分で練つて足に付けていたんですよ。それを半年くらいかかつたかねー。成長期もあつたのか段々足の皮があがつて来るまでに。最後にくつついた時は六年生になつた十月ごろかなー。一番勉強の大仕事な時に学校へ行けないんですよ。あの時だけは悔しかつたね。結局五年生の三学期から六年生の二学期、およそ一年間の間、勉強してないんですよ。だから今の算数でいえば比と比例が全然わからない。

家にいたら、うちの親父に似たような人がやつて来て、「お前どうしたんだ。」つていうから「足、怪我して直しているんだ。」と言つたら「お前は幾番目の子だ。」というから「四番目だ。」という、と、「あー、そうか。俺、判るか。」つていうから、「知らない。」と言つたら、「お前の親父の弟だよ。」つていうんです。

旭村で親父が兄弟で育つたことを思い出してすぐわかったんです。「そういえば似ているな。」ってね。

「何で来たのかなあ。」と思っていたら、そのうち親父が帰って来て話をいろいろやっていて、その話は最初は何だかわからなかったのですが、そうしたらおじさんが帰る前に「子供がいないんだ。」と、いうんですよね。「うちは兄弟げんかばかりやっているんだよ。」と言ったら「お前、東京へ来るか。」って言うんですね。「何しに行くんだい。」と言ったら、「うちは子供がいないんだ。」と。「だから寂しいからうちへ来るか。」って言うんです。「なんかこの家は兄弟喧嘩ばかりやっていて、そのなかでもお前が一番ワルらしい。」「今は怪我していて何もできない。」といったら「こんな病氣は東京に来ればいい医者がいやすぐ治るよ。」というんです。まー、だまされたよね。それっきりで話は終わったんです。

そうして卒業近くなったら、また改めて何かお菓子なんか買って持って来て。まー、だましに来たんだろう。ちょうど学年が終わるからね。「じゃー、東京へ行ってもいいよ。」って、何か面白そうだから逆にうれしかったんですね、「兄弟喧嘩ばかりやっているんだったら子供が誰もいない、菓子だって一人で独占できるな。」って、それで四月一日、東京の学校も始まるから行っちゃったんですよ。

人生を変えた東京での生活

おじさんの家は大塚駅のすぐ前なのです。大塚駅と大塚公園の中間の大塚辻町というんです。市電の車庫があつてその車庫

の後ろなんですよね。だから場所的にはいいところだったんですよ。学校へ行くのにも初めて洋服を買ってもらって、初めて洋服を着て行ったんですよ。高等小学校は二年しかないんですよ。

一応、二年間で傷も直っていたもんだから。ところがこの学校というのは変わってしまつてね。田舎から行った人間にはたまげましたね。今は茗荷台中学校と言います。たった一年生と二年生しかないのに、これだけの生徒がいるんです。マンモス校で二〇〇〇人もいました。夜になると小石川工業学校になっちゃうんですよ。二〇〇〇人もいるんだから運動場が狭いぐらいでしたね。

私にとってこの学校へ行ったのがよかったですね。人生が変わったんです。東京をまず知るでしょ。友達っていうのもわかるでしょ。世の中も見えてくる。ここへ行かなかったら今日の私はないんです。恩師がよかったですよ。藤牧という先生なんです。私が一番尊敬している人物の一人です。他にいろいろ先生方がいますけれど藤牧先生が一番良かったですね。この先生が一年生と二年生の担任だったんです。

一学年十クラスあるんですが、全部試験をやつて一番から五十番まで特殊学級のようなクラスを作つてそれが進学などをしたいとか、将来、奨学金を貰つて学校へ上がりたいという連中の、成績いいのだけ集めたのが一組なのです。その試験を全校一斉にやるわけなのです。たまたま私が受かったんです。その一組に入つて担任が藤牧先生になったんです。

でも何といつても勉強より遊びの方が好きだから東京が面白

くてたまらなかつた。友達は最初はできないで、逆に「ジャパニーズ・イングリッシュ」というあだ名をつけられて、随分いじめられましたよ。言葉が通じない。言葉がだめで、もう一学期中は本当にいじめですよ。埼玉と東京都は文化から何でも全てが違いましたね。洋服を着ているので驚いちゃった。こっちにいる時は着物だったからね。親父が「学校へ行くんじや洋服作ってやれ。」と、大塚駅前の岩田っていう洋服屋へ行つて寸法とつてもらつて、洋服を初めて着たんですよ。それで学校へ行つたんですけれどね。

「ジャパニーズ・イングリッシュ」といわれ、標準語がしゃべれない、この辺の言葉つきり知らないでしょ。今の私のアクセントは越谷弁と混同しちゃったものなのです。地元の言葉でもなくなっちゃったんです。それで「ジャパニーズ・イングリッシュ」をみんなをやつちやおうつてね。田舎者つてね。洋服は着ていても、いやでね。本当にいやだったですね。

夏になると体育の時間が暑いと、アスファルトの運動場だから、体育館の中でマット敷いて相撲をやるんです。この相撲を悪用しちゃったんです。力はあつたから勝ち抜き戦なんかやると大休五人くらいはやつつけちゃうんです。

腕ずくでみんなを負かしてなんとか押さえちやおうていうんで、言葉じゃ喧嘩できないんですよ。みんなの所を負かして得意になっていて、「おれもこれでようやく東京の子供になれたかなー。」と得意になつていたら担任に呼びつけられて、「高崎、お前の相撲は相撲じゃない。」っていうんです。職員室に連れて行かれて怒られて「おまえのやつているのは喧嘩だ。」っていうんです。こっちは喧嘩も相撲もありやしなですよ。「何でそう

いうことをやるんだ。お前のやりかたは相手が倒れてもまだやっている。相撲というのは倒れたり土俵から出たら終わるんだ。ところがひっくり返つてもまだやつている。」と。わかっちゃったんですね。こっちの感情が。おまえは相手が負けたのに更にやる。それで怒られて、あの時だけは「悪いことしちゃったな。」って思いましたね。田舎から出てきたっていう引け目と、散々いじめられたからむきになつたんですね。

今日の私の人生が小石川でできちゃった。市電が走っているところをほとんど乗って覚えちゃったですよ。山手線も大塚の駅がすぐそばですから。最初に乗って居眠りしちゃったんです。そうしたらまた同じ所にいるんですね。「あらー、まだ寝ぼけてんのかなー。」って。いくら考えてもわからないんですね。「この電車また元に戻ってきましたよ。」と駅員さんに聞いたたら、「あんたねー、この電車は回っているんだよ。」東武線なんかこんなのないからね。初めて山手線を一巡りしたんですよ。

これがいけなかつたね。それから興味持つて、一駅乗っちゃ降りて、また一駅乗つては降りたりもした。さらに池袋までの切符でグルグル回つて降りないで、あつちこつち覚えちゃったんです。これが最初ですよ。山の手線の駅を全部覚えて、その次は市電でぐるぐるめぐる。市電も、できるだけ一番遠くまで行き、戻つてきて乗つたところで降りる。その次が一番遠くまで行つて一番近くに戻つてくる。そういうのがひらめいてきたんですね。「市電を全部乗ろう。」って思つて、二年間の間に市電を全部乗っちゃったんですよ。

その市電を乗るのも金がないから朝六時半までに市電に乗れば赤い往復切符を買えるんです。六銭で。普通は一回七銭なの

です。ところが朝は割引券を売ります。それをまとめて買っちゃうんです。往復で赤い切符を買っちゃうんです。それを昼間使ってもいいんですから。乗るとできるだけ遠くを回って、だから大変でしたよ。市電の地図をおじさんから借りて、いかに安くいかに市内を回るか二年間に全部を回りました。

教師目指して浦和師範学校へ

当時、藤牧先生が「お前みたいなやつは学校の先生になるのがいい。」っていうんで、「こんなワルがやったら子供が悪くなっちゃう。」と言ったら、「お前は自分が悪いっていうのが判るのか。」ってね。「そういうことが判った人の方が教師にはいい。」っていうんですね。そういうのが判らないお坊ちゃん育ちはだめだって。「じゃおれいかな。」って言ったたら、「そうだよ、やってみな。」ってね。

豊島師範というのが池袋にあったんです。その第一部だったら入学する資格があるっていうんです。じゃー、池袋だったら歩いても行けるわって。それで池袋の豊島師範の願書を貰って来たんです。そうしたら田舎の親父が、「おめーみてえな奴は、東京の学校なんか受かるわけないんだから。」って、「埼玉を受ける。」って。「じゃ埼玉の方も願書貰ってきて出そう。」結局、両方出すようになっちゃったんですね。でも自分はせっかく東京に慣れたんだから豊島師範を受けたかったです。ところがあの当時は規制があって豊島師範が一、二とやれば埼玉は一、三とこうなるんです。日にちをダブらすんです。併願をさせないように。結局、試験日が一日重なるような制度だったのだ。

一日目に豊島師範を受けたら田舎の親父が「おまえのようなやつだめだから、埼玉を受ける。」って。それで埼玉の第一日を受けるようになっちゃって。そうすると豊島師範は失格ですから二日目は埼玉へ来ちゃったんです。というわけで、今の埼玉へ入ることになったんです。途中いろいろ制度が変わってしまから、予科が三年、本科が三年、六年間浦和の学校で暮らしちゃったんです。それで寄宿舎に入ることになったんだけど東京の生活が面白いから日曜日っていうと大塚の親戚の家に行って遊んでいました。

わたしの叔父さんは、親戚のゴム工場へ勤めていたんです。それで戦争がはじまった。そうすると工場疎開が始まったんです。民家だけでなく工場も疎開したんです。都内のゴム会社は全部仙台の長町へ工場疎開になったんです。それで仙台へ行くことになりました。そうなると職場と一緒に住まいも仙台へ行っただんです。

ちようどその時分、まだ私は行く場所がないから学校の寄宿舎にいたんです。「お前は宮城師範へ転校しろ。」っていうんです。同じ学校同士だから転校ができたんです。「じゃー、行こうかな。」っていうんで仙台へ行っただんです。行ったら一週間雪なんです。その時に限って「仙台はいいところだと思ってきたらロクな所じゃない。」と叔父さんに言ったんです。叔父さんと生活する予定だったんですが、学校を卒業する前に叔父さんが突然亡くなってしまふんです。そうしたら叔母さんが「私一人になっちゃった。力さんはどうすんだい。埼玉にいるのか、宮城に来るのか。」と聞かれた。自分はまだ学生で金がないから、「叔

母さんが東京の弟さんの手伝い。」っていうことで自分も帰って行ったんですよ。叔母さんは「弟の世話になって自分のお墓に入ればいいんだから、力さんは自分の生活をしたら。」っていうんです。

進学から勤労働員へ

大学は勉強したのだから何だかわからない。戦争になってくると学徒動員。勤労働員で農家へ一週間泊まって百姓の手伝い。

生まれが百姓だったから何とも思わなかった。

もっと戦争が激しくなると軍事教練、これは千葉県の習志野に一週間ぐらいかな、隣の兵舎には兵隊がいるんですよ。朝はラッパで起床してわれわれも真似てやること、なすこと、全部軍隊と同じで生活してたんです。私は力があつたから機関銃士。これは自分が持っている道具



昭和18年 指扇村（現・大宮市）での学生勤労働員 中央の青年

です。機関銃士というのはいつも先頭になるんです。これが終わったら中島飛行機大宮工場へ行つたんです。ここは昭和の初めごろは競馬場だったんです。その競馬場跡地を空襲が激しくなったので東京多摩地区にあったエンジン工場が疎開して来たんです。広大なエンジン工場だったんです。大宮の中心街は爆弾でやられていたんですが、この工場は無傷でした。おそらくアメリカは日本が降伏したら接收して利用しようとしていたんじゃないかな。日本の航空技術の素晴らしさ。ここで私は検査をやっていたんです。エンジンの構造などの勉強をして講習を受けて、たまたま私の配属されたのがエンジンの後蓋（こうがい）の検査でした。ところが検査の係長が兵隊に召集されてしまい自分が係長代行ということになったんです。

桜井中学校の教壇に立つ

昭和二十二年の六三制が発足と同時に学校の教師になったんです。就職先が地元の桜井中学校（現在の桜井小学校の敷地に桜井小学校とともにあった）。免許が小学校と中学校の両方とつたもんだから、中学校が新しく出来たというんで派遣された。中学校を担任したら、三分の一が東京からの疎開の子供だった。その生徒たちがそれから二年目から三年目にかけて東京へみんな戻っちゃったんです。

戦後の苦しい、まだひどい時ですよ。免許状は理科と社会、しかしほとんどそれはやらないで他の仲間がやって、私は残りの図工だの農業だの体育だの「雑ばもの」ばかりでした。だから教科をもったのはその後、東中に転勤した時に自分の組の

社会だけ一組しかもった経験がない。他の人が優先で取っちゃうんです。できる人がいないから残ったものの美術だの英語だの音楽だの、さすがに音楽はやらなかったけれど。

何事にも人に負けたくないんだから「遊ぶ方も負けない。」と。これは親父の実績も残っていたんですよ。旧道の角の大沢橋のふもとに三階建ての加賀屋という料亭があったんです。それと越谷駅に行く途中にどぶがあつて大野屋という料亭があったんです。こういうところは、親父がよく仲間と飲んで騒いでいたんですね。その後、教師の仲間と飲み会などで使うと、店の人は知っていて「あんた大泊の高崎さんでしょう。よく親父さん、ここへ来ていたんですよ。」と。うちの親父はそれほど酒は飲まなかつたけれど、仲間を連れてよく遊びに来ていたようです。

勤めたからといっても、そういう料亭に行くお金がかかるし一人や二人で行ったんじや入りにくいんですよ。だから赤ちやうちんへ行つてのれんの中に入ると結構あつたかいんですよ。そこで「わり」っていう焼酎と葡萄酒を割つたやつを一、二杯飲んで自転車で家に帰るのが多かつたですね。「つま」には八つ頭だのおでんのだの、一人で最高で三品しかとらない。

料亭の加賀屋とか大野屋には独特な風習があるんですよ。同僚から「親父の代から知っているらしいから。」と言われれば、「しようがないな。」と幹事役を頼まれて、そうするとみんなが来る一時間前には行って交渉して座席の形だの料理の内容だの、お酒の本数など、だいたい予算とかかわりの交渉をやるんです。それが終わると、店にあつたお風呂に入つて浴衣を着

ていい気持ちになつて二階で夕涼みをしているとみんなが集まってくる。そういうんですよ。ほかの人から言わせると「幹事さんをやらして悪いな。」つて言うけれど逆に面白いんですよ。それで帰りには幹事だからと店からウナギの焼いたものをお土産にもらつて帰つてくるといふわけですよ。

その他、遊び方つて言うのもそれに関連した人たちとの付き合いからいろいろ覚えたですよ。それも親父のせいなのですね。昔は村長だのといつても結構あちこちで飲んで歩いていたんじゃないですか。

越ヶ谷達磨の話

今は例えば川崎大師に行けば達磨がたくさん売っている。その中に越谷の物はどれか、高崎のはどれか、もうみんな種類が違う、それを読める人はいないんじゃないですか。まあ好きな物を買えばいいんだから。ところが私たちになると産地が判らないんじや研究者になれない。これはどこのものか、これは誰が作ったものか、これは船渡の松崎さんの先代の作品というのが判らないといけない。そうでないと一人前じゃないですよ。

越ヶ谷達磨つて言うのと頭の長い「大蔵(だいぞう)達磨」が日本中に知れたものです。ひょうたんみたい、ちよつと長いんです。それが越ヶ谷達磨の特徴だったんです。これは高橋大蔵さんという方が明治から昭和の初期にかけて作った独特の作品で、今では骨董市などに出たら大変な値段ですよ。

結構、古物商は知っているからね。しかし今では古市でも高橋大蔵達磨はほとんど出てこない。美術研究雑誌にも取り上げ

られたので全国的に知れ渡ったんですね。残念ながら越谷の人は余りこだわらないんですね。でもマニアの世界からいえば越谷だったら誰々の何の作品と知っているんです。

私は古物商から随分いろいろなことを教わったですね。従って自分でも収集するし、うちにも何体か日本中の物があります。でも置き場所がなくて子供らに怒られているんですけれど。でも捨てるわけにもいかないしね。全国のももあるから、それを講演や講座で使うんですよ。

新居を構えて大相模中学校に転勤

結婚したのは二十五、六才かな。大相模中学（現在の大相模小学校の敷地に大相模小学校とともにあった）に転任した時かな。四月なんだよ。だから転任と結婚は一緒なんです。切り替えの時期に、その方が便利だから。新居も同じ。これ三つ一緒にやっちゃったんです。大沢に家を建てて、桜井の北の一番はずれから、今度は真ん中に住んだからって、一番近い大相模の中学校へ行ったんですよ。ある人はいうんです。「大相模に転任したのは大相模の遺跡を探すために転任したんだろう。」と。結果的にはそうだったけど、そういう目的じゃないんですよ。家が大沢の今の越谷郵便局のそばに移ったからですよ。家庭訪問も真面目にやって生徒の家も全部知りました。教える子のお家みんな回って。それでついでにそういういろんなことも調べて。そしたら、うちの遠い親戚まで調べるといかにつながった家があるのかと。それから家内の身内も調べてい

ったら、あのうちもそうかとか、わかったんです。

それで次の仕事は自分の研究をやればいいんだって思って、あとは結婚を境に地の利を得たものだから調査地も広げたいですよ。

結婚を期に大相模中学校へ転任したことで、途中、大沢橋北詰の新国道と日光街道との挟まれた繁華街のど真ん中を朝晩いつも歩いていたんだ。その繁華街について一番詳しいのは私でしょうね。他を回るんだったらあの真ん中を歩いた方が交通安全全上いいから。

それに、大野伊右衛門さんの家が近くになったもんだから、その繁華街を通ってしよっちゅう遊びに行つたものです。夕方は客を取ろうとする人が外へ出ているし、朝は十時頃になるとようやく起きて来て、「あーっ。」と大あくびしてたばこ吸っていたりしていたっていうのが、あそこの繁華街の女の人たちですね。

今でも、四人、五人、六人くらいいますかね、この近所に。近所に嫁さんになった人もいますよ。私より若いけれどね。もうみんなおばあさんですよ。いろんな話なんかした人は、そのうち三人位いますか。もう、故郷の事から友達のことからお客さんの事から何でも。だからお客さんのことも半分は知っているんですよ。

私は魚釣りが好きだから。座敷に上がることはなかったですよ。経営者の親達を何人か知っているからおさらです。

麻雀は、賭け事としてではなく、よくやりましたね。あるとき東京のおばさんに言われたんです。「あんたは何事にも賭け事

は強そうだから、深入りして絶対身を滅ぼすぞ。」って。それがきつかけで賭けごとほしないことにしたんです。

酒だけはたしなむ程度でおぼれるってことはないですね。酒屋のアルバイトをやっていたから今でも飲む気がしない。

レイクタウンと南越谷駅周辺の話

越谷レイクタウン周辺の地主達に大相模耕地整理の組合長をしたNさんという市議員なんか一番苦労しているのじゃないですか。耕地整理の最後の始末はきれいに土地を分配して仕事を終わる予定だったんです。ところが残っちゃった、買い手がないんですよ。引き取り手がないんです。それで引き取り手がないのはどこかというところ、集落から離れた辺鄙なところほど誰も手をつけない。しかもそういうところへ火葬場を造っちゃった。ますます嫌われて整理つかない。そうすると耕地整理の仕事が終了できないんです。だけどみんなに買えって言っても誰も買わない。仕方ないから委員長がみんなが嫌った土地を買って大相模耕地整理を終了と幕を下ろしたんです。

しかも私があそこの遺跡の発掘を手掛けちゃったものだから、ますます嫌われ、火葬場はある、遺跡はある、しかも土壌は一番悪いところ。全てが悪条件ですよ。わたしはだから黙ってました。あんなところで、あそこの場所云々なんて言ったら、「お前が遺跡を発掘するから火葬場まで出来ちゃった。」と言われ兼ねない。待つだけ待って、必ず悪いものは転換の仕方の良いものだから。だから耕地整理の委員長も、誰も買い手がつかないで困っていた。

南越谷の駅の近所、あそこの土地も戦前からほとんど瓦曾根の地主が持っていたんです。農地改革になったら、あの南越谷一帯の地主さんが持っていた土地はいらなくなって手放した。自分たちは瓦曾根の近いところだけ所有地にして、向こうは農地解放しちゃったんです。ところが蒲生の農地整理の事務所は最後まで売って成立しないと解散できない。それで所長が困っちゃったんです。「これ残っていると、この事務所整理できない。」と。働いていた事務をやっていた女の子に「お前ら買ってくれよ。」と、今度渡す給料で買ってくれよ。「やだ。」っていう。あんな蛙の小便で水が出るような、そんなところ買えたもんじやない。誰も買わない。最終的には所長が女の子の月給を差し引きで買ってもらったんですよ。とても安く。所長だけでなく地元にとっても助かり、協力していただいた女の子に感謝、感謝ですね。それが今の南越谷の駅のある場所なんです。

そして今でもあるけれど、駅の西側の教員住宅へ友達もいたので行くことになった。「こっちに来いよ。」と声がかかってくる。その教員住宅へたどりつくまでが大変、自転車で行くと膝までもぐつちやうんです。それに食用蛙がゴーゴーと鳴いているし、帰りは気持ち悪くて、そういうところだったのが今の南越谷でしょ。その事務所で働いていた人、知ってますけれどね、会うと笑い話になっちゃやうんですよ。世の中天地ひっくり返るとはこういうことですね。「もっと買っておくんだった。」と。それが坪何百万といって騒いでいるんですから。

大相模も同じ、だからレイクタウンの構想が出た時すぐに組合長は恨まれちゃったんです。「値段は上がる、それを見込んで最終整理をやったんだらう。」と。そうじゃないですよ。でも

人間というのは人が良くなると妬む、悪く解釈する。だからNさんは「そこらを歩けない。」っていうんです。

郷土研究会立ち上げ裏話

郷土研究会を立ち上げたのは木村信次図書館長が主なんですよ。ところが木村図書館長は東京の人間なんです。図書館長として連れてきたのが大塚伴鹿という初代市長。東京の大東文化大学の教授なんかやっていたんで交流があつたんです。越谷町立図書館を越谷小学校の中へ作って館長として迎え入れたんです。その後合併したので越谷市立図書館長になったんです。

木村さんは本当は俳句の世界の人なだけけど、「郷土史を自分で始めておもしろいから。」って言うんで、私なんか割合と早くから呼び込まれて仲間として一緒に動いていた。そのうちに「何とかまとまった研究団体にしようか。」っていうんで、「教育界は私が説き伏せて何人でも入れるから。」っていうんで立ち上げた。

それで母体ができた。そしたら当時の教育長がおもしろくないわけよ。「自分は地元の人間で教育長をやっている人間だ。」と。「それを差し置いて木村さんだの高崎だのがやるっていうのは面白くない。」と、「こういうんですよ。」あー、そういえば話を通してなかった。「簡単ですよ。これこれでやるって事前に言えればいい。それで「それは高崎君、結構なことだ、じゃあ、やれ。」っていうんですよ。「じゃ、やろう。」って。

メンバー、役員メンバーなどその下構想を作っていくうちに出来てきたのが、教育長が「小学校の社会科教育部長、中学校

の社会科教育部長というのがいるんだから、学校と社会と連携するのがこれからの勉強形態なんだ。」と。「だから小学校の教員も入れる、部長は理事として役員で入れるんだ。」ってこういうんです。私はこれは反対で「これはあくまで民間団体として育てていくんで学校とか教育とかは一応切る。」っていったら、「君よ、そんな勝手なことほさせない。」というんです。「当然これは学校教育に還元してもらうんだ、その成果、調査したものを。だからどうしても学校の代表を入れる。」と。それで大喧嘩になってしまったんです。「それじゃ私は役員はやりません。意見が合わないから降ります。」と。

それを木村さんにも言ったたら大反対でね。「だめだ、だめだ、どうしてもくつついてきてくれ。」って。だから「会員としてくつついて行くけれど役員にはならない。役員に入ってくるのが学校の職員で、しかも校長をやっている社会科教育部長イコール自動的に郷土研究会の役員っていうのは変だ。」って言ったんです。「仮にこの人が北埼玉の方から越谷の方に来て社会科教育部長になったら、その人に役員をやらせるんですか。」って言ったんです。「そうだ。」っていうんです。「私がそういう立場だったら出席しません。わざわざ日曜日に北埼玉の方から郷土研究会の役員会だからってやって来て一日つぶせるかって考えたら、そんな生易しいもんじゃないよ。すぐ近くに住んでいる教育長とは違う。」って言ったんです。自分はすぐそばだからね。歩いても来られる。わざわざ電車に乗ってここまで来たら大変ですよ。

とにかく発会式は内々決まっていたから、目の前に迫っていたので、「じゃ、目の前に来て喧嘩をやっている様子がない

から私は一応
引きます。先
輩、どうぞや
ってください。

私は役員から
降ります。」そ
う宣言して私
は辞めちゃっ
たんです。木
村図書館長が、
「いつかは判
るんだから、
体制が変われ
ば入るって、
絶対これ変わ
るから心配な
いよ。」などと
随分説得した

んだけれど、自分は「その内またやるから、木村さん待って
てください。それまでお願いします。」

そうしてはじまった。役員の中に越谷教員の社会科の部長さ
んが一人が入ってきた。「次は来月のいついつやります。」そし
たら「その日は他に用事があるから無理だ、欠席だ。」そして
「副部長に代われ。」って、副部長が突然ピンチヒッターで出席
することになった。副部長はそんなこと何にも知らないで来た。
どうにも役立たない。そういうトラブルを一年間やっちゃった。



編集委員のさまざまな質問に丁寧に答える高崎常任顧問

年が明けたら校長である社会科教育部長というのが「辞めさせ
てください。」と。教育長に直談判が始まっちゃった。教育長も
事情を聞いたりしていくうちに止むを得ない。ということでも黙
認する。認めたんじやないんで黙認の形をとった。

そこで教育長に「ふざけてんな。」って言ったんです、私は。
「あれは正式にシャットアウトでいいんだ。」って言ったんです。
すると教育長は「おまえ教員のくせによく仲間にそういうこと
を言えるな。」って。「これは民間人として設立したので公的な
学校という教育機関じゃないんだ。だから郷土研究会の柱をそ
ういう教育とか学校と縁切って初めて自主独立ができるんだか
ら。そうすれば教育委員会の支配下も抜けられる。」と思った。
私はそこなんです。行政の支配を受けたくないんです。もち
ろん私にとって一生の問題だったんです。役員をオミットし
ちゃったんだから。

それで一年経ったら木村館長がやって来て、「高崎さんよ、教
育長は自分で引退した。だからもう大丈夫だから来て下さい」
と。二年目から復帰して、やるようになったんです。初めの役
員名簿には私は載ってないですよ。

設立準備して発会式を迎える直前にそういう問題が解決しな
いで辞めちゃったから。そういう経緯なんです。だから先の
こと考えるというか、本質を考えるという、そういうことは昔
の年配者っていうのはできないんですね。世間の習慣とか慣習
そういうのをただ真似してやるから。ところがそんなのないん
ですよ。埼玉県下にも。学校の教師の社会科教育部長が当初か
ら規則の中にうたっちゃうんですから。そういうわけで私の言
うような形になったんです。

初期の段階というのとはかく形のできるまでは個人の活躍を期待するしかなかったですね。誰彼じゃなくてみんなが一人ずつ何かをやつて、何かを提案して、何かを発表するとそういうことをやることによつて、ムカムカつて燃え上つてくる、そういう団体で行けば何とでもなるんじゃないか。ですから設立した当時のメンバーはほとんどが先輩でした。教員の仲間でも退職した校長なんかみんな入つて来たんです。それから役場の人たちも私から見たらみんな先輩でしたね。それでもその人たちも一応私の立場を認めてくれたつていうとおかしいけれどね、一緒にあちこち見て歩いたけれど。

郷土研究会の前身は愛好家の集まり

その下地つて言うのは会をつくる前にできていたんです。各村に一人か二人ずつ郷土史の愛好家の集まりがあつたんです。昔でいう区長という、今でいう自治会長とか町村長とか役場に勤めている人とかで。戦後の昭和二十二年ごろかな。農家の人が多かったけれど。八潮から三郷を含み、こっちは春日部を含み、だいたい春日部から南あたりですね。その範囲内に村に一人か二人好きな人がいたんですよ。そういう人達がいつの間にか地元を見直して我々の住んでいる地域がどうだったのかを見て歩こうと。それでいつの間にか出来たんですよ。会をつくるとかじゃなくて友達とか知り合いとして集まつて、村の話をしたり過去のことを話したり、よその村のお寺の何かを見たりつてというのが、いつのまにかできたんですよ。誰が始めたかわからないですけれど。

越谷研究に影響を与えた二人の人物

わたしは専門的な知識というものはほとんどないんですよ。みなさんに教わりながらやつてきたな一つ。それだけなんです。ただ、みなさんとちよつと違ったのはいくつかあるんですね。その中で、私の人生上の恩師といえますか先輩というからお父さんみたいな存在が二人います。

一人は、大袋村つていうのが昔ありまして、その村長をやつていました瀬尾哲太郎さんという方。もう一人は埼玉県会議員をやつていました大野伊右衛門さんという方。この二人が人生上の大先輩であり私の今日まで育ててくれた二人なのです。今は亡くなりましたけれど、この二人がいたから私があるんだと思つてゐるんですよ。それに、わさびを効かしてくれたのが初代市長の大塚伴鹿さんなんです。

大林の瀬尾哲太郎さんとの関わりは三ノ宮卯之助です。日本で一番力の強い人物が越谷にいたという人の研究のきっかけを作つてくれたのです。昭和二十六年です。それ以来、瀬尾さんの言われた通り今でもやつてゐるんですよ。四年前に三ノ宮卯之助が日本一の力持ちだと名実ともに証明することができました。

四丁野（今の宮本町）の大野伊右衛門さんは明治時代に元荒川を利用して材木問屋をやつていた金持ちなんですからね。ある時、「大相模の一本杉あたりを探しているか。」つて言うから、「そんなところ行ってませんよ。自分の村でもないのによその土地まで荒らすことしませんよ。」何の話かわからなかったの

すが、「あそこを探せ。」っていうんですよ。「何か出るんですか。」と聞くと、「出るかも知れない。」それで何回か調べていくうちに土器の破片が出て来たのです。「これはおかしいなー、こんな田んぼの中に土器のかけらがあるわけない。」当時は疑問に思っていたんです。「これは時間をかけてもやらなければならぬのかなー。」と、当時は疑問視していたんです。見田方遺跡の発掘のきっかけを作ってくれた方なのです。

越谷市の資料館構想

資料館構想については私も昔からの念願なんです。ただし、実現と念願とまたちよつと違うんですね。たとえば一つの文化財を指定する、しないっていう問題と同じようなんです。今、宮川会長なんかいろいろやっているけれど、何を決めるっていつても一年二年かかっちゃうんです。三ノ宮卯之助なんかも話題になってから何年かかっているかわからない。私がいる時から提案しても、出て引っ込んで、出て引っ込んで、そんなことやっているんです。じゃ、そういうのをどうするのかっていう問題になってくると、またちよつと違ってくるんです。これは勿論、文化財の場合は文化財調査委員という人が本来は責任を持ってやるべきなんですけれど、最終結論は市なんです。委員は意見を諮問に答えるという規則になっちゃっているんです。要するに自分たちで事を起してものを作ってという権限がないんですよ。最終的には条例問題というところまで行かなくちゃならないんですけれどね。

いずれにしても一般の人たちの要望として資料館は欲しいと

いうことは間違いないんです。しかし作れるかどうかというところ、まだまだ問題が残っているんです。それは複雑で多くの市民の賛同、あるいは行政の問題もある。私もチャンスを狙っていて、かつての市長あたりが市内にいろんな子供なんかも使える科学館みたいなものをつくったんです。その時分に「資料館もつくれ。」と言ったら、その資料館は目標の順番が後ろの方なんです。世の中のそういう科学思想だのロケットだの子供の遊びの問題だのが優先してしまつて。資料館のメリットって言っちゃおかしいけども、少ないんですよ。それを子供の世界とか大人の一般の社会に役立てるとなるとこれ難しいんです。今のよその地域にある資料館なんか見ても閑古鳥が鳴いているわけです。それを埋めるには特別な展示会などをやらないと人が集まらない。そういう現状なんです。

それから、集めた物の保存問題もあるのです。展示室を造っても保存する部屋は無視される程じゃないんだらうけど重きを置かないんです。私なんか逆に保存することが前提なんです。だから見せるのはその次なんだと話すんですけど、行政から言わせると市民サイドに立つと、見せるのが先で保存は後ろにいつちやうんです。そういう理論的な問題など民心の把握の仕方などが違うんですよ。今までさんさん努力しても、中々かみ合いがうまくいかないんですよ。

これ行政サイドに立つて見るとわかるんです。私も何年か役所に入って仕事をやった経験があるんで、その当時は昇る勢いだったから提案して先走って行けば、どんどんついて来て何とかなってまずくれどね。私が役所にいた時につくった団体はたくさんありますよ。

ところが資料館的なものはムードが上がらない。上げるだけの層が広がってない。だからやっぱり底辺を広げるしかない。底辺の一つが郷土研究会のメンバーだろうと思うんです。こういうのがどんどん広がってくれば、その中から力がつけば郷土資料館は自然とできるだろう。

これ、無理してやって、例えば全国的にたくさんできた時期があるんですよ。私も何十と見ました。行く度に、あちこち今でも見ます。今、没落しちゃって物置倉庫でクモの巣があるのを散見する。そうすると、「つくりました、クモの巣だらけになりました。」ってなら、これこそ非難されるだけ。そういうものをどうするかということですね。ただ単なる全国的ムードに乗ってやってもクモの巣だらけになっちゃう。そうすればしぼんじゃうんですよ。だから、あわてることはない。レイクタウンじゃないけど、遺跡の保存調査そういう問題でもそうなんですよ。あわててガタガタとやっていくか、それとも世の動きとその地域の実情の変動とそれに合わせた形でやる、これが一番心配ない。「つくりました、人気がない。」という市長にすれば大失態になっちゃう。そうすると踊らしたのは誰だかっていうことになっちゃうんです。そういうグローバル的に見ていかないと、一つの永久施設をつくるっていうのは慎重でないとだめだ。

だから市町村にあるいろんな施設で眠っていたり、利用頻度の少ない施設を調査するといんです。あるいは特定集団の専有化に近い施設もあると思うんです。関係ない人から見たら「あれは一部のマニアのものじゃないか」と思われてもしかたがないですね。

お話の途中ですが、そろそろ予定時間になりましたので終了させていただきます。紙面の都合上、お話の全てを会報に掲載できませんが、貴重な記録として全てを録音し、文字に起こして保存致します。

本日は長時間にわたり大変ありがとうございました。

@ 越ヶ谷駅から越谷駅へ @

越ヶ谷 から 越ヶ谷 → 新田

(下記区間の一駅ゆき)

新田 ← 大袋

通用券日限 下車前途無効

3等 10円

1461

東武鐵道

越ヶ谷駅発行

1461

大正9年(1920)4月、現在の場所に関業した越谷駅は、昭和31年(1956)11月まで「越谷」に「ヶ」がついた「越ヶ谷」と表記されていた。

大吉の香取神社と松伏溜井図

鈴木進志

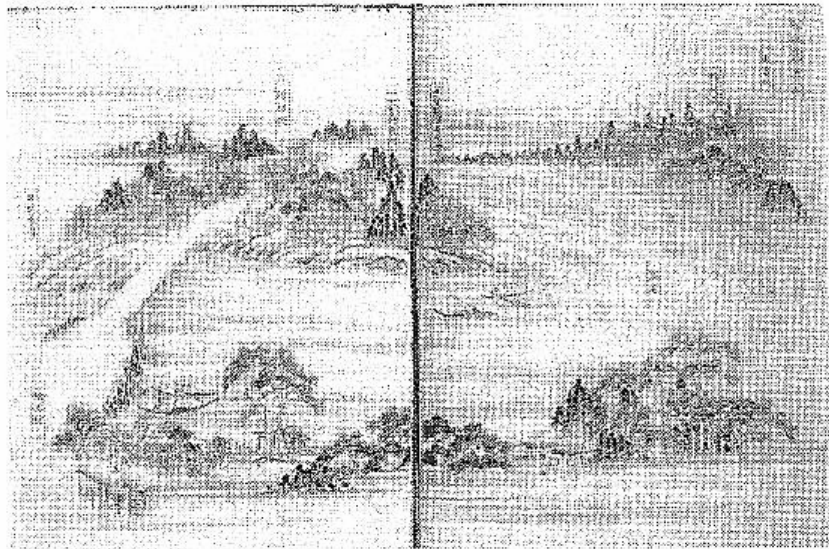
市内北東、野田街道の寿橋で新方橋から平方東京線を北の方へ五〇〇程行くと、古利根川沿いに大吉地区の香取神社がある。この神社は平成三年まで前記寿橋近くにあったが、河川改修や市の緑化策による古利根堰公園造成に伴い現在地に移転された。

元来この神社創建時期は不明であるが、移転されるまでは昔から大吉村鎮守の森として、うっ蒼とした数百年の樹木に覆われていた神社だった。この森は既に新編武蔵風土記稿Ⅱ文政十一年（一八二八）Ⅱに添付されている松伏溜井図にも同様な風景で描かれている。

下の絵図である。これは特徴的部分を強調して描かれているようだが、ここで若干絵図風景について説明しておく。

絵図の下方余白部分には松伏村の畑や森等が存在

していた筈だが省略されている。古利根川（松伏溜井）は分流し、主流は左方向へ流れ、他方は鷺代用水（別称逆川又は葛西用水）だが絵図では上方へ流れている。この用水川幅は非常に拡大されて描かれた絵図になっている。しかし現在はこの付近の分流口は埋没され、地下通水に変貌している。これは前記河川改修に伴うもので隣接して古利根堰も近代的に造り替えられた。左方



新編武蔵風土記稿 葛飾郡之十五 松伏溜井図（国立公文書館蔵）

向に見える土橋（松伏堰）は現在の寿橋で野田街道筋である。中央の大きな森が当時の大吉村香取神社地で「大吉村飛地」と絵図の上部に書かれている。森の向かって左側方面は「増林村」で、一方「大吉村飛地」と書かれた文字の向かって右側隣には、「瓦曾根溜井分水口」と書かれている。これは鷲代用水の流路方面を示している。絵図向かって右側は対岸の「大吉村」である。香取神社移転先はこの上流になる。向かって右側上方に「稲荷森」（稲荷ノ森）と書かれ、樹林が続くようだが、この付近には「稲荷の森」と呼ばれる屋敷林がみられていた。その場所は、現在の老人ホーム「キャンベルホーム」及びその駐車場あたりである。かつては、江戸時代から商っていた材木商「田川家」が所有していた森である。ここで移転された香取神社の創建時期を考えてみる。同神社の勧請文によると、その文面頭初に「一当村ニ従前々鎮座在之候香取社……」とあるので、この勧請文が書かれた日付の弘化二年（一八四五）正月二十九日以前から既に神社は存在していたものと推測される。なお、この勧請文には更に「香取大神宮御神璽」、「御額字御染筆替」と記されているので、改めて拝受を願ひ出たものと思われる。



またこの神社境内には稲荷社や水神宮も合祀されている。水神宮の石祠年号が享和元年（一八〇一）西六月吉日とある。この日付により水神宮は香取社のこの勧請日付より四十数年以上前から祀られていたようである。

更に時代は大分遡るが、寛永年間（一六二四―一六

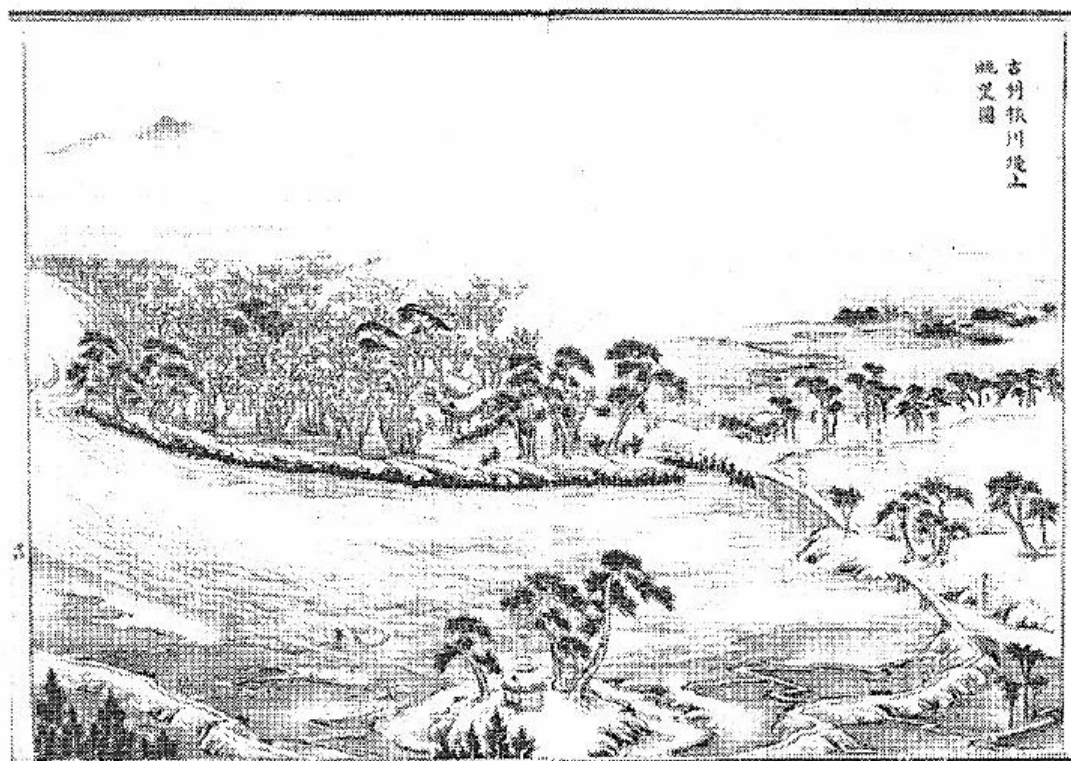
四四) 以降の長年にわたる葛西用水水系成立過程において、この付近では松伏溜井、松伏堰(香取神社隣接)等の整備、更には古利根川から分流する鷺代用水(逆川)の開削が行われた。このとき分流する角地部分(移転前の香取神社敷地)が大吉村の飛地となり、対岸の増林村へ残されたようである。残された理由は不明であるが、地形や地勢上の理由か、あるいは大吉村の開発当時(正保期Ⅱ一六四四・四七以前)この地に村の何か氏神が祀られ、聖地として残されたのだろうか。

何れにしても飛地として残された土地には既存か新規勧請かにかかわらず、この頃以降何らかの神社が祀られていたものと推量される。

飛地にあった神社が、およそ三六〇年も経過したと思われる平成の現在に至り、ようやく大吉地区住民の土地へ移転されたのである。

なお香取神社の新移転地は川沿いの低地だったが、そこには昔から小さな石祠が残り、住民には稻荷社の跡地として知られていた場所である。この稻荷社については前記同様、風土記稿にその絵図が「古利根川堤上眺望図」として添付されており、最近その撮影写真及び解説文を拝見し、これは地元住民にも

新編武蔵風土記稿 埼玉郡之八 利根川堤上眺望図 (国立公文書館蔵)



大変参考になると思われるので、資料作成者の了解のもと本稿末尾ではあるが添付させていただいた。古利根堰公園の街道際に数百年を経た樺の老木が二本立っている。その枝振りは大分小さくなっていて、元々移転される前の香取神社参道入口の御神木だった。付近の歴史や環境変化の象徴として、今後の推移を見守りたいものである。

＝追記＝

加藤 幸一

前のページ下段の図は、新編武蔵風土記稿に添付



今はなき小島にあった稲荷社の現在地

された資料に掲載されている「古利根川堤上眺望図」である。大きく描かれた川は、向かって左から右へと流れる古利根川である。その手前は、現在の越谷市大吉(おおよし)、対岸は砂丘が広がる松伏町である。対岸の中央には天神社(現在も当時の砂丘上にある)が見られ、その北方は桃林が盛大に続いている様子が描かれている。

図中で、古利根川の下流に架かる橋は重ね土橋(現、寿橋)で、向かって右端手前の水路は「西葛西用水」と書かれ、葛西用水である。向かって右端は、大吉村の香取杜裏から古利根川に半島のように突き出た香取杜(この図には出ていない)の土地である。

古利根川の河川敷の小島にある稲荷社(図の中央手前)は全く現存しないが、現在の大吉の香取社(葛西用水の左岸からここに移転してきた)のあたりに、江戸時代はあったのである。

この稲荷社の手前陸地側には、ここには掲載されていないが、徳蔵寺がある。徳蔵寺に隣接する半円形の道筋の土手道は、古利根川沿いの古道であった。図では稲荷社の手前の小道がそうである。また、向かって左上遠方の山は、筑波山である。



越谷市内の渡し場

篠原 陸郎

現在、川を渡る道には橋が架けられているが、昔は主要な往還道（日光街道の元荒川を渡る大沢板橋など）以外は橋がなかったので、ほとんどが舟を利用した。いわゆる渡し舟である。その発着場を渡し場という。

私有舟でない「公用」の渡しは、村の入用費や自費などで舟を備え、「渡し守」（渡し番・川番）が管理した。今でも「渡し守」を勤めたという家が残っている。

渡し守は渡舟運賃を徴収したが、村人は運賃の代わりに米・麦などを毎年納めて利用したともいう。

江戸・明治・大正・昭和と、それぞれの渡し場は時代とともに消えたり、橋が架けられたりしても名前だけは一部残っているとある。

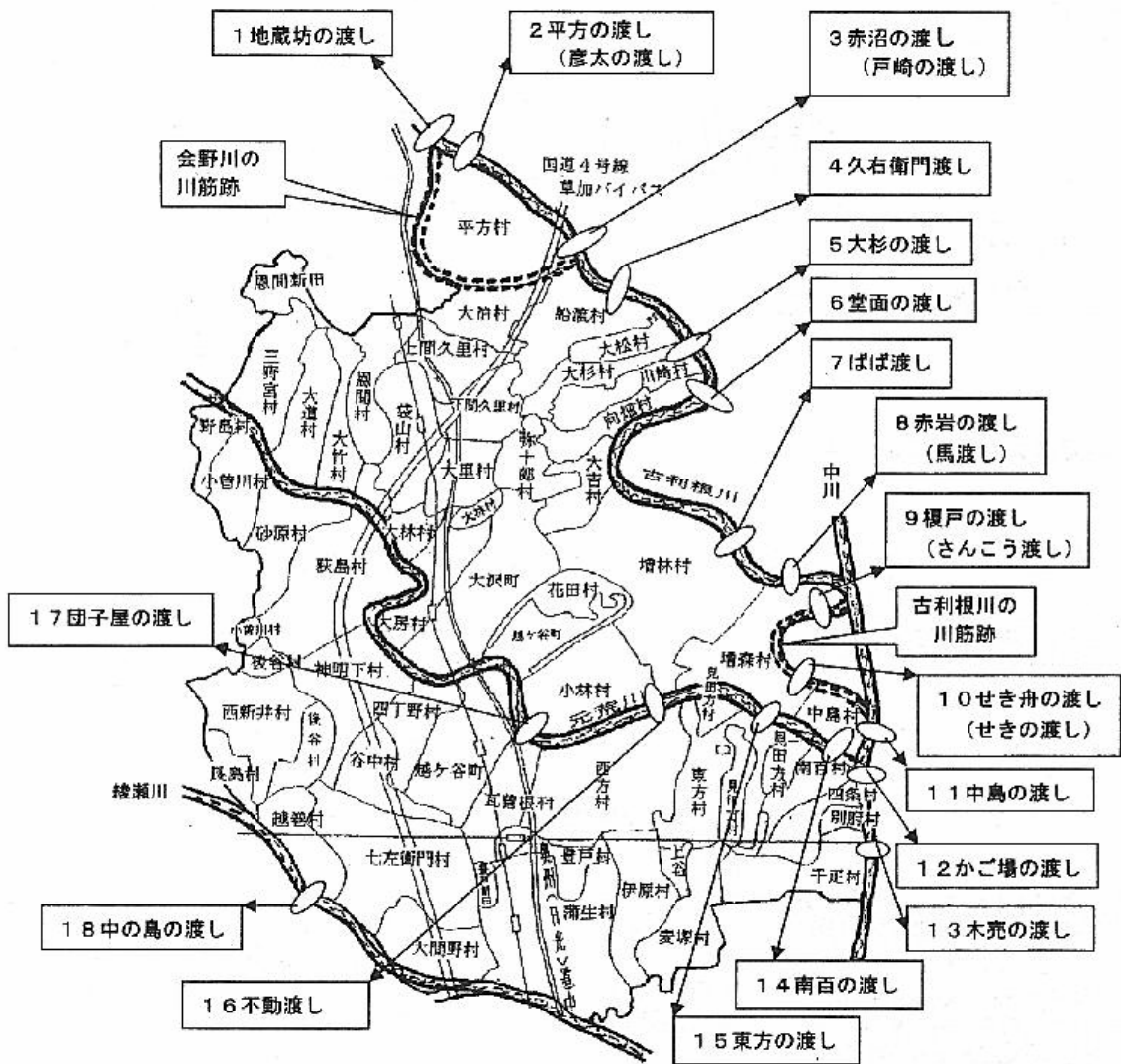
ここに渡し賃を徴収して利用した越谷市内の公用

の渡し場を地図上に表してみた。

発着場

- | | | | |
|---|--------|----|--------|
| 9 | 増森↔榎戸 | 18 | 越巻↔中の島 |
| 8 | 増森↔下赤沼 | 17 | 瓦曾根↔小林 |
| 7 | 増林↔上赤沼 | 16 | 西方↔小林 |
| 6 | 向畑↔松伏 | 15 | 東方↔増森 |
| 5 | 大杉↔大川戸 | 14 | 南百↔中島 |
| 4 | 船渡↔大川戸 | 13 | 千疋↔木売 |
| 3 | 戸崎↔赤沼 | 12 | 南百↔吉川 |
| 2 | 平方↔銚子口 | 11 | 中島↔吉川 |
| 1 | 備後↔銚子口 | 10 | 増森↔須賀 |

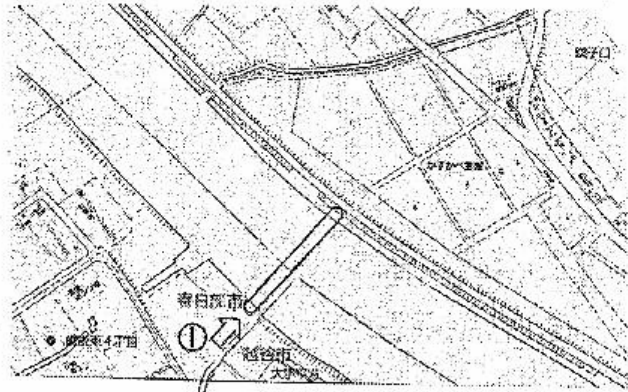
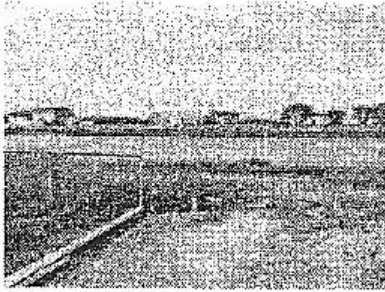
越谷市内の渡し場



1 地藏坊の渡し(備後～桃子口)

2

⇒ 1

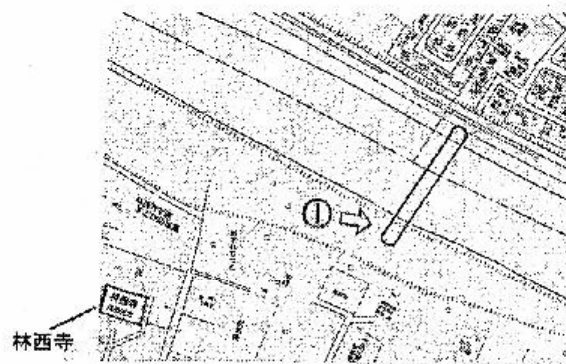
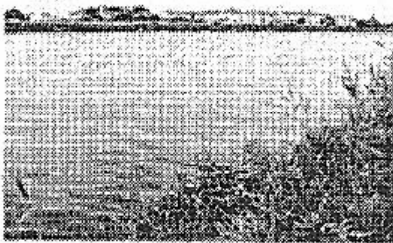


日光道中
地藏様

日光道中入口にお地藏様があり、渡し場の目印となつたので地藏坊渡しと呼ばれたという。

2 平方の渡し(平方～桃子口)
(彦太の渡し)

⇒ 1



林西寺

3 赤沼の渡し(戸崎～赤沼)

⇒ 1



木橋の柱跡

⇒ 2



古利根橋を望む



水神宮(1835)



⇒ 3

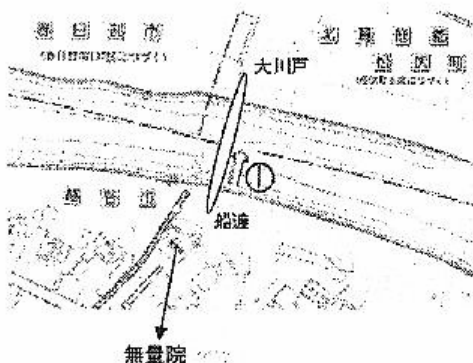


古道

- ・昔は今の野田岩槻線がなく、この渡し場が赤沼へ行く唯一の往還道であった。
- ・昭和の始め頃、この木橋が架けられ、昭和30年頃現在の野田岩槻線が出来て、古利根橋が架けられた。(今でも写真のように、木杭が残っている。)
- ・「赤沼の渡し」脇に「水神宮」の石塔があり、舟の安全を願ったものと思われる。
- ・ここの「渡し守」は「小早川家」が勤め、今でも同家の人が水神様を供養している。

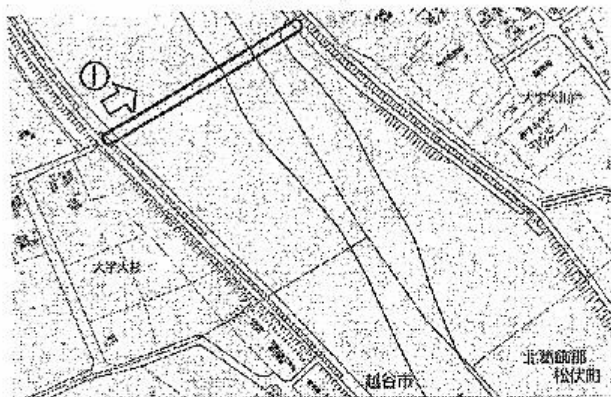
4 久右衛門渡し (船渡~大川戸)

⇒ 1



5 大杉の渡し (大杉~大川戸)

⇒ 1

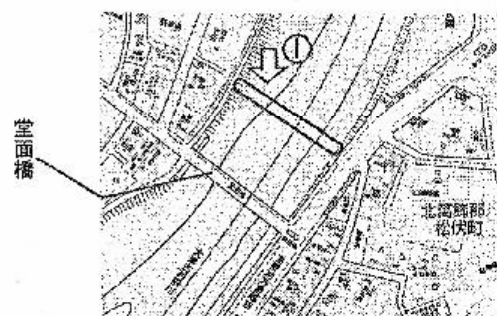


6 堂面の渡し (向畑~松伏)

⇒ 1



手前渡し場から堂面橋を望む



7 ばば渡し (増林~上赤沼)

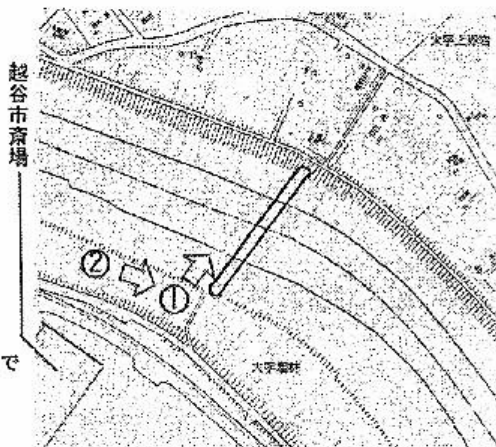
⇒ 1



⇒ 2



手前渡し場から「ふれあい橋」を望む



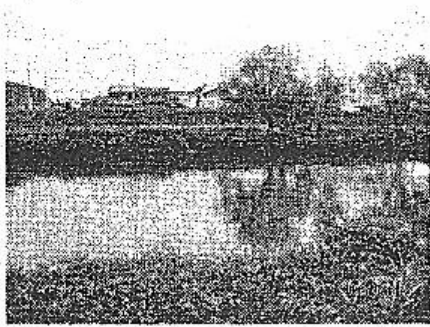
- ・「ばば」の由来は不明、 婆さんが渡し場に居たからとの言い伝えあり。
- ・「婆」を連想するので単に「渡し場」、あるいは地元が中組なので「中組の渡し場」ともいう。
- ・もともとは「馬場」という意味だったのかも知れない。
- ・(勝林寺大26世の祖母の人の話)

「大正の頃は、渡しの料金は往復で大人3銭、子供1銭、自転車は10銭であったという。地元の中組の人達は、年に2回、秋に玄米3升、夏に麦6升納めたので、渡り賃は無しで渡れたという。」

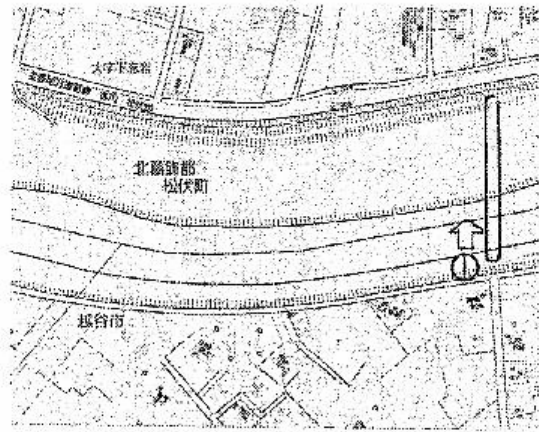
- ・渡し場は戦後のカスリーン台風が襲ったS22頃まで行われていた。

8 赤岩の渡し (増森~下赤沼)

⇒ 1



- ・ ばば渡しの下流、増森の観音堂の北にあった。
- ・ 馬渡しともいい、人・馬の運搬がみられた。

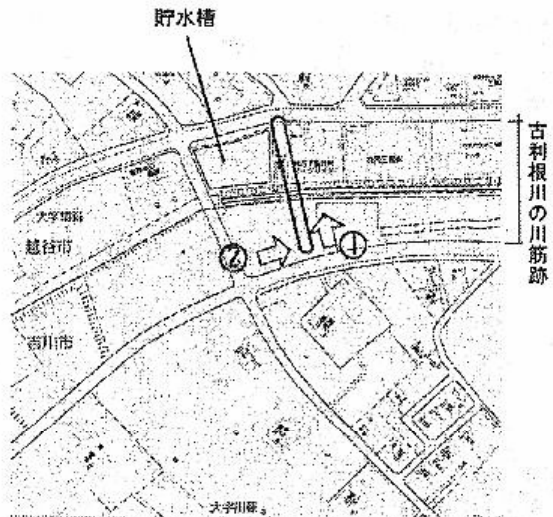


9 榎戸の渡し (増森~榎戸)

⇒ 1



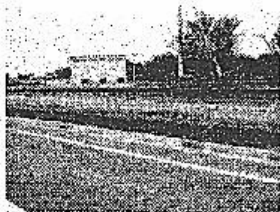
⇒ 2



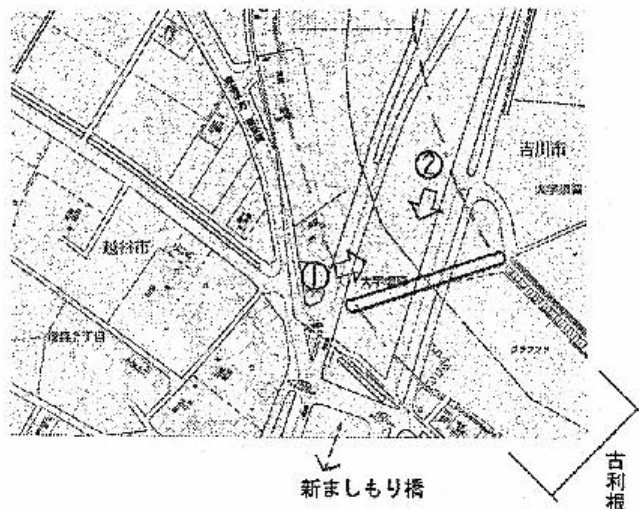
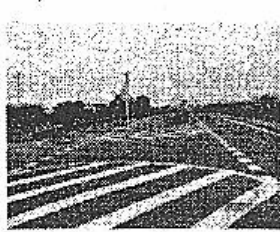
- ・ 昔は古利根川が曲流していた。現在は造成されているが、川筋跡の様子がうかがわれる。
- ・ 赤岩の渡しの下流、現在の丹下製作所あたり。

10 せき舟の渡し (増森~須賀)

⇒ 1



⇒ 2



榎戸の渡しと同じく、今はない古利根川を新4号線が横断している。

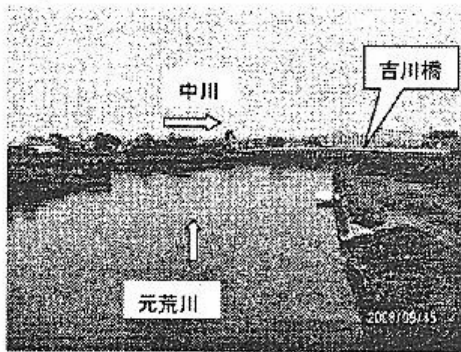
11 中島の渡し (中島～吉川)

12 かが場の渡し (南百～吉川)

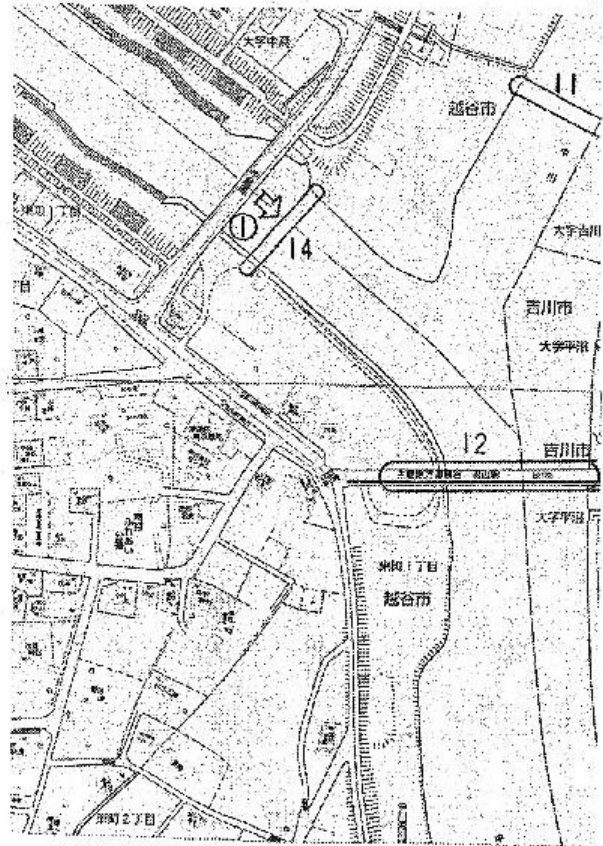
- ・吉川方面へ行く中川の渡し
- ・明治8年頃吉川町の徳江忠次郎という人が木橋を架ける。「徳江橋」(今の吉川橋)と呼んで、個人の橋のため通行料をとっていたという。
- ・後、県がこの木橋を買い取り8年コンクリートの橋を架けた。

14 南百の渡し (南百～中島)

⇒ 1

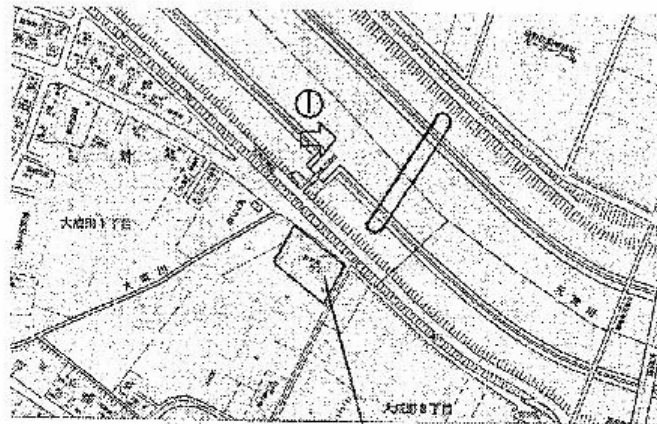
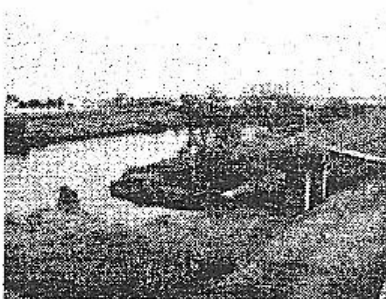


- 元荒川中島橋上より中川に向かい
- ・舟のあたりが14南百の渡し
 - ・中川左手あたりが11中島の渡し
 - ・中川右手吉川橋の位置が12かが場の渡し



15 東方の渡し (東方～増森)

⇒ 1



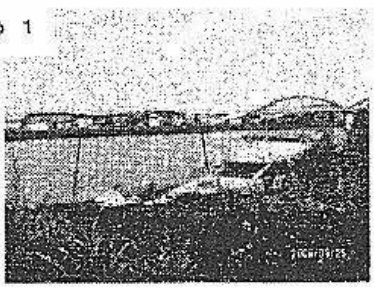
渡し守であった戸井田家の当主(祐三氏)の話

戸井田家

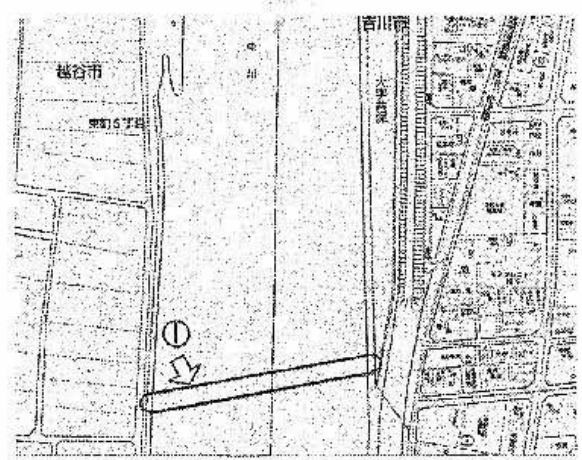
- ・現当主で3代にわたり江戸末期より、戦後間もない頃まで農業の副業として「渡し」をやった。
- ・戦前は2銭/人・片道の舟賃をとり、5～10人/回、5～6回/日、人や自転車を運んだ。
- ・離島のような当時の増森・中島地区から学校へ通う先生などもいた。
- ・舟は自前で、家族が舟を漕ぎ、毎日の日銭は農家にとって大変助かった。
- ・対岸の渡し場には誰もいないため、客の合図は、川を渡したロープを引っばると鈴が鳴ることで迎えにいった。

13 木売の渡し (千疋~木売)

⇒ 1

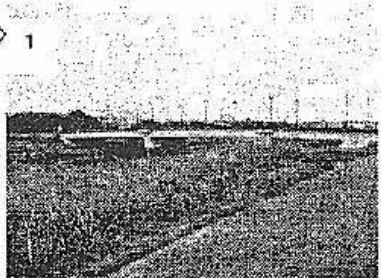


中川右手下流に水管橋を望む
船のあたりが渡し場

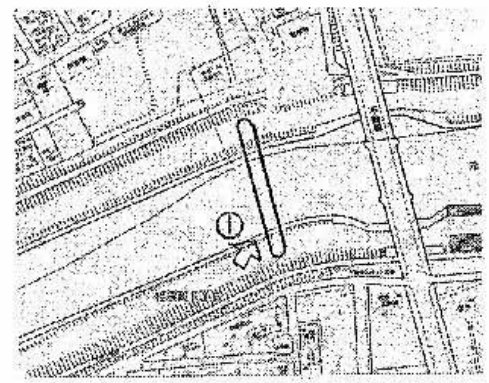


16 不動の渡し (西方~小林)

⇒ 1

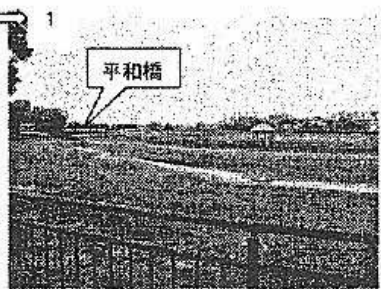


増森村から西方村の大相模不動(大
聖寺)へ通じる元荒川の渡し場
下流に不動橋を望む



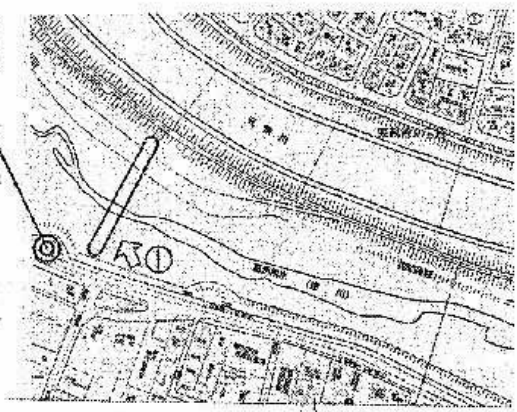
17 団子屋の渡し (瓦管根~小林)

⇒ 1



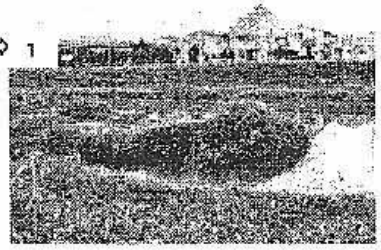
元荒川と葛西用水の間の中洲へ
瓦管根から渡る渡し場

団子屋
道路の北側に今井家(屋号「稲荷屋」)
あり団子屋を営む。現在道路の南側に移転。

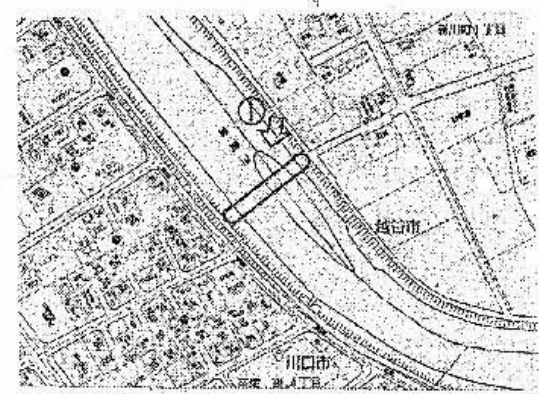


18 中の島の渡し (越巻~中の島)

⇒ 1



写真の中洲は昔からあった
対岸地域を中の島と呼んでいた



中町・浅間神社の懸仏

水上 清

当社の創建については明らかでない。しかし、後述の懸仏裏面の墨書から室町期には既に祀られていたことが分かる。また、江戸期には四丁野村（現・宮本町二丁目）の真言宗越谷山神宮寺迎攝院が別当として当社を管理していたことから、創建はこの寺がかかわっていた可能性がうかがえる。

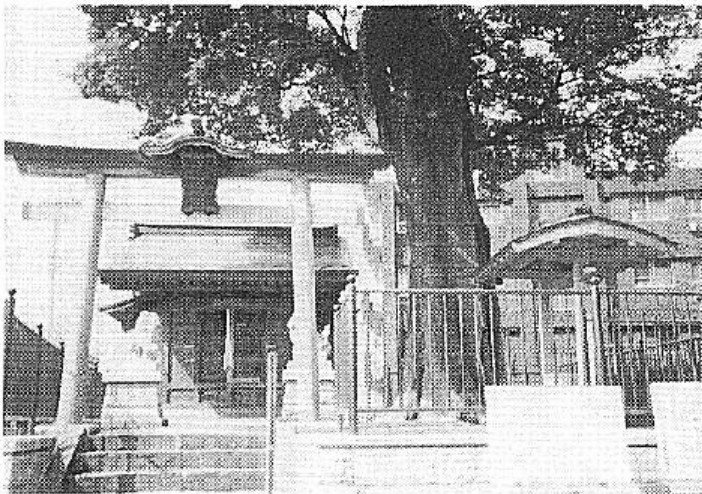
祭神は木花咲也姫命である。中町の鎮守として崇められる一方、子育ての神、子供を守護する神として近隣に知れ渡っている。

懸仏は、神社の鏡や曼荼羅の月輪に由来する円形板の中に、神の本地仏を浮き彫りにしたもので、御正体ともいう。平安中期の神仏習合の信仰から生まれた。鎌倉期から室町期にかけて社殿等に吊り懸けられ、さか

んに拝まれたことから、この名がある。その後、信仰の移り変わりによって、懸仏は見られなくなった。

本面は、当浅間神社に祀られていた。明治維新の廃仏毀釈の際、捨てられていたのがたまたま拾われ、所蔵者会田勝亮氏（越谷市中町十一、六）の祖父・会田太助氏が保管することになった。一時期、同社の祭礼に社殿の中に本面が立て掛けられたこともあった。平成十七年より久伊豆神社に預け保管されている。

その形状は丸い木型に富士山をかたどった銅板鍍金



中町・浅間神社

張りで中央に銅板打出鍍金の大日如来像を張付けている。上部に釣り手環一对。裏に墨書銘文。径二四・四釐。昭和四十七年十月二十五日指定の市有形文化財、工芸品。

裏面の銘文中、先ず注目されるのは二つの異なった年代（いずれも室町前期）と二人の別当名が記されていることである。そして筆跡は全く同一。

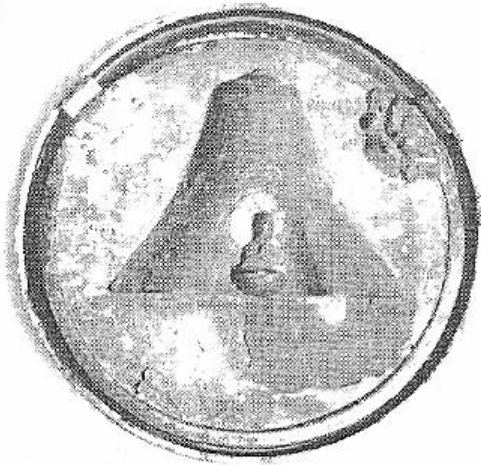
「恐らくこの御正体は文明八年富士浅間神社に懸けられていた御正体を写して造られたのかも知れない」との見方がある（越谷市史）。しかしこの記述に関心をも

って調査者された〇氏から「富士宮の浅間神社に問い合わせたが、当社には当該当品は存在せず、奉納の記録もなく、また別当二人の名も記録されていないとの返答を得た」と聞いている。

また、恐らく上野介満範が応永年間に奉納した懸仏が何らかの事情で失われたため、文明年間に跡継ぎの良清があらためて奉納したのが本面ということなのであろう」（富士吉田市史）との解釈もある。因みに上野介満範は、当時数代にわたり幸手領田宮城主であった一色氏の一族、一色満範のことと思われる。（埼玉の神社）

次は種子文字の配列である。富士山頂の八峰を八葉蓮華（はちようれんげ）ハス、極楽浄土）に見立て、金剛界大日を中心それぞれ本地仏を設定したものである。

全国の懸仏の中で、山の形をあらわした中町の懸仏は他に例を見ない。また、富士山を八葉蓮華に見立てた山岳宗教の



【懸仏 表面】



【懸仏 裏面】

確立を示す文化財は山岳信仰の遺品として貴重である。

敬白

奉納 富士山内院御正躰

南無浅間大菩薩

上野介満範

別当

本云応永三十二年巳六月一日 讚蓮(教)

于時文明八年丙申六月一日

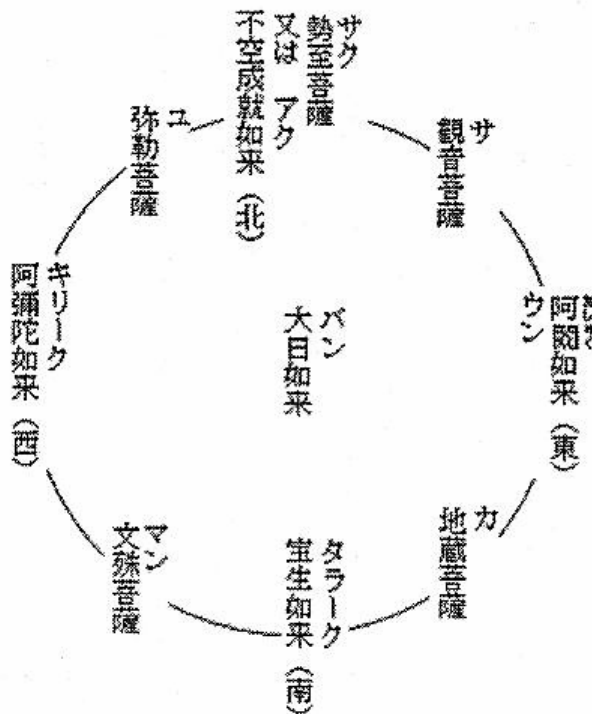
别当中納言阿闍梨良清 義範種子

種子を読みと尊名

裏面の墨書銘文は埼玉県史より転写したものであるが、「懸仏裏面」の写真から見ると北はサクサでは

【裏面の墨書銘文】(埼玉県史より転載)

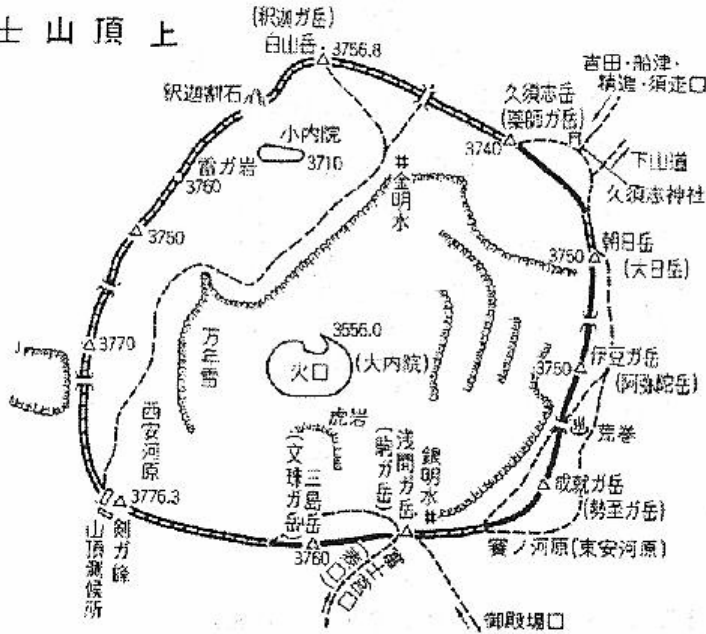
なくアクサと読めるようである。サク(勢至)は誤記で、アク(不空成就)が正しいとすれば、金剛界五仏が揃うことになる。



富士山山頂

富士山山頂の噴火口を古来「内院」と呼ぶ。これと
 とり囲むいわゆるお鉢の本地仏は、時代とともに変化
 してきたが、現在でも大日岳、阿弥陀ヶ岳（勢至岳）、
 文殊岳、釈迦ヶ岳、薬師ヶ岳などの呼称が残っている。

富士山頂上



越谷ふるさと話

越谷吾山と越谷の方言

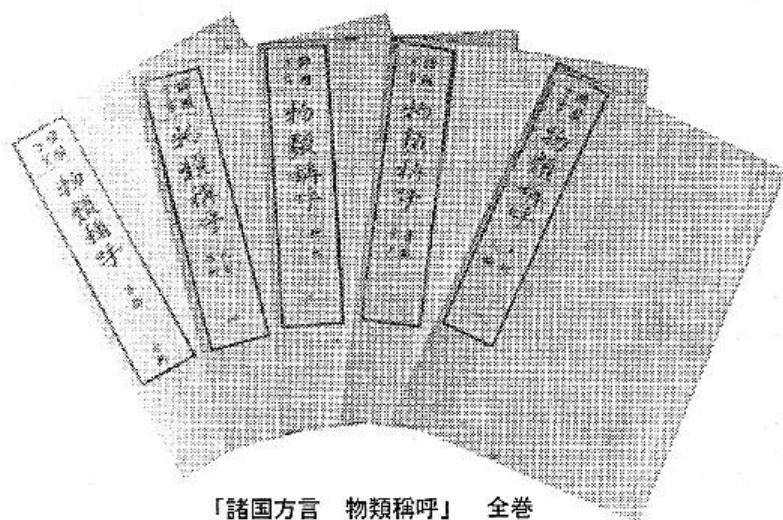
増岡 武司

人の話す言葉にはその地域によって独特の言葉があります。

例えば、東北地方には津軽弁・山形弁・秋田弁等
 いわゆる東北弁、関東地方では茨城弁・栃木弁、山
 静地方では山梨弁・静岡弁、中部地方では名古屋弁、
 関西・中国地方では大阪弁・岡山弁・広島弁・山口
 弁（長州弁）、四国地方では高知・土佐弁、伊予弁、
 九州地方では博多弁・鹿児島弁等々、全国それぞれ
 特徴のある言葉が交わされています。昨今ではテレ
 ビやラジオの影響で方言ばやりです。

日本で地方地方での言葉の違いを自覚し、その区
 域を明確に意識して記録した最古のものに、十世紀
 初めに成立したと思われる「東大寺諷誦文稿（ふじ
 ゆもんこう）があります。

なお、日本全国の方言を大量に採集し、分類した
 ものは越谷吾山（こしがやござん）の「物類称呼」
 （ぶつるいしようこ）です。この「物類称呼」は江
 戸時代最大最高の全国方言辞典で二十世紀終戦前ま



「諸国方言 物類稱呼」 全巻

で、一人の手になる
こうした全国的規模の方言辞
典は存在しませんでした。

越谷吾山は享
保二年（一七一七）越ヶ谷新町会
田家で生まれ、若いときから江戸
などの文人と交流をして俳譜（俳
句）に精進し、のちに江戸へ出て
芸道上の高位位
である「法橋」に

推選され、さらに安永四年（一七七五）には全国の方言を調べて、これをまとめ「物類稱呼」という本をつくりました。その後、天明七年（一七八七）十二月、七十歳で江戸でなくなりま
した。

越ヶ谷の久伊豆神社境内にある池のふちに越谷吾山の句碑

（市指定史跡）が建てられています。この句碑は嘉永二年（一八四九）に建てられたもので、法橋吾山として、

「出る日の旅のころもやはつかすみ」

との句が刻まれています。碑の石は自然石で、高さ一一五センチ、幅九十センチと、かなり大きいものです。

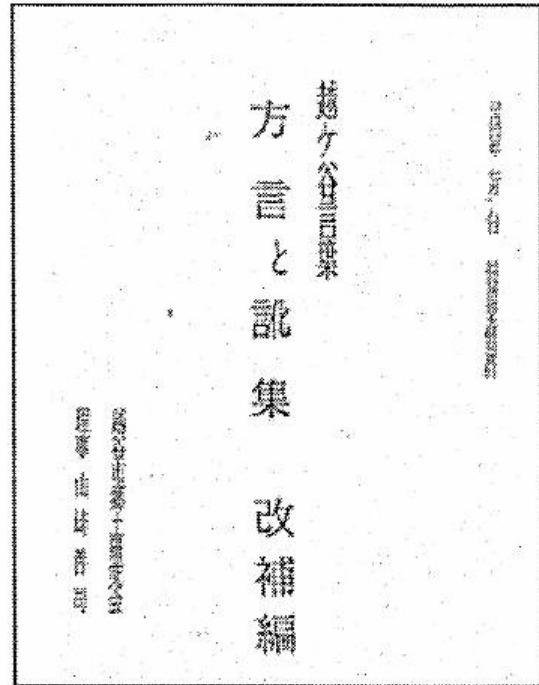
さて、越谷の方言ですが、越谷は人口の急増で、言葉も標準語化し、いわゆる「越ヶ谷弁」が急速に消えていこうとしています。その中であつて、越谷市弥生町の山崎善司氏（故人・元越谷市郷土研究会理事）が越谷周辺の方言と訛（なまり）を熱心に調べられ、それを「越ヶ谷言葉・方言と訛集」として発表しておられ、その言葉は一六五〇語にも及ぶそうです。

越谷は昔、日光・奥州街道の宿場町で、江戸と東北地方との交通路にあたっていたので、旅人を介してそれぞれの言葉が混
とんと交じり合つて越ヶ谷言葉が生まれたようです。

○越ヶ谷の方言例（カッコ内は意味）

- ・ あいけんちい（じゃんけんぼん）
- ・ あたす（思うようにならず、悪さをする）
- ・ いら（たくさん）
- ・ うかしんぼ（釣りの浮き）
- ・ うそつき（真剣ではない）

- ・おいねえ (だめです)
- ・おかまさま (ヒキガエル)
- ・おこさま (蚕川かいこ)
- ・おこもさん (こじき)
- ・おつきる (引きすぎる)
- ・おつぱるねえ (福張ってるね)
- ・カガメツチョ (トカゲ)
- ・かくらん (日射病)
- ・かせる (伝染する)
- ・がつこっこ (小学校の生徒)
- ・きじる (筋が突つ張る)
- ・くじる (指先でかき回す)
- ・こそつべえ (心からなじめない)
- ・さくい (気がおけない)
- ・さしこみ (夢中になる)
- ・さつぼる (投げる)
- ・ざらつべえ (だらしなく金を使う人)
- ・しわんぼう (けち)
- ・すつぺりめし (おかずのない) (飯)
- ・せな (長男)
- ・ちやりいれる (横から口をはさむ)
- ・ちよこべ (傘が逆さに開く)



越ヶ谷言葉 方言と訛集 改補編 山崎善司 / 著

- ・つつきりみち (いつも通る近道)
 - ・とんきち (間抜け者)
 - ・なすかなあ (借りたものを返す)
 - ・ねずみいらす (食器戸棚)
 - ・はま (車の輪)
 - ・ぶく (喪)
 - ・やてばたてば (今すぐ急に)
 - ・らちやくちやねえ (整理がつかぬ)
 - ・らんげえる (たいそうなもてなし) 以下省略
- なお、増林地区コミュニティ推進協議会の
方々が地元の古老から聞き取り調査をして

- まとめられた越谷弁には次のようなものがあります。
- ☆「べえ」のつくことは (確認に使う)
 - ・あれんべえ (あれだけ)
 - ・いつちやうべえ (いつてしまおう)
 - ・いいべえ (よいでしょう)
 - ・きたべえなのに (来たばかりなのに)
 - ・そうだんべえ (そうでしょう)
 - ・やつちやうべえ (やつてしまおう)
 - ・よかんべえ (よいだろう)
 - ・やだべえ (やだ)
 - ・これんべえ (すくない)
 - ・いなべえ (だれもない)
 - ・けつちやうべえ (帰る)
 - ・くつちやうべえ (食べる)
 - ☆「つ」が入ることは
 - ・おつとぼす (追い飛ばす)
 - ・おつことす (落とす)
 - ・おつばなす (離す)
 - ・おつべす (押す)
 - ・くれつから (上げるから)
 - ・こりきつちやう (困ってしまふ)

- ・さつぼる (投げる)
- ・したつけ (したかしら)
- ・しつるって (ぶらさげて)
- ・そろつと (そつと)
- ・とつとけよ (貰っておきなさいよ)
- ・とつけつこ (物を交換する)
- ・ひやつこい (冷たい)
- ・ぶつとばす (急いでいる)
- ・めつける (みつける)
- ・よつかかる (よしかかる)
- ☆「え」が入ることば
- ・けええる (帰る)
- ・おさまんねえ (つかまらない)
- ・かまねえ (かまわない)
- ・しんねえ (知らない)
- ・なんねえ (ならない)
- ・あぶねえ (危険)
- ・いけねえ (否定する)
- ・おつかねえ (こわい)
- ・つまんねえ (つまらない)
- ・しようねえ (しかたない)

☆挨拶ことば

- ・いいあんべえだねえ (天気の良い日の挨拶)
- ・じつじやあねえけど (話のはじめにいう)
- ・やんばいですね (良い天気ですね)
- ☆その他のことば

- ・うなつちやう／うなう (耕す)
- ・うら (うる)
- ・おら (わたし)
- ・たいる (垂れる)
- ・ちつとんべ (わずかばかり)
- ・ほつぽとけ (構うな)
- ・めぐる (まわる)
- ・おつぺかす (はがす)
- ・びたつける (たたきつける)
- ・ぶつくらす (なぐる)
- ・たまげた (おどろいた)
- ・ほじくる (穴をほる)
- ・かんべん (許す)
- ・びんた (頬をなぐる)

「越ヶ谷言葉 方言と訛集 改補版」平成4年7月(1992)刊(88ページ)は、夢空感・市立図書館でご覧いただけます。

@ 越谷市郷土研究会へどうぞ、ご入会ください @

昭和40年(1965)3月に発足し、今年で44年を迎えました。史跡めぐり(市内・市外)を毎月実施しています。

毎年1月と6月に講師を招き、越谷に関連したお話を聞く講演会を開催しています。

越谷市民まつり、越谷市民文化祭、こしがや文化芸術祭に展示部門で参加しています。

市内の石仏・石塔を中心にした文化財パトロールを希望者を募り実施しています。

子供を対象に「埼玉古墳たんけん隊」「越谷歴史たんけん隊」等を行っています。

学校や自治会・各種団体への出張授業を行っています。

会費は年間2千円(4月～翌年3月)。10月以降の入会は千円。翌年1月～3月までの入会は次年度を含めて2千円です。

越谷市外の方も大勢入会されており、大歓迎いたします。

〒343-0041
越谷市千間台西2-17-16
宮川進方 越谷市郷土研究会
はがきにてお申込みください。

「久」か「興」か―

吾妻鏡 建久五年六月三十日の条

宮川 進

1. 吾妻鏡にある「越谷を含む地域」の記述

鎌倉幕府の公式記録ではないか、とも言われる吾妻鏡に越谷に関係した記述があります。越谷、そのものについてではありませんが、越谷を含む地域にあった大河戸御厨についての記述です。

御厨（みくりや）とは神社へ生産物を上納し、その経済を支えた領地をいいます。大河戸御厨は源頼朝によって伊勢神宮へ寄進されました。具体的な場所としては不明であり、会報第8号に、その範囲について不完全ながら小論を書かせていただいています。松伏町に大河戸という地名が残っているの、これ（葛飾郡）を含み埼玉郡、足立郡にまたがっていたと推定されています。

その記述は何箇所かありますが、その中でも特に越谷と関係が深いと思われるのが建久五年六月三十日の条です。

○その原文は次のとおり。

卅日 巳未 於武蔵国大河戸御厨久伊豆宮神人等喧嘩出来之由之有其間依驚思食為令尋沙汰被下遣掃部允行光云々

○読み下し文は次のとおり。

卅日 巳未 武蔵国に於て、大河戸御厨と久伊豆宮の神人等と喧嘩出来の由、其聞え有り。驚き思食すに依つて、尋ね沙汰せしめんが為、掃部允行光を下し遣はさると。云云。（訳文 吾妻鏡標註 堀田璋左右著 名著刊行会刊 S 48・9 から）

武蔵の国において、大河戸御厨の人と久伊豆神社の神職との喧嘩が発生し、その報告を受けた源頼朝が驚いて、事実の把握と処理のために、二階堂掃部允（かもんのじょう）行光を派遣したくという記事です。

右の読み下し文のように、S 50・3に刊行された越谷市史 1・通史上には「久伊豆宮の神人」と書いているし、江戸時代刊行の「新編武蔵風土記稿」（天保元（一八三〇）年完成）にも、そう書いてあります。

これを読んで、大河戸御厨というのは当然、越谷を含んでいるだろうし、久伊豆はこれまた当然、地理的にいっても御厨に一番近い越谷の久伊豆でないか、それが吾妻鏡に載っているのだと、うれしく思っていました。

2. 久伊豆ではなくて「伊豆宮」か

異論があるということに気づいたのは岡田清一氏（東北福祉大学教授）の「大河戸御厨をめぐる二、三の問題」（埼玉県史研究第26号 H3、2刊）を見たときです。これには「大河戸御厨と伊豆宮の神人が喧嘩した」と書かれていました。「久」がどこかへ行っちゃいました。

どこから、こういう読み方がでたのか、調べました。

S 60・3 刊行の新編埼玉県史・資料編7・中世3あたりではないでしょうか。同資料編は「吾妻鏡については吉川本や島津本で補訂した「新訂増補国史大系」（吉川弘文館刊）所収の「吾妻鏡」を底本とし、適宜、北条本と校合した」としており、「大河戸御厨と伊豆宮の神人等と喧嘩出来」と読んでいます。

どうやら、日本の古典を収録した全集として、最も権威ある「新訂増補国史大系」所収の吾妻鏡が、「伊豆宮」説の発端であったようです。「新訂増補国史大系」は北条本を底本としているのですが、このところについては、わざわざ「註」を入れて「原作は『久』であるが、『今』は『吉川本』に従う」として、「與」と読んでいるのです。

これまで、私たちの信じていた読み方は北条本によっていたのです。

吉川本では、次のようになっています。

○原文は――

卅日 巳未 於武藏国大河戸御厨與伊豆宮神人等喧嘩出来之由之有其聞依驚思食為令尋沙汰被下遣掃部允行光云々

○読み下し文は――

卅日 巳未 武藏国に於て、大河戸御厨と伊豆宮の神人等との喧嘩出来の由、其聞え有り。驚き思食すに依つて、尋ね沙汰せしめんが為、掃部允行光を下し遣はさると。云々。

（「吾妻鏡吉川本第一」というT4、2 国書刊行会から刊行された吉川本を活字化したもの―和田英雄・八代国治校訂―には「與」の横に「久」とあり、北条本では「久」となっている旨の表示がなされている。）

ここで、吾妻鏡の写本についてご説明しておきますと、「鎌倉幕府の歴史」を記した歴史書といわれる吾妻鏡には現在、「原本」は存在しません。高橋秀樹氏の「吾妻鏡の諸本」（佐藤祐彦・谷口崇編の吾妻鏡事典所載）によると、一部の記事のみを断片的に写しとめた抄出本や数年分の零本（端本）の形で伝わっているもの以外の、「集成本」には――

①北条本 天正十八年（一五九〇）の小田原開城の際、小田原北条氏の所蔵していた本が黒田孝高に譲られ、慶長九年に孝高の子長政から徳川秀忠に献上されたもの。現在、国立公文書館所蔵、重要文化財。

②吉川本 大内氏の重臣陶氏出身の右田弘詮によって収集書写されたもの。大永二年（一五二二）完成か。吉川史料館所蔵、重要文化財。

③島津本 十五世紀末に二階堂氏から島津氏に進上されたものをもとに、島津家でさらなる収集と補訂が行なわれて成立した

もの、現在、東京大学史料編纂所所蔵、国宝。

④毛利本（慶長初年（十六世紀末頃）、大徳寺の僧・宝叔宗珍の周辺で書写。毛利家から明治大学図書館へ寄贈された）などがあります。

3. 北条本と吉川本

北条本と吉川本との読み方の差異はH. 6. 9刊の春日部市史・通史編1にまとめられているので、すこし長くなりますが、引用させていただきます。

①北条本

武蔵国大河戸御厨において、久伊豆宮神人等喧嘩出来の中、その聞えあり、驚き思し食すによりて、尋ね沙汰せしめんがため、掃部允行光を下し遣わさると云々。

②吉川本

武蔵国において、大河戸御厨と伊豆宮神人等との喧嘩出来の中その聞えあり。驚き思し食すによりて、尋ね沙汰せしめんがため、掃部允行光を下し遣わさると云々。

『尊卑分脈』の太田行朝項には、太田行朝が神人の頸をはねたため所領を召し放たれたと、この事件に関する傍注が記されている。

北条本による解釈は、武蔵国大河戸御厨で久伊豆神社の神人が喧嘩を起こし、鎮めようとした太田行朝が神人の頸を切った

ことから武蔵国太田庄を没収されたことになる。久伊豆神人が喧嘩を起こした相手は記されていないが、大河戸御厨は伊勢神宮の所領であり、頼朝の篤い信仰を背後にもつ伊勢神宮神人と野与党が信仰した地方有力神社の神人が衝突し、介入した領主が所領を失って没落したことになる。久伊豆と読むと、久伊豆神社の初出史料となる。

吉川本による解釈は、武蔵国で大河戸御厨の神人と伊豆山神社の神人が相論を起こしたことになる。走湯山（伊豆山神社）は、源氏の信仰の厚い三所（伊豆・箱根・三島）のひとつであり、鎌倉時代に走湯山燈油料船（熱海船）は東国の海上交通及び関東の河川交通に重要な役割を果たしていた。大河戸は大川（荒川、現岩槻市長官で古利根川の本流古隅田川と合流している）の津という意味である。この場合は、大河戸御厨の住民と河川交通に携わる伊豆山神人の衝突であり、年貢輸送や交易などの問題から発生した事件と考えられる。太田氏と大河戸氏は同族であり、介入した領主がかえって没落したことになる。「与」と「久」の一字の違いであるが、大河戸御厨住民がトラブルを起こした相手が変わり、事件の解釈がまったく異なってくるのである。『吾妻鏡』の本文研究の進展をまちたい。

4. 吉川本を前提とした論文もー

吉川本が正しい（久伊豆ではなく、伊豆宮が正しい）ことを前提とされている論文も出てきています。

ひとつは前出、岡田清一氏の「大河戸御厨をめぐる二、三の

問題」(埼玉県史研究第26号 H3・2刊)です。

ここで、氏は「新訂増補国史大系」の吾妻鏡の「於武蔵国、大河戸御厨与伊豆宮神人等喧嘩出来之由」との読みをとられ、伊豆宮神人は伊豆山神社の走湯山燈油料船に乗って来往して、彼らが大河戸御厨の住民とのあいだに「関手徴収」でもめたのが衝突の原因であったと推論されています。

関手とは河川交通の関所通行料のこと。走湯山燈油料船は鎌倉幕府により関手などの徴収を免じられる代わりに、輸送料などの収益の一部を伊豆山神社に燈油料として寄進することを約束した船。

その傍証として伊豆山文書文永九(一二七二)年十二月十二日付関東下知状案に下総国神崎関での走湯山燈油料船楫取と千葉氏一族の神崎為胤との関手徴収についての相論展開が記されていることをあげておられます。

もうひとつは森田悌氏(群馬大学名誉教授)の「玉敷神社と久伊豆神社」(埼玉史談第55巻第2号・H20・7刊)です。

この論文では、『新編武蔵風土記稿』は「大河戸御厨と久伊豆宮神人が喧嘩事件を起こした」としているが、この記事は正確には「大河戸御厨与伊豆宮神人等喧嘩出来」である」とされています。

そして、付言として「吾妻鏡の記事を久伊豆神社関係とする

所見は、右引文の与を久とする写本に依拠して立論されているのであるが、与とするのが正しい校訂のようである。久と与の草書は近似することがあるので、写本によっては与を久としてしまったのである。」とされています。

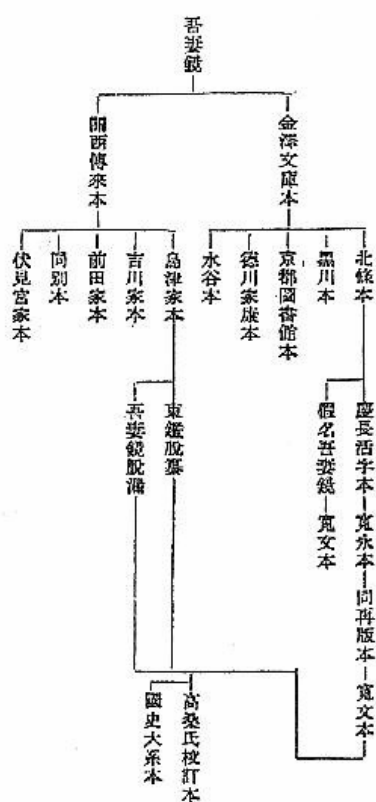
岡田氏、森田氏の論文については、それぞれ、先学の師として尊敬上げている方々のもものではありませんが、あえて反論を申上げることをお許しいただきたいと思えます。

それは、北条本をベースとしながら、この部分だけ、吉川本をとっている「新訂増補国史大系本」をなぜ信用されるのか、ということですが。

森田氏の方は「與とするのが正しい校訂のようである」とされています。これは先に触れたように新訂増補国史大系本が「註」を入れて、「與」としていることを汲まれたのではないかと、そして、その背景には吾妻鏡研究の泰斗・八代国治氏がその著書「吾妻鏡の研究」(S18・8刊)において、「吉川家本は稿本にして、北条本は修正本にあらざるかと考察するものなり」、つまり、「吉川本が元の原稿であって、北条本はその後、修正などが加えられたものとされている」ことの影響があるのではないかと思っています。

5. 八代国治氏の吾妻鏡系統論

八代氏は吾妻鏡の系統を次のように示していました。



6. 現在の吾妻鏡系統論

しかし、いまや、この八代氏が書かれた吾妻鏡本文系統論は世間では受け入れられなくなっているようです。

その先端をきった益田宗氏（東京大学名誉教授）は「吾妻鏡の伝来について」という論文（『論集中世の窓』同人編S 52、12刊）で、「すべての吾妻鏡は寄せ集め本にすぎない」とされ、「吾妻鏡は『あちこちの本を集めて寄せ合わせたもの』であって、後世の一括した形を遡らせることができない」と述べておられます。

そして、前川祐一郎氏（東京大学史料編纂所助教）も「吾妻鏡の伝来や本文系統に関する研究は、戦前の和田英松氏や八代国治氏らの研究をへて、益田宗氏の研究にいたっている。（略）北条本、吉川本、島津本といった、十六世紀に成立した大部の吾妻鏡写本の系統に確たる結論を得るのは困難である。したが

って、中世社会においては吾妻鏡は全巻揃えて入手することの困難な書であり、それゆえに十六世紀諸写本の本文系統研究はほとんど不可能に近い、という益田氏の所説が、吾妻鏡伝来論の現在の到達点といえるのである」とされています。（室町時代における『吾妻鏡』明月記研究第5号00、11明月記研究会編・刊）

井上聡氏（東京大学史料編纂所助教）・高橋秀樹氏（文部科学省教科書調査官）は、その共著「内閣文庫所蔵『吾妻鏡』（北条本）の再検討」の中で、次のように書かれています。（明月記研究第5号、00、11明月記研究会編・刊）

かつて八代国治は、吾妻鏡諸本の考察を総括するなかで、北条本が東国に、吉川本が西国にそれぞれ流布するものであったという推測を立てている。しかし、本論で分析したように、実のところ中世東国においても吉川・島津の両本と同系統の本が一部とはいえ存在していたことが予想され、流布を地域的偏差で説明することは難しい。金沢文庫に所蔵される典籍・聖教類にみるごとく、中世段階においても書物は東西を分かつたらず伝播していたとみるべきである。中世段階における吾妻鏡は、さまざまな系統の写本があちらこちらに断片的に伝わっているという状況を想定したほうが良いだろう。吉川本も北条本もこうした断片を長い期間かけて蒐集したものであり、益田の指摘どおり、すべての諸本は取り合わせ本なのである。

つまり、どの写本が一概に古い、新しいといえるものではないということ。この建久五年六月三十日の条でも、吉川本が古いから「興」が正しい、「久」は北条本を作る時点で間違えて写されたものだからダメだ、とはいえないのです。

現時点では、「久」とも「興」とも決められませんが、どちらかと決めて、その上に立って、議論を進めることは避けるべきだと考えます。「伊豆宮」と決めてしまつて、伊豆宮の走湯山燈油料船(熱海船)が、利根川、荒川流域を走りまわつていたくなど、言い切るようなことは現時点ではしてはいけないと思います。

私個人としては、S 43・3の萩原龍夫氏(元・明治大学教授)が「旧利根河畔の中世文化」(駿台史学第22号所収)の註において、「新訂増補岡史大系本では、原本(北条本)に「久」となるのを、吉川本により「与」と改めているのは妥当ではない。久伊豆宮という社号は埼玉郡に特有のもので」とし、「北条本の読み方を正しい」とされているのに賛成したいのですが、この論は推論であつて、吾妻鏡にどのように書かれているかという事ではないのです。

7. 両論併記が唯一の解決法

例えば、冒頭に読み下し文として紹介した訳文吾妻鏡標註も実は次のような註を入れています。

「久伊豆宮は埼玉郡騎西町なる宮か。同地方の総鎮守なり。」

延喜式の玉敷神社に当たらん。久伊豆の久の字、吉川本に興の字に作る。然らば「伊豆宮の神人等と喧嘩云々」と読むべく、従つて伊豆宮の社名に疑あり。尚更に考ふ可し」。

H 5・2埼玉県刊行の「中川水系Ⅲ人文」では「伊豆宮」説を採りながらも、註で「興」は吉川本によるが、北条本では「久」となつていて、これによれば埼玉郡に分布している久伊豆神社と考えることも可能である」としています。

吾妻鏡の写本のこの箇所についてどれが正しいか、結論がない現在、このような両論併記が最も適切な表現であり、この方法しかないのではないかと考えます。「久」と「興」、わずかな一字の違いですが、「久伊豆」か「伊豆」かの議論を生みます。資料の解釈の面白さを感じながら、またムツカシサも味わつた、この「一字」でした。

○吾妻鏡の写本

知先記、以隨公事、之思綺、若及懈緩、可辭申	之旨嚴、極被酌、折 <small>と</small>	吹日、已未、若武、國大河、御厨、久伊豆宮	神人、等喧嘩、出来之由、有其、凶、依、驚、思、倉、為、令、尋	沙汰、被、下、遣、擇、部、允、術、光 <small>と</small>	七月小	三日、廿戌、民部、卿、經、房、所、有、被、申、之、旨、東、大	寺、修、養、日、事、可、為、明、春、正、月、之、中、已、雖、有、其、定、遠	國、之、輩、為、結、縁、令、上、浴、省、時、節、若、可、有、煩、致、有、極
-----------------------	----------------------------	----------------------	--------------------------------	-------------------------------------	-----	--------------------------------	---------------------------------------	---------------------------------------

吾妻鏡 北条本 (国立公文書館蔵)

又市井有傳言作傳作小生先德... 今當流於下世而其功顯達引... 惟此也但各備有結緣之儀... 知先德不以隨公事之思... 中之有緣者致... 女日已來武藏國史河... 喧嘩出來之由有美聞... 沐下道福并先行也

三月三日成... 吾妻鏡

新撰... 吾妻鏡... 東鑑

東鑑（吾妻鏡）毛利本
 〈明治大学図書館蔵〉

吾妻鏡 吉川本
 〈吉川史料館（岩国市）蔵〉

参考書

- 訳文吾妻鏡標註 堀田璋左右著 名著刊行会刊 S 48・9
- 越谷市史 1・通史上 越谷市刊 S 50・3
- 大河戸御厨をめぐる二、三の問題 岡田清一著（『埼玉県史研究第26号』）
- 埼玉県民部県史編さん室編 埼玉県刊 H 3・2
- 新編埼玉県史・資料編 7・中世 3 埼玉県編・刊 S 60・3
- 新訂増補国史大系 吾妻鏡 黒板勝美編 吉川弘文館刊 S 7・8
- 第1刷刊 S 39・7 完成記念第1刷刊
- 吾妻鏡 吉川本第一 和田英雄・八代国治校訂 国書刊行会刊 T 4・2
- 吾妻鏡の諸本 高橋秀樹著（『吾妻鏡事典』佐藤和彦・谷口崇編 東京堂出版刊 07・8）
- 春日部市史・通史編 I 春日部市教育委員会編 春日部市刊 H 6・9
- 玉敷神社と久伊豆神社 森田悌著（『埼玉史談第55巻第2号』） 埼玉県郷土文化会刊 H 20・7
- 吾妻鏡の研究 八代国治著 明正堂書店刊 S 18・8 第3版
- 吾妻鏡の伝来について 益田宗著（『論集中世の窓』） 論集中世の窓同人編 吉川弘文館刊 S 52・12
- 室町時代における『吾妻鏡』 前川祐一郎著（『明月記研究第5号』）
- 明月記研究会編・刊 00・11
- 内閣文庫所蔵『吾妻鏡』（北条本）の再検討 井上聡・高橋秀樹共著（『明月記研究第5号』） 明月記研究会編・刊 00・11
- 旧利根河畔の中世文化 萩原龍夫著（『駿台史学第22号』） 駿台史学会編・刊 S 43・3
- 中川水系Ⅲ人文（『中川水系総合調査報告書2』） 埼玉県編・刊 H 5・2
- 毛利家旧蔵本吾妻鏡について—吾妻鏡諸写本についての一考察—福田栄次郎著（『駿台史学第8号』） 駿台史学会編・刊 S 33・3
- 吾妻鏡諸本雑考 丸山二郎著『日本の古典籍と古代史』 吉川弘文館刊 S 59・10
- 吾妻鏡の一古写本 村田正志著『村田正志著作集 第5巻』 思文閣出版刊 S 60・2
- 吾妻鏡の諸本 北海道倶楽部のサイト

越谷「焼き米」の方が

草加煎餅より古い

宮川 進

お隣の市「草加」の煎餅は押しも押されぬ「全国ブランド」。東京駅にだって「草加煎餅」が売られています。越谷でも「草加煎餅」が作られています。正直なところ、その繁栄が口惜しくて、とりあえず、越谷と草加のせんべい、どちらが古いかを調べてみました。

草加市史調査報告書第5集「草加せんべい―味と歴史―」によりますと、草加市内に残るせんべいの最も古い資料は、草加市青柳の藤波家に所蔵されている寛政八年（二七九六）の「万祝儀覚帳」に記載されたものであるといえます。

これは藤波家に同年正月にお年玉として受け取った品々が記録されたもので、塩鮭やあま酒などにまじって「せんべい」があります。

越谷の「煎餅」についてのいちばん古い記録は、「結城使行」という、元禄十六年（一七〇三）に茨城県結城に築城のため、江戸から出かけた水野家の家老・水野

織部長福の紀行文です。

そこには次のように書かれています。（越谷市史 I 通史編上）

梅田・嶋根・竹ノ塚と過ぎ、草加に入ると昼となったので、町はずれの茶店で昼休みをとる。「花さかんそうかとぞきく 鳥の声」。草加を出ると川があるので、何川であるかと問うと「大河」であるという。また一人は「あやし川」であるといい、別の一人は「あやせ川」とも答えた。「鶯いかに 氷の隙を あやし川」。この川を越えようと、道は右（出羽堀）も左（綾瀬川）も、流れ悠々とした川にはさまれ、興味のある所である。ただ溝川（出羽堀）の上に家を構えている家の様子があぶなくみえる。当所の名物だといって道端で焼米を売っていた。此所は加茂村と聞いたが、加茂ではなく蒲生であるという者もいる。また加茂と蒲生は一村の中の地名であるともいう。いずれが本当だろうか。「道ぞ永き日にやき米を 加茂蒲生」。

ここでいう「焼米」とはどういうものでしょうか。焼米というと、戦国時代に籠城する武士が即席でたべる「米を火で炒った」ようなものではないかと思っていました。

日本古代食事典には、このようにあります。

『焼米(やいごめ)「やきごめ」ともいう。(略)』

江戸時代の『本朝食鑑』に「焼米」の作り方がくわしく記されているので、紹介してみよう。

当今作られている焼米というのは、青稲の籾がらを除き、よく炒って春(つ)いて扁(ひらた)くした米をいい、味は佳い。また、新米の籾がらを取り去り蒸してから春(つ)いたもので、その形は扁ではないが、これも焼米である。ただし、青い糯稲の籾がらを取り除いたのは、よく炒ってから春(つ)いて扁米にすると、味は甚だよい。』

広辞苑は「春(つ)く」は「搗く」と同じで「杵や棒の先で打っておしつぶす」こととし、用例に「餅を春(つ)く」をあげています。ですから、焼米はいまの煎餅なのです。記録に残るのは越谷が一七〇三年、草加が一七九六年。しかも、越谷の方の「結城使行」は「名物として売っていた」と明確に書き、草加は、貰い物の記録であって、煎餅Ⅱ商品であったかも、はっきりしません。

これで、古さのことは決着がついたと思いますが、これほど、「草加煎餅」が有名になったのは、やはり、草加のひと達の努力があったからのことです。それには敬意を払わねばなりません。

そして、越谷は「煎餅」ではとても太刀打ちできませんから、「越谷焼き米」というブランドで売り出して

みてはどうでしょう。

「焼き米」の最初は醤油が塗られていたわけではなくて、きつと原形はいわゆる「塩せんべい」だったと思われます。「越谷焼き米」は白焼きで、味は「米の味」だけで勝負する。そういう味のユニークさとネーミングで、これは将来、「草加煎餅」を駆逐し、草加で「越谷焼き米」がつくられるのではないかとも思う次第です。

なお、前出の「草加せんべい」の報告書を読んで、当会の会友・本間清利さんも、「結城使行」を引いて、越谷の方が古いと昭和六十三年十月十四日の毎日新聞「タテヨコ埼玉」でお話されているのに気がつきました。二十年以上前のことですが、その後、このことが一般に定着しようでもありませんので、焼米とは何かという解釈を加えて、あえて書かせていただきました。

参考書

- 草加市史調査報告書第5集 草加せんべい―味と歴史―草加市史編さん委員会編 草加市刊 H4. 3
- 日本古代食事典 永山久夫著 東洋書林刊 00. 5
- 越谷市史Ⅰ 通史上 越谷市刊 S50. 3
- 広辞苑 新村出編 岩波書店刊 98. 11(第5版)

四国で亡くなった

越ヶ谷の六十六部行者

加藤 幸一

(1) 六十六部とは

「六十六部」とは、写経した六十六部の法華経のことである。略して「六部」ともいわれるが、一般には「六部さん」等といって、六十六部行者（六十六部聖「ひじり」、廻国聖ともいう）のことを指す。

「六十六部廻国」は、遍歴者が、日本全国、北は陸奥国、南は薩摩国の六十六か国を歩き廻って巡礼し、六十六部の写経された法華経を一国一か所、合計六十六か所の霊場にそれぞれ一部ずつ、合計六十六部を納めることである。

鎌倉時代末から室町時代にかけては、僧侶が主に行っていた。江戸時代になると、僧侶の他に一般の人も行うようになったのである。

六十六部廻国の書き写した法華経（大乘妙典ともいう）の納経先は、その国の国分寺とも一ノ宮とも言われるが、実際

には、それ以外の有力寺院や神社が選ばれることもあった。六十六部廻国は、僧侶の他に一般の人が、鼠木綿の着物を着て、手甲・甲掛・股引・脚絆を付け、笈を背負って、鉦を吊り下げて鳴らし、「ナンマイダ」などと念仏を唱えながら、巡礼姿で諸国を旅するわが国最大の巡礼といえる。

(2) 越ヶ谷地域で見られる六十六部廻国塔

「六十六部廻国塔」（六十六部廻国供養塔）は、六十六部廻国巡礼が成就した記念に建立された石塔である。

巡礼先の地で廻国半ばにして亡くなり、その地の人によって、敬意を表して建立された石塔もある。

図1は、宝永五年（一七〇八）に大聖寺「だいしょうじ」（大相模の不動尊）の僧侶のために西方村（にしかたむら）の藤塚と山谷（さんや）の人々によって建立された石塔で、市内で最古の六十六部廻国塔である。銘文も刻まれ、歴史的に貴重な石塔といえる。

図4は、六十六部廻国を成就した記念に正徳元年（一七一）一、通誉円心によつて建立された石塔で、通誉円心は、廻国達成した十二年後にも念仏供養塔を建立するなどして地元で活躍している。

図5の上段の石塔は、増林村（ましばやしむら）の須賀吉兵衛なる者が、この地に訪れた六十六部行者の為に供養して建立したものである。

図8は、そこに刻まれた銘文によると武陽散人の雅号をもつ僧侶円心が、成年（享保三年・一七一八）の三月より子年（享保五年）の十月までの二年七か月をかけて六十六部廻国を成就しているが、それを記念して、翌月の十一月に増林三五〇〇の平野家（屋号は「げんざむ」）の先祖、平野源左衛門が建立したものである。大松（おおまつ）の平野家（大松一七五）の路傍にある六十六部廻国塔（図4）に出てくる円心と同一人物であろう。増林の平野家と大松の平野家との親戚としてのつながりが推測される。

図15は、相模国三浦郡下宮田村より、この地にやってきた六十六部の女性行者の供養のために建立されたものである。

図23は、野島村（のじまむら）生まれ小曾川村（おそがわむら）育ちの斎藤徳右衛門が、老いてから二度に分け、都合六年もかけて六十六部廻国を成就した記念に建立したものである。

図30は、越後国岩船郡村上領新保村からやってきた六十六部行者によってこの地に建立されたものである。

同じく図32は、越後国蒲原郡出身の江戸浅草の山谷（さんや）に住む六十六部行者によって建立されたものである。なお、図12や13などの「六十六部供養塔」は、廻国はしないが、法華経六十六部を奉納し供養した記念に建立された石塔である。

ここでは、図版1から32までの、現存している六十六部に関する供養塔を紹介したが、「越谷市金石資料集」による

と、その他にも、現在になつて所在が行方不明となつた六十六部供養塔がある。次のとおりである。（上部の漢数字の番号は、「越谷市金石資料集」の「六十六部」の掲載順の番号）

二、正徳元年九月吉日

「奉納大乘妙典六十六部供養塔」

笠付型 大林一七五路傍

四、正徳五年十月吉日

奉読誦大乘妙典一千部成就所

柱状型 大間野の光福寺「武蔵国大間野村」

一〇、元文四年七月吉日

「奉供養大乘妙典一千部」 笠付型 袋山の釈迦堂

一八、安永四年十一月吉日

「奉納供養日本廻国」 駒型 見田方の浄土堂

「当所世話人中、願主覚道」

一九、文化八年十一月十五日「奉納大乘妙典日本廻国供養塔」

駒型 西方堂端共同墓地

「天下泰平・国土安全」

二〇、文化八年十一月十五日

「奉納大乘妙典日本廻国供養塔」

自然石 西方十一面観音堂

「江洲加茂郡比留村行者円心、

世話人当村庄藏・和洲宇右衛門」

(3) 四国の巡拝先で亡くなった

越ヶ谷の六十六部行者

ア 四国の戸板島の『六十六部廻国墓地蔵』

これは、高知市の東北東十五⁺の地点にある観音堂そばの寛延四年(一七五二)の石仏である。所在地は、土佐山田町戸板島である。観音堂の北側には、四国弘法大師札所巡りの旧お遍路道が東西に走っている。東方の近くには、物部川が流れている。

高知市加賀野井二・二三・一の岡村庄造氏の説明によると次の通りである。

「台座銘は向かって左側の『佐古郷(さこごう)戸板島村』は石塔の現在場所で、中村氏は当村代々の庄屋です。現在も末裔が同所に住んでおり、同封写真の内、お堂の後方に写っている家がそうです。」「死亡の『六十六部』行者、七郎兵衛は、遍路コースに当たる戸板島のお堂(昔はもつと大きく、寝泊りできたと思われ)を根拠地として、治療や除災(じよさい)、その他祈禱などをして地域の住民に恩恵をもたらしていたでありましょうか。特に人の集まっている後免町(現、南国市後免町)方面へ力を注ぎ、多くの信者を得ていたものと解されます。没後、これ程の石塔を作ってもらえるのはその証です。」

と推定している。

イ 越ヶ谷新町の六十六部行者の七郎兵衛

地蔵菩薩座像の台座には、「寛延(一七五二)四辛未天 六月十四日」「武州さき玉郡こしかい新町 六十六部七郎兵衛墓 行年五十九 此所(ここ)にて没」と刻まれている。

越ヶ谷新町の七郎兵衛は、寛延四年六月十四日に、遠いこの地にやって来てとどまり、地元の為に尽くしたと思われる。六十六部廻国巡礼半ばにしてこの地で果てたのである。

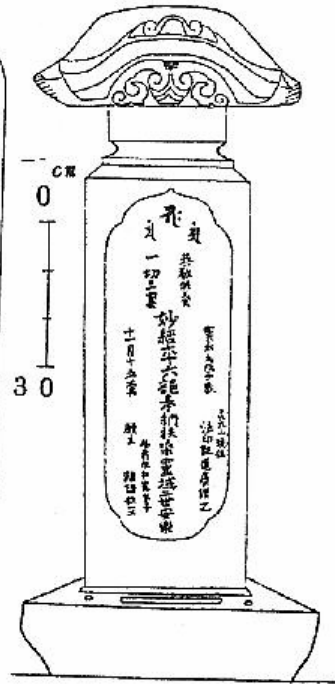
この石塔は、七郎兵衛(戒名は伝心禅定門)の墓を兼ねた六十六部廻国塔である。この石塔を建立した中心人物は、七郎兵衛を慕っていたと思われる地元の戸板島村の庄屋(関東でいう名主)中村勘六や、近くの後免町に住む村上伴五郎と田所や安兵衛の合わせて三人である。

この石塔に刻まれている「こしかい新町七郎兵衛」とは、越ヶ谷宿新町の代々名乗ってきた会田七郎兵衛家の人物をさすのであろう。

江戸時代の文化・文政年間に作成された「越ヶ谷・瓜の蔓」(福井猷貞著)の中の日光道中に沿った町並みを紹介した図に「会田七郎兵衛屋敷」との文字が見られるためである。「会田七郎兵衛屋敷 田中安兵衛」と「会田七郎兵衛屋敷 会田新右衛門・庄蔵」の二か所がそうである。後者が会田七郎兵衛宅であろうか。会田七郎兵衛は、住まいの新町が越ヶ谷宿のうちでも一番南のはずれにあるので、分家の家柄であったことは間違いないであろう。すぐそばには、瓦曾根村(かわらぞねむら)がある。

1. 西方
六十六部廻国塔

大聖寺墓地



礼 礼
恭敬供養
妙經六部奉納扶塗靈域三世安樂
十一月十五日
願主 極壽院林常第十 離讀飲立

寶永五戊子歲 真大山現住 法印觀蓮慶讚之

〔墓面〕
當山本堂前立不動明王火炎劍索石座等
寤壇年已尚矣專信心沙弥離腹乘納經六
十六部之願願広募衆縁令修補之且矜迦羅
制多迷二童子像新令彫造請余慶讚供
養兼達石浮圖以欲貽將來其功不徒
施福豈唐捐乎 大聖寺觀蓮誌

※「扶桑」とは、中國の東方にある日の出る國、日本をさす。
※「助縁」とは、「助授」（援助する）という意のことか。

2. 四條
六十六部廻国塔

妙音院墓地



3. 平方
六十六部廻国塔

富士合成工業之び丁字路

奉納大乘妙興六十六部日本回國

4. 大松

六十六部廻国塔

平野家〔大松一七五〕路傍



念仏供養塔

平野家〔大松一七五〕路傍



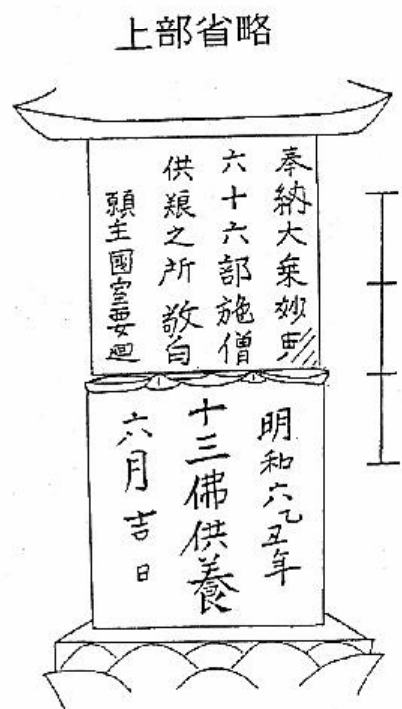
十一月十七日

享保八年癸卯歲

5. 増林

六十六部及び十三仏供養塔

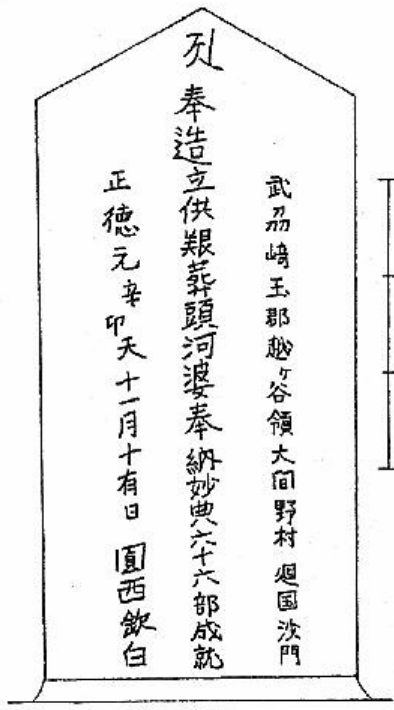
勝林寺



6. 大間野

六十六部廻国塔

光福寺



神明下

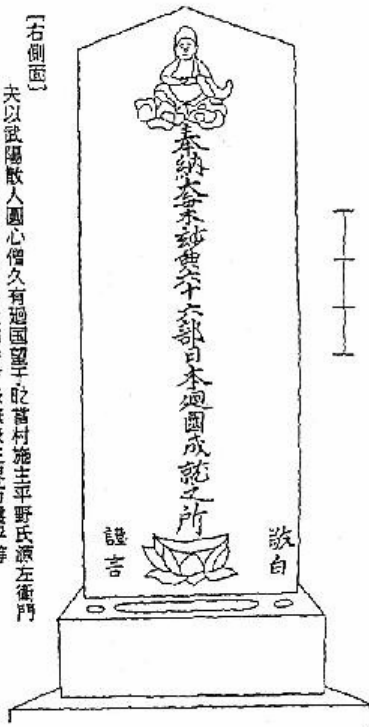
7. 六十六部廻国塔

薬師堂



8. 增林 六十六部廻国塔

平野家個人墓地



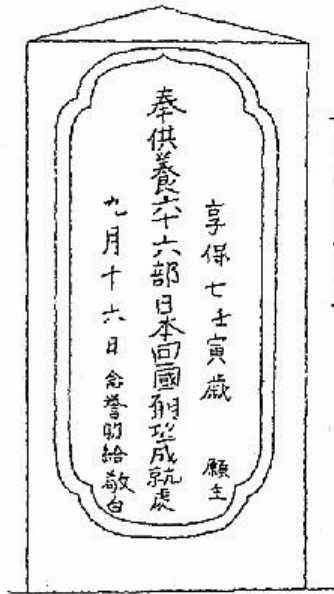
〔右側面〕

夫以武陽散人圓心僧久有廻國望于吃菅村施主平野氏源左衛門
 為靈燈光顯法師相積壽園大姉并有緣無緣三界万靈平等
 利益有金錢之助力右之僧成三月 廻國日本六拾六ヶ國奉納
 大乗妙典諸國行脚之内諸人他力普根請庚子十月古郷端
 去故供養塔建立者也 敬白

見田方

9. 六十六部廻国塔

浄音寺



10. 川崎

六十六部廻国塔

聖徳寺

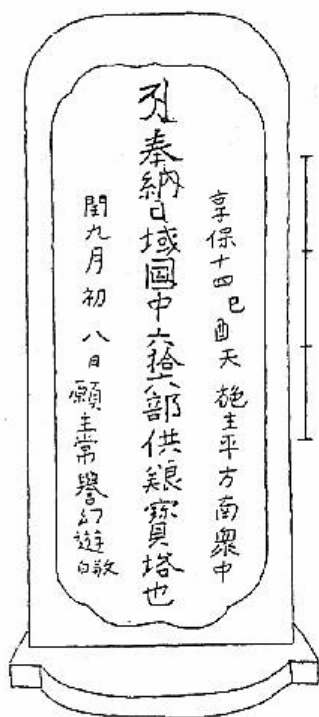


清心比丘

11. 平方

六十六部廻国塔

女帝[女体]神社



12. 大竹

地蔵像付六十六部供養塔

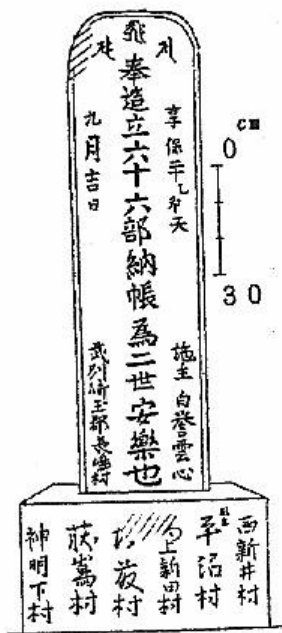
東養寺(太子堂)



13. 長島

六十六部供養塔

長島自治会館



14. 増林

六十六部廻国塔

勝林寺

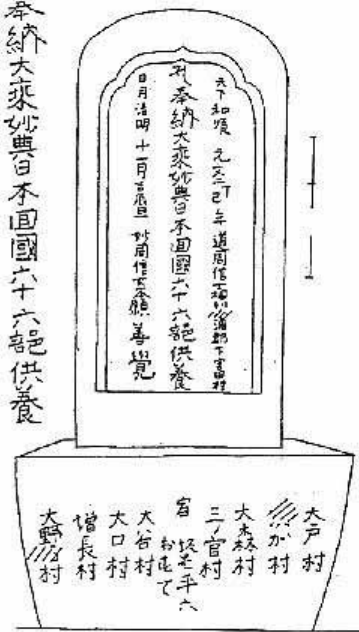


三野宮

15 六十六部廻国塔

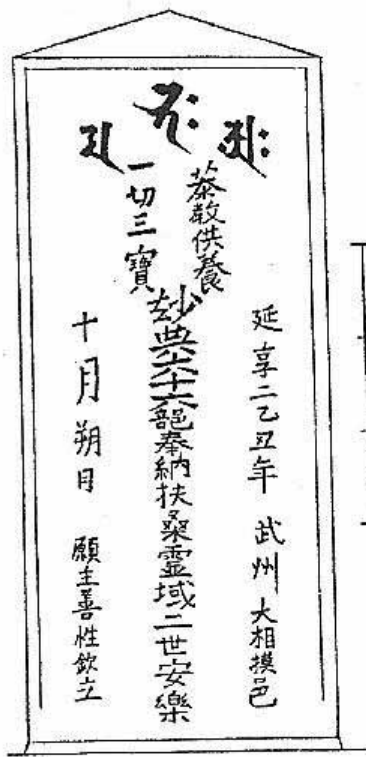
一乘院

孔奉納大衆妙典日本回国六十六部供養



16 東方 六十六部廻国塔

地藏堂墓地

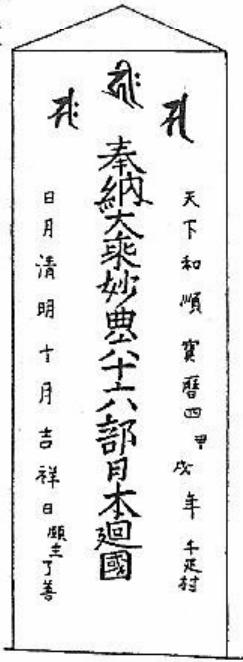


千足

17 六十六部廻国塔

東養寺墓地

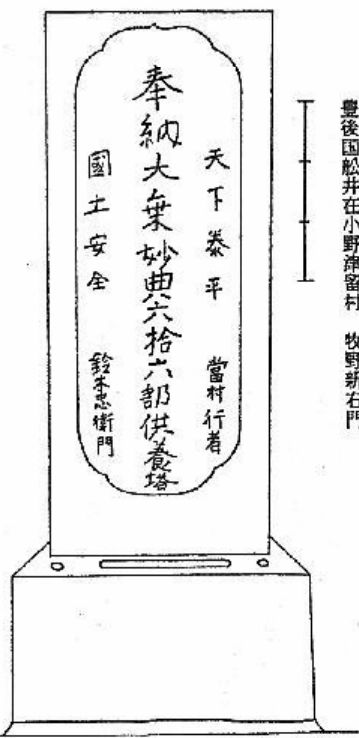
孔奉納大衆妙典六十六部日本廻国



18 七左 六十六部廻国塔

観照院

上総国口宮原村 年宿 渡口(辺)六郎左門 堀江治右門 伊勢国渡会郡神野原 石塔与助 叢岐国三野郡下勝岡村 牧野新右門 豊後国松井在小野津留村



19. 増林 六十六部廻国塔

勝林寺



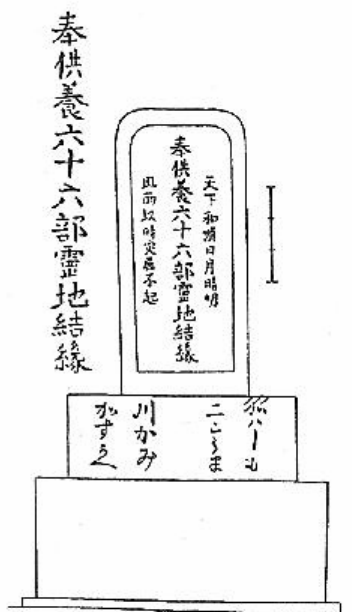
20. 七左 六十六部供養塔

大沼大明神



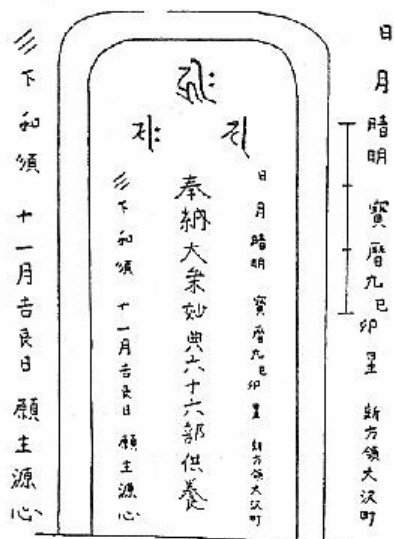
21. 越ヶ谷 道標付き 六十六部供養塔

天徳寺入口



22. 大沢 六十六部供養塔

地蔵堂の地蔵堂



23. 六十六部廻国塔



田口家「小曾川三三〇」路傍

〔左側面〕

おひの身で
廻る日の本
今爰に
如我有折願
まくうれしき

開喜施主 小曾河村田口源右衛門
助金二分 田口沢右衛門
助力供養 所々善男女等

行者 俗名斎藤徳右衛門
法名續道宗本自題

〔右側面〕

武蔵国埼玉郡越箇谷庄齋藤徳衛門者座于野嶋村而住于小曾河郷人也
嘗欲奉納経日域六十六州歳已久終不忍止寶曆十二壬午暮春出郷廻(一)歴
南西北中諸國而庫禮神社仏閣四ヶ千茲乃還郷中間伸供養復明和二丙
戌三月越奥州竊坂東越年丁亥五月帰郷前後六年而納経上畢其間一日
再宿厚恩捨財一鉢助力嗚呼幾乎幸身心堅固所願満足皆是憑於三寶加
護蒙乎衆人慈愛也依之為報恩謝徳彫刻遺箇石碑置於神社仏閣寶印
在々所々寄宿日記信施俗名法名等以為願満供養塔則永劫當不朽如是
宿檀徳本增長善根則汝等々々皆當作佛豈遠乎故感心餘不忍措如今稱
植道宗本窃述其意越二云爾

千時明和五星舎戊子歳三月下流 野嶋山浄山禅寺現住寶願夏陸之

越ヶ谷

24. 地蔵像付き六十六部供養塔



天徳寺入口

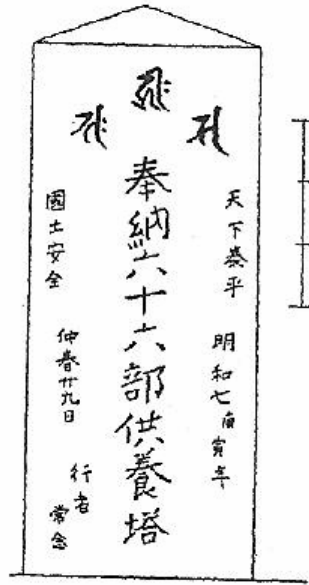
武蔵国埼玉郡越箇谷庄齋藤徳〔右〕衛門は、野嶋村に産れ、而して
小曾河郷に住する人なり、当に日域六十六州に納経奉らんと欲して、歳
已に久しく、終に止むるに忍びず、宝曆十二壬午〔年〕暮春、郷を出て
遍歴す、南西北中諸國の神社仏閣を順礼して四ヶ〔年〕、茲に乃ち郷へ
還る、中間の供養を伸ばし、復明和二丙戌〔年〕三月、奥州に趣き、
坂東を轉めて越年し、丁亥〔年〕五月に帰郷す、前後六年にして納経を
上畢る、その間一日再宿、厚恩捨財、一鉢の助力は嗚呼幾〔何〕乎、
幸身心堅固、所願満足は皆是三寶の加護を憑み、衆人の慈愛を蒙るなり、
之に依り報恩謝徳の為に彫刻せる遺箇石碑置、神社仏閣宝印に於いて、
在々所々寄宿日記、信施の俗名法名等を以て願満供養塔と為す、則永劫
當に朽ちず、是の如し、宿檀徳本、善根增長す、則、汝等々々皆作仏に
当たり、豈遠乎故、感心の余り措くに忍びず、今の如く植道宗本と称す、
其意越を切かに述べ、爾云、

時に明和五星舎戊子歳三月下流 野嶋山浄山禅寺現住寶願里之を誅す

25 千疋

六十六部供養塔

東養寺墓地



26 荻島

六地藏像付き六十六部廻国塔

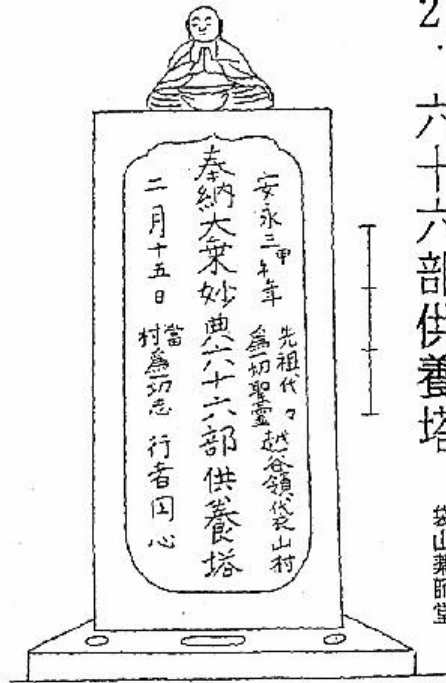
玉泉院



27 袋山

六十六部供養塔

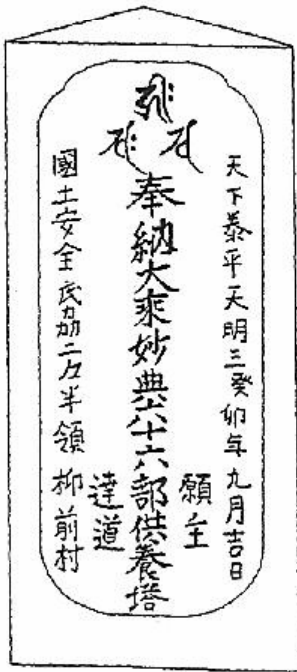
袋山薬師堂



28 中島

六十六部供養塔

正福寺管轄の共同墓地



29 西方

六十六部廻国塔

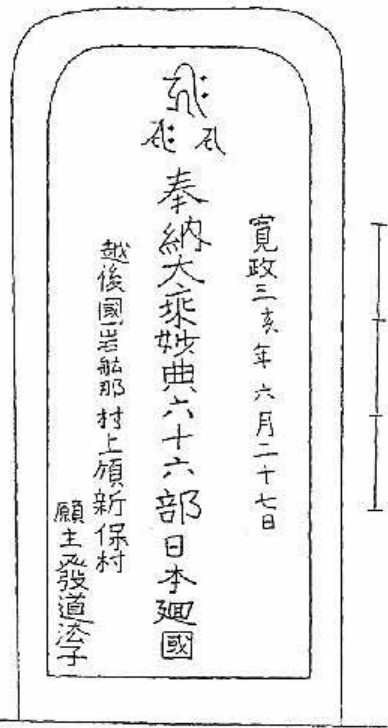
福寿院



30 大杉

六十六部廻国塔

大杉第2集会所



31 後谷

六十六部廻国塔

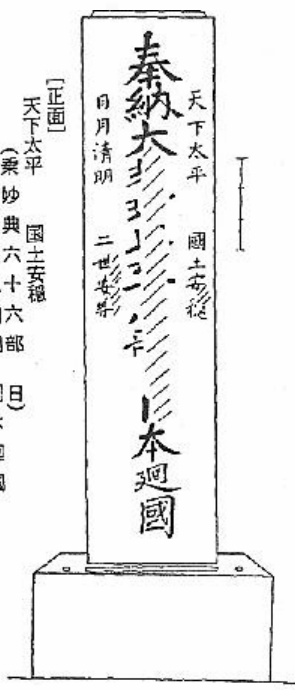
根郷自治会館



32 越ヶ谷

六十六部廻国塔

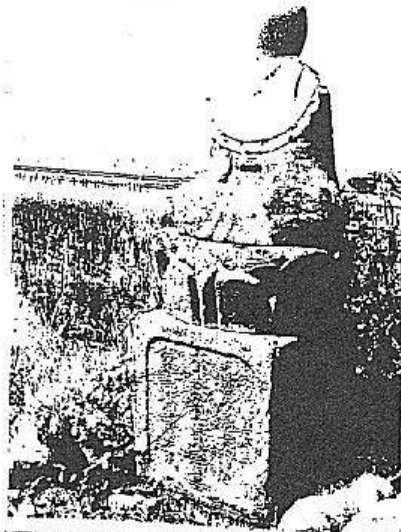
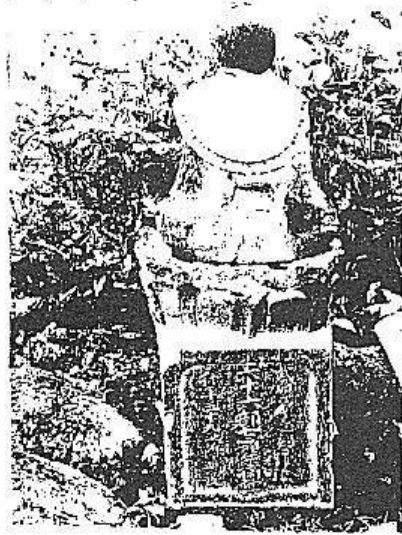
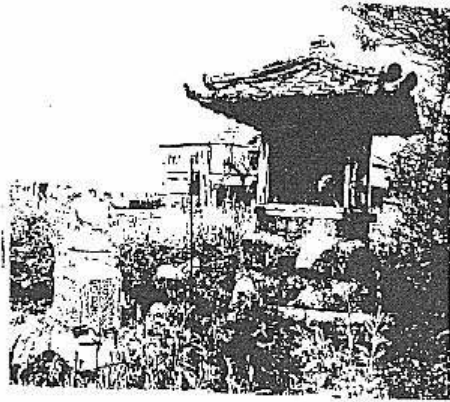
天保寺



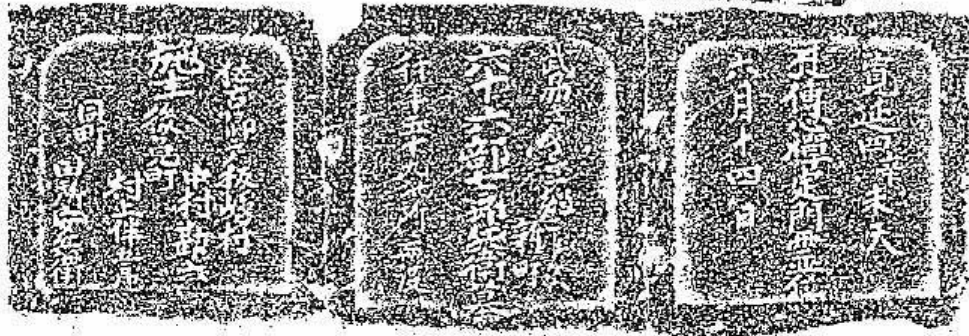
〔正面〕
 天下太平 國土安穩
 奉納大乗妙典六十六部 日本廻国
 日月清明 二世安樂

〔右側面〕
 本國越後國蒲原郡
 武州豊島郡江戸浅草山谷住人 行者彦兵衛造立

〔正太郎等〕



【四国の戸板島の『六十六部廻国墓地蔵』】



戸板島
廻国墓地蔵
(ニヒキ)
寛延四年未天
乳傳心禪定門靈位
六月十四日

武加さき玉郡こしかい
新町
六十六部七郎兵衛墓
行年五十九此所二面没

佐古郷戸板島村
中村勘六
施主後免町
村上伴五郎
同町
田所安兵衛

【越ヶ谷新町の会田七郎兵衛】

現、大野家

大野新左衛門屋敷	新左衛門
医師龍又屋敷	井橋
井橋太郎兵衛屋敷	釘屋 漕兵衛
釘屋	弥兵衛
六郎兵衛住	会田
会田藤右衛門屋敷	八郎兵衛
会田源兵衛屋敷	市兵衛
	川村
会田七郎兵衛屋敷	新左衛門
	庄藏
大戸作右衛門屋敷	大戸
	兵藏

日光道中

現、栃木銀行

牛之助屋敷	釘屋 大兵衛
	平兵衛
会田平右衛門屋敷	会田 庄藏
	平三郎
△	漕左衛門
△	太郎兵衛
	井橋
丸屋善兵衛屋敷	善兵衛
	丸屋 八
△	庄藏
馬右衛門屋敷	

江戸

悪水落堀

越ヶ谷
八条領道中界
瓦曾根

瓦曾根村

茶屋

東正院
修驗
除地

悪水落堀

瓦曾根村

悪水落堀

福井猷貞著「越ヶ谷瓜の蔓」より作成

新発見！ 越谷在住の絵馬師たち

木原 徹也

越谷市にゆかりのある絵師・画人といえば、越谷市の文化財に指定されている「瓦曾根溜井図」を描いた幕末の浮世絵師、鳥文齋栄之（狩野栄川院）をあげることができる。他にも「越谷市史」には、谷文晁、酒井抱一、司馬江漢、さらに越ヶ谷町出身の池田山鼎や越谷近在の旧家に多くの掛け軸や画賛を残した、謎の人、越谷山人の名前が記されている。これらの人々の他にも越谷ゆかりの絵師がいたかについては、全くつかんでいなかった。

ところが、最近になって越ヶ谷に住んでいたと思われる、江戸時代末期の絵馬師の存在が明らかになったのである。

野田市教育委員会と野田市内の歴史愛好会である「野田地方史懇話会」の絵馬サークル（リーダー石田年子氏）とが共同で平成十八年度より野田市内及び近

隣の絵馬の全数調査を行っている。この過程で越谷市に関係すると思われる絵馬師の存在を突き止めた。

石田氏のご教示によると、例えば野田市東金野井の天神社に奉納された「天保四年（一八三三）癸巳晩春」の紀年銘のある「日吉丸と蜂須賀小六図」絵馬には、「越谷亭 堤等谷画」とあり、さらに同市目吹の熊野神社に奉納されている天保十年（一八三九）六月の「伊勢太々御神楽図」には、「越谷町 堤秋月」とあるので、越ヶ谷町に居住あるいは出身の絵馬師であると思われる。いずれも力強い迫力のある大絵馬である。

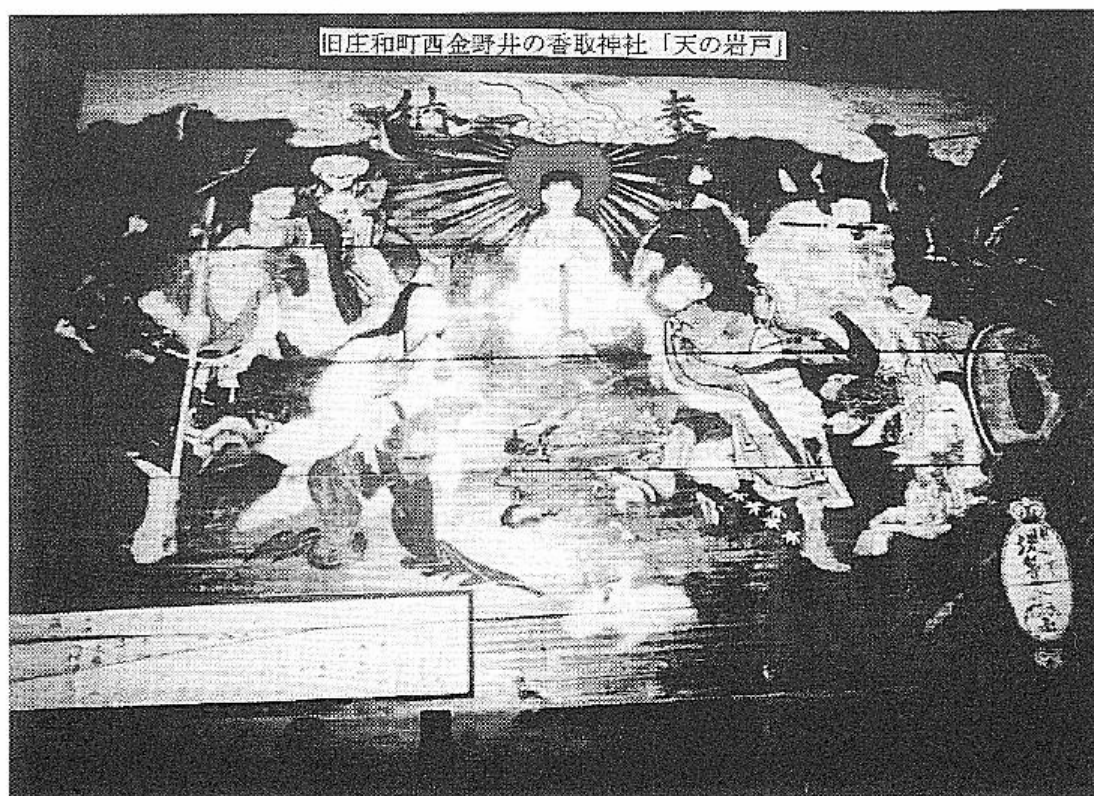
この「堤等谷」と「堤秋月」とは別人とも思えるが、その関係、生没年、事歴などは、一切不明である。「堤秋月」は、新勝寺にも奉納しているので、かなり力量のある絵馬師であったであろう。この両絵馬師の現在までに判明している絵馬を最後に表にしてまとめた。

「千葉県文化財実態調査報告書——絵馬・彫刻編」によれば、絵馬師として「堤等淋」を祖とする「堤派」とでも言うべき一派があったとのことと、「越谷亭 堤秋月」・「越谷亭 堤等谷」は、この「堤派」に属した絵馬師であったとみられる。

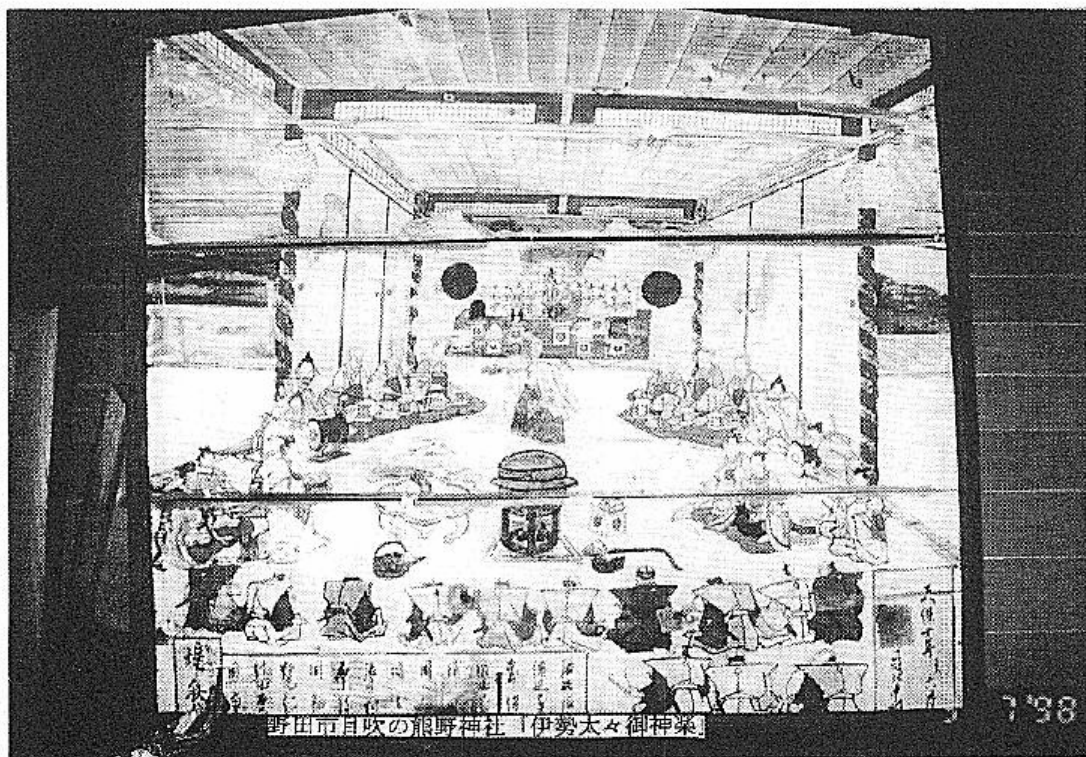
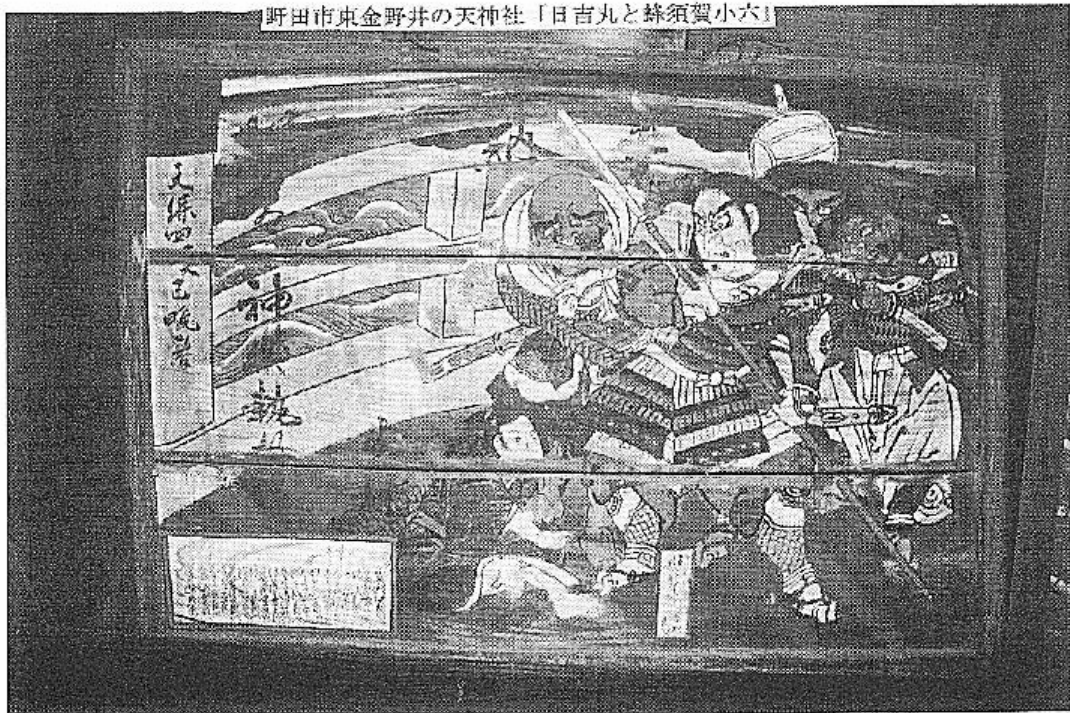
今後、地元の越谷市をはじめ、近隣地域の調査が進めば、越谷市に関係する堤派の絵馬師の作品が多く発見され、またそれらの事歴などが明らかになるものも期待している。

	所在地	名称	年代	絵師名
1	野田市東金野井	日吉丸と蜂須賀小六	天保4年晩春	越谷亭 堤等谷
2	野田市目吹	天神社熊野神社 伊勢太々御神楽	天保10年6月	越谷亭 堤秋月
3	旧庄和町西金野井 香取神社	武者絵	不明	越谷亭 堤秋月
4	旧庄和町西金野井 香取神社	天之岩戸	不明	越谷亭 堤等谷
5	旧庄和町立野 天満宮	神功皇后と武内宿祢	元治元年	堤秋月
6	旧庄和町神間 富多神社	伊勢二見ヶ浦	天保4年9月	堤秋月
7	旧庄和町神間 富多神社	伊勢太々御神楽	天保6年4月	秋月
8	千葉県成田市 新勝寺	源義家靈験	江戸時代	堤秋月

8 は「成田山新勝寺の絵馬」に掲載されている



野田市東金野井の天神社「日吉丸と蜂須賀小六」

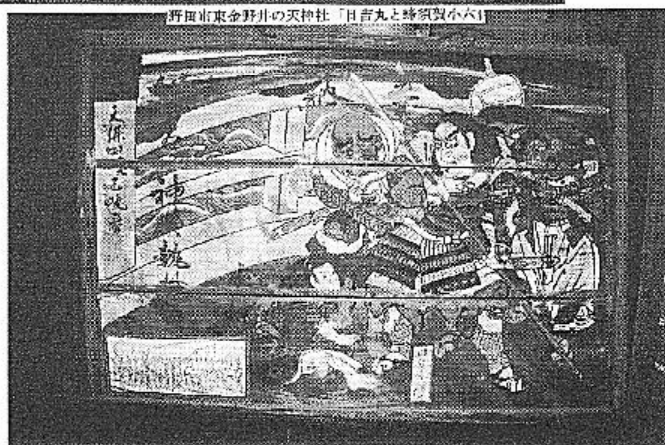


野田市目吹の熊野神社「伊勢大女御神樂」

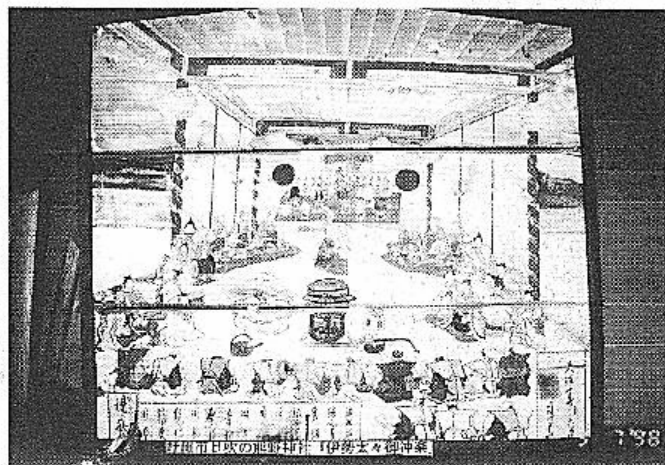
旧庄和町西金野井の香取神社「武者絵」



野田市東金野井の天神社「日吉丸と蜂須賀小六」



野田市東金野井の天神社「日吉丸と蜂須賀小六」(部分)



野田市東金野井の地御神社「日吉丸と蜂須賀小六」

198

日光道中ぶらぶら歩き (2)

和泉守

伝馬町から両国へ

安政の大獄により、志士に対する断罪は三回に分けて行われた。最初は安政六年（一八五九）八月二十七日水戸藩関係、十月七日橋本左内二十六歳、頼三樹三郎三十五歳が同じく死罪。左内は入獄してからわずか五日後のことである。最後が十月二十七日吉田松陰死罪。時に三十歳。松陰は左内と獄内で接する機会がなく、「留魂録」でそれを残念がっている。

松蔭に判決が出た当日、斬首の執行に当たったのは、あの「首切り浅右衛門」こと山田浅右衛門七世吉利である。三男吉亮の回顧談に、父吉利は「さすがに立派な往生であった」と常に松蔭の死に際を讃えていたという。將軍家の刀剣類の御試御用役が本業の山田家が、この首切り同心の役も兼業するようになったのは、必然ともいえる。元禄あるいは享保の頃からという。

「山田浅右衛門には自分の処刑した罪人の生胆を役得としてもらいうける権利があった。彼はその生胆から諸種の秘伝の薬を製造し市販していた形跡がある。」と綱淵謙錠はいう。そのお陰かどうか、山田家は「一万石に匹敵する富裕さがある」と世間では噂していた。人肉を嗜好品として食し、また医薬品として用いる風習は、古代中国に遡るといふ。

人間の生胆を医薬品とすることなど、現在では考えられないが、明治になってもその信仰はまだ根強く生きていた。明治三十五年（一九〇二）の「腎肉斬り事件」、学生であった野口男三郎は、十歳の少年の腎肉とともに生胆も取ったといわれる。恋人の兄の癩病を治すための薬として。

「ああ世は夢か幻か 獄舎に独り思い寝の
夢より覚めて見回せば 四辺静かに夜は更けて」
と延々と続く演歌「夜半の追憶―男三郎の歌」が、四年後の明治三十九年に大流行した。それはこの事件を題材としている。

話が暗くなった。そろそろ伝馬町をあとにしよう。日光道中は人形町通りを横切って北東に向かい、日本橋大伝馬町から日本橋横山町を経て両国橋に通じている。このあたりは大川の織維問屋がひしめいていて活気があり、往時の賑わいを

彷彿とさせる。

家康の江戸入府後、伊勢・近江・越後・堺の商人が日本橋に進出してきたが、三河・遠江の木綿商人も伝馬宿を根城にして活動し、木綿問屋となるものも出てきた。

大丸がこの商業地に開業したのは寛保三年（一七四三）。

人形町通りから一〇〇ほど道中を進んだところで、現在繊維商社のタキトミがあるあたりである。広重の「名所江戸百景」の一つ「大伝馬町ごふく店」には呉服太物商の大丸屋が描かれている。

明暦三年（一六五七）におきた「明暦の大火」（振袖火事）で焼けるまでは、この大丸屋の東南、現在の富沢町、堀留町二丁目、人形町二丁目のあたりに、吉原遊郭（元吉原）があり、店の東南側は「大門道」に面していた。今も「大門通り」として健在である。

古川柳を二三ご披露しよう。

- ・ 大門を 呉服屋一字 丸にする
- ・ 大丸や 傾城どもが 夢のあと

この日本橋富沢町に、私が勤務する事業部の事務所が四回目の引越しをした最初の夏、お盆に入った途端、一斉休暇で全く人がいなくなったことに驚いた。昼飯を食べるところもなく、まさに「ゴースト・タウン」となって、ここが伝統

ある繊維の街であることを、あらためて思い知らされた。二〇年以上前のことになるが、今はどうだろうか。

しかし由緒ある街道も、時代の変化には抗いがたかった。今井金吾はこう書いている。

「・明治維新による文明開化の風潮は、明治十五年（一八八二）十月、日光道中の北側に当たる当時の小伝馬町の真ん中、つまり現在の江戸通りに日本橋―浅草間を継ぐ馬車鉄道を走らせ、さらに明治四十二年（一九〇九）十一月にはここに市電が開通。その結果、それまでの日光道中の賑わいも寂れ、繁栄していた各商店も没落、遂には大丸も明治四十三年にここを閉店して京都へ引揚げ、大丸デパートとして東京駅八重洲口にその姿を再現したのは戦後になってからである。」

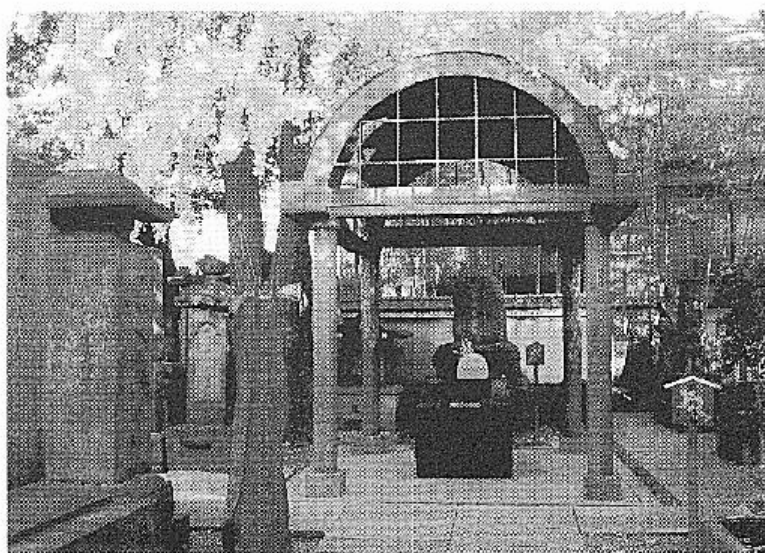
戦後とは昭和二十九年（一九五四）のことである。

横山町を通り抜けると、西から来た靖国通りと江戸通りがぶつかる交差点に出る。ここまで江戸通りを六号（水戸街道）と一緒に進んできた国道一四号は、なおも北へと江戸通りを進む六号に別れをつけ、東へ方向転換して靖国通りを引き継ぎ、暗れて京葉道路となって千葉に向かう。道中歩きは六号と行動を共にすべきだが、少しだけ一四号につきあうことにする。

二〇〇円で隅田川にかかる両国橋。明暦の大火の時、火に追われた人々は行き場を失って隅田川に飛び込み、多くの人が溺死した。焼水死者は十万人を越えたという。天守閣も焼き尽くしたこの江戸史上最大の火事で江戸は大きく変わった。幕府が都市整備を余儀なくされたからである。隅田川にも三年後（四年とも）、ようやく大橋が架設された。かつての下総国・武蔵国を結ぶ橋だったので、やがて両国橋と呼ばれるようになった。現在の行政担当は、橋の真ん中で中央区から墨田区に代わる。

墨田区に入って二〇〇円で回向院。大火の時の焼死者などを埋葬し、塚を築いて回向したのが回向院の起源であり、その後現在地に土地を拝領して、諸宗山無縁寺回向院となった。多くの供養塔と有名な文人の墓碑がある。このお寺の出発点である「明暦大火横死者供養塔」は教育委員会の案内パネルと実物が離れているため、草取り作業をしているおばさんに聞いてやっと分かった。それに比べると「鼠小僧次郎吉の墓」に対する優遇措置には感心するばかりである。

天保三年（一八三二）に小塚原で処刑された大名屋敷専門の義賊はここに葬られている。いや正確には、歌舞伎役者の市川団升が、狂言大当たりのお礼に明治九年に建てた供養墓である。墓石の削り片を持つているとご利益があるという信仰があり、ギャンブラーには人気が高いという。よくしたも



ねずみ小僧の墓

ので今では削り取り用の墓石が墓の前に別に用意されている。しかし、罪の意識を持って削つてこそ効用があるのではないか。そう思つて私はお賽銭だけにとどめた。

その賽銭

箱はきれいな御影石の工芸品めいたもので、雨が降つても安心してお参りできるようにとの思いやりからか、入口の門に模した立派なドーム型の屋根まである。死んでなお、お賽銭を集め、お寺にご奉仕しているとは、さすが義賊と言つてよく、管理するお寺としては大事にして当然であろう。集客はすべてのビジネスの基本に違いない。

浅草橋から浅草へ

このあたり見るべき史跡は数多いが寄り道はここだけに
して、江戸通りと靖国通りの交差点に戻る。この靖国通りと
神田川に挟まれた日本橋馬喰町二丁目と、南の馬喰町一丁目
の一部を含めた広い地域は、関東郡代屋敷があつた所である。
明暦の大火で類焼した寺院が他に移転した跡地に、江戸城の
常盤橋門内から移ってきた。郡代は勘定奉行に従属し、幕府
の直轄領（幕領）、俗に言う天領を支配していた。

関東郡代の所管地域は、時代により変更はあつたが、所謂
関八州とその隣接地にわたる広範囲をカバーしていた。徳川
家康の関東入国の際、伊奈忠次がこの職に任じて以来、約二
百年、十一代にわたつてその子孫が世襲した。現在の川口市
に位置した赤山陣屋は三代の伊奈忠治が設けた役所である。
会社の事務所などが並ぶ馬喰町二丁目をぶらぶら歩いて
いると、郡代屋敷の中心に近いと思われる所、神田川の左衛
門橋に通じる道に面して「郡代」という飲み屋を見つけ嬉
しくなった。郡代屋敷の表門は細長い「追廻し馬場」に面し
ていたが、この馬場は関が原の戦（一六〇〇）のとき、馬揃
えが行われたという。

交差点から北に向かう江戸通りを進む。一〇〇以足らずで
浅草橋。橋の手前、南詰めの交番の前に「郡代屋敷跡」の説
明パネルが立っている。浅草橋の下は神田川。

三鷹市の井の頭池を水源地とする神田川は、昭和四〇年
（一九六五）の河川法改正までは、上流は神田上水、中流域
は江戸川、そして水道橋あたりからの下流だけが神田川と呼
ばれていた。JR水道橋駅の西側で外堀通りから神田川を見下
ろすと、高速5号池袋線の下を、神田川から南に日本橋川が分
流しているのが見える。本来は、この日本橋川が本流であつた
が、江戸時代初期に江戸城外堀として人工的に掘削され、神田
川となったものである。

神田川は一路東に水路をとり、隅田川に向かう。舟で下ると、
御茶ノ水橋・聖橋あたりは緑豊かで、心なしか、川にいる鯉も
元氣そうにみえる。聖橋の上から船を見下ろす人たちも小さく
見えて、空が高く感じられる。しかし、秋葉原の万世橋・和泉
橋のあたりに来ると、無粋な護岸コンクリートが、中小ビル群
を護るがごとく垂直に立ち、一気に俗世間に引き戻されてしま
う。

吉宗の治世、和泉橋の北にあつた柳森稲荷から浅草橋に続く
右岸には、十町にわたつて柳が植えられ、柳原十手として名所・
景勝地になったというが、今は同じ場所に柳森神社が身を小さ



浅草橋から柳島を望む

くして残るのみ。あとは殺風景な景色が墨田川まで続いているだけである。浅草橋の西詰め北側には浅草見附跡の碑がある。もと江戸城三十六見附の一つ。

浅草橋から北に伸びる江戸通りが昔の日光道中であり、浅草寺までほぼ二・二キロ。トロイア遺跡を発見したシュリーマンは、その六年前の慶応元年（一八六五）四十三歳の時、世界一周の旅の途次、横浜に立ち寄った。幕末の緊迫した情勢の中、彼はあらゆる伝手を使って江戸に来ることに成功し、浅草寺も

訪れている。

旺盛な好奇心と探究心に溢れた旅行記には「有名な日本橋と呼ばれる橋を渡った。日本人はここを基点として国内すべての距離を計測する。ようやくわれわれは浅草観音寺の大きな山門に着いた」と。たちまち浅草寺に着いてし

まい、途中の記述がないのが残念だが、日光道中を通った筈である。

彼が馬で通った道を、今はとても車と一緒に歩く気はしない。ここは裏道を行くことにする。神田川沿いに二〇〇メートル東にいくと、隅田川に合流する直前に、柳橋がかかっている。この二〇〇メートルの河岸は、かつて吉原通いの山谷舟の船宿で賑わったというが、現在も「はぜ釣・屋形船・花火舟」の看板を掲げた船宿が数軒目に付く。

昨年両国の江戸東京博物館に行く際、ひまにまかせて秋葉原から神田川沿いに歩いたことがある。柳橋に近づくくと、欄干にもたれる着物姿のすらりとした女性が見えた。橋のそばには人だかりがしていた。それは船宿を背景に、コマースィヤルを撮っている女優の蒼井優だった。柳橋には着物姿がよく似合う。

しばらく隅田川と江戸通りにはさまれた柳橋一・二丁目を歩いてみる。小さな稻荷神社があり、入り口両脇の石柱には「柳橋芸妓組合」「柳橋料亭組合」の文字が浮き彫りになっていて、かつての隆盛が偲ばれる。

江戸通りに戻る。蔵前橋通りと交差する手前の通りの西側に、天明二年（一七八二）に幕府が創設した天文台が明治五年まであったという。寛政十二年（一八〇〇）閏四月、伊能忠敬は第一次蝦夷地測量のため、江戸を発った。朝八時前深川を出て、

近所の富岡八幡宮に参詣してから、ここ浅草の天文台に立ち寄り、師の高橋至時と別れの盃を交わして千住に向かった。現在、天文台があつた広範な場所は、住宅や小さな店舗・工場が立ち並ぶ普通の町である。

蔵前橋通りを東に曲がつてすぐの蔵前橋の手前左手に、江戸時代隅田川に面して浅草御蔵―幕府の米蔵―が一番から八番まで並んでいた。船が横着けしやすいように堀が楡形につくられた様子は、明治時代の地図でも、はっきりと確認できる。四番堀と五番堀の間には「首尾の松」といわれた松の木があつた。吉原帰りの連中が昨夜の首尾を語りあう所だつたからというのが一説である。

今、橋畔にあるのは何代目かの松だが、いずれにしろ隅田川を往来する舟人の格好の目印であつたことは間違いないようである。芭蕉が奥の細道の旅に出たときも、この隅田川を舟でさかのぼつた。彼もこの松を眺めたに違いないが、やはり旅の首尾を気にしていたらうか。

駒形橋に通じる浅草通りと江戸通りとの交差点を真北に行けば五〇〇円で浅草寺である。しかし先を急ぐので立ち寄らない。三十数年も昔、よくこの境内を通つて路地を抜けた。今はウイーンズ浅草という黄色い建物に行つて馬券を買うために。しかし信仰心薄き通り抜け者に福はやつては来なかつた。(つづく)

参考資料

- 35 「安政の大獄」 吉田常吉 吉川弘文館 1996年
- 36 「斬」 網淵謙錠 文春文庫 1975年
- 37 「江戸東京歴史散歩 1(都心・下町編)」 江戸東京散策倶楽部編 学習研究社 2002年
- 38 「日本流行歌史・戦前編」 社会思想社 1981年
- 39 「墨田区史跡散歩」 小島惟孝 学生社 1993年
- 40 「大丸二百五十年史」 大丸編纂委員会 1967年
- 41 「半七捕物帳江戸めぐり」 今井金吾 ちくま文庫 1999年
- 42 「街道をゆく36―本所深川散歩・神田界限」 司馬遼太郎 朝日新聞社 1992年
- 43 「台東区史跡散歩」 松本和也 学生社 1992年
- 44 「江戸の旅人」 高橋千劔破 時事通信社 2002年
- 45 「シュリーマン旅行記―清国・日本」 ハイブリット・シュリーマン 訳・石井和子 講談社学術文庫 1998年
- 46 「川が語る東京―人と川の環境史」 東京の川研究会 山川出版社 2001年
- 47 「新装版 今昔三道中独案内」 今井金吾 JTB出版事業局 2004年
- 48 「伊能忠敬を歩く―江戸から蝦夷へ400里の旅ガイド」 伊能忠敬の道発掘調査隊 廣済堂出版 1999年
- 49 「第390回史跡めぐり―植木の里・安行と伊奈家の足跡を訪ねる」 資料 越谷市郷土研究会 2009年

火の見櫓を訪ねて

三浦 栄市

櫓探し 一回目の旅

越谷市郷土研究会が平成八年五月から十月まで市内
残存の火の見櫓を調査、三十一基の櫓を確認する。越
谷市内の櫓の総数は五十九基あったが、戦中、櫓は鉄
不足による強制供出のため、木造(杉丸太)に建て替え
られた。

平成八年の調査から十一年の今年(平成十九年)、そ
の後の櫓の現況を越谷消防署に問合わせたと、五
月現在、残存櫓は八基、その八基の設置場所を消防署
職員方から資料を受け、友人K氏と現況調査を開始す
る。五月十日と五月十四日、この二日の私の日記から
以下書き写す。

五月十日朝九時半、K氏と私宅で待ち合わせ。今日
の天気予報は午後から激しい雷雨になるというが午前

中は大丈夫と出発、前日の打合せ通り平方三七三桜井
第五分団から調査開始。カーナビに住所を入力、車は
カーナビの指示通り、旧道を下間久里からバイパスに
入り、古利根橋の手前を左に平方北通りを二二〇〇以
平方三七三の櫓は進行方向右側にあった。路肩に車を
止めてK氏がカメラに納めるが、分団の建物と櫓の廻
りの立木で櫓の足元がカメラに収まらない。一枚は見
上げた位置から同じ場所を後ろに引いて一枚。この写
真に櫓の高さの中間にある屋根付きの鐘を撮ることが
出来たが、櫓の屋根はない。上部の踊り場も手摺もま
だ見た目では大丈夫と思う。

車は林西寺から折り返し、平方北通りを逆戻り、バ
イパスを右に間久里方面に南下、六〇〇以先、野田岩
槻線を左へ三〇〇以、県道平方東京線を右に折れ、五
〇〇以先を左折して五〇〇以、無量院の前、船戸一三
八一―七の新方第一分団の櫓は寺の駐車場の隅にある。
写真は無量院を入れて六枚、鐘はあるが屋根は所々破
損している。上部の踊り場、手摺、梯子は見た目には
良いが、四本の柱は足元が錆びて良くないが補修して
屋根を葺き替えればと思う。第一分団から平方東京線
を南東に二二〇〇以先、北川崎二三九―一、新方小学
校正門の前に新方第二分団の櫓があった。屋根も踊り
場、手摺も破損はないが櫓の中間にある踊り場に手摺

がない。梁に半鐘が下げてある。四本の柱の足元を補修すればまだまだ保存出来るはず。梯子は櫓の内にある。

新方交流館の大杉公園通り、新方川の間久里新田橋を渡り、バイパス下間久里を越えて上間久里、国道四号を北上、千間台南陸橋通りを左折、東武線の上を跨いで千間台西で中堀通りを左へ。恩間七六八―一八、恩間香取神社の境内参道にある。高さは低いが屋根も踊り場、手摺、梯子、鐘もあり、骨組みも大丈夫。出来れば早く塗装すること、何とか残しておきたい。写真には香取神社とも四枚。

次は県道越谷大野島線へ須賀川通りを大竹、大道の地境の道を南下、大袋分署の前に出る。K氏が分署の職員に大竹四五〇の所在を確かめる。分署の裏が元荒川、この越谷大野島線はまだ家並みが少ない。分署の際、元荒川に架かる大砂橋の車の通行も静かだが空模様は怪しくなってきた。大竹四五〇は分署から三〇〇以先、大袋中学校の裏に畑の中を通る十字路の角にあった。屋根の一部が破損しているだけで異状なし。修理塗装をすればこの櫓も残しておきたい。写真は三枚、私が二枚の中に。K氏が残してくれる。去年八月に撤去解体した大道八九の場所を探す。大道神社の参道を

出た角、ここにあったと近くの農家の主人。この付近の火の見櫓では一番高かったという。大道神社と所在地跡の写真二枚、撤去することもなかったのにと農家の主人。地元の名物だったと。残念無念の思い。主人に別れを告げて車に乗り込む。今日六ヶ所の櫓探し。金子さんは車の運転にカメラマン、それに聞き込みと一人三役、ただっいているだけの私は感謝するだけ。午前に帰宅。台風の雲行きの中、意義のある時間だった。

残り三ヶ所、天気回復次第と約束する。

櫓探し 二回目



五月十四日、月曜日五月晴れ上々の午後一時、K氏が車で迎えに来る。今日は増林、大相模、川柳の三基の調査。先ず増森にある増林第四分団に向かう。東越谷から増林、増森を抜けて中島を通り、元荒川と中川が合流する中島橋へ行く道。増森で新方川に架かる新田橋を渡ると、直ぐ左にあった。増林二―四十三。三脚で屋根はない。稲荷神社が傍にある。新方川の堤通り、神社の鳥居を間に櫓と分団の小屋が川の流れを見ている。水田の多いこの辺り、昔はこの櫓も四方八方に睨みを利かしていたのだろう。橋を渡る車の中から

振り返ると櫓が手を振るように見えた。屋根を直し、半鐘を掛け、柱の足元を補修すれば十分に新方川周辺の風景にとけこみ、昭和の生き証人として何としても残しておきたい思いが一杯。

新田橋を渡り、中島橋へ向かう。次は大相模第二分団の櫓だ。地名は大相模二―一四一。新方川に架かる中島橋を渡ると右へ。吉川と越谷を結ぶ大相模道、今は越谷流山線。見田方だけが古い地名だ。南百、千疋、柿木が元荒川から中川に寄り添うようであった。地名を替えて味のない地名に、もう六十年前になる。この道は、米の買い出しに自転車で吉川橋を渡り、何度も通った記憶が甦る。夏の吉川橋の上で汗を拭き、一休み。車も越谷・吉川を往復する乗合バスが通るだけの土の匂いがする道だった。

カーナビがあと三〇〇で目的地とアナウンス。視線は左、右と櫓探し。大相模公民館の前、道端に、脇に大相模分団第二部。見上げる高さに、寄贈した浅見さわさんの名と昭和五年十一月の日付が入ったプレートが、梁中央に貼り付けてある。櫓の設置年月日の掲示があるのはここだけだった。屋根は骨組みだけ残して屋根板が無く、鐘もないが交通量の多いこの道、櫓の上部に回転する照明灯を付ければ夜間ドライバーの目印になり、交通安全の一助になると思うがどうか。

さて次は残存櫓最後、川柳。カーナビに案内された車は越谷流山線を堂端落とし沿いを南へ。八条用水に架かる馬頭橋を渡り、西へ葛西用水沿いに天神橋のところを左に柿木蒲生線に出ると、川柳公民館近く、川柳分団二部、川柳二―三六七、深井さんの地内であった。三脚の櫓で丸屋根は骨組みだけで屋根板は無く、鐘もない。子供達が遊びで櫓に上るので梯子は一番下の梁の高さで切り外してある。葛西用水と八条用水の間にあるこの櫓は昔は一面田や畑、川柳の目印だったはず。

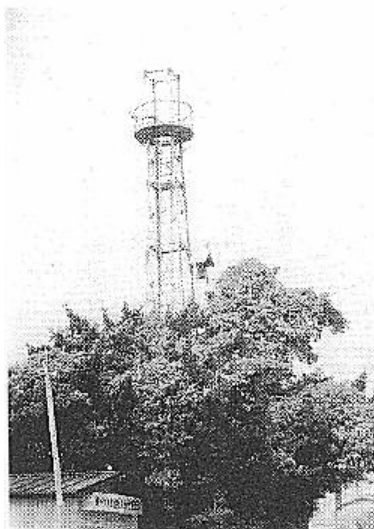
今ではどの櫓も無用の長物だが、災害を知らせる大事な歴史の証明者だ。私たちの行動は変わり者と一笑されて終わるのか。何年先、いや何十年先、我々と同じ変わり者がこの写真を見るかも知れない。その人のためにも櫓探しを続ける。

五月晴れ櫓の姿違えども

この町の歴史を刻む櫓なり

平成二十一年四月現在、市内には残存している火の見櫓は一つもない。

越谷市内残存櫓設置場所

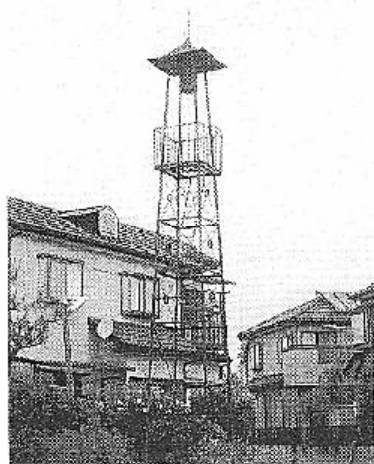


桜井地区 平方 373

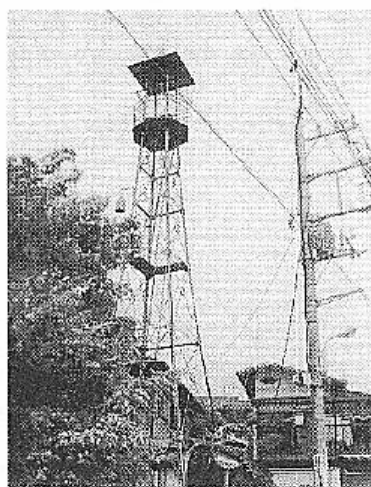


新方地区 新方 1 船戸 1381-7

地区	半鐘の有無	設置場所
桜井 5	有	平方373
川柳	無	川柳373
大相模 2	〃	大成2-141
増林 4	〃	増森2-43
新方 1	有	船渡1381-7
新方 2	〃	北川崎239-1
大道	〃	平成18年8月解体
大竹	〃	大竹450
恩間	〃	恩間768-18



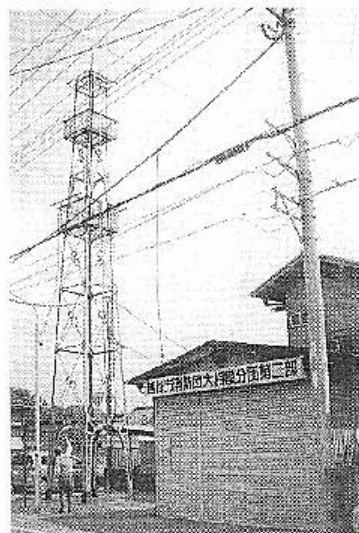
恩間 768-18



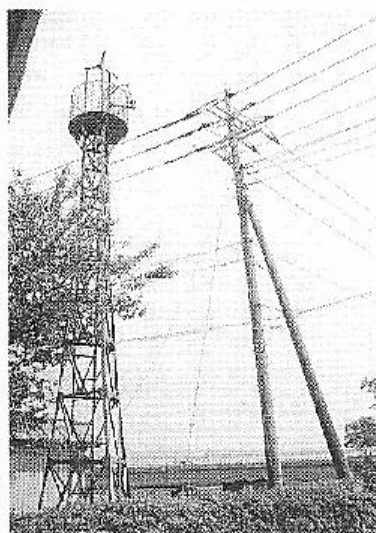
新方地区 2 北川崎 239-1



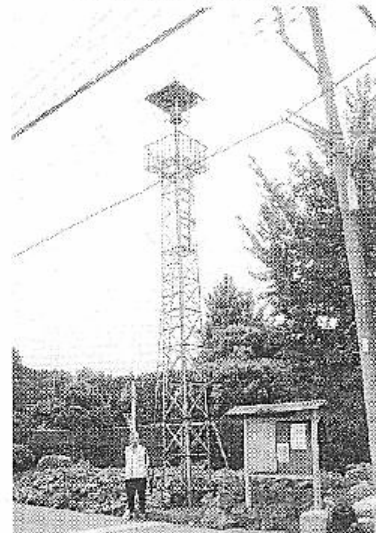
川柳地区 川柳 2-367-1



大相模地区 大成 2-141



増林地区 増森 2-43



大竹 450

川口の「お女郎仏」と大沢

岩瀬 静江

南北に走る御成街道（日光街道）の新町交差点から東に県道一〇三号線を一五〇メートル行つた北側の県道沿いに、川口市石神（旧・石神村）の「女郎堂」があり、そこには昔から「お女郎様」「お女郎仏」と呼ばれている墓石（戒名は、「蔵誉妙延信女」）が見られます。女郎とは、身分の高い女性という意味です。

これは、昔から下（しも）の病などの病気に霊験あらたかと言ひ伝えられてきたもので、特に女性の信者が多く、かなり広い地域に渡つて熱心な信仰を集めていました。

越谷大沢でも、女性たちに人気があり、私は、戦前・戦後を通して、地元の女性たちが大沢から団体で牛車に乗つて参拝に出掛けていく様子をよく見ていました。女性たちを乗せる客車の周りには、落ちないように柵を取り付けていたのを覚えています。

私は、大沢に遊郭があつた関係もあつて、女郎仏の御利益（ごりやく）を得ようと熱心に信仰されていた水商売の方も、古くからの私共地元の方と一緒に、貸し切りバスで、この「お女郎さま」をコースに入れ、二回程お参りに行ったことがあります。

私の祖母が聞かせてくれた「お女郎さま」に関する昔話の

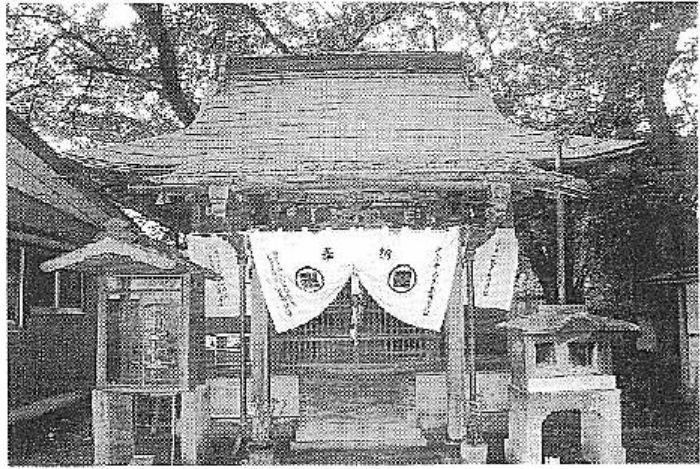
中で、「病で行き倒れになつた女の人が、近くの親切な人のお世話になり、最期の息を引き取る時になつて、『私の墓に願ひをかければ、必ず病を治してあげます』と言ひ残した。」とよく話してくれました。そして、「甘い物をお供えするように」と聞いた覚えがあります。

ここでいう「女郎」とは、若くて身分の高い女性という本来の意味です。十八、九歳程の気品の高い女性であるとか、由緒あるお方などの言い伝えが残っているのはそのためです。今日では、遊郭の出ではないかとの誤解が生まれやすいのが残念です。

女性を対象とした似たような信仰に、白像に乗つて現れて人々を守ってくれると法華経が説く普賢菩薩の信仰があります。普賢菩薩は、女性の信仰を集めて美しい姿に作られます。



川口市石神新町 お寺のできる前から人々の信仰心を集めた女郎仏



妙延寺の女郎堂

た。それゆえに、美しい遊女が実は普賢菩薩の化身であったとの言い伝えが生まれ、江戸時代に遊女のことを普賢菩薩にたとえて「普賢」と言うのはそのためです。

女郎堂は、女郎と呼ばれた人の命日となる寛政二年（一七九〇）三月六日に開山（開基）されました。堂宇は小さな祠で、境内がわずか三〇坪しかない、とても狭いところだったそうです。昭和八年（一九三三）に門前の東西に走る県道の拡張改修があり、そのとき境内の一部が買収されましたが、早船為五郎氏の篤志によって四〇〇坪の土地を寄進という形で受け、さらに地藏尊を安置するための新たな開山堂や札所等を信徒の浄財によって建て、昭和九年四月に竣工しています。

女郎仏の命日は、本来は三月六日であったのですが、明治以降に旧暦から新暦に変わると、月遅れの四月六日が命日となり、今日に至ったと思われています。

昔は「御命日には、弁当を持参、脚絆姿の善男善女や急造の馬車や牛車に揺られてきた団体の参拝人で境内は時ならぬ賑わいを呈した。」（「妙延寺・女郎仏」冊子より）そうです。なお、昭和二十七年（一九五二）八月二十一日に宗教法人となり、女郎仏の戒名にちなんで「妙延寺」と名付けられた真言宗寺院が設立されました。

なお、この「お女郎仏」信仰が広範囲に広がっていた名残りとして、船橋の寺町にある浄勝寺には、「蔵菩薩地藏妙延信女」と刻まれた分身の石塔が祀られ、幕末の頃より「お女郎地藏」として信仰されています。

※ 主に、「妙延寺・女郎仏」冊子を参照しました。

わたくしの夢、観光都市 越谷

田中利昌

世間では歴史に対してどういうイメージを持っているのでしょうか？「古臭くて嫌だ、暗い」「過去は終わったことだ、これからのことだけを考えればいい」。確かに、歴史に興味などなくても生きて行けます。しかしながら、歴史はその「まち」にしかない郷土の誇りです。また、昔の風景や、当時の人々の気持ち、生活を想像することは、思いやりの心を高め

ることにもつながります。さらには、世代間の共通の話題になることで、親子孫同士のコミュニケーションのきっかけにもなります。

越谷市郷土研究会は、昭和四十年発足以来、四十三年間、郷土・越谷の文化、歴史に対する興味をより深めようと活動をしてきました。パネルディスカッション（公開討論会）が行われた今日も、大間野の中村家住宅で子供たちに昔の遊びを教えるイベントがあり、大成功を収めることができました。歴史は心の財産です。パネルディスカッションを機縁に越谷市郷土研究会と越谷市民の方々が、わたしたちのふるさと越谷への郷土愛を、ともに育んで行けるのなら、まことに嬉しいことです。

「越谷はよく、何もありません」といわれています。確かに越谷は全国的な特産品もなく、教科書にのる程の人物、遺跡、建造物もありません。しかし、越谷には売りとる程の観光資源がたくさんあります。越ケ谷の総鎮守（四丁野村・越ケ谷宿・大沢町・瓦曾根村・神明下村・谷中村・花田村の七ヶ村）である久伊豆神社には、伊勢神宮からいただいた鳥居（正式には内宮板垣南御門）があります。旧4号沿いの元荒川付近の御殿町には、徳川家康の別荘である越谷御殿がありました。明治時代には、宮内庁の鴨場がつくられる程、皇室、政府と深い関係があります。

江戸時代には、越谷出身で、610⁺の石を持ち上げたといえられる、三ノ宮卯之助という全国に知られた力持ちがおりました。岩槻で有名な人形も、草加のせんべいも、春日部の桐ダンスも、実は宿場町であった越谷が発祥という話もある

ります。その他、阿波踊り、能楽堂のある日本庭園花田苑、レイクタウンのヨット、だるま、くわい、鴨ネギ鍋など、売りとなるものが、この他にもまだまだたくさんあるのです。あらためて越谷市民の方々が越谷の歴史、特産品に対する想いを強くしていただいて、郷土愛と誇りをますます高めていただければ嬉しく思います。

次に、各団体における事業実施にあたっての現在の問題点ですが、まず、当事者の方々が自分たちの持っている歴史的なものの魅力に気づいておられないことです。例えば、昔栄えた宿場を想像することができる魅力ある町屋をお持ちの方々が、その魅力に気づいておられない、ましてや、「代がかわれればマンションや駐車場にしたいと思われる」という話を聞きます。せめて価値ある町屋を保存していただきたいと思えます。

また、赤山街道や不動道などの小道が、長年の歴史を秘めたものであるということを知らずに通っている人が多いことです。また、「まち」づくりに関する他の「まち」の情報が不足していること。また、行政まかせ、他人まかせで、市民自身がやろうとしないこと。また、「まち」づくりとは、非常に多角的なものであること。つまり、道路整備、建築規制、標識、優遇税制、休憩所、案内人、食事、お土産、近隣にお住まいの方々のご理解、などです。また、行政については、縦割りが大きな壁となっていること。

つまり、「まち」づくりをどこが主管するのか、ということ。最後に、「まち」づくりとは、いろいろな分野がありますが、市民、行政、議会などを含めて、情報や意見を交換す

る組織があってもいいのではないか、ということ。青年会議所にも、ぜひ音頭をとっていただきたい、と申し上げました。

わたくしには夢があります。それは、越ヶ谷、大澤の宿場を、京都のような観光地にすることです。せめて、川越ぐらいいにはしたい。「何をあり得ない話を語っているんだ」とお思いかと思います。しかし想像してみてください。かつて、立派な町屋づくりの旅籠、料理屋、商店が軒を連ね、きれいな着物の人々が行きかい、また何百人も引き連れた盛大な徳川將軍の来訪、大名行列があり、大沢では風流な芸者のお祭りがあつたり、また昔はしじみがとれたほど透き通った元荒川で、木船に芸者を乗せて、うなぎを食べながら桜の花見をしたという程、優雅な文化があつたのです。わたくしの夢は宿場起しです。

あの川越も二十年前は閑古鳥が鳴いていたそうです。それが地元の方々のご情熱で、年間六〇〇万人が訪れる程の観光都市になったそうです。草加などは市役所に、今様草加宿推進課を設置するほど、宿場おこしに対して行政、市民に情熱があります。越谷にもできないはずありません。これからは地方分権の時代です。観光庁も発足致しました。財政難を観光収入で埋められることも考えられます。「埼玉の東京都、西の川越、東の越谷。」わたくしの生涯をかけた夢です。

最後にまとめとして述べたいと思います。

暗い世相です。景気は低迷、給料は上がらない、生活の格差、重い税負担。治安の悪化、わたしたちの「まち」越谷でも毎日犯罪が起こっております。ストレスだらけの殺伐とし

た人間関係。地球環境や国の借金から来る漠然とした不安。夢も希望もない、自分の世界に引きこもる、挨拶もできない子供たち。「この国はどうなってしまうのだろう」という心配と、家族関係や健康の不安、あるいは孤独で、安らぎのないご年配の方々。この世の中の運命、ひとりひとりの運命を良くするにはどうすれば良いのか。良い結果をもたらすには、良い原因を作るしかありません。

良い原因とは何か。自分の利益だけでなく、世のため、人様のためになる思いやり、言葉、行動です。人と人との心をつなぐ挨拶、自分に嫌なことでも感謝する心、自然や他人を敬い思いやる心。そして、周りに良かれと思うことを行うことが、ひとりひとりの心を温かくし、巡り巡って幸運をもたらすものと思うのです。まちづくりは人づくり、人づくりは心づくりです。

縁あつて当日ご一緒できました越谷青年会議所、越谷ウォータースポーツクラブ、まちアートプロジェクト、越谷レイクタウンふるさとプロジェクト、越谷市、そしてご静聴いただいた聴衆の方々、「越谷三十二万人が、生まれて良かった、生きていて良かった、これで安心して死ねる」、そんな幸福に満ちた人生を送れるよう、互いに協力、尽力できますよう、心から祈念致します。

平成二十年十一月十四日(金)、越谷市中央市民会館・劇場で行われた「2008年度 社団法人 越谷青年会議所/主催」のパネルディスカッション『魅力いっぱいのもち「こしがや」にしよう!』の講演原稿です。



越谷の史跡紹介 塩かけ地蔵

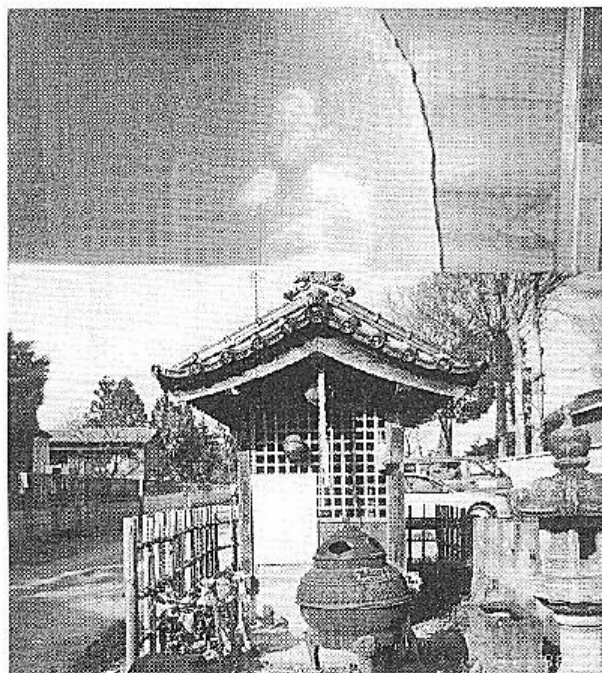
菅波昌夫



塩地蔵と呼ばれ霊験あらたかな地蔵として広く信仰を集めていた。

昔は病気になっても余程のことがない限り医者に見てもらふことはなく、日頃信心している神様や仏様にお参りして、病気が治るようにお祈りしていた。なかでも地蔵さんは子供を救う仏様として信じられ、中でも塩かけ地蔵は、願い事が叶うとお礼に多くの信者から満願の都度、頭から塩をふりかける習わしから塩によつて石が溶かされ、その形さえ解らなくなり現在の姿となった。地蔵さんはたくさんの子供たちの苦しみを救つたために、このような姿になったのだと満足しているように見えてならない。地蔵とは地蔵菩薩の略で中国では唐代(六一八〜九〇七)、日本では平安時代(七九四〜一一九二)より盛んに信仰される。

なお、越谷市内の寺院では大沢の光明院、北川崎の聖徳寺の二寺院のみに塩地蔵が見られる。



北川崎の聖徳寺の塩地蔵



大沢の光明院の塩地蔵

絵図と古地図と写真でたどる大沢橋

原田 民自

大沢橋は越谷市の越ヶ谷と大沢とを結んで元荒川に架かる長さ五〇坪、車道の幅五・五坪、歩道の幅二・二五坪の鉄骨造りの橋です。昭和二十八年（一九五三）五月に現在の橋に架け替えられたが、架け替える前は木造であった。江戸時代の安永年中（一七七二〜一七八〇）以前は、横幅が四間（七・二七坪）とあり、ほぼ現在の車道と歩道をあわせた広さであった。

現在は大沢橋と呼ばれているが、江戸時代は境板橋と称され、往時の越ヶ谷側は武蔵国埼玉郡、大沢側は下総国新方庄と元荒川を境として二つの国の境界であった。明暦元年（一六五五）に関東郡代伊奈半左衛門忠克によって架け替え工事が施工されたとの記録が残されている。このため初期の架橋年代はかなり古いものと思われる。

元禄二年（一六八九）三月二十七日（新暦五月十六日）、奥の細道の旅に出た芭蕉は、草加宿で第一夜を過ごした後、翌日に越ヶ谷へ入り大沢橋を渡って日光へ向かった

といわれている。

奥州道中（日光街道）越ヶ谷宿は江戸時代においては日本橋から数えて三番目の宿場であった。「駅要録」によると参勤交代で千住宿を通過した大名は三十七藩にのぼり、知行一萬石以上の大名が石高に応じた人数を率いて自国の領地から江戸までを往復した。各藩が殿様を中心に大名行列を編成して大沢橋を渡って行ったのである。

「駅要録」に見る石高、藩名と藩主は次の通り。

（三萬石以上の石高を有した大名）

駅要録 奥州道中之分

高62万5千百石	奥州仙台	松平陸奥守
高23万石	同 会津	松平肥後守
高20万5千8百石	羽州秋田	佐竹次郎
高20万石	奥州盛岡	南部大膳太夫
高15万石	羽州米沢	上杉弾正大弼
高14万7千石	同 庄内鶴岡	酒井左衛門尉
高10万石	奥州白川	阿部飛騨守
高10万7百石	同 二本松	丹波左京太夫
高6万石	同 弘前	津軽越中守
高6万8千2百石	羽州新庄	戸沢大和守
高6万石	同 山形	秋元左衛門尉
高5万石	奥州中村	相馬長門守
高6万石	同 棚倉	井上河内守
高5万石	同 三春	秋田山城守
高5万石	同 岩城平	安藤対馬守
高3万石	同 一ノ関	田村左京太夫
高3万石	同 福島	根倉甲斐守
高3万石	羽州上ノ山	松平山城守

奥州道中 増補行程記 宝暦元年 (1751)



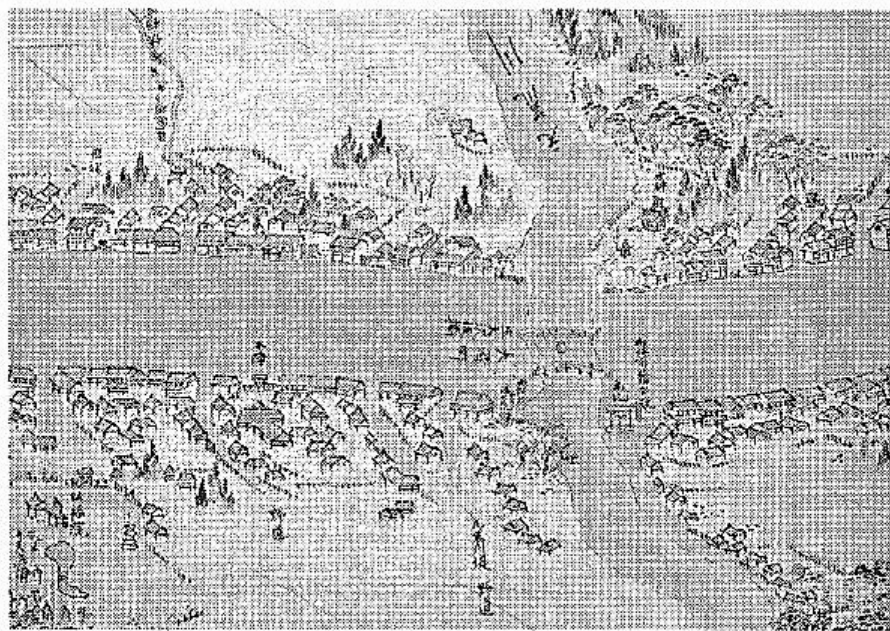
盛岡市中央公民館・蔵

大沢橋が描かれた現存する最古のものは、宝暦元年（一七五一）に陸奥盛岡藩に献上された「奥州道中 増補行程記」。盛岡藩八代藩主南部利視（としみ）の命を受け、同藩士清水秋全（しゅうぜん）が、江戸日本橋から盛岡までを色彩鮮やかに描いたもので、道中界隈の風景などが絵図と文章で克明に記録された。大沢橋も周囲の景観と共に描かれている。絵図の中の文書は次の通り。

騎西郡 越谷二里廿八丁 御本陣相田八右衛門 荒河橋長廿四間 御下り 橋を越候ては大沢町と申候 両町合十七八丁と申候 此辺稲の苗なしらすと申スヲ 植候と承候 泥川ゆるく流れて水の色藍の如し 当所 薪沢山のよし申候 赤山より出候て江戸えも参商買スト云々 此辺に杭有、紀伊殿かり場と書たり 大樹公ノ御殿也 町ノ中に御殿有りと承候 当所より赤山爪とて名物出申よし江戸にて賞スル之ヲよし承候 江府通船多し 松筆見へたり 一里塚有ト可考 浅間大明神 茶店多し 小社有

絵図とともに記述された文書によると、現在では失われた越谷産出の品々が見られる。赤山付近からは薪がとれて江戸から商人が買いに来ることや、赤山爪という名物は江戸で食されるとある。この赤山爪とは鷹爪（たかのつめ）という唐辛子と思われる。越谷周辺では戦前まで広く栽培されていたという話がつたわる。

日光道中分間延絵図 文化三年（一八〇六）



れ、元荒川の文字右側に御殿場跡御林とある。越谷御殿が江戸大火で江戸城二の丸に移されて六畝余歩の御林だけが残された。この絵図では樹木が群がり生えている。

日光道中分間延絵図は文化三年（一八〇六）、江戸幕府の道中奉行所において数年にわたり精密な測量や調査を行い完成させたもの。大沢橋は高欄（欄干）付きの板橋で描か

越ヶ谷瓜の蔓 文化末年～文政初年

<p>本町 五十五軒 外町 久保町 下町</p>	<p>大沢町 御座候 境板橋</p>	<p>大沢町 御座候 境板橋</p>	<p>大沢町 御座候 境板橋</p>	<p>大沢町 御座候 境板橋</p>	<p>大沢町 御座候 境板橋</p>
<p>大沢町 御座候 境板橋</p>	<p>大沢町 御座候 境板橋</p>	<p>大沢町 御座候 境板橋</p>	<p>大沢町 御座候 境板橋</p>	<p>大沢町 御座候 境板橋</p>	<p>大沢町 御座候 境板橋</p>
<p>大沢町 御座候 境板橋</p>	<p>大沢町 御座候 境板橋</p>	<p>大沢町 御座候 境板橋</p>	<p>大沢町 御座候 境板橋</p>	<p>大沢町 御座候 境板橋</p>	<p>大沢町 御座候 境板橋</p>

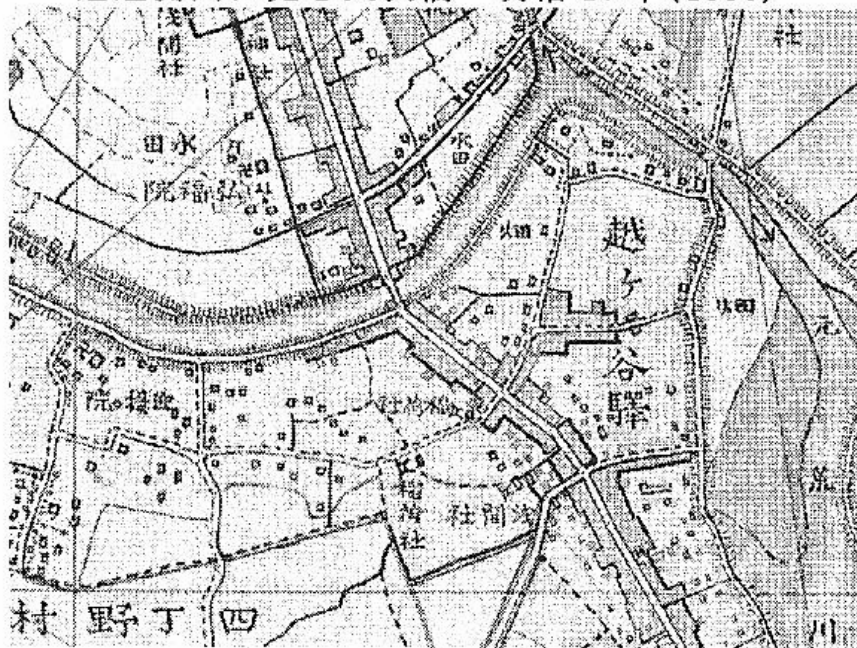
「越ヶ谷瓜の蔓」は越ヶ谷町の地誌で、文化末年（一八一五）～文政初年（一八二〇）にかけて越ヶ谷宿本陣・問屋の要職を勤めた福井権右衛門によつて作成され、その中の挿図として元荒川に架かる大沢橋が境板橋と表記されている。境板橋は「長十八間、横三間」「前、横四間之所、安永年中より三間二成」とある。

大沢町地誌「大澤町古馬宮」にも大沢橋之事「越ヶ谷宿大沢町境板橋、元荒川ニ御掛渡シ御座候 境板橋は已前は大沢橋と唱ひ申候」とある。

フランスの実業家で富豪のエミールギメは明治八年（一八七五）八月に日本を訪れ各地を観光した。日光観光の途中で大沢橋のたもとで温鈍屋で昼食をとる。同行のレガメーにより大沢橋周辺がスケッチされた。稲荷社の階段に腰を下ろして車夫の米を研ぐ女中、大沢橋を渡る人物、橋向こう側に市神社が見え橋下には舟が浮かぶ。稲荷社裏側が木立で覆われている。

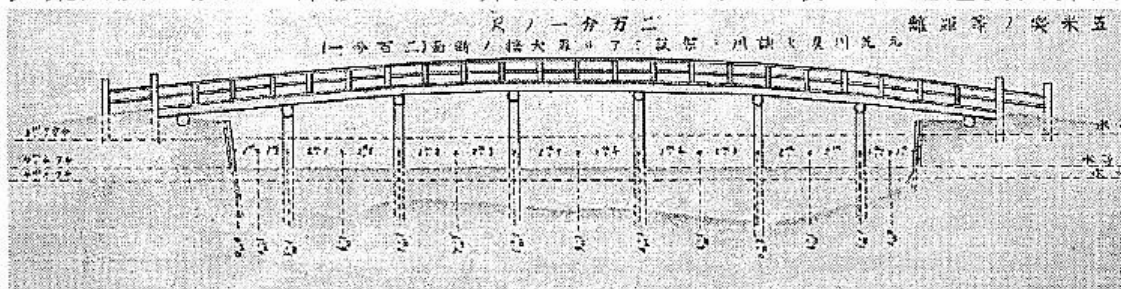


迅速測図に見る大沢橋 明治13年(1880)



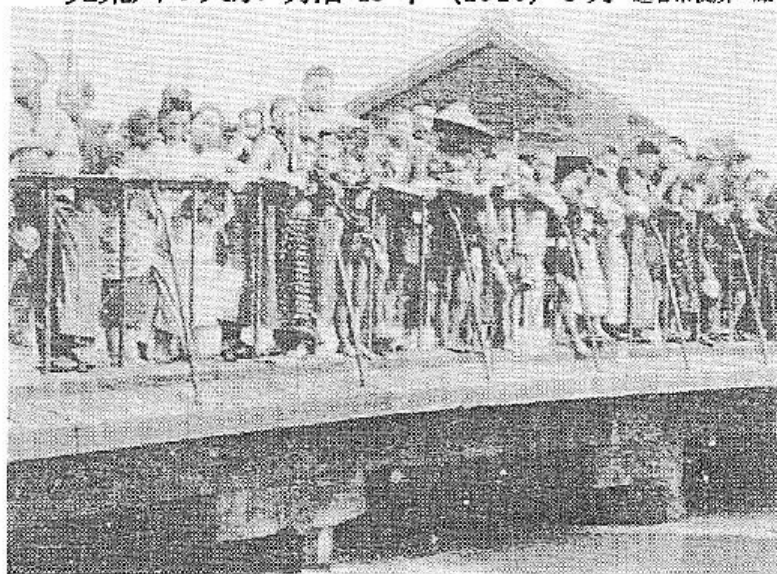
迅速測図は今から一三〇年さかのぼる明治初期に色彩鮮やかな地図として関東平野のほぼ全域を陸軍参謀本部によって作成された。大沢橋をはさんだ日光街道沿いには両側に商家が連なる。

元荒川及ヒ該川ニ架設シアル界大橋ノ断面（二百分一）迅速測図挿図



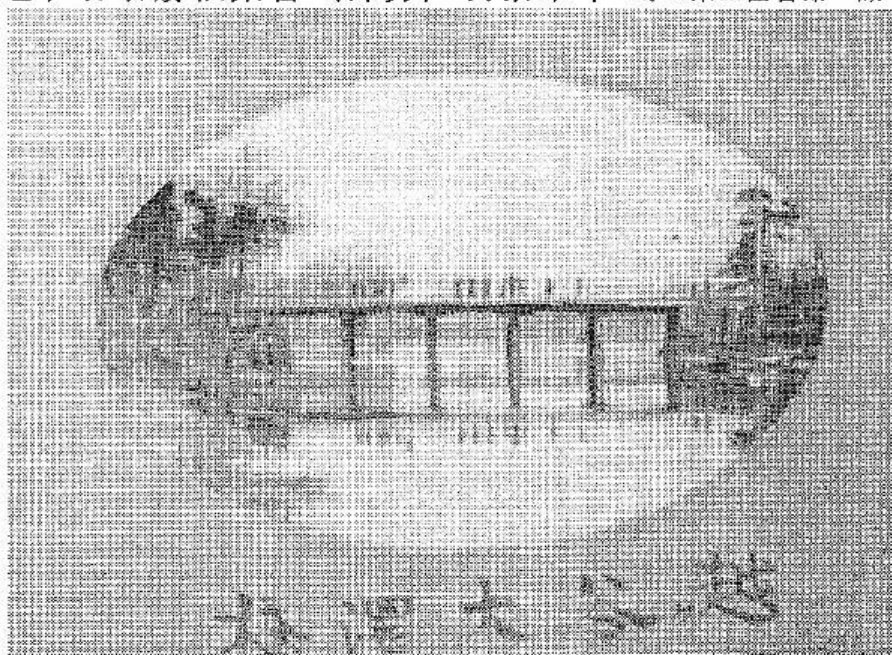
明治二十二年（一八八九）二月、千住馬車鉄道が千住から粕壁まで馬一頭立て十二人乗りの馬車鉄道を開通させる計画を立てた。馬車鉄道を通す工事が進む中、大沢橋上に線路の敷設をすることになったが、橋の構造に不安があったのか鉄道会社は大沢橋の脇に馬車鉄道専用の副橋を通すため杭打ちを行った。しかし川に多くの杭を打つことで大雨が降った時に水の流れが乱され、大沢橋が流出する危惧があると地元の猛反対で完成していた杭を外してしまう。結局、大沢橋を補強して馬車鉄道が開通した。千住馬車鉄道も東武鉄道が開通する直前の明治三十年（一八九七）四月、経営不振に陥り廃業する。開業から四年足らずの運行であった。大沢橋から馬車鉄道の線路が取り外されたことは言うまでもない。越谷市内には鉄道馬車の痕跡は残っていない。

元荒川の大水 明治43年（1910）8月 越谷市役所・蔵

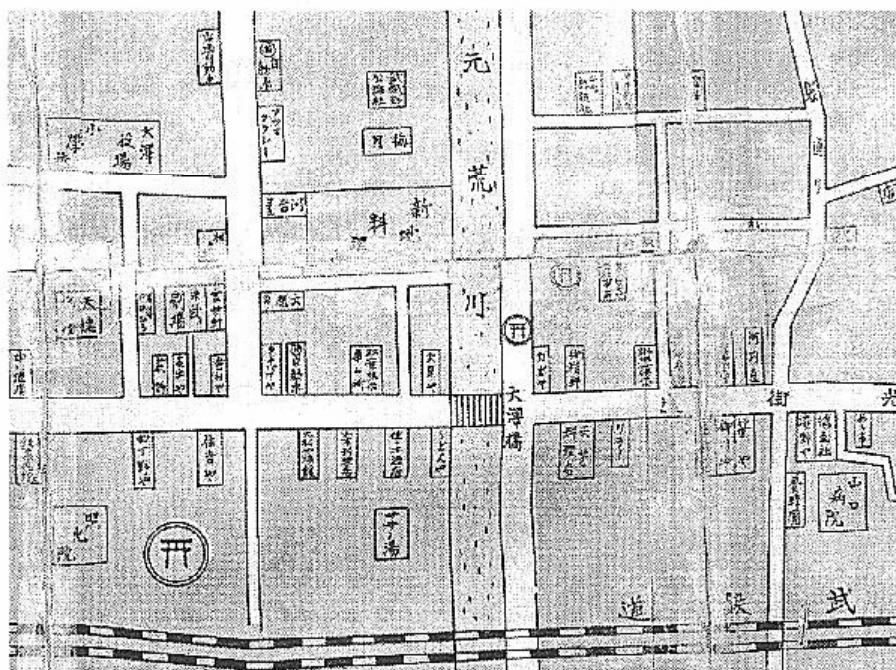


（九〇センチ）から六〜七尺（一尺八十センチ〜二尺十センチ）の水に見舞われ、特に大沢町は床上百二十三戸におよび、元荒川筋は増水のため土手に一尺（約三十センチ）から三尺（九〇センチ）の土俵（土のう）を以って防御中とある。写真では大沢橋の上から不安そうに水量を見つめる大勢の人がいる。橋の欄干が金属で出来ているのが分かる。

明治四十三年（一九一〇）八月上旬から関東地方は雨が降り続き、ついに荒川が決壊、東京をはじめとする関東各地で洪水の被害が出た。越谷付近の被害の状況を当時の新聞で見ると、三尺



大沢橋の両岸が木立でうっそうとしている。元荒川に舟を浮かべての撮影のようで、大沢橋の上には大勢の人がいるのが見え、川面に人影が映る。現在に比べて元荒川の水量が多いのがわかる。絵葉書は五枚組の一枚。



越ヶ谷名勝案内 昭和七年（一九三二）

「越ヶ谷案内」は、粕壁・岩槻・杉戸・吉川・草加あたりと比較し景気がいいと評し、多くの料理店や芸妓屋では連日三弦の音を絶やすことはない、と書かれている。

大沢役場からの延長線上に続く現在の県道49号線（足立越谷線）はない。地図中央の「新地料理店」の一角は江戸時代には大沢遊郭と呼ばれ奥州街道の名物に上げられていた。

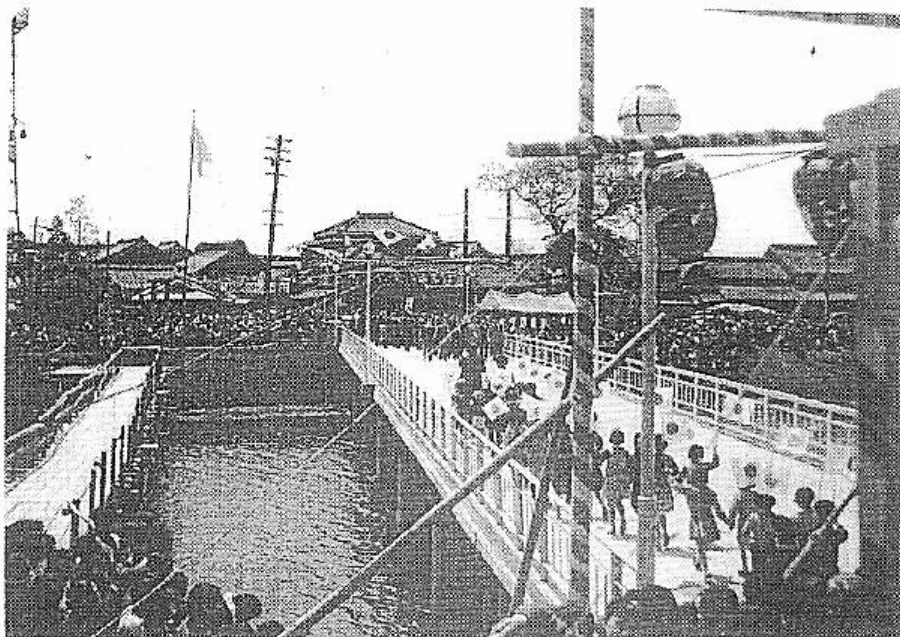
「大沢橋から大蛇が出ても大沢通いはやめられぬ」という俚謡（りよう）があり、元荒川の水は涸（か）るる日があるとも大沢に芸妓酌婦の絶ゆる時はないのである、ともいわれた。大正五年（一九一六）刊

仮橋 大沢橋の架け替え 昭和 27 年 10 月 県立文書館・蔵



太平洋戦争中に国策として金属供出が全国で行われた。大沢橋の欄干が金属であったため全て取り外され、むき出しになったことがある。間もなく木枠のお粗末な欄干が取り付けられたが、通行する車が運転を誤って欄干にぶつかり川に落ちそうになったことがあると、当時を知る人が話していた。

昭和二十七年（一九五二）十月、老朽化した木造の大沢橋を架け替えるため隣接して仮橋を渡す。自動車通行は新国道（足立越谷線・県道49号線）が、昭和十六年（一九四一）には大



沢地区まで完成し、昭和二十五年（一九五〇）には本格的な工事が進められたので、工事中はそちらを利用したのだろう。仮橋の隣では旧大沢橋の解体工事が進む。橋向こうは蔵造りの町並みが続く大沢町。

大沢橋の落成 渡り初め式 昭和 28 年 5 月 県立文書館・蔵

大沢橋から蔵造りの家並みが続く越ヶ谷方面を望む。約十か月かけて大沢橋の架け替えを終えて落成式を迎える。土地の名望家の一家を先頭に子供達が日の丸を振って完



成した橋を渡る。越ヶ谷町側の左側に火の見やぐらと半鐘が見え、市神社の鳥居があり口の丸がたなびく。土手伝いにも大勢の人が橋の完成を祝い集まっている。越ヶ谷町の元荒川沿いにあった火の見やぐらから撮影した写真には大黒湯の煙突がそびえ、大沢橋には多くのトラックが行き交う。

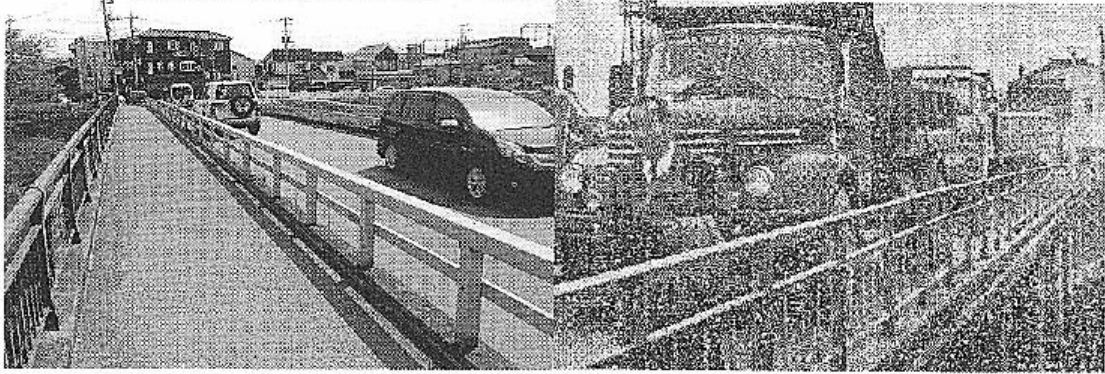
火の見やぐらから見た大沢橋 昭和33年ごろ 越谷市立図書館・蔵



昭和三十四年(一九五九) 東京観光交通社

昭和三十四年(一九五九)につくられたカラー地図である。この一年前に越谷は市制を布いた。大沢橋が橋に取り付けられた標識の「大橋」と表記されている。元荒川橋は県道49号線に架かる。大沢橋周辺はうどんや、平野時計店、三浦薬局など数軒が現在でも営業を続けている。

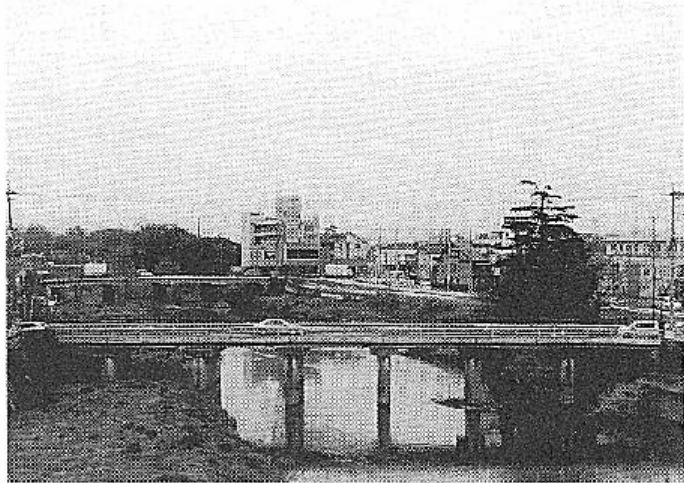
車道と歩道が分離された 大沢橋に歩道橋を 昭和42年10月 サンケイ新聞



昭和四十年代に入ると越谷市でも交通量が格段にふえた。旧国道の大沢橋もその影響を受け一日あたり五千台もの車が通過していた。そのため橋上で大型トラックが行き交う時は歩行者が渡る余地がなく身を危険にさらすことになる。

越谷市では昭和四十二年(一九六七)十月、八百万円の予算で橋の下流側に平行して横幅二・二五メートルの歩道橋を完成させた。さらに国道4号線バイパスが開通し大沢橋の交通量もかなり緩和し現在に至っている。大沢橋上の車両通行は現在は交互通行だが、一時、一方

大沢橋近景 東武線車窓より 平成21年3月



通行の時期があった。上の写真の手前、大沢橋の先に見える橋は県道49号線に架かる元荒川橋。大沢橋たもとの温鈍屋(うどんや)は、徳川家康が亡くなる一年前の元和元年(一六一五)創業という。

●元荒川の納涼会

明治42年(一九〇九)8月10日

埼玉新報

越ヶ谷町協立社主山崎恭助氏発起となり去る六日午後七時頃より元荒川に小舟を浮べて納涼会を催せしが何がさて時節柄の事とて急遽の企てなるにも拘はらず我もくと賛成者ありて忽(たちま)ち数十名の会員を得たり夕刻より煙火(はなび)を打ち揚げて景気を添へ舟中の余興には蓄音器あり大沢芸妓は酒杯の斡旋を為し各十二分の歓を尽して散会せしは午後十一時半頃なりしが此の景況を見物せんとて涼みがてらに押し寄せたる老若男女は兩岸橋上とも人の山を築き大沢橋畔は期せずして小川開きの観ありき

中世東国水運史から見た

『吾妻鏡』建久五年六月三十日条の問題

秦野 秀明

一 走湯山(五堂)燈油料船

『伊豆山文書』の「文永九年(一二七二)二月二日関東下知状案」(1)に、下総国神崎関(現千葉県香取郡神崎町付近)で、走湯山伊豆山権現(現伊豆山神社)の走湯山(五堂)燈油料船と、下総国神崎庄小松郷の在地領主であった千葉左衛門四郎(小松四郎)為胤(2)との間で、関手(関料)徴収をめぐる相論が発生し、走湯山燈油料船の梶取は、治承五年(一一八一)に源頼朝から関・泊・津の通行権を与えられた(3)として、関手(関料)を払うことを拒否し、一方の千葉為胤は、関手(関料)の徴収を認められた下文を与えられていると主張したが下文を提出できず、その結果として鎌倉幕府より走湯山燈油料船の特権が認められなかったという事件が記されている。

盛本昌広氏(一九八八)は、走湯山燈油料船が、何の目的で航行し、何を運搬していたのかに疑問を抱き、中世では船による莊園年貢の輸送の占める比重が高かったことに注目したが、鎌

倉時代後期に作成されたと推定される『三宝院文書』の「走湯山所領目録」(4)では、伊豆・相模・武蔵・越後・駿河・土佐の所領が列挙され、寛元五年(一二四七)、宝治元年(一二四七)の「北条時頼寄進状」(5)での寄進地も駿河であったため、相論が発生した文永九年(一二七二)以前に、下総国神崎関のあった常陸川流域に、走湯山伊豆山権現(現伊豆山神社)の所領の存在を示す史料は見出せなかった。

また、『伊豆山文書』(1)では、走湯山燈油料船は「五拾艘」あると記されているが、走湯山伊豆山権現(現伊豆山神社)と同様に、鎌倉幕府の信仰が篤かった鶴岡八幡宮の年貢運搬船の数は、それを示す史料(6)によれば「参艘」であり、走湯山伊豆山権現(現伊豆山神社)側が訴訟に際して数を誇張していたとしても、走湯山燈油料船が多数存在していたであろうと推測した。以上から、走湯山燈油料船は年貢運搬以外の目的で航行し、各地で調達した物資を遠隔地へ運送することで得た利益を、燈油料として走湯山伊豆山権現(現伊豆山神社)に納付していたのではないかと推測したが、『伊豆山文書』(1)以外の史料は見出せないために裏付けはできないと述べた。

だが、この推測を補強する史料として、『金沢文庫』所蔵の「白証書状」(7)に「あたミ船」、同じく『金沢文庫』所蔵の「信時書状」(8)に「熱海以便船」と記されている船を、走湯山燈油料船の世間一般での呼称ではないかと推測し、その史料の内容から熱海船(あたミ船)の機能を、旅客を乗せて目的地まで送り届ける乗合船的性格と、物資の運搬を依頼される宅配船的性格

を持つものとして解釈し、この熱海船(あたみ船)が走湯山燈油料船と同一の船なら、走湯山燈油料船もこの二つの性格を持ち合わせた船であろうと推測した(9)。

二 久伊豆宮神人か伊豆宮神人か

下総国神崎関(現千葉県香取郡神崎町)で、走湯山伊豆山権現(現伊豆山神社)の走湯山燈油料船が、千葉為胤との間で関手(関料)徴収をめぐる相論が発生した文永九年(一二七二)より、遡ること七八年前の建久五年(一一九四)六月三十日に、武蔵国大河戸(おおかわど)御厨(10)で事件が発生していた。

『吾妻鏡』建久五年(一一九四)六月三十日条

於武蔵国大河戸御厨与(久)伊豆宮神人等喧嘩出来之由有其聞
依驚思食為令尋沙汰被下遣掃部充行光云々

この条は武蔵国にあった大河戸御厨や、太田荘(11)の歴史を考察する上での重要な史料であるが、『吾妻鏡』の写本による異同が問題となっており、『吾妻鏡』の写本自体の研究も含めてこの条の内容についての結論は現時点で出ていない。

すなわち、『吾妻鏡』北条本では「於武蔵国大河戸御厨久伊豆宮神人等」であり、吉川本では「於武蔵国大河戸御厨与(と)伊豆宮神人等」となっており、この条の内容を左右する喧嘩を起

こした当事者が、「久伊豆宮神人(じにん)」なのか「伊豆宮神人(じにん)」であるのかが判明しないのである。

『吾妻鏡』寿永三年(一一八四)正月三日条で、大河土御厨の所在地とされる武蔵国崎西・足立両郡のうち、崎西郡は久伊豆神社の祭祀圏であり、『新編武蔵風土記稿』(12)ではこれを、埼玉県騎西郡崎西町の久伊豆神社(現玉敷神社)とした(13)。

岡田清一氏(一九九一)は、『伊豆山文書』(1)より類推し、下総国神崎関の場合と同様に「関手(関料)」徴収を原因として、大河戸御厨の住民と、走湯山燈油料船で来往した走湯山伊豆山権現(現伊豆山神社)の神人の衝突として推測した(14)。

三 久伊豆神社と伊豆山権現の関係

埼玉県騎西郡崎西町正能に、龍花院(伊豆山龍華院法音寺)があり、『龍花院文書』(15)によれば、伊豆権現・八幡・久伊豆大明神を鎮守するとある(16)。

また、『新編武蔵風土記稿』(12)において、騎西郡崎西町の久伊豆神社(現玉敷神社)には、式内論社の末社・宮日神社やその他の末社の一つとして伊豆権現があると記されている。

森田悌氏(二〇〇七)は、騎西郡崎西町の久伊豆神社が、延喜式神名帳所載の武蔵国埼玉郡玉敷神社であり、近世において久伊豆神社を称した当社の訓みは「くいず」、「ひさいず」の両説があるなかで、『新編武蔵風土記稿』(12)の記述によって、「ひさいず」と訓んでいたことが確実であると示した。

また、久伊豆神社の伊豆を走湯山伊豆山権現(現伊豆山神社)に結び付ける説も存在するが、『伊豆山神社文書』(1)による走湯山燈油料船の広い活動範囲を考慮すると、何故、埼玉郡のみに走湯山伊豆山権現(現伊豆山神社)の信仰が展開されたのが不明で、『新編武蔵風土記稿』(12)の記述のごとくに、久伊豆神社(現玉敷神社)の境内に、末社として伊豆権現が祀られたという事実は、主神と末社の神霊が同一に祀られることになるためにあり得ず、久伊豆神社を走湯山伊豆山権現(現伊豆山神社)に結び付ける所見は、成立しえないと推測した(17)。

四 『吾妻鏡』における久伊豆宮と伊豆宮の表記

現存する『吾妻鏡』の集成本として分類される写本の主要なものは、北条本、広橋本、吉川本、島津本、毛利本の五点である。建久五年(一一九四)六月三十日条に関して、現時点で本文を確認出来る集成本として北条本、広橋本、毛利本が「久」で、吉川本が「与」である。東京大学史料編纂所所蔵で国宝に指定されている島津本は、現在閲覧が一時的に中止されている。

最近筆者はある研究者の厚意により、その島津本の建久五年六月三十日条のコピーを頂く機会を得た。結果は、島津本もまた「久」であり、四対一で「久」が多数を占めることが判明した。

「人間文化研究機構国文学研究資料館データベース」(18)のサイトに、『吾妻鏡』本文検索(19)がある。

『吾妻鏡』における久伊豆宮と伊豆宮の表記についての調査を行うためにこれを使用した。このデータベースの『吾妻鏡』の底本は、国文学研究資料館蔵の「寛永版本」である。

①「久伊豆宮」の検索結果は「一件」で、
建久五年(一一九四)六月三十日条(九卷六八頁一行)のみである。

②「伊豆宮」の検索結果も「一件」で、
建久五年(一一九四)六月三十日条(九卷六八頁一行)のみである。これは、「久伊豆宮」の「伊豆宮」の部分が、
検索にかかったためである。

③「伊豆山」の検索結果は「二一件」あり、
初出が

治承四年(一一八〇)八月十八日条(二卷四三頁八行)
最後が

文応元年(一一六〇)十二月一日条(二四卷七七頁六行)
である。

④「走湯」の検索結果は「三七件」あり、
初出が

治承四年(一一八〇)七月五日条(二卷三一頁八行)
最後が

寛元四年(一一四六)三月三日条(一九卷七二頁六行)
である。

その内、「走湯山」という表記が「三三件」、「走湯権現」という表記が「四件」である。

つまり、『吾妻鏡』においては走湯山伊豆山権現（現伊豆山神社）は「伊豆山」、「走湯山」又は「走湯権現」と表記されるのが通例であったと推測され、吉川本の建久五年（一一九四）六月三十日条のみが「伊豆宮」と表記していたことになる。

五 『吾妻鏡』における大河土（戸）御厨の表記

次に前述の検索（18）（19）を使用して、『吾妻鏡』における大河土（戸）御厨の表記の調査を行った。

⑤ 「大河（土）御厨」の検索結果は「一件」あり、

寿永三年（一一八四）正月三日条（二巻八二頁二行）

のみである。

⑥ 「大河（戸）御厨」の検索結果は「三件」あり、

建久三年（一一九二）十二月二十八日条（八巻一一七頁八行）

建久五年（一一九四）六月三十日条（九巻六八頁一一行）

建暦三年（一一一三）五月十七日条（一一巻一四二頁一〇行）

である。

大河（土）御厨と記される寿永三年（一一八四）正月三日条の内容により、大河（土）御厨が武蔵国崎西・足立両郡内に存在することが判明するが、大川戸の地名が残る埼玉県北葛飾郡松伏町付近を大河土（戸）御厨と比定した場合、その当時にはそこが、下総国葛飾郡であったことが難点であった。

そこでひとつの仮説として、武蔵国崎西・足立両郡内に存在したと記される大河（土）御厨に、寿永三年（一一八四）正月三

日以降、建久三年（一一九二）十二月二十八日以前に、その当時に下総国葛飾郡であった北葛飾郡松伏町大川戸地区が、飛び地のような形で新たに寄進された結果、大河（戸）御厨という表記に変えたのではないかと推測したが、それを裏付ける史料は無く、勘解由小路兼仲『勘仲記』紙背文書では、すべて「大河（土）御厨」と記されている（20）。

北葛飾郡松伏町大川戸地区が、当時の国境及び郡界であった利根川の流路の変遷の結果、武蔵国より下総国葛飾郡に編入されたという説（21）があるが、近年の河畔砂丘等の研究成果により、古代から中世にかけての利根川の本流は、埼玉県春日部市付近で現在の古利根川を分流した後、現在の古隅田川を経て、埼玉県さいたま市岩槻区付近で現在の元荒川と合流し、それより下流の元荒川を経て江戸湾に流入していたことがわかっており（22）、現在の古利根川「左岸」に位置する北葛飾郡松伏町大川戸地区が、中世の利根川本流の「右岸」であり武蔵国であったという説（21）は、地質学的にあり得ない。

それ故、古隅田川及びその合流地点より下流の元荒川の左岸は、古代より近世初頭に至るまで一貫して、下総国であり続けたのである。

六 中世関東水運史における重要なテーマ

伊藤一美氏（一九九〇）は、氏の所有する「貞治四年伊豆山権現走湯山の寺領一覽」を紹介しながら、「伊豆走湯山所領目録」

(4)にも同じく記載される武蔵国吉田郷三ヶ村が、源頼朝によつて治承三年(一一七九)十二月二十八日に、寄進されたと推測した(23)。

伊藤一美氏は、走湯山燈油料船については述べていないが、武蔵国吉田郷より年貢を船で運ぶためには、吉田川、赤平川、荒川を経て、当時の利根川の本流が流れていた(22)大河戸御厨の中を航行して、江戸湾に出たことが容易に想像が出来る。しかし、『伊豆山文書』(1)の場合と同様に、武蔵国吉田郷三ヶ村での走湯山燈油料船の活動はすべて不明である。

現時点の研究で、走湯山燈油料船が鎌倉時代初期に大河戸御厨の中を航行していたという史料の裏付けはない。それ故に、『吾妻鏡』建久五年(一一九四)六月三十日条において、喧嘩を起こした当事者が、久伊豆宮神人なのか伊豆宮神人であるのかが問題なのであり、この問題の解決は『吾妻鏡』の写本研究のみならず、中世関東水運史においても重要なテーマなのである。

(追記)

『吾妻鏡』建久五年(一一九四)六月三十日条における久伊豆宮が、さいたま市岩槻区宮町の久伊豆神社や、越谷市越ヶ谷の久伊豆神社である可能性もあるが、両社の社伝は鎌倉期については触れる所がなく(24)、史料的に建久五年(一一九四)に存在したことを立証するのは、走湯山燈油料船が大河戸御厨の中を航行していたことを立証するよりはるかに困難がある。

越谷市越ヶ谷の久伊豆神社に程近い元荒川右岸の越谷市御殿

町に、建長元年(一一四九)の銘のある板碑が存在するが、この板碑が数少ない立証のための手がかりのひとつとなる。

註

(1)『伊豆山神社文書』『鎌倉遺文』一五―一一一五六
(2)千野原靖方一〇〇七

『常総内海の世界―地域権力と水運の世界』
寄書房 八四―九〇頁

(3)『伊豆山神社文書』『平安遺文』八一―三九七四
※盛本昌広氏は(9)の三四頁の註四において、「この治承

五年正月日御下文にあたりと思われる治承六年正月日の源頼朝下文が、走湯山東明寺に現存するが、様式から見て偽文書であろう」と述べてる。

(4)『三寶院文書』三号『静岡県史料』1
(5)『伊豆山神社文書』四号 寛元五年二月十六日

北条時頼寄進状『静岡県史料』1
(6)『神奈川県史』3上―四六六号

(7)『澁稿冊子百九・裏文書』『神奈川県史』3上―三八三四号
(8)『澁蓉著作・四分律行事鈔見聞集十八・裏文書』

『神奈川県史』3上―三八九六号
(9)盛本昌広一九八八

『走湯山燈油料船と神崎関』 『千葉史学』一三三号
(10)※初出史料

『吾妻鏡』寿永三年(一一八四)正月三日条
(11)※初出史料

『吾妻鏡』文治四年(一一八八)六月四日条
(12)『新編武蔵風土記稿』卷之二百九 埼玉郡之十一 騎西領

(13)太田富康一九九三
『中川水系 III 人文』第一章第二節六

- 埼玉県一八四・一八五頁
 (14)岡田清一 一九九一
 「大河戸御厨をめぐる二、三の問題」
 『埼玉県史研究』二六号
 (15)「納経拝札に付き龍花院由緒扁書」
 『騎西町史・近世資料編』
 騎西町 六九一―六九三頁
 (16)富田勝治 二〇〇五 『騎西町史・通史編』三編 一章 二節 騎西町 一九二―一九六頁
 (17)森田悌 二〇〇八
 「玉敷神社と久伊豆神社」
 『埼玉史談』第五五卷 第二号
 (18) http://www.nijl.ac.jp/contents/d_library/index.html
 (19) <http://ocelot.nijl.ac.jp/dlib/azuma/>
 (20)海津一朗 一九九二
 「弘安の神領興行法と東国諸御厨」『地方史研究』一三九 第四二巻五号
 (21)大村進 一九七五
 『越谷市史・通史編上』三編 一章 二節 越谷市 二三八―二四三頁
 (22)平社定夫・佐藤和平 一九九三
 『中川水系 Ⅰ総論・Ⅱ自然』第一章第一節四 埼玉県 八二―一一八頁
 (23)伊藤一美 一九九〇
 「武蔵国吉田郷と伊豆山神社」

- 『埼玉県史研究』二四号
 (21)大村進 一九七五
 『越谷市史・通史編上』三編一章二節 越谷市 二四一・二四二頁

阿波踊り 安西利夫・墨絵



第 25 回 南越谷阿波踊りは 2009 年 8 月 21 日～23 日に開催

越谷市内を流れる元荒川は元・利根川だった

秦野秀明

一 元・利根川

越谷市内を流れる「元荒川」(流路跡を含む)は、古代より中世前半までは「利根川」であった。

故に、越谷市内においては、「元荒川(元・利根川)」の流路(流路跡)を境に、下総国と武蔵国が画されていたのであり、その国境であった期間は「元荒川」が「利根川」ではなくなっていた近世初頭まで続いた(1)。しかし「元・荒川」という名称のため、「元・利根川」であったという事実は、一般的にはあまり知られていない。

今回、関東地方では「利根川」流域だけに存在する「河畔砂丘」を題材として、越谷市内を流れる「元荒川」が「元・利根川」であったという事実を紹介するが、紙面に限りがあるため、「中川水系 I 総論 II 自然」第一章第一節四(2)より引用した基本的な事柄のみの記述を行うこととする。

二 河畔砂丘

「河畔砂丘」とは、自然堤防性の河川堆積物とその上に重なる風成砂によって作られている。この河川堆積物の最上部は後

背湿地面より数mの比高をもっているため、その上を覆う風成砂が自然堤防の高まりをさらに大きくし、小高い「河畔砂丘」ができている。時には風成砂が薄く、自然堤防性の地形が主体となっている場合もある(3)。

多田文男氏(一九四七)は、「河畔砂丘」の形成に関して、利根川中流部は砂の供給がよく、砂の移動が容易で、蛇行の袂状(けつじょう)部の風下側(東側あるいは南側)に出来やすいことを明らかにした(4)。

「河畔砂丘」の分布(図1・図2)は、

①会の(あいの)川(羽生市上川俣―栗橋町高柳まで)

②合の(あいの)川(北川辺町飯積)

③浅間(あさま)川、大落古利根川(大和町佐波―栗橋町高柳―鷲宮町―杉戸町―春日部市―松伏町上赤岩まで)

④古隅田川、古隅田川の合流点から下流の元荒川(春日部市浜川戸―岩槻区長宮―越谷市大成町まで)

であり、特徴的なことはかつての「利根川」と考えられる流路(流路跡)沿いだけに発達していることである(5)。

「利根川」上流部においては、六世紀初頭以降に四度に及ぶ大噴火があった(6)。そのため、その火山性の砂の粒度組成及び鉱物組成(7)が、「河畔砂丘」を形成する決め手になったといえる。故に、「利根川」と「荒川」の違いを、上流部に活火山が存在するか否かで説明することもできるのである。

三 北越谷地区の元・利根川の流路跡

「写真1」は、昭和二二年(一九四七)の越谷市北越谷地区の

空中写真(8)である。区画整理事業が行われる以前のため、「元荒川」の流路跡を、大房稻荷神社付近を分流点に、少なくとも五筋は読み取ることができる。

北越谷地区には、浄光寺を乗せる「河畔砂丘」の列と、北越谷小学校の東側の住宅地を乗せる「河畔砂丘」の列が併せて二列存在し、「北越谷河畔砂丘」と命名されている(9)。「河畔砂丘」は「利根川」の流路の東側及び南側に形成される(4)ので、現在ある北越谷小学校の位置より東側に読み取った数筋の流路跡のすべては、「元・利根川」であったということが出来る。

故に、今はなき大沢浅間神社の小丘や「大沢七つ池」(10)が形成された時期も、「元・利根川」の頃であり、長元七年(一〇三四)に勧請されたという大沢浅間神社の伝承(11)も、流路跡の時期を推定する材料になる可能性がある。

昭和四七年(一九七二)に、北越谷地区の対岸である南荻島地区の「元荒川」の川底から、康正三年(一四五七)より明応八年(一四九九)に至る板碑群が引き上げられた(12)。

北越谷地区における「元・利根川」の流路は、「河畔砂丘」の形成(4)の過程により東から西へ移動している。それゆえ、最後に板碑の建てられた明応八年(一四九九)以降に、現在の「元荒川」の位置に流路が定まり、板碑群が川底に没したのである。

四 照光院の氷川社

『大澤町古馬宮(こまばこ)』(13)には次の記述がある。

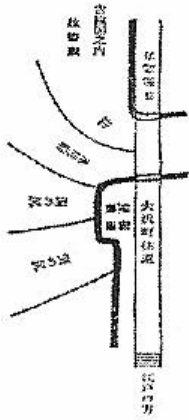
六十一 氷川前

一 古絵図ニ氷川前といふ(は)御蔵屋敷の西の方に向ひ川前と記しあり、夫より辻耕地の境辺をいふなり、委しく(は)古絵図ニて知へし、

筆者は当初、この記述の「氷川」は「氷川神社」とは無関係であろうと推定していたが、『新編武蔵風土記稿』の照光院の項(14)に「氷川社」があるのを見出し、照光院のご住職に確認したところ、この「氷川社」は明治以降に大沢香取神社に合祀され、現在は照光院の境内には存在しないものの、この地に確かに「氷川神社」が存在していたという事実が確認できた。

『大澤町古馬宮』により、照光院の西南西付近に「御蔵屋敷」(15)、照光院の東北東付近には「天神前小橋」(16)が存在したことが分かる。「北越谷河畔砂丘」(9)の位置より推定すれば、下総国と武蔵国の国境であった「元・利根川」が、「天神前小橋」(16)付近を流れ、その後創建された照光院はその右岸であったということが出来る。

故に、古絵図に記される「氷川前」(古絵図1)も、「元・利根川」の右岸であり武蔵国埼玉郡の地名であった可能性が高い。しかし何ゆえ、「埼玉郡」の鎮守であった「久伊豆神社」ではなく、「足立郡」以西の鎮守であった「氷川神社」(17)が祀られていたのかは不明である。



古絵図1 氷川前
『大澤町古馬宮』
六十一 氷川前を使用

- (1) 新郷 (2) 岩瀬 (3) 砂山 (4) 須影 (5) 志多見 (6) 南篠崎 (7) 飯積 (8) 原道
- (9) 高柳 (10) 西大輪 (11) 青毛 (12) 高野 (13) 小淵 (14) 藤塚 (15) 松伏 (16) 上赤岩
- (17) 浜川戸 (18) 長宮 (19) 袋山 (20) 大林 (21) 北越谷 (22) 東越谷 (23) 大相模

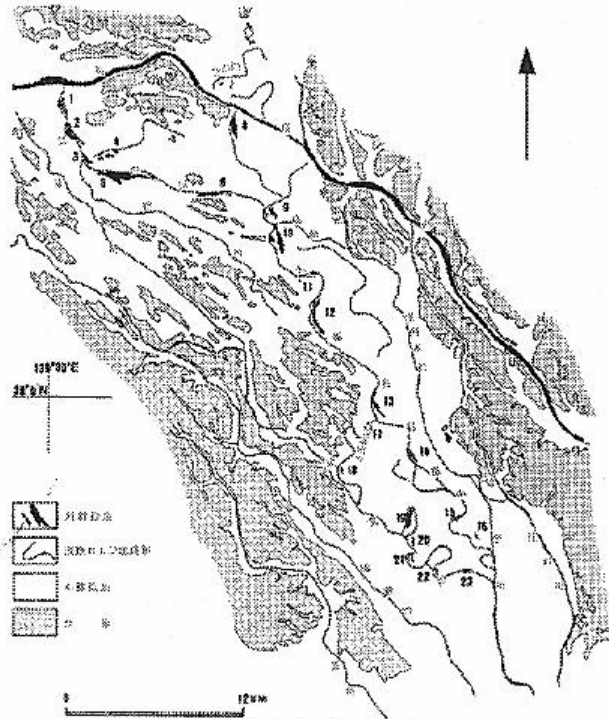


図1 河畔砂丘の分布図
 平社定夫・佐藤和平 1993 『中川水系 I 総論・II 自然』
 第一章第一節四 埼玉県 84 頁 を使用

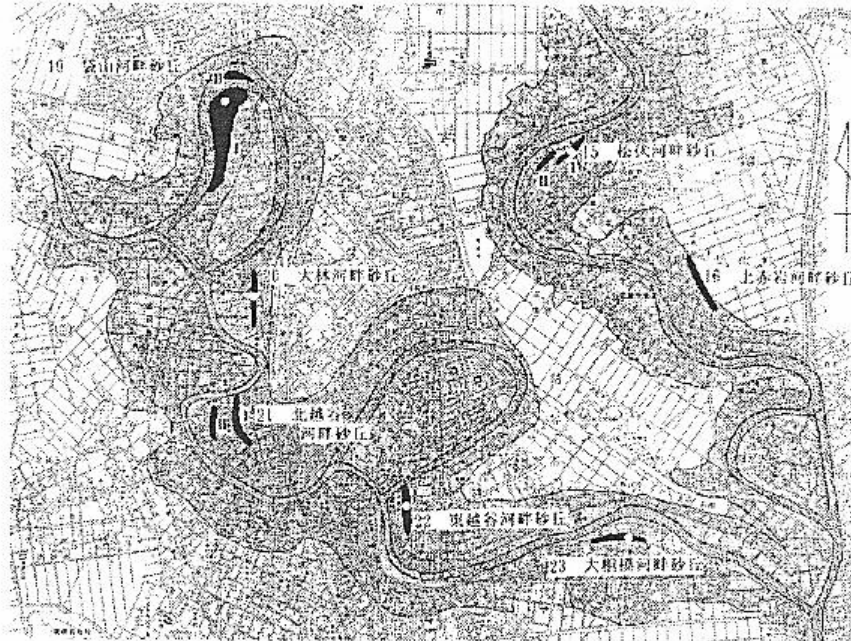


図2 越谷市と松伏町の河畔砂丘と周辺の地形
 平社定夫・佐藤和平 1993 『中川水系 I 総論・II 自然』
 第一章第一節四 埼玉県 94 頁 を使用

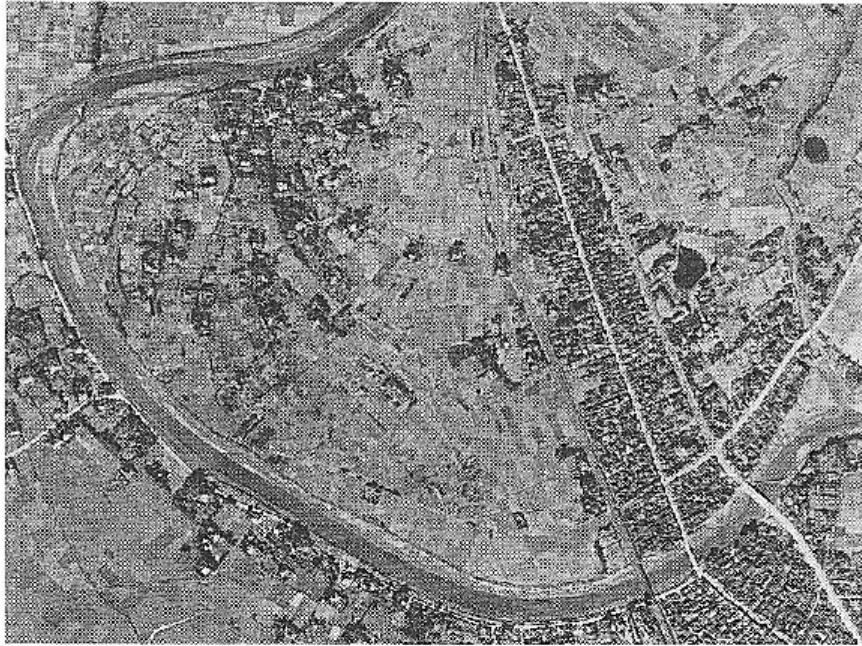


写真 1

国土地理院 空中写真 (1947・10・23撮影)
129番 を加工して使用

註

(1) 代表的なものとして

本間清利 一九七八 『利根川』 埼玉新聞社

※ 「利根川」 初出は 「住田河」 『類聚三代格』 承和二年 (八三五) 六月二十九日

(2) 平社定夫・佐藤和平 一九九三

『中川水系 I 総論・II 自然』 第一章第一節四 埼玉県 八二―一八頁

(3) 前掲書註(2) 一一七頁

(4) 前掲書註(2) 八二頁

(5) 前掲書註(2) 八五頁

(6) 早田勉 一九八八 『関東・甲信越の火山 I』 築地書館 七四―九二頁・

高橋正樹 一九八八 『関東・甲信越の火山 I』 築地書館 九三―一一八頁

(7) 前掲書註(2) 九七―一一七頁

(8) 国土交通省 国土地理院 空中写真 (一九四七・一〇・二三撮影) 一一九番

(9) 前掲書註(2) 九三頁 「北越谷河畔砂丘」

大林河畔砂丘の一つ南側の蛇行部、越谷市北越谷に二列の河畔砂丘が発達する。いずれもゆるく湾曲した平面形態を示し、北から南へのびる。

I は浄光寺をのせ長さ五八〇m、幅七五mであり、II は北越谷小学校の東の住宅地をのせ長さ三五〇m、幅五〇mである。低地との比高は、二m前後である。

(10) 高崎力 二〇〇七 『大沢のセツ池』 『古志賀谷』 一四号 八二・八四頁

(11) 『荒井家文書』 (越谷市大沢)

(12) 加藤幸一 一九八八 『元荒川(南荻島)出土の板碑群』 (未公刊)

(13) 江澤昭融 一八四一 『大澤町古馬宮』 (原本三四頁)

(14) 『新編武蔵風土記稿』 卷之二百三 埼玉郡之五 越ヶ谷領

(15) 前掲書註(13) (原本七二頁)

(16) 前掲書註(13) (原本五一頁)

(17) 西角井正慶 一九六六 『祭祀圏の問題』 『古代祭祀と文学』 中央公論社

増林の勝林寺本尊と岩付の渋江氏

山本泰秀

東武伊勢崎線越谷駅からおよそ四[、]ほどの田園地帯の先に、増林の閑静な住宅地の中にたたずむ勝林寺がある。本堂には、岩付（現、岩槻）渋江氏の守護仏と伝えられる木製の十一面観音坐像が祀られている。勝林寺の本尊で、像の座高が四寸六分ほどの可憐な小品である。その御姿は、頭上に弥陀の化仏および変化面を頂き、右手は五指を伸べて膝上に置き、左手に水瓶を持っている。

勝林寺の発祥は、万寿二年（一〇二五）三月十日、源勝という僧が、岩槻にある天長元年（八二四）開山の慈恩寺（天台宗）の末寺として、この地に自耕院を開山したことに始まる。この時に祀ったとされる観音菩薩像は、恵心僧都の一刀三礼の製作とされることから、平安時代に遡るとされる。

その後、寺は、衆人によって度重なり修復されてきた。しかし、寺が無住になることもあって荒廃してし

まった。

その寺を

渋江氏の

系譜を受

け継ぐ黙

堂開契

（もくど

うぎんか

い）が新

たに修復し、曹洞宗に改宗し、寺号を勝林寺と改名した。天文元年（一五三二）八月のことである。

中興開山黙堂開契の世代に「勝林二世」の天松玄固が太田氏の岩付城に赴き、渋江氏代々の守護仏十一面観音の仏像を譲り受けた。天文元年九月二十四日のことである。これ以降、十一面観音像は勝林寺の本尊として、今に至っている。

なお、黙堂和尚が亡くなられたのは天文七年四月十六日である。

元来、勝林寺住職には、仏像はあくまでも信仰の対象として崇める慣習のみで、仏教美術としてとらえることはなかった。本尊十一面観音は、普段は御厨子にしまわれ、扉が閉められ、秘仏として大切に安置されている。御開帳は十二年に一度の午の年である。



勝林寺本尊木像十一面観音坐像

大相模地区 文化財パトロール

平成二十一年二月から三月にかけて大相模地区に散在する一九九体の石仏・石塔の文化財パトロールを七つのグループ、二十二名の調査員により実施した。その時の様子が読売新聞に掲載され、テブコケーブルテレビでは三月一日より六日間、放映された。

道端の文化財パトロール

越谷 NPO法人 石仏など100体

文化財に指定されず、保存がままの荒廃の陰に隠れてしまふこともあるたや石塔を守ろうと、歴史を継ぎ、継承する。越谷市でNPO法人「越谷市郷土研究会」(宮川進)のメンバーが、越谷市内で文化財パトロールを行っている。「地域の歴史を伝承し、昔の人々の生活をたどる大切な文化財」として、一丁目を止めていく。地域で「一丁」がパトロールは、0.06年から始まった。小期待を込める。

メンバーの進捗は、越谷市立第一小学校の加藤一朗校長(59)が約15年かけて市会を回り、江戸朝初期に作られた石仏を石塔約1000体を詳細に調べたスケッチと地図に描いた。石仏は、刻まれた文字が読れなくなっている。文庫が残っていない。一丁の資料になる」と話す。

現在は約20人、市西奥部の約1000体をパトロール中。越谷レイクタウンの開発などで急速に町並みが変わる可能性もあるため、この地域を巡る。17日は4人が同市東町と四方の石仏など100体を巡る。石仏の寸法を測ったり、どう見ればいいのかを確認した。

点検した内容は調査票にまとめ、リストを作成している。宮川会長は「今後、地域の人々に調査内容を伝え、保護に協力してもらえよう。お願いできれば」と話している。



石仏の保存状態をリストにまとめるメンバーら(17日、越谷市東町で)

メンバーの進捗は、越谷市立第一小学校の加藤一朗校長(59)が約15年かけて市会を回り、江戸朝初期に作られた石仏を石塔約1000体を詳細に調べたスケッチと地図に描いた。石仏は、刻まれた文字が読れなくなっている。文庫が残っていない。一丁の資料になる」と話す。

現在は約20人、市西奥部の約1000体をパトロール中。越谷レイクタウンの開発などで急速に町並みが変わる可能性もあるため、この地域を巡る。17日は4人が同市東町と四方の石仏など100体を巡る。石仏の寸法を測ったり、どう見ればいいのかを確認した。

点検した内容は調査票にまとめ、リストを作成している。宮川会長は「今後、地域の人々に調査内容を伝え、保護に協力してもらえよう。お願いできれば」と話している。



テブコで関東地区一帯に放送された



インタビューを受ける中村さんと小林さん

(テブコケーブルテレビ放送・音声文字起こし) 町中に点在する石仏などの文化財を市民の手で記録保存して行こうと二月十七日の火曜日、越谷市のNPO法人が文化財パトロールを行いました。

元荒川沿いの肥沃な土地で農業を中心に発展してきた越谷市。市内には今もいにしへの暮らしを刻んだ石仏や石塔が数多くあります。今回のパトロールはそんな暮らしの中の文化財を記録し後世に伝えて行こうと越谷市郷土研究会が行いました。パトロールは二年に一度行っています。この日は中村さんと小林さんの二人が相模町にある四〇体の石仏・石塔を確認して回りました。

調査のベースになるのは地元の郷土史家・加藤幸一さんがまとめた詳細な資料です。石仏石・塔の形はもちろん、刻まれた文字やいたみ具合などが記録されています。この資料を元に所在を確認し保存状態を記録

します。中には建立から二〇〇年、三〇〇年と経っているものもあり、前回調査からの間にも所在の判らないもの、場所が移動したものの、欠けたものなど多くの変化が見られました。

石仏・石塔は越谷市内に一〇〇〇程度あると言われ、それらは地元の人たちの手で守られているのが現状です。地域のきずなが希薄になりつつある現在は、守る人がいなくなった石仏・石塔も数多くあるそうです。この日、二時間かけて行われた調査では四〇体のうち三八体が確認されました。

小林さんの話「以前、ここにこういう人が住んでいてこうだったと言うことを手掛かりとして、歴史を探究する糸口としては石仏が大変面白い。ただ非常にわかりにくくなってきているので字も読みにくくなりましたし、地味な調査だと思うのですけれど。」

中村さんの話「新しい道路ができたりとか、それから建物の建て直しがあつたりとか、そういう形で知らない間にこういう文化財的な石像が無くなるというのが間々あるようなのですね。そういうことで現状をよく把握しておいて、何か問題があればそういうものを関係のところに対策を依頼するということを、これからもやって行く必要があるかな、と思います。」

越谷市郷土研究会ではこの他にも「史跡めぐり」や子供たちへの「むかし遊び教室」などを開いています。地域の歴史や文化を知ることので自分たちの町に関心を持つことができるのではないのでしょうか。



当会主催の講演会報告



「旧・越ヶ谷宿の町並みを考える」――

最近の調査研究ノートから――

日時 平成二十年一月二十七日（日）

場所 越谷産業会館

講師 日本工業大学教授・黒津高行氏

越谷市にレイクタウンもできた。越谷駅前の再開発も青写真ができた。「新しいものがどんどんできる今、江戸時代からの伝統を受け継ぐ越谷の中心の町並み保存をどのようにするのがよいのだろうか」との趣旨で、主題のお話を聞かせていただくことになった。

黒津氏自身が携わった歴史的景観のある魅力的な町並みの具体例を鳩ヶ谷市のみならず、世界中から挙げたいだいた。特に崩壊の危機に瀕するカトマンズ盆地世界遺産地区の例は、古い町並みを真剣に考えるよい機会を得ることができた。

「旧・越ヶ谷宿と街づくり」

日時 平成二十年六月二十二日（日）

場所 越谷産業会館

講師 大妻女子大学非常勤講師・根岸俊雄氏

旧・越ヶ谷宿の古い町屋の紹介を通して、古い町屋の利活用について触れていただいた。さらに根岸氏自身が携わり「彩の国さいたま景観奨励賞」を獲得した秩父の松本教室（登録文化財）などの多くの実例を通して、歩道の設置、電線の埋設化、路面の美化の他にもさまざまなアイデアを紹介しながらの話であった。前回行われた黒津氏の講演会とは別の切り口で、越ヶ谷宿の古き町並み保存を唱えていた。

越谷市制施行五十周年記念歴史講演会

（越谷市教育委員会との共催）

「方言の世界」——越谷吾山から方言学へ——

日時 平成二十年八月三十日（土）

場所 越谷市中央市民会館（劇場）

講師 東京女子大学教授・篠崎晃一氏

越谷出身の江戸時代の俳人・越谷吾山は日本で初めての方言辞典「物類称呼（ぶつるいしようこ）」を作った。本格的な方言研究の第一歩を築いた越谷が誇れる人物の一人である。二百三十年後の今でも、その研究成果は方言学の研究者にとっては欠かせないという。

「日本語でなまらナイト」などの著書を通して方言学・言語学を紹介された篠崎氏による吾山のことを含めた「方言」の話を詳しく、かつ楽しくお聞きすることができた。

「旧・越ヶ谷宿の良さを発見しよう」

日時 平成二十一年一月二十五日（日）

場所 越谷産業会館

講師 （株）文化財保存計画協会・建造

物室長・津村泰範氏

江戸時代の日光街道の名残をとどめる越ヶ谷の町並みと、それを構成する建物、これを次の世代にどのように伝えていくのか。

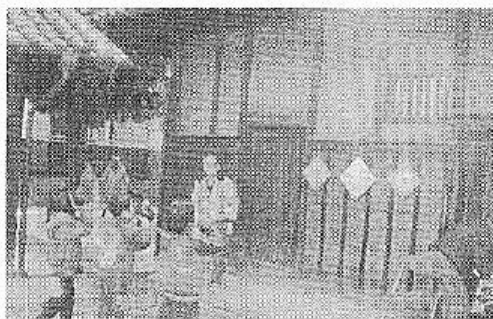
津村氏は建築物の保存・活用に全国を飛び回っておられる専門家である。「歴史的建造物」のとらえ方から保存・活用まで、自身が携わってきた実例をあげて話され、専門家の目で豊富なご経験に基づく知恵を紹介していただいた。

その他のイベントとして行われたものを次にあげる。

平成十九年十二月二日（日）「こしがや産業フェスタ」で行われた「深川睦会公演」（主催は当会と越谷市観光協会）がある。東京都指定無形民俗文化財に指定されている。三ノ宮卯之助生誕二〇〇年記念イベントとして越谷市総合体育館アリーナで行われたものである。平成二十年二月二十四日（日）「こしがや文化芸術祭」で行われた文化講演「越谷の古道」（講師は当会副会長）がある。越谷コミュニティセンターにて行われたものである。

昔の遊びを体験し学びました

20年11月14日(県民の日) 越谷市保存民家 大間野町旧中村家



吹き矢大会に参加の子供たち



旧中村家の広い庭で走り回って遊ぶ子供たち

当日は快晴のイベント日和に恵まれ、郷土研究会から二十名、市教育委員会、地元の人会によって運営され、総勢約二〇〇名の子供と家族が、初冬の日を楽しく過ごしました。

今回は「遊び体験を通して、子供たちが自発的に昔の生活や文化を肌で感じて学び取る」ことを狙いとして実施しました。

屋内では、五目並べ・折り紙等に始まり、屋外では、ゴム鉄砲・吹き矢・紙コップUP・ベーゴマ・竹トンボ・メンコ・ビー玉・縄跳び・モッコ担ぎ等々、昔の遊びに最初は戸惑いながらも、みんなでワイワイ、ガヤガヤと楽しく遊んでいました。

午後からは高崎庁常任顧問による三ノ宮卯之助の説明があり、郷土の生んだ偉大な力士に、感嘆の声を上げていました。また、同家の「かまど」に火が入れられ、甘酒が参加者全員に配られ、心身ともに暖かくなりました。初めて見る遊びに、最初は尻込みしていた子供たちも、慣れるに従って楽しみながら学

習をしていました。子供たちの興味津津の瞳がキラキラと輝き、みんなの記憶に残る楽しい一日となりました。



当日、子供たちと一緒に昔遊びを楽しまれた越谷市郷土研究会のメンバー

越谷市郷土研究会 史跡めぐりの記録

【第371回】平成19年(2007)9月29日～【第391回】平成21年(2009)5月20日

回	月日・曜日	行き先	案内者	参加人数
371	平成19年9月29日(土)	歴史ロマンただよう行田	菅波昌夫	63
372	10月24日(水)	碓氷峠と鉄道文化村	中村幸夫	62
373	11月18日(日)	東京たてもの園を見に行く	宮川 進	73
374	12月15日(土)	50年前の越谷を訪ねて	北川義男	56
375	平成20年1月3日(木)	伊興七福神めぐり	加藤幸一	88
376	2月27日(火)	六本木・麻布十番	宮川 進	135
377	3月23日(日)～ 3月25日(火)	三ノ宮卯之助の力石を訪ねる 飛鳥・山の辺の道めぐり	宮川 進	29
378	4月9日(水)	宮内庁埼玉鴨場見学	藤川吉洋	20
379	4月22日(火)	県北は埼玉の歴史のふるさと	宮川 進	56
380	5月24日(土)	陽春の岩槻道と旧長島村	加藤幸一	85
381	6月4日(木)	地下神殿と江戸川散策	渡辺和照	49
382	7月23日(水)	小江戸川越の歴史を歩く	中村幸夫	81
383	9月27日(土)	織部 桐生を訪ねる	菅波昌夫	77
384	10月22日(水)	鉄道博物館と民俗博物館 大宮公園散策	藤川吉洋	80
385	11月18日(火)	横浜総持寺と横浜中華街を訪ねて	渡辺和照	63
386	12月12日(金)	結城 つむぎと蔵と歴史のまち	水上 清 篠原陸郎	62
387	平成21年1月3日(土)	谷中七福神めぐり	加藤幸一	79
388	3月1日(日)	案外知らなかった越谷を歩く	宮川 進 加藤幸一	134
389	3月25日(水)	南総里見八犬伝のふるさと内房を訪ねて	水上 清	71
390	4月25日(土)	植木の里・安行と伊奈家の足跡を訪ねる	篠原陸郎	73
391	5月20日(水)	新緑の榛名山の麓 榛名神社／小栗上野介／伊香保・水沢	渡辺和照	61

第371回 史跡めぐり 歴史ロマンただよ行田

平成19年9月29日(土)

天気 くもり

参加者 63人

案内者 菅波 昌夫

記録 中村 幸夫

八時一五分越谷駅集合。昨日は真夏並みの気温三二℃が、今日は一気に一〇℃も下がって二〇℃以下、小雨もパラッキ一寸肌寒い天気の中を出発した。羽生駅で秩父鉄道に乗りかえ行田駅に到着。本日の史跡めぐりの一步を踏み出す。まずは大長寺を訪問。本堂にて住職から「要研究図大掛軸」

について説明を頂く。

最後に各自木魚をたたいて朝の眠気を覚ました。本堂をでて露座の大仏、六地藏等をお参りしながら、次の訪問先・横田酒造へ向かった。横田酒造では社長と岩手県から来ているという杜氏の案内により酒造り工程のと見学を行った。最後にお楽しみみの試飲。清酒大吟醸、果実酒などの試飲と買物を済ませ、ほろ酔い気分佐間天神社へ。天神境内の樹齢四百年以上の大けやき群は見事だった。

昼食は行田忍公民館ホールで食べる。行田名物ゼリーフライが一つずつ配られ試食。ポテトとおからのコロツケ風焼き物、皆さんお味は如何だったでしょうか。

食後最初の訪問は「足袋とくらしの博物館」。NPO法人の方から足袋製造工程の実演説明を頂いた。今は日常使うことのなくなった足袋をはいた生活が懐かしく思いだされた。その後、行田市役所の前を通り忍城趾・郷土博物館へ。常設展で行田の古代から江戸時代の歴史を説明いただいたあと、忍城三階櫓へ。三階からしばし行田の街の展望を楽しんだ。

忍城をあとに四時のからくり時計に間に合うよう歩いて「城西からくり時計」のある交差点へ。四時丁度わらべ唄風の曲が流れ子供達が昔なつかしい遊びを披露、最後に殿様が現れ約五分のからくりが終わった。

からくり時計で本日の行程はすべて終わり、帰りの乗車駅秩父鉄道「持田駅」へと向かった。



大長寺大仏の前に立つと穏やかな気持ちになると参加者の声

バス二台。一号車、二号車とも乗車人数は各三十一名とゆつたりとした状況で出発した車は、関越道・上信越道と進み、車窓の左右から妙義山の岩肌に見とれているうちに、妙義神社前の道に到着。ここから妙義神社までは急な坂道と階段を皆ふうふうしながら上り、妙義神社宝物殿(旧宮様



第372回 史跡めぐり

碓氷峠と鉄道文化村

平成19年10月24日(水)

天気 晴れ

参加者 62人

案内者 中村 幸夫

記録 佐藤 光夫



あり、二階は茶屋を物語る品が展示してあり、南に妙義山を背景にした庭園は素晴らしかった。昼食は、おぎのやで峠の釜めしを頂いた。

めがね橋からの道は、以前横川から軽井沢までアプト式電車の走っていた所で今は遊歩道になっている。ゆるやか

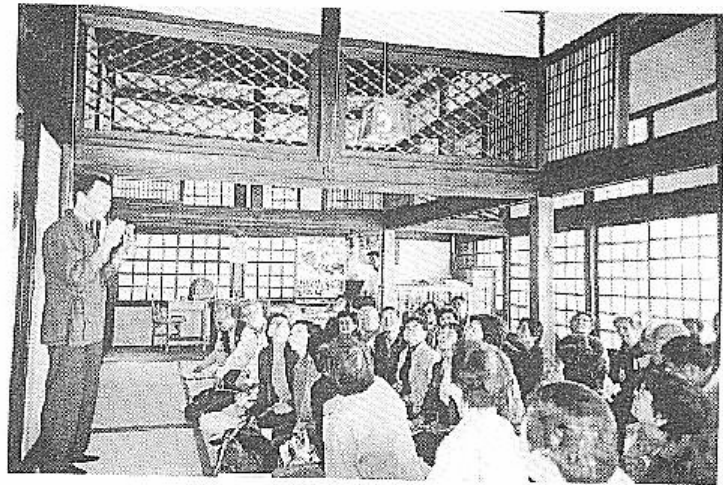
御殿)にて宮司の川島さんから妙義神社・由来のお話を聞いた。妙義神社本殿は前回の大雨で参道等が土砂崩れで参拝は出来ないとの事で、波己曾社のみの参拝となった。

五料の茶屋駐車場から踏切を渡った所の五料の茶屋本陣には、お東とお西二軒の建物が

な下り道と幾つかのトンネルをくぐり、下の方に碓氷湖を見ながら、しばらく行くと白秋歌碑あり、バスは少し先で待っていた。

鉄道文化村駐車場から、三百ほど行くと碓氷関所資料館があり、安中市の文化財係の人から関所の移り変わりの説明があった。関所の建物、西門はこわされた

が、東門は後に焼かれるところをある人が見つけて関所跡に復元された。実際に建っていた所は少し離れた所だった。鉄道文化村は、自由行動なので皆思い思いに散策に行った。D51機関車・電気機関車・客車・貨物車・工作車など所狭しと並んでいた。鉄道資料館で模型電車の走るのを見ているうちに帰る時刻となった。天候は良かったが紅葉には少し早かった。道路の渋滞・事故も無く予定より速めに帰着した。



妙義山神社宝物殿の中で神社の由来を聞く

朝から快晴に恵まれる。全員元気に南越谷八時四十分の電車に乗り、途中の南浦和ではほとんど全員が座れた。西国分寺駅で乗り換え、武蔵小金井駅で降り、路線バスに乗り換え、十時二十分に無事「江戸東京たてももの園」に到着しました。当日は四名のボランティアの方々の案内により、四班に別

第373回 史跡めぐり 江戸東京たてももの園を 見に行く

平成19年11月18日 (日)

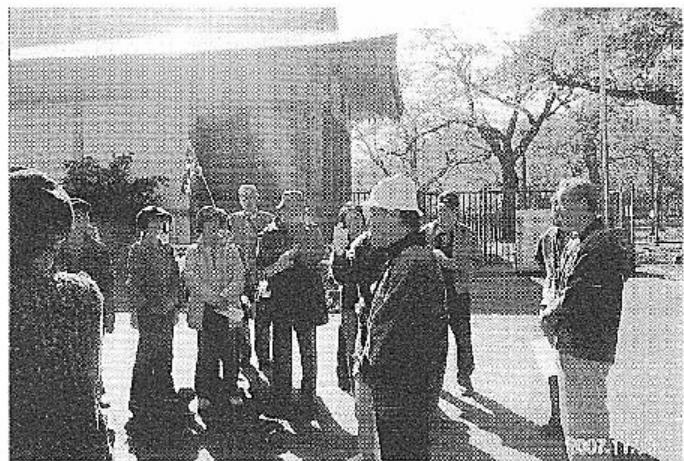
天気 快晴
参加者 73人
案内者 宮川 進
記録 渡辺 和照



④常盤台写真場⑤八王子千人同心組頭の家⑥綱島家(農家)
⑦三井八郎右衛門邸の順番で見学。センターゾーンでは⑧旧
自証院霊屋⑨高橋是清邸等を見学し、次に東ゾーンに移り、
またセンターゾーンと全部で二十二の建物を詳細な説明の
と案内いただいた。

れ園内の見学に向かっ
た。当園には百八十名
の方々が案内ボランテ
ィアとして登録されて
おり、休日には約三十
名のボランティアの方
が案内を行っていると
のこと。私達の班は「白
井正治」さんに案内し
ていただいた。

当園は、西ゾーン、
センターゾーン、東ゾ
ーンの三つに分かれて
おり、西ゾーンからの
出発です。見学順は①
田園調布の家(大川邸)
②前川國男邸③小出邸



歴史的建造物が並ぶ敷地内でガイドの説明を聞く

こしてはならないものと心に誓いました。

私事ですが、北千住の子宝湯は小学生の時にいったこと
あがり、当時を懐かしく思い出しました。また、昭和三十
九年に就職しましたが、会社の上司に月に四回位三年間近く
鍵屋(居酒屋)につれていってもらった事を昨日の様に思い
出しました。

場所は言問通りの入谷鬼子母神の前あたりだったと記憶
しています。本当に驚きです。温故知新、会員の皆様いろ
いろな思いで見学したのではないのでしょうか。古い物を大
切に保存することの重要性を改めて感じた一日でした。

途中昼食は会員
各自、広い園内の
各地で楽しい食事
の一時を過ごしま
した。食事の後も
各班別に帰りの集
合時間まで見学を
続けました。特に
十一番目に見学し
た植村邸(東京中
央区宝石店)では、
東京大空襲での焼
夷弾の破片で傷つ
いた建物の穴が大
変印象的でした。
戦後六十年経過し
た現在、二度と起

第374回 史跡めぐり 50年前の越谷を訪ねて

平成19年12月15日(土)
天気 くもりのち晴れ
参加者 56人
案内者 北川 義男
記録 原田 民自

りは当時、法務局や県税事務所などもあり、越谷市の官庁街だったようだが、ちよつと道を外れると田んぼやぬかるんだ道が続いていたと、案内の北川さんの説明。続いて、越谷にあった二つの映画館の一つ、越谷映画劇場の前に出た。娯楽の少なかつた当時はかなり繁盛したそうだが、今はスーパーに变身して当時の面影は何もなし。



今回の史跡めぐりは、来年十一月三日が越谷の市制施行五〇年の節目にあたることで、普段見慣れた町の中に昭和三十年前半のなつかしい場所や施設をたどろうと企画されたもの。当日は九時に越谷駅東口噴水前に集合。「越谷駅」も市になる少し前まで「越ヶ谷駅」。こしげや と表示されていたところで、駅前広場も今の半分程の広さだった。大勢の参加者の中、郷土研の黄色や緑の旗を先頭に歩き始めた。五〇年前の越谷にタイムスリップ!

最初の訪問地は市制が布かれた当時に市役所があったヨーカ堂付近。越谷市誕生記念樹のメタセコイアの木が今でも二本植えられていて、五〇年を経て当時のままそびえている

姿に、越谷市発展の原点を見るようでたくましく思えた。このあた

続いて訪ねた越谷警察署跡は当時、旧日光街道沿いの新石二丁目にあつて、町の秩序安定に奮闘していたが、その警察署も一階が商店の大きなマンションに变身した。

現在の市役所前には道路を隔てて市立福祉会館があつた。昭和五十一年に東京から越谷に引

つ越して来た時、何気なく中に入ると図書館があつた。薄暗く雑然として狭いという印象が残っている。今では跡地に中央市民会館が堂々とそびえたつている。

越谷の平らな地形の中、ポツンと一段高い場所にある東福寺を訪ねた。ここは元荒川に沿った河畔砂丘だということを知った。続いて越ヶ谷小学校正門前の越ヶ谷役場跡を見学して出発点の越谷駅に戻った。

今ではほとんど当時の建物がなくなつたり、別の場所に移つていた。「五〇年前ははるか遠くにあり」を実感した史跡めぐりだった。



「この場所に旧市役所がありました」。案内の北川さん

越谷駅発九時十二分の日比谷線で竹ノ塚駅に向かう。快晴だが気温が低く車窓から富士山がよく見えた。伊興七福神は最近出来た寺院七福神で、観光の土地柄でもなく未整備のため、伊興町の歴史散歩と合わせて案内したいとの説明があった。



第375回 史跡めぐり

伊興七福神めぐり

平成20年1月3日(木)

天気 晴れ

参加者 88人

案内者 加藤 幸一

記録 安西 利夫



ので新しい大きな石像を作った。奇異に感じたのは、その台座に小さな他の六福神が並んでいたことである。

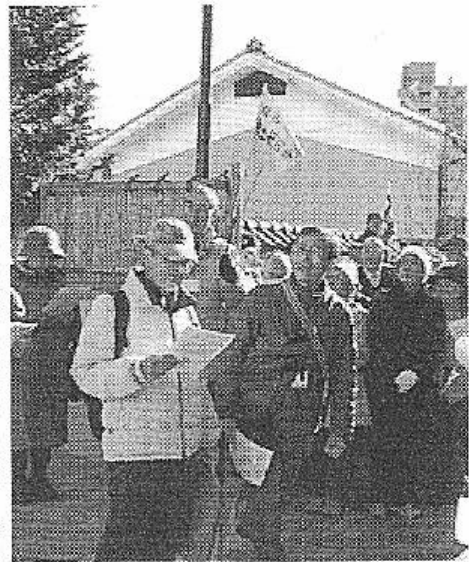
「正安寺」門を入ると小さなお堂があり高さ三十センチ位の木造の七福神が並んでいた。

明があった。

「白旗塚古墳」竹ノ塚駅西口一帯は低湿地で、一部海拔四位の丘がある。そこに古墳時代の小さな墳丘があり、霜柱を踏みながら見学した。形のよい松と水路のある史跡公園になっていた。

「法受寺」布袋尊

関東大震災後、東京谷中から移転した寺です。最近、実相院が布袋尊を引き継いだ



詳しいレジュメを見ながらコースを回った

碑があるが、一列通行の境内は狭く参加者から苦情が出ていた。

初詣客は近くの西新井大師に行ったのか、此処では参拝人が全く見当たらない。閉店中の商店街と狭い路地を八十メートルの行列が続く。途中で旧王子道や庚申塔などの説明があった。

「実相院」弁財天、大黒天、毘沙門天 伊興の子育て観音として有名だが人影はない。大黒と毘沙門が石像なのに、水かけ弁財天が金属製だった。

「福寿院」寿老神、福祿寿 係員が一人出迎えてミカンの接待をしてくれた。幼稚園が併設されていて、そこでトイレ休憩となる。

「源正寺」恵比寿神 七福神の幟だけが目立ち、境内に感銘するものもなく、十二時三十分解散となった。

「東岳寺」

ここも震災後に東京から移転した旧蹟で、江戸時代の浮世絵師・歌川広重の墓と記念



第376回 史跡めぐり

六本木・麻布十番

平成20年2月27日 (火)

天気 晴れ 強風

参加者 135人

案内者 宮川 進

記録 生 弘三



鑑賞する。日頃あまり絵画彫刻を観る機会のない私など久しぶりに心洗われるものがあつた。他の催場で大観展が開催されていて入場するのに長い行列が出来ていた。ビルの谷間にひっそりと佇む乃木邸、その奥に続く乃木神社、鳥居の右に枝垂れ桜、左に白梅が咲き辺りは風につけて香りが漂い疲れを和ましてく

昨夜からの雨は止んだものの寒風が吹き荒れる早朝、それでも大勢の会員の元気な顔が揃いました。本日の案内者の宮川会長から、コースの説明と注意があつた。越谷駅を八時三十六分の電車で出発。途中、北千住で千代田線に乗り換え、六本木方面に向う。強風の影響で電車が遅れ車内は混雑、最初の目的地乃木坂駅にて下車、階段を昇り外に出る。

街が一変したのにピツクリ、高層化している東京都心、六本木界隈も高層ビルが立ち並び刻一刻と変化しているのがよくわかる。その中でも国立新美術館のひとつ際目を引く景観に皆圧倒されながら館内に入る。館内で東京五美術大学連合卒業修了作品展を

れた。

明治の面影と近代的建築の混在する六本木、麻布の街並、これらは地下鉄の貫通と共に装いを新たにした。東京ミッドタウンで昼食。ここは防衛庁跡地に建てられた巨大な複合ビル、お食事にショッピング、又芸術観賞とリッチな気分を楽しむ事が出来る一つの街である。そこを通り抜けゆつたりとした和風庭園である榎町公園に出る。散策するには風が強く、その上建物に光が遮られゆつくりする事が出来なかつたのは残念。

ヒルズ族で一躍有名になった六本木ヒルズを通り、テレビ朝日の館内で暫しの休憩。善福寺、麻布十番商店街へ。寒く風の強い早春の楽しい一日。予定通り無事終了。地下鉄を乗り継ぎ流れ解散となる。



斬新な円形の屋根と周囲の高層ビルに囲まれた大勢の参加者

一日目 東京・新大阪・明石魚棚・姫路・魚吹八幡（卯之助像と力石）・姫路城・大阪

二日目 大阪天満宮（卯之助力石大盤石）・藤原京跡・山田寺跡・万葉文化館・亀形石・酒船石・飛鳥寺・板葺宮跡・石舞台・橘寺・川原寺跡・亀石・天武・持統合葬陵

第377回 史跡めぐり

三ノ宮卯之助の力石を訪ねる
飛鳥・山の辺の道めぐり

平成20年3月23日～25日

参加者 29名
案内者 宮川 進
記録 宮内 和代

・鬼の俎板・雪隠・欽明天皇陵（猿石）・水落遺跡・石神遺跡・甘樫丘・本薬師寺跡・大阪

三日目 海柘榴市跡・大神神社・箸塚・ホケノ山古墳・纏向古墳群・景行天皇陵・櫛山古墳・崇神天皇陵・天神山古墳・黒塚古墳・西山古墳・塚穴山古墳・石上神宮・大阪・東京

一日目 新幹線ひかり七時三十三分発。新大阪駅にて迎えの小型バスに乗る。運転士の「安全運転で行きます。」に安堵する。高速道はかなり走り、昼食は有名な明石の蛸の定食で、皮を剥いだ蛸が青紫蘇に吸い付いている。

魚吹八幡宮に着いた頃に雨が降り出した。文化財の楼門をくぐる。正面の卯之助の石像は思っていたより大きくて立

派だ。官司さんの説明の後、新築の事務所案内される。見事な神輿や近代的な設備に眼を見張り、熱いお茶を頂いた。

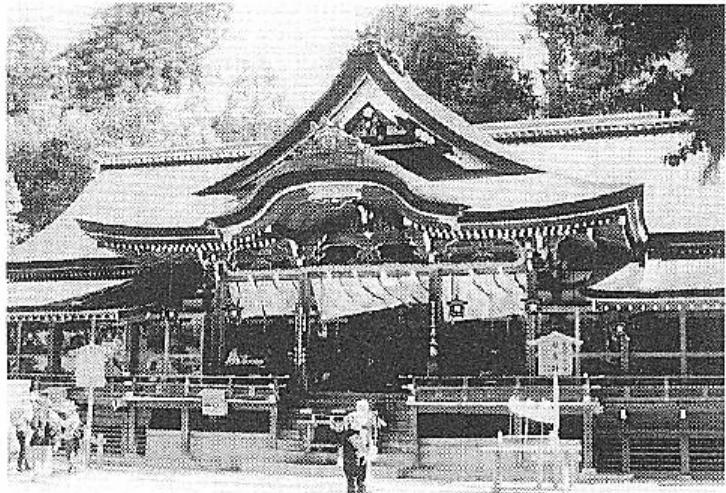
姫路城に着く頃には本降りになった。二班に分れ案内人と城の中に入る。五層六階の城の階段をスリッパを履き、手す

りにつかまりながら昇る。高さよりも使われている石の量や柱等、又、水に対しての備えにも感心する。その後一路大阪を目指す。夕食は道頓堀のかに道楽のかにすきを楽しむ。一番美味かったのは最後の雑炊だった。法善寺横丁の苔むした水掛不動を拝みホテルに入る。

二日目 七時三〇分ロビーに集合し、地下鉄構内で朝食



雨の中、魚吹八幡神社境内の三ノ宮卯之助石像前に立つ参加者



大阪天満宮を主祭神とする菅原道真がある石盤大石力助之卯

でうつすらと水が溜っている。クローバーが足に優しい。万葉文化館に寄るが、ゆっくりする余裕はなく、次の目的地に向かう。

何処も道は整備されているが、工事中の所も見受けられる。昔と違っていたのが、飛鳥寺で大仏様にカメラを向けると良いとのことだった。聖徳太子ゆかりの橘寺、白馬瑠(めのう)の礎石のある川原寺等、又、甘樫丘にも登る。

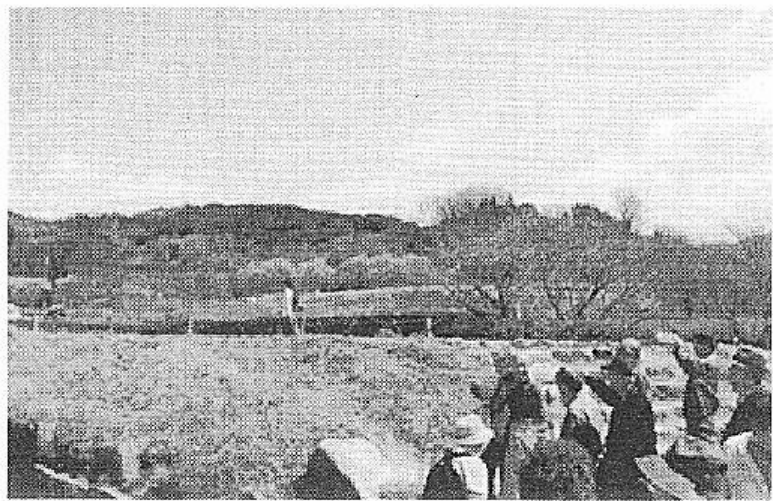
をすまし、船渡御で有名な大阪天満宮へ。大磐石と書かれた卯之助の力石の前で高崎先生の説明を聞き、その石に触れて境内を歩く。「楳(うめ)咲て鳥のよろこぶ気色かな」翁(松尾芭蕉)の句碑がある。好天に恵まれた今日は風が心地良い。藤原京跡は昨日の雨

山は連なり、家々の屋根の瓦が立派で美しい。今日は石に立ち、触り、登り、よく歩いた一日だった。夕食は好み焼きと串かつ。グリコの広告や通天閣のネオンの派手さ等、雑然とした所が大阪での印象だった。

三日目 ホテルを七時三〇分、昨日と同じ朝食を済ます。

山の辺の道を行く。海柘榴市から大神神社へ。大鳥居を出てすぐ脇の土産屋に寄る。昼食には温かい三輪そうめんを頂いて、箸塚古墳に添って纏向古墳群へ。

天皇陵は眺めるだけだが、最後の西山古墳・塚穴山古墳も印象に残った。石上神宮が山の辺の道の終わりだが、最近見かけなくなった鶏が放し飼いされていた。



山の辺の道 邪馬台国畿内説の地で詳しい説明を受ける

江戸時代の力持ち・三ノ宮卯之助

魚吹八幡神社に足跡

姫路

ゆかりの埼玉・越谷市郷土研究会 力石や石像見学



卯之助の像と力石を見学する越谷市郷土研究会のメンバーら＝姫路市網干区宮内、魚吹八幡神社

江戸時代の力持ちで、埼玉・越谷市出身の三ノ宮卯之助の足跡をたどると、同市郷土研究会のメンバー約三十人が二十三日、姫路市網干区宮内の魚吹八幡神社を訪れた。境内にある卯之助の名前を刻んだ力石や石像を見学し、功績に思いを

寄せた。

同会によると、卯之助は全国を興業で巡り、持ち上げた力石が関東のほか、大阪府や長野県などに三十八個残るといふ。このうち二個が魚吹八幡神社にあり、生誕二百年を記念してツアーを企画した。

一行は、社務所前にある二個の石に触れ、刻まれた名前を確認。新社務所の建設に合わせて造られた卯之助の石像を見上げながら、宮司の説明に聞き入った。

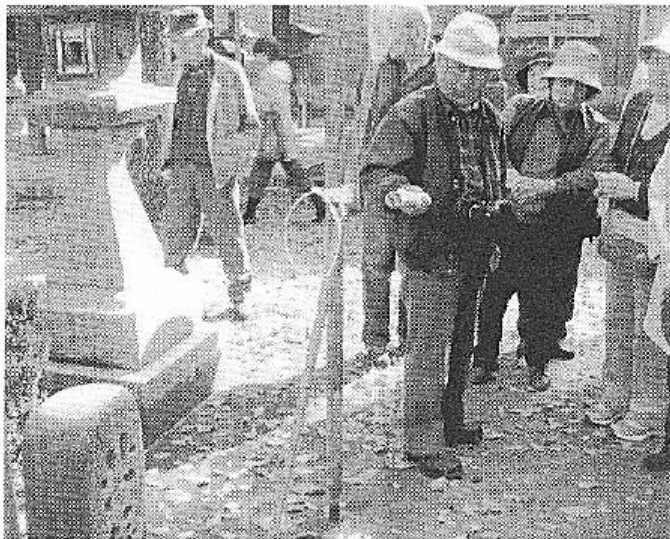
同会の宮川進会長は「姫路は卯之助が持ち上げた石が残る地域の最西端。以前から来たかったが、念願がかなった。今後も交流がきたら」と話していた。(井関 徹)

地元の神戸新聞に今回の史跡めぐりが紹介された

順調にバスは走り、新幹線には余裕があった。今回の第一の目的は、三ノ宮卯之助の力石と石像を訪ねる旅だったが、奈良は何処をどう回ったか忘れる程よく歩いた。行く機会のない大阪と、春の奈良の穏やかな風、清々しい空気と景色は、他では味わえないものだった。

万葉の風を現に春惜しむ

和代



今回の史跡めぐりを提起し終始アドバイスされた高崎常任顧問

昨日の雨は上がったが、曇り空で肌寒い。

今回の越谷鴨場見学は二〇名。みなさん予定時間より少し早めに到着。市の職員二名の方が待っている。竹林に囲まれた鴨場は別世界だ。門から少し入った所の藪椿は咲き

終わっている。「鴨場

のしおり」を頂き、竹製の椅子でビデオを見る。鴨を捕獲する話の中で、午前中に捕まり標識を付けられた鴨が、午後も捕われたという話は興味深かった。

は鹿の角がぐるりと掛けられ、ヘラ鹿の片方だけの角もある。皆さんは説明して下さる方に次々と質問している。薄暗い中で見る角は物悲しい。

午後「ほっと越谷」で郷土研究会顧問の増岡武司氏より、越谷鷹狩りの変遷のお話を聞く。その後、越谷市のビデオ「ほっと越谷」の説明を聞き日程を終わる。

第378回 史跡めぐり 宮内庁埼玉鴨場見学

平成20年4月9日(水)

天気 くもり

参加者 20人

案内者 藤川 吉洋

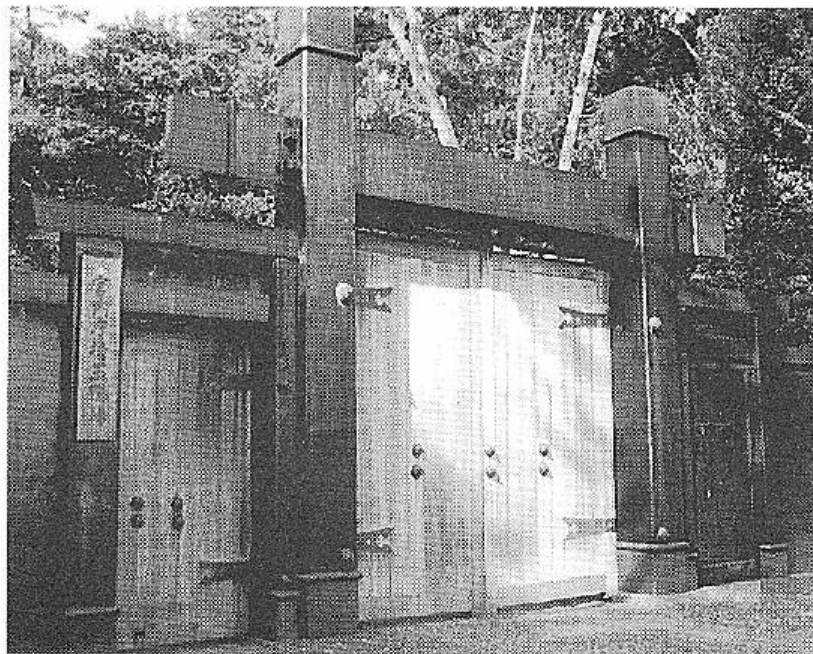
記録 宮内 和代

うだ。

毎年秋に一万羽余りが来るといふ池を「小覗」「大覗」といふ穴から見る。今は鴨は不在だ。

食堂として使われる建物には、暖炉が三つあり、長押し

越谷から飛び立った鴨が、シベリア、アメリカ、アラスカ、メキシコ、フィリピンまでも渡り、十年から十五年経て再捕獲されるのも少なくない。



元荒川左岸の河道を利用して明治41年(1908)に設けられた埼玉鴨場

朝からお天気に恵まれ参加者が多くバス二台に分乗し南越谷を出発。車内で本日の案内者である宮川会長によりコースについて説明がありました。会員の皆様は真剣に聞いており、目的地に着くのがとても楽しみの方でした。最初に訪れたのは県内最古の鷲山古墳です。

第379回 史跡めぐり 県北は埼玉の歴史のふるさと

平成 20 年 4 月 22 日 (火)

天気 晴れ
参加者 56人
案内者 宮川 進
記録 古谷 京子

小高い丘の様などころを登ってみると長閑な田園風景が眼下に広がり、すーっと気持ちがよくなりました。ここにはどのような人が眠っていて、この周辺でどのような生活をしていたのか想像しただけでも楽しくなります。

次の金鍬神社は、本殿が無く背後の山を拝む古い形式を残しています。また、木造の多宝塔はめずらしく貴重

なもののお話でした。鶯の声がよく響き、著我の花が美しく咲いて私達を迎えてくれました。盲日の大学者塙保己一の生家は、九代日のご子孫が住んでいるので気を配りながら見学しました。競進社模範蚕室では、二班に分れ説明を受け、工夫を盛り込んだ建物の特徴などを熱心に聞き入っていました。



宮川会長の説明のあとに境内を散策する参加者

昼食の「つみっこ汁」は、地の粉のダンゴと地野菜を使い醤油味で「すいとん」に似た懐かしい味でした。秋山古墳群、広木大町古墳群などを回り、庚申塚古墳では中に入りました。大きな天井石や隙間の棒石など上手に構築されており、おどろかされました。美里町郷

土資料室には、貴重な土器・埴輪などの展示品がありました。古代人はどんな気持でこれらを現代に残そうとしたのでしょうか。農具の前では昔使ったとか見たことがあるとか楽しそうに話してありました。万葉遺跡、長坂聖天塚古墳を見て回り、最後の酒造店では、お酒や奈良漬などの買物ができ良いお土産ができました。帰宅途中、事故に巻き込まれ一時渋滞しましたが、予定時間には南越谷へ無事着きました。個人ではなかなか行けないコースを、解説付きで会員の皆様と一緒に回る事ができ、いにしえのロマンに浸る一日でした。

総勢八十五名、越谷西口に元気に集合。人数の関係で第一陣・第二陣と路線の異なるバス二台に分乗、目的地鉤上に向かう。

五才堀跡地で全員が合流し、岩槻道に至る古道について説明を受け、岩槻道がその昔往還といわれていた当時、人さらいが出るこわい道であったことなど往時を偲び、ついで長嶋地区へ

歩く。

長嶋地区は田畑の広がる地域で、そのなかにあってひと際見事な屋敷林に囲まれた旧家のたたずまいの内山家に到着。

入口長屋門は堂々としていて目を見張るものがあり、その門前でご当主の内山金次氏の出迎えを受け、屋敷内で江戸時代の膨大な古文書を拝見し、その由緒ある名家

第380回 史跡めぐり

陽春の岩槻道と旧長島村

平成20年5月24日(土)

天気 快晴

参加者 85人

案内者 加藤 幸一

記録 増岡 武司

ぶりに感服した次第。

ちなみに現当主内山氏は二十三代目当主で現在保護司の外、埼玉県警の少年非行防止及び青少年育成のための組織の会長等を務めておられ、又平成十年に藍綬褒章を授賞された名士です。

内山家の広い敷地(二八〇〇坪)には、かつてその昔万歳寺

というお寺と稲荷社があったそうで、その広さは周囲をめぐらす囲い堀跡を見るにつけ驚くべき広さであり、その敷地内にかつて江戸時代には高札場があった由。内山家を辞したあと旧長島村の鎮守・稲荷社の石仏・石塔を拝見し、加藤先生の説明で当時の村人たちの生活ぶりをかいまみることが出来ました。そのあと長嶋地区をあとにして、三ツ又堰まで歩き、ここで水量の多さと水の分かれるさまを見て三ツ又の名前の由来を実感しました。

次いで健康福祉村内の旧越巻村鎮守中新田の稲荷社へ。この稲荷社は先年の火事で焼失、現在は新しい社殿となっており、産土社として信仰を集めているとか。

ここで本日最高気温二十七度と、夏日のなか熱心に種々ご説明下さった加藤先生に参加者一同、二度にわたる拍手で感謝し現地解散となった。楽しい半日でした。



大勢の参加者に長嶋地区について説明する加藤副会長

前日は雨風が結構強かったが、当日の朝はすっかり止んで越谷駅に集合した時は、ワクワクして嬉しかった。お集まりの皆さんもよく雨が上がったと言いついてニコニコしていた。でもあの雨で入館できるかどうかと渡辺幹事さんが短い時間の中で、あっちこっち交渉したりして、龍Q館

第381回 史跡めぐり

地下神殿と江戸川散策

平成20年6月4日(木)

天気 薄くもり時々晴れ

参加者 49人

案内者 渡辺 和照

記録 有元 淳子

がOKとなったときは、みんなホツとした。いよいよ全員四十九人、越谷から春日部に着いて貸切の朝日バスに乗換えて龍Q館へ。

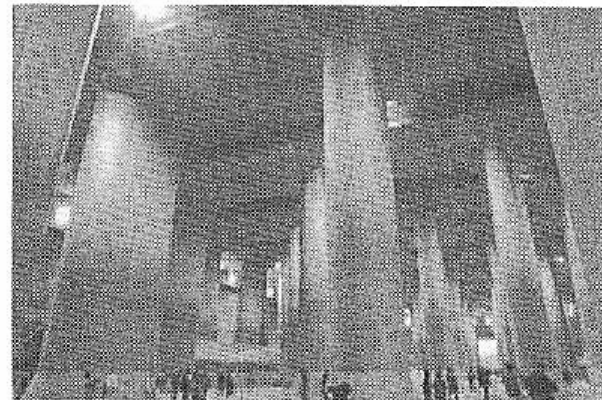
建物の中に入つて、中を見まわすと近辺の子供達で作ったかわい額が並べられたりして、親しみやすい

雰囲気です。二階へ行くと、龍Q館の設備等に関する説明があり、そのあと今日の最大の目的の地下パルテノン神殿(首都圏外郭放水路)を見学する為に、約ビル七階分の階段を徒歩で降りるのです。やっと降りてあまりの広さと立派な円柱がドーンドーンに感心。十六号線の地下を通って



首都圏外郭放水路 地底探検ミュージアム 龍Q館

ギリシャパルテノン神殿を彷彿とする巨大建造物



るようで、日本の技術ってこんなに凄いのだなと心から感動してしまいました。皆さんも声もなくあたりの威容にみとれていました。税金はやっぱりに役に立っているんだと嬉しく思いました。

お昼は庭先の建物で済ませました。龍Q館をあとにして、歩いて香取神社、富士信仰の岩を積み上げたミニ富士山を拝んで、庄和総合公園へ。蓮花院では大棟にため息をつきました。ご住職さんの分かりやすい御説法をうかがってから、南桜井駅から帰路につきました。

思ったほど疲れなくて、とても楽しい史跡めぐりでした。

朝から暑い中八十一名が集合、中村幹事のコース説明を受けて出発。涼しい車内で資料を読み話はずむうち、川越駅に着く。駅とビルが陸橋で繋がり、バスに連絡していて便利である。バスに分乗し、蔵造りの街並みを通り、川越氷川神社に向かう。



第382回 史跡めぐり

小江戸川越の歴史を歩く

平成20年7月23日(水)

天気 晴れ

参加者 81人

案内者 中村 幸夫

記録 小泉 平八郎



た。

三芳神社の木陰で水分を補給。この神社は天神様と呼ばれ、童謡「とうりゃんせ」の発祥地とか。川越城内の七不思議の話聞いて、本丸御殿を拝観する。通りに山吹の花が見られ、太田道灌が偲ばれた。

神社の社は、老樹に囲まれ、湧き水の流れる緑陰で、川越の歴史、神社の由来を聞く。社殿の彫刻、八坂社など重要文化財は、見ごたえがあった。川越城二の丸跡にある、市立博物館に移動。瓦屋根に白壁のスッキリした建物である。城下町の模範で、藩の変遷や組織、体制、運搬による繁栄、蔵造り、川越祭等丁寧な解説で理解が深まった。



蔵造りの家屋が軒を連ねる川越市内

名所「時の鐘」に着いた時、鐘が鳴り一同大喜び、正午であった。鳥清の炊きたて釜飯で元気をいただく。午後は、昔なつかしい菓子屋横丁、芋飴、ニツギ、羊かん、せんべい、アイス等郷愁が買物をそそる。

石畳の横町を通り抜けると、黒壁土蔵造りの商家が連なる一番街。洋風建築の旧八十五銀行、旧武州銀行と、大正浪漫通りが続き、成田山別院を経て、喜多院に至る。桜の木陰で創建と変遷を聞く。国重文等が数多く現存し、五百羅漢も拝観する。由緒と歴史が刻みこまれていた。仙波東照宮の前を通り、中院に着く。威厳のある山門と、手入れされた庭園は「天台宗別格本山特別寺」の風格を感じさせる。

予定通り四時に川越駅コンコースにて解散。今日は三十五度を越す猛暑にかかわらず、全員事故なく終了。案内者、関係の皆さんに感謝の拍手をささげる。

第383回 史跡めぐり

織部 桐生をたずねる

平成20年9月27日(土)

天気 晴れ

参加者 77人

案内者 菅波 昌夫

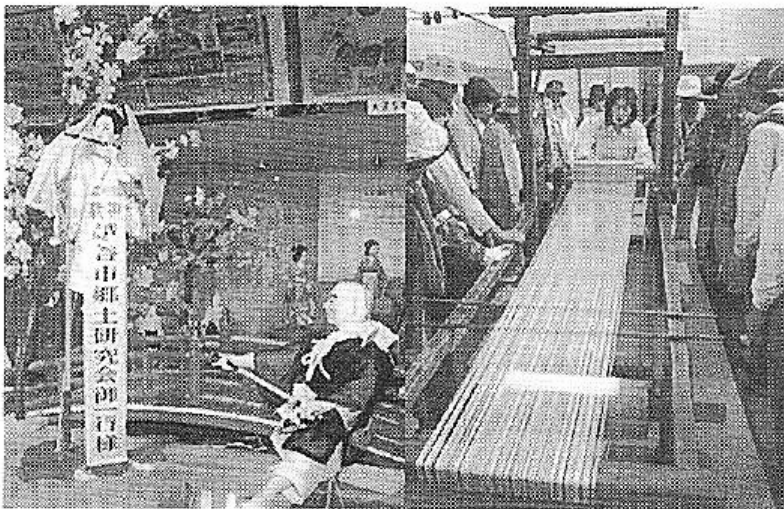
記録 原田 民目

再開発のつち音も響こうかという越谷駅前。見慣れた風景も近日中に一変することになるだろう、と思いつつ駅前の噴水周辺には大勢の方が集合していた。案内の菅波さんから今日の行程と注意事項を聞き、いよいよ越谷駅下りホームへと向かい太田行きに乗車。しばらく走ってからの車

いる旧桐生高等染色学校の内部を見学。敷地内にある青春という石碑に目が留った。『人は信念と共に若く 疑惑と共に老ける 人は自信と共に若く 恐怖と共に老ける 希望ある限り若く 失望と共に老い朽ちる』、思わずペンを走ら

窓風景は稲穂もたわわに実り、畑も葉物がぎっしり並んで秋真つただ中の気持ちのいい景色。電車の中は右を見ても左を見ても郷土研の仲間でもまさに貸切り状態で新桐生駅のしやれた駅舎から群馬大学構内へと向かう。大正四年に建てられ国有形文化財となつて

せた。続いて昇運の神様という天満宮へと向かう。天満宮末社春日社の見事な彫刻の装飾は彩色が大分はがれてはいるが、いつまで見ても飽きない程すばらしかった。次に向かったのが「桐生からくり人形芝居館」。江戸初期から伝承されている歴史のある人形芝居で、保存会の方々が汗だくになりながら「巖流島」「曾我兄弟夜討」「忠臣蔵」を披露してくれた。保存会の方々の地道な活動が後世に伝承されて行く姿を見て感銘を受けた。「織物参考館」では、貴重な文化財や資料を見て回り、桐生の織物の歴史に触れて十分理解することができた。



参加者を見る貴重な織機の実演 歓迎のたれ幕がうれしかった

八時四十分の手頃な時間、翌日から雨という秋晴れの南越谷に、弁当をリュックにふくらませた八十人が、全員予定通り集合、一路電車を乗り継ぎ最初の目的地、鉄道博物館へ向う。

子供の頃、よく父親に連れていってもらった神田の交通



第384回 史跡めぐり 鉄道博物館と民俗博物館 秋たけなわの大宮公園散策

平成20年10月22日(水)

天気 晴れ

参加者 80人

案内者 藤川 吉洋

記録 篠原 陸郎



俗の博物館へと向った。そこで全員昼食をとったあとは、館内見学と藍染体験の二班に分れる。

一度体験したいと思っていた藍染は、思いの外スムーズに染め上がり、白抜きの図柄を見て何となく様になっているのに驚き感心。と、同時に計算された幾何学的な紋様、

博物館は、昨年近代的な建物へと様変わりしていた。昔日の超特急「つばめ」を目の前にした時は、懐かしさの余りしばし見とれ、時代の流れをつくづくと感じた。

当館の目玉「汽車弁」には、買い求める人で列をなし、買いそびれた人は後ろ髪を引かれる思いで次の目的地県立歴史と民

藍の濃淡など職人の深い技を考えると、日本の伝統の心髓を垣間見た思いだ。

館内展示見学では、忘れ去られつつある昔の生活・習慣・調度など、素通りしてしまいそうなコーナーは、学芸員の説明によって全く違ったコーナーになってしまおう。

「説明・案内」は見る者を何倍にも満足させるものだと改めて感じた。

博物館を出て、未だ初秋の緑の森、大宮公園を散策して行くと、意外なスポットを目にする。公園内の競技場が戦前オリンピック会場であったという「幻のオリンピック会場」の説明碑、甘藷の先生「青木昆陽の碑」、「二等水準点」など「へえ」と、しばし案内者の説明に耳を傾ける。

本日最後の見学は、公園内にある武蔵国一宮「氷川神社」。皆十円玉を投げ入れ、何を願ったか満足な顔をし、全員無事北大宮にて解散。大変有意義な一日であった。



館内2階からの眺め

国鉄時代に活躍した車両が一望できる

座席に余裕のあるバス二台は南越谷をあとに入谷で首都高速に入り、一路鶴見に向った。

最初の目的地「生麦事件参考館」に到着。こじんまりとした館は生麦事件のあったすぐ近く。一行は二班に分れビデオ鑑賞と、この事件の研究で文部大臣賞を授賞したという浅見武夫氏



第385回 史跡めぐり 横浜総持寺と 横浜中華街を訪ねて

平成20年11月18日(火)

天気 晴れ

参加者 63人

案内者 渡辺 和昭

記録 篠原 隆郎



を得て、延焼を防ぐ為に作られたという百間廊下を渡る。修行の基礎という毎日の床掃除に、百間の床板は光沢をなし、靈験さを漂わす。と同時にしばらく行くと近代的なコンクリートの建物に入る。どっかのホテルのロビーのようだ。どことなく空しさを感ずる。

の四方山話に目と耳を凝らす。自分はこの事件に興味があつたことから、

ここで事件の全容を掴むことが出来、大変納得。

次の目的地、本日のメインの一つ「曹洞宗大木山総持寺」に入山。かつて多数のお寺をめぐってきたが、他に例のないほどの山内の広さに圧倒。

早速教学僧が寺内を案内。まずは能登の大火の教訓

くぐる。

だんだん日が落ち始め、皆それぞれの思いで帰りのバスに集合。一様に中華マンらしきおみやげを手にしている。幸い往路、帰路ともラッシュに遭わず予定より三十分早めに無事帰還した。楽しい一日であつた。



石原裕次郎のお墓があるので有名な総持寺

合掌し寺を後にする。

最後の目的地、横浜中華街に到着。二、三度来た所だが案内人の説明を受ける。と新たな発見があつた。二つの廟は日本の神社を連想する。参加者は約一時間半の散策にそれぞれ分かれる。自分は仲間四人と腹がせかしてラーメン・ギョウザ飯店をあれこれ探し一軒の美味そうな、安そうな暖簾を

暖かくなるという予報の中、バス二台に分乗し、五霞の道の駅を経て結城に向かう。市内に入り道幅の狭い中をつむぎの館に着き、三つのグループに分かれる。案内は若い女性達で、終始にこやかで丁寧な説明だった。

資料館では昔栄えた頃の書類や繭から糸になるまでを人形を使い表現している。

展示館では一千万円の反物と五十万円という反物を指先の感触で確かめ、皆さん納得していた。

第386回 史跡めぐり

結城 つむぎと蔵と歴史のまち

平成20年12月12日(金)

天気 晴れ

参加者 62人

案内者 水上 清・篠原 陸郎

記録 宮内 和代

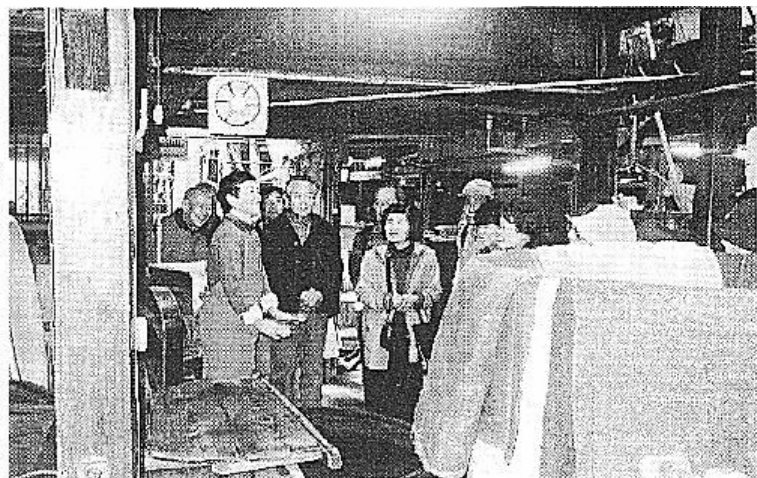


結城の町は築地塀や立派な見世蔵に昔の繁栄が偲ばれ、こぢんまりとした静かな町で何回も同じ道を通っていたような気がする。

弘教寺では、与謝蕪村の句碑の他にも新しい立派な句碑があり、墓石も昔を偲ばせる。孝顕寺では御朱印堀を覗く。結

織機の並ぶ真新しい実演館では、糸を触ったり、織りの説明を聞いた。先に申し込みをしていた二十五名が織りの体験をする。両手と両足を使い3cm程織って乗になった。

昼食は披露宴に使うような広い会場で頂く。



実演館ではつむぎに携っている人からくわしい説明を受ける

城は親鸞ゆかりの寺で、称名寺は結城家の繁栄を支えた寺という。本堂の外に掲げてある「天下無二」の文字がそれを物語っている。コートを着ていると少し汗ばむような暖かい中を歩いて結城酒造に着く。古い酒蔵の天井を見上げながらご主人の説明を聞き、試飲もそこそこに秋葉麹みそ醸造所と物産所の二つに分かれ

る。秋葉麹みそ醸造も見世蔵で、奥に入り用意してある熱々の味噌汁と甘酒を頂く。

物産所を経て、バスで城跡公園に着く。埋蔵金を見つける為に掘ったという堀を覗き、その副産物なる石橋を踏み、バスに戻る。

最後に親鸞の妻であった玉日姫の墓に詣でる。この土地は「玉日」という地名だそうだ。その玉日のような夕日を見ながら帰路に着いた。

八時三〇分越谷駅集合。新年を迎え皆さん笑顔がほころぶ。早速急行へ乗り込み北千住へ。

北千住で新年早々のトラブルに遭遇、常磐線が信号機故障でストップ。急遽千代田線への振替輸送で西日暮里經由で田端駅へついた。予定より十分程度の遅れにほっとした。

田端は芥川龍之介ほか文士の居住の多かったところで、駅のすぐそばには「田端文士村記念館」があったが、本日は休館。後日出かけてみたいところだ。

記念館を右手に七福神めぐりに出発。5分ほどで「田端八幡神社」へ。そのすぐ隣が「福祿寿・東覚寺」。赤紙仁王尊のいわれなど説明をうけて、本日1番目の七福神にお参り。今年の無事息災を祈る。

東覚寺を後に、谷田川跡の道を歩いて緩やかな坂道を登って「道灌山」に到着。江戸時代には、粟草などの草摘み・虫聴き・花見・月見などで賑わった景勝地だったが、いまもすぐ下の線路を挟んで眺めはなかなかのものだ。

西日暮里駅前をとおり、「ひぐらしの里」に入る。「恵比寿・

青雲寺」「布袋尊・修性院」と七福神が続く。さすが、江戸でもっとも古い七福神だけにどこへ行っても大賑わいだ。

さらに歩をすすめ、谷中銀座そばの「夕焼けだんだん」へ。この付近なんとなく古き良き昭和の雰囲気漂う。

谷中墓地に入り、「毘沙門天・天王寺」へ。谷中墓地は有名な人のお墓のオンパレード、別の機会にゆっくりまわってみよう。

意外に小さな昇り降りが多く疲れもみえてきたのを頑張つて、「大黒天・護国院」へ、さらに上野動物園横をとおり、最終「弁財天・不忍池弁財天」前に到着。ここで、最後の説明を受け解散となった。お疲れさまでした。

第387回 史跡めぐり 谷中七福神めぐり

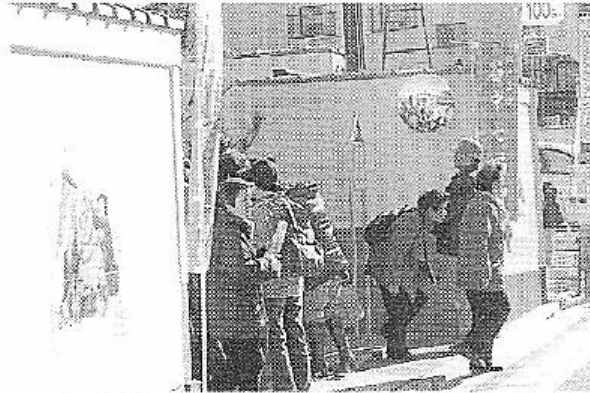
平成21年1月3日(土)

天気 晴れ

参加者 79人

案内者 加藤 幸一

記録 中村 幸夫



谷中七福神ののぼりが取付けられた護国寺・大黒天



途中、谷中天王寺五重塔跡にも立寄った

冬の寒さとはまさに今日のことをいうのだろう。手がかじかみ体が震える中、集まった人数はなんと史跡めぐり新記録の一三四人。円空仏のご利益であろうか。みなワクワクした表情。楽しい旅になりそうだ。



第388回 史跡めぐり 案外知らなかった越谷を歩く

平成21年3月1日(日)

天気 くもり

参加者 134人

案内者 宮川進・加藤幸

記録 田中利昌



空仏の平穏で柔和な表情に、一同安らぎと感動を覚える。じかに拝観させていただいたお寺様にあらためて御礼申し上げたい。

照光院では本陣の家柄である福井猷貞の墓を弔う。江戸時代に「大澤猫の爪」「越ヶ谷瓜の蔓」を

「さし」の前を通る。たくさんの思い出に感謝である。

迎攝院では、原田理事のご縁でお借りした貴重な昔の写真を見る。

また、本堂前の「台徳院殿(徳川秀忠)と刻まれた石灯籠は芝増上寺から譲られたそうである。弘福院では、円

執筆した郷土史家の先駆であり、同じく郷土を研究、愛する当会の大先輩とも言え、なお感慨深いものがあった。光明院では塩かけ地蔵を見る。盃験あらたかとして広く信仰を集め、多くの信者から満願のつど塩を供えられたので、塩によって石が溶け今のような形になったという。ただ珍しさに感動するだけでなく、当時の方々の思いに深々と感じ入る。最後は香取神社。奥殿には紺屋や七福神の立派な彫刻が彫られている。その迫力にみな見入っている様であった。

若干予定時間をオーバーしたものの、あつという間の充実した小旅行であった。大満足の今回、案外知らなかった次の越谷も楽しみである。



迎攝院山門前で参加者に説明する宮川会長



「ここから先は四丁野道に入ります」と加藤副会長

第389回 史跡めぐり

南総里見八犬伝のふるさと 内房を訪ねて

平成21年3月25日 (水)

天気 くもり

参加者 71人

案内者 水上 清

記録 木村 恵仲

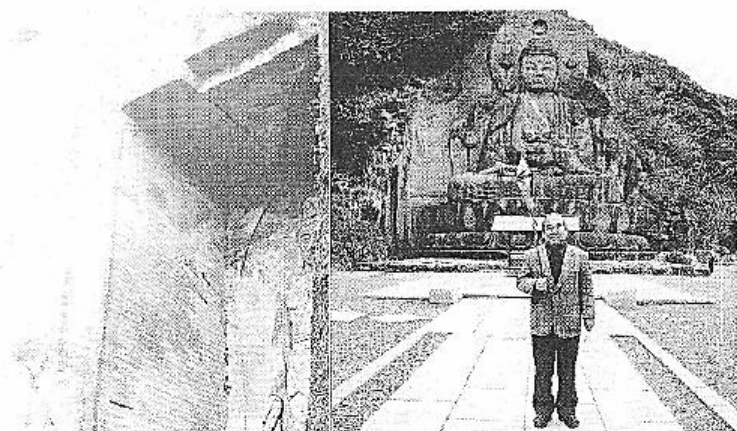


曇天の中、南越谷を早朝七時二十分に一路、千葉は内房方面に向かい出発しました。最初の訪問先は鋸山であり、高齢者に配慮して、登り方に色々あり、健脚・普通・弱者コースに分かれております。鋸山は切り立った断崖絶壁になっており、それらにさまざまな仏像が彫られたり、洞穴に仏像が安置されてお見学する分には飽きに来ず楽しめました。

大仏は寺の本尊で、総高三十一・〇五メートルの坐像としてはわが国最大のものです。原型は天明三年（一七八三）に完成しましたが、いつも感心するのが二百年以上前にあのような大仏を我々の眼から見れば左右相称に作り上げたのには驚嘆させられました。

その後、金谷ザ・フィッシュにて昼食をとりましたが、今までの史跡めぐりでは最もうまい食事でした。参加の人たちも食が進んでおり、喜んでおりました。今後、史跡めぐりでも少々割高でもおいしい食事がいいと思います。

その後、館山城（館山市立博物館分館）、この建物は中世の



鋸山日本寺の大仏(31 俵)の前で



石切場跡の岩肌に刻まれた百尺観音像に行く

館山城天守閣を復元したものであり、曲亭馬琴著作の南総里見八犬伝に関する各種の資料が展示してあります。この物語の完成には二十八年間費やしており、作者は晩年には失明しながら、息子の嫁さんに口述筆記をさせて完成させたの事、その女性の姿の美しさと筆字の見事さにはただただ驚かされました。最後に、崖の観音に行きましたが、行基がその崖面に十一面観音を彫刻安置したのが始まりとされる。但し、現実には崖面の観音は風化と暗さでよく見えませんでした。

この日は天候不順と渋滞等により時間がかなり一部の場所は見学中止となりました。総括しますと、大変気楽で楽しい史跡巡りでありました。

朝の予報だと、午前の降水確率八〇%、午後は一〇〇%というあいにくの天気。南越谷駅東口に隣接の新装なったバリエ前に集合。案内の篠原さんから今日のスケジュールを聞く間もなく雨が降り出した。武蔵野線の戸塚安行駅で降り、用意してあった傘を

第390回 史跡めぐり

植木の里・安行と 伊奈家の足跡を訪ねる

平成21年4月25日(土)

天気 雨

参加者 73人

案内者 篠原 陸郎

記録 原田 民自



両は通り抜けできない遊歩道。延々と続く竹藪や木立の中を森林浴を楽しみながら雨でぬれる足元を気にして傘をさして一列に進む。コンクリートのトンネル内で雨宿りがたら篠原さんから赤山陣屋と伊奈家についての説明がレジュメとともにくわしく聞く。それによると赤山陣屋を築いた伊奈氏はそ

の木造建築で一番高い建造物で三代將軍家光の長女千代姫が元禄六年(一六九三)に奉建したと案内板に表示されていた。雨降りのなか参加者は歴史ある重厚な三重塔を何度も見上げていた。

続いて向かうのは赤山陣屋。途中の道は車



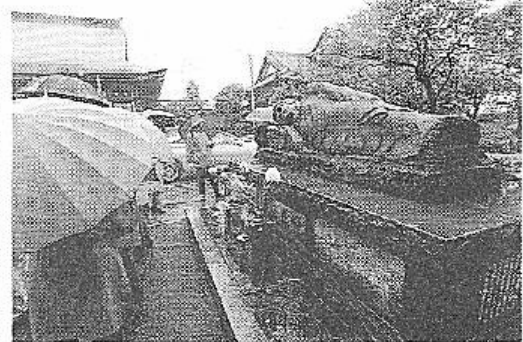
雨に打たれながら西福寺三重塔を見上げる

のすぐれた土木技術によって

江戸時代の治水・新田開発に大きく貢献したとのこと。続いて本丸跡や二の丸、堀などの遺構が残る赤山陣屋の広大な敷地を見学してまわる。先人の知恵の結晶を目の当たりにしつつ、つつじや草花が雨にぬれて緑も鮮やかに、足の運びも軽やかに思われた。

「埼玉県花と緑の振興センター」の普段は講演会などが行われる広い場所で昼食をとった。食事中に「午後から雨と風がさらにも強まる」との情報で昼食後の見学をどうするかを選択に迫られた。挙手の結果、途中で切り上げる人たちもいたが、残った人たち(二十三人)で見学を続行することになる。

赤いのはりのはためく弁才天のアップダウンの道を進み、方生池の霊水にふれ、路傍の左右にある多くの菩薩のお顔を拝見しながら周光山源長寺に到着。お釈迦様の横になったお姿に多くの人が見とれていた。雨でずぶぬれになったけれど、案内者の解説も明快で、楽しい史跡めぐりの一日だった。



源長寺の釈尊涅槃像 頭北面西の床につかれたお姿

晴天に恵まれ、新越谷駅前に集合した全六十一名は二台のバスに分乗し一路新緑の榛名山麓へと向かった。今回のコースは、小栗上野介の墓「東善寺」、榛名神社、榛名湖畔で昼食、伊香保温泉街、水沢観音の盛りだくさん。東善寺は烏(からす)川に沿った権田(こんだ)地区の小高い山腹にあり、小栗上野介親子や同士の墓がある。上野介は一八二七年江戸駿河台に

第39回 史跡めぐり

新緑の榛名山の麓

榛名神社・小栗上野介・伊香保・水沢

平成21年5月20日(水)

天気 晴れ

参加者 61人

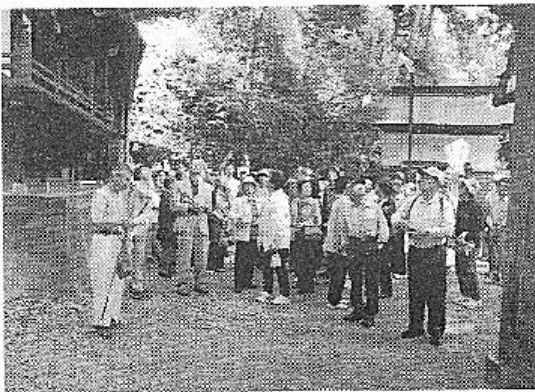
案内者 渡辺 和昭

記録 浜 富雄

され、往時の様子が鮮やかに映し出されている。展示されていたレボルバー拳銃は、米国の開拓時代を彷彿とさせる逸品である。火縄銃しか知らなかったであろう彼らは新鮮な驚きをもって見つめ、手にしたに違いない。榛名神社では木々の緑とつつじの山道を登り、八重の山桜も残っており、新緑の候を満喫することができた。山頂の社殿で宮司の説明を聞き、

旗本の子として生まれる。日本近代化に大きな足跡を残す。一八六八年一月、鳥羽伏見の戦いのあと失脚し隠退するが、官軍に捕えられ同年四月六日、烏川のほとりで悲憤のうちに斬首刑となった。志半ばで激動の時代の流れに翻弄され、その魂は今も新緑の木漏れ日のなか、ひっそりと眠っている。境内や本堂脇の資料館はよく整備

国重要文化財の「額殿」「国祖殿」「双竜門」「神楽殿」「随神門」等々を見学。山腹の奇岩と巨木に溶け込む荘厳な霊場であった。このあと榛名湖周辺の竹久夢二の歌碑、アトリエ、「湖畔の宿」記念公園などを車窓から眺め、昼食場所「ゆうすげ」に到着。山海の珍珠に舌鼓を打つ。午後から伊香保温泉街に向い、長峰公園のつつじ、ハワイ公使別邸、伊香保閑所跡、石段商店街を経て、伊香保神社に参拝。石段商店街では、下界に広がる渋川の街並みと、吹き抜ける涼風に疲れを癒した。最後に水沢観世音に詣で、新築の資料館、釈迦堂を参拝。帰路、関越道で事故故に巻き込まれそうになりましたが、運転手さんの沉着冷静な判断で事なきを得た。新緑と歴史を訪ねての榛名山麓巡りは、その目的を十二分に達した、快適な一日であった。



榛名神社宮司の説明を聞く



与謝野晶子の詩が刻まれた伊香保温泉石段



市制施行50周年記念 アンケート



平成 20 年（2008）は、越谷市制施行 50 周年です。

今回のアンケートは 50 年前のあなたについてお尋ねしました。

- 問1 50 年前はどちらにお住まいでしたか。
 問2 当時の越谷の印象をお書きください。
 問3 問2に回答できない方は越谷（現住地）に移住された当時の越谷の印象をお書きください。
 問4 当時は何に熱中していましたか。
 問5 当時の社会情勢についての印象は？

アンケート集計結果

あなたの名前を教えてください。	あなたの出身地はどこですか？	① 50 年前にお住まいはどこでしたか？	② 50 年前の越谷の印象をお書きください。	現住地は移住した何年前か？	③ 質問に回答できない方は、現在の住地に移住した当時の印象をお書きください。	④ 当時、何に熱中していましたか？	⑤ 当時の社会情勢についての印象は？
松本瑠美	横浜市	鎌倉市	日光に行く時、通っただけで名前も知りませんでした。	38年前	田舎とは思ったが、親切な人が多く、話になりやすい。郵便局、銀行、市役所があるので驚きました。	子育て、自治会設立、園芸、読書、卓球、自転車（傘をさして乗ること）、料理	当時、松戸市長・松本清氏が「すぐやる課」という課を設け、道路などを直してまわすなど、山荘事件、三島由紀夫自刃。
永作公道	茨城県鹿嶋市	茨城県鹿嶋市		34年前	カエル、バッタ、おたまじゃくし、ザリガニ、メダカがいた。商店街が元気だった。	野球（子供の）	村に一、二の家がテレビがあった。
符金俊治	東京都北区中十条	東京都江東区深川		42年前	愛宕町→平成17年に寿町へ。新田駅から朝まで夜に帰るだけでした。よくわかりません。	住込みで働いていて、朝から夜まで仕事でした。	党に関係なく大物政治家がいまど16歳で投票できませんでした。給料は給料の小使程度でした。
守屋不二夫	静岡県浜松市天童区	当時山香村		28年前	弥栄町 駅まで遠く（徒歩30分）バスの便も少なく、商店も少なく不便な所。移住2年目で台風による水害があり、一生懸命ではなかった。	仕事	大平首相急逝、落得殿大内閣、大寺大蔵大臣、大東大蔵大臣、大島監事、大島選手、大暴走、大暴力多発、大竹子族。

渡辺久剛	新潟県 三条市	すみません、生まれていませんでした！					
和田尚之	東京都	東京都		20年前	バブル期、土地価格上昇。土地を見上げてきた。坪ノ60→100万円。道路がなかった。ラナーなしの東武線、古い駅舎。	困窮に夢中で流れていた。卓球が行っていた。	三白景気。原糖を輸入しただけで、10円代。利益が出た時代。
岡野助夫	横浜市	横浜市	私の父の草加市北部にあり、幼い頃からしばしば訪れた。そこも越谷も水路に恵まれた豊かな所だと思っていた。			スポーツ：パドミントン 味：映画鑑賞	当時の神武景気などで、家計が厳しかったので、アルバイトなどの時間を割かなかった。
浜 富雄	三重県 伊勢市	三重県 伊勢市	当時、小学校3年生であり、知る由もない、遠い存在でした。	35年前	東京の本社への通勤に伴い、居を構え、転入が害に見舞われ、良い印象は残っていません。	山奥の土地で育ち、毎日山の中を走り回っていました。記憶があります。	山間の地情を離れてしまった。
杉浦健之		東京都内		36年前	近辺に田園などがあり、夜になると蛙の鳴き声、ホテルなど飛んで田園豊かな所であった。	魚釣り（へら鮎）、旅行、自然観察。	越谷に移住した翌年、石油ショックの年で大変だった。
古屋賢一	東京都 葛飾区	東京都 葛飾区		40年前	家の周りは農家ばかり。砂利道と越物くろへ…と	軒ぼはな、夏の合奏、古いトイレは汚い。軒ぼはな、夏の合奏、古いトイレは汚い。軒ぼはな、夏の合奏、古いトイレは汚い。	山一な運水。日比谷線が開通して楽になった。一番印象に残っている。
関 幸保	栃木県 佐野市	江戸川区 小松川	田舎。言葉が悪い。			建築資金作りで夢中。	現在よりは、天国であったと思う。
伊藤キク	幸手市	東京都 江東区		18年前	田んぼがちらほら有って、蛙の声でにぎやかだった。	旅行	もう少し発展性があるとみた。
西川信徹	福井県 大野市			15年前		水泳	

藤井佐登子	越谷市	東京都葛飾区	大袋村が父の実家だったので、年に1~2回は来ていました。電車は東武のみ。多くて4両、30分に1本。駅には西口がなく東口のみに。市役所は木造でした。	42年前	地下鉄日比谷線は乗り入れたが大雨が降ると床が水たまり。マンションビルも少なくなかった。花火がよく見えた。	大演劇部でアルバイトの家庭教師	新幹線などなく夜行列車、学割での旅行をした。全学連にも参加した。東京タワーはこの頃だったかな？
中尾浩久	東京都町田市		まだ生まれていない	15年前	田舎っぽくてよかったです	散歩や里山歩き	
村上瀏治	熊本県	東京都		33年前	北越谷駅~自宅(大沢)までの間は田圃が飛び交っていた。夏の保健センターの横の辺りである。	仕事、仕事、仕事。	大沢北小はあったが、道は未舗装であった。どろんどろん家が建てられた。お店もそれ程多くなく、ショッピングは大変だった。
近藤ユキ子	山形県	東京	市がある事も知りませんでした。	30年前	大変な田舎だと思った。	ゴルフ	
阿久津弘江	栃木県	東京都	わかりません	40年前	毎日うめたてがさかんで(ついで)こんな田舎に…と来た。小川に魚がおよぎ、野草がたくさんあった。	生活に夢中でした(働くこと)	預金金利がとてよかった
永井勇雄	兵庫県	兵庫県		32年前	田圃が多く自然豊かな町と感動した。子供も多くなり、明るい雰囲気があった。	スポーツ(テニス、バレーボール)	第一次オイルショック後で、日本経済が元気がなかった様に思う。
M. I	松伏町	松伏町		45年前	S. 38年頃は区画整理で、住宅も余りなく淋しく感じた	バレーボール、編物、文化しゅう。	歴史と文化の流れと住みよい発展
井上瑛久江		東京都足立区	小学一年生の時遠足で久伊豆神社に行った。特におおきく田舎だった事だけおぼえています。	19年前			当時、ローンがたいへんだったことだけおぼえています。
小野田吉秀	荒川区	荒川区荒川	S33年頃は日光・鬼怒川に旅行した時、車で行った程度で回舎と思った。	41年前	S42年に引越して会社(足立区)に通勤して不便に思った。	仕事オンリーで他は特になし。	日常の生活に追われ特になし。

前野靖男	東京都	東京都葛飾区	ほとんど知らなかった。(市名程度)	39年前	田畑が多く、交通の便など不便な面があった。空気がきれいで、子育てには最適であった。	約り	今ほど生活に余裕が、世の中はなにかよるものがある。人間関係も暖か、道徳でも好つたりはるかに暮らした。現在暮らし易かった。
木村 正	越谷市					学生です。	
原田秀一	秋田市	秋田市内		20年前	千間台西地区に転居。今後の発展が大きい。ニュータウンのイメージがあった。	少年野球チームのコーチとして、子供と地域コミュニティを楽しむ。	バブルの最盛期、不動産の高騰。
高倉和嘉子	石川県金沢市	石川県金沢市		33年前	家の周囲に田んぼがあり、子育てにいい所がたがら喜びました。	子供とマラソン、ドッチボール、サイクリング	品物もたくさんあり、のどかな生活を送り、以前は(東京)にいたため、こちらで新鮮な野菜が手に入りました。
小野博康	仙台市	東京都足立区	知りませんでした。	41年前	家の前の赤山街は、雨がどろんどろんと周囲は田園が少なかった。	仕事ですね。	昭和33年は上京して、就職した年。(月給)初任給8800円!!なべ底景気から岩戸景気に。1万円札発行、インスタントラーメン発売等々。
北川義男	埼玉県松伏町	松伏町	純農村地帯で全てが素朴			草野球に熱中	カップラーメンの出現等により食品の変化。化学工業の隆盛振りが印象にある。
生出弘三	栃木県宇都宮市	東京都品川区	越谷の印象は全くありませんでした。	34年前	日比谷線が開通し、都心に通勤が便利で、田園風景が印象に残っていた。	トレッキング(ハイキング)スキー	朝鮮動乱が終わり日本経済が好況に向かい、生活に豊かさがでてきた。
山口正夫	富山県	富山県南砺市		27年前	自治会活動が活発で、子供たちがたくさんいて、ほのぼのとした雰囲気があったように思います。	三角ベース野球と川遊び。(昭和33年当時)	コーヒーを飲んでいる家庭が随分裕福で、上品に思えたものです。(昭和33年当時)

島根岱助	埼玉県 幸手市	越谷市	2町8村が合併してできた越谷市は日光街道沿いに町並みがあり、米作を中心とする田園地帯であった。	53年前		大学生、越谷に住んで通学した。理系（数学専攻）のため、毎日勉強に追われていた。	戦後10年余を経過し、戦中・戦後の混乱から徐々に生活向上して行った。中ちつた社会になりつつあった。
菅原貞良	山形県	東京都 杉並区	「草加、越谷、千住の先よ」ぐらいしか覚えていない。			マージャン	やっと、テレビが見られた。皇太子の御結婚。
篠原陸郎	東京都 世田谷区	東京都 世田谷区	全く記憶無し。地名すら知っていたかどうか。	32年前	住居購入時、通勤に日比谷線であり、安くて通な事があった。夏になると幼児の息子が「オニヤン」と「オニヤン」をとりまじめた。	高校在学中で、高一時、歴史部所属。長野県市古底に在籍していた。	安部関争が始まり、教師を講義しなみであった。
岩瀬静江	越谷市 大沢	越谷市	近郷近在は畑が多く、買い物等は越谷、大沢の商店が賑わっていました。			新宿の歌声喫茶「灯」の食堂で三バーグラムの食みだすは自分で	給料は日給200円位。昼食は30円。60円位。一室を並べて寝ていました。
田中利昌	越谷市	生まれておりません。					
田端功政	埼玉県 児玉郡	市川市	(田舎町…いい意味でも、悪い意味でも)	40年前	市役所…暗い事務所の印象が残っています。	子育て（子どもが心と変、妻は小児科に電話予約しました。）	混んだる東武電車が社会対応した。変化に一杯がた。
中島美代子	石川県 金沢市	石川県 金沢市		28年前	家の横が田んぼで、かえり近くに友ア、本当ではないが、越谷市に思いました。	息子のサッカー（越谷FC）に浦中熱中します。	子どもたちも遊ばせたい。生活が良くて、高き谷ン。

中村垂夫	東京都	杉並区		30年前	逆川沿いにはタンポが多く残り、カエルの大合唱。都心に近い田舎の感じ。	時刻表オタク	
須賀由紀子	埼玉県	久喜		49年前	住んだのはS34.4からですが、S31.4に勤めで通ってはいました。駅古くは古い商家、市が立派な町並み、その口は賑わっていました。又、元荒川の土橋を渡る田畑が広がり、自然豊かな風景でした。	子ども達の教育や趣味、箏曲。	(高くない)オーバー1枚買うと月給1ヶ月が飛んでしまったり覚えがあまりありません。(当時の給料8000.-ぐらいだった?)
泉 雅彦	新潟県 長岡市	東京都 練馬区		34年前	ホテルの飛び交うずいぶん田舎だと思った。(自分の故郷と環境が似ているので、良かった。)		
松原茂樹	横浜市 鶴見区	東京都 世田谷区		48年前	越谷駅西口にある「よし」があるのに、西側に出るのに赤山を渡るのに線路を渡りました。苦勞しました。「水たまり」がありました。	仕事、仕事、仕事、時々野球。	安保さわぎも終わり、オリンピックが景気があつて、建築屋はウハウハだと思えます。
大澤 茂	埼玉県	春日部市	越谷市平方と春日部市大畑の境に住んでいたの、親しみやすかった。	4年前	千間台西は区画整理され、大変美しい街並みだと思った。	小学校1年生なので、今でいう昔遊び(ペーパーマ、竹とんぼ、竹馬など)に熱中。	高度経済成長の時期が来ている感じがするという感じがした。
外山澄子	静岡県	静岡県		3年前		勉学	発展途上国で貧しい極東の小さな敗戦国。
間野栄一	茨城県	北多摩郡 保谷町	浮世絵版画にある風景、松並木と宿場町の頃のものとされます。			短波放送の受信機が良し、短波の仕組みが面白い。	勤務先の青山に焼け跡が多くありますが、人情が厚いのが印象的でした。東京オリンピックの準備がすすんで、弾が飛び交わりました。

堀井博之	越谷市	越谷市	人口流入が始まった頃かな、まだ何もない（コミセンとか）これからどんどん発展し始めるときで、元荒川では水泳が出来なくなった頃かと思いますが、あまり古い事なのでわかりません。ちょっと前は、元荒川を泳いで北越谷の桃園に桃をいただきに行っただけを思い出します。			駅伝（埼玉）に越谷青年団として出場してました。	
斎藤博道	羽生市	羽生市	中堅、中核と分る先生方が越谷方面へ越されて、越谷が発展しているという印象を持っていて、魅惑の地域ではないかと思っただけです。			ソフトボールのチームとして、他の職員試合をしました。）	戦後の暗い、貧乏な生活から脱却し、ややゆとりを持った生活ができた時代になりました。
荻野功夫	東京都	越谷市北越谷	50年前の越谷は純然たる農村でした。当時の人口は4万人で、北越谷、蒲生、周辺の駅が賑わっていました。			大岳会と云う山岳会を作りました。6人1年1回登山を楽しんでました。	日本全国で高度成長期に入り、商業、不動産が活発になりました。
荒金照登	東京都港区	東京都		35年前	せんげん台駅はジャリ路、国道以外には舗装がなかった。ホテルが夏に出た。カエルの音がアジ原で、人口ゼロ、駅が我が家から見えた。	仕事（機械の設計）	働けば働くほど賃金が上がった。土地も上がっていった。田中首相が出て、日本全体が景気が良かった。
小川康治	東京都葛飾区	東京都葛飾区	多分、埼玉のまちだろう程度。	37年前	都市化進行中で、プレハブ校舎、通勤地獄、医師不足等々基盤整備の時代でした。	働き盛り、仕事で色々ありませんでした。	第一次オイルショック前後、戸急激な変化にも関わらず、全国的に自治体が誕生したのも、その反映だったでしょう。

伊丹常和	東京都中央区	東京都大田区		30年前	梅林が沢山あって、良い環境だった。	写真	右肩上がりを経済。
鈴木也津子	東京都	東京都台東区	40年代に入ってから居前シ物です。		当時買ったインシュールはカエルと自然に	生活、子育てに終わらぬ夢中でした。	幼児3人保育園に入れたお金の代に
吉川輝男	東京都	東京都			妻の実家が45年前東京より移住。当時、大田地区は田園風景が印象的でした。	洋画、コンサート。	長島選手の巨人入団、栃若時代、フラフープの大流行、ミムナーチーム等々、20才を大分過ぎていました。
鈴木祐司	東京都	東京都荒川区		32年前	自分を含めて東京都から移住して来ると急増。住宅増加、都心への通勤難の越谷でした。	とにかく仕事多忙で、ゴルフくらいでした。	オイルショック、列島改造等で成長経済から加熱経済に突入。ふりかえればクレージーでした。
山内繁男	東京都	東京都足立区		35年前	越谷の船渡は田、畑でした。	ソリデット模型を作る事です。これは現在も続いています。	
林 佳子	埼玉県騎西町	越谷市		50年前	子どもの頃から田舎に住んでいたので、おなあとおなあと思っていました。		経済的にも0からの出発だったので、特に苦しみませんでした。一人暮らしから結婚・子育てと職業を持ちながら共働きで夢中でした。
松岡利器	栃木県	東京都世田谷	殆ど縁が無かったので、田舎と感じています。			軟式テニス	なべ底景気から岩戸景気に移行する途中で、社の衝突も激しかった。社会の中間層の発生する基になった。
斎藤幸裕	栃木県宇都宮市	栃木県宇都宮市		20年前	雨が降ると直ぐ道路が冠水する町。	仕事オンリー	越谷移住時 天皇崩御（昭和天艦「なだしお」事件）。
遠藤 洋	新潟県	新潟県	生まれた年が33年なので…？	26年前	けっこう、いなかなど思っていた。川が多い所だと思った	特に無し	わりと、おちついていました。景気もわりと良い方だったと思う。

小泉平八郎	滋賀県 東近江市	東京都 中央区 日本橋	千住の先の田園 地帯。	37年前	川で小ブナがよ く釣れた。子供 はエビガニ、お たまたまじゃくし、 蛙、イナゴ、ト ンボと自然の中 でのびのび遊ん でいたが、水害 で移住する。	魚つり	通勤電車の混 雑、スーパーの 次々開店、医 療機関の不備に 困る。
飯泉信夫	東京都 北区	目黒区 中目黒		30年前	越谷駅、蒲生駅 とも古い。田舎 へ来た日比谷線 武蔵野線が驚 入る。	うたごえ喫茶が たいいと新橋の よ一丁目下日参 がのみて たのしみ た。	政情不安のた め、安保国会の デモを国返し で繰り返した のが印象に 残っている。
柿沼孝行	東京都	春日部市	蒲生に知人が居 り時々行きまし たが、駅前は一 色。ぼんぼり の田んぼ。現在 の蒲生駅を みてもびっくり する。			高校1年生。柔 道部に所属し て毎日練習し た。	たしか、ロカビ ーブーム。き たら一度行 ったが、な かうたう かとう かとう かとう
殿山悦三	広島県 尾道市 瀬戸田町	広島県 尾道市 瀬戸田町		35年前	山の無い随分 園情な町で した。	越谷に自宅を 建てた。自 宅はなつか しい。ゴルフ が凝っていた。	ヨーロッパ、ア メリカ行で、終 つて夢中 で仕事 した。
鈴木弥七	福島県 郡山市	福島県 郡山市	1976年当時、越 谷駅をおりた印 象は、少し淋し い印象があり ました。市役所 は立派だったの を覚えています。		千間台駅前周 辺は草の生え た。特に進 んだ。	散歩。近辺の 歴史に興味 あり足で たかめた。	生活はマンショ ン等の増加 で少しずつ 便利になっ てきました。
川原文子	栃木県	東京都 世田谷区		30年前	転校生だけで クラスが来る ほどのマンモ ス弥栄小学校。 6年のクラス に二男が転入 した。あの頃 はみ～んな 輝いていた。	親も子も仲 よく熱中 していたか もね。	回想の世の中 は、今より住 みかたも良 い。岸内閣 時代、社会 党景気。岩 戸ミッチー (美智子)ブ ームで、テ レ増。預金 が利子が良 かった。鯨 肉にはパナ ナ高級品、 など。
藤川吉洋	広島県 呉市	広島県 呉市		23年前	東京へのアクセ スが予想外に 大雨が降ると 道路がすぐ冠 水する。	ゴルフ	子供の大学入 試重なり、大 変な生活して いました。

江森峯子	東京都足立区	東京都足立区		40年前	大林～北越谷の 間、店も無く、 又、街灯も無か った。	家を買ったばか りで働いてばか りだった。	高度成長期なの で給料も上がっ たが、物価も上 がった。
石井敏夫	東京四谷	東京大塚	全くわかりませ んでした。	38年前	毎年台風期にあ ります。今思っ たように住居 は神明町。	特になし	銀行等のコン ピューター細分 化が進みつつ あります。
水上 清	東京都大田区	鎌倉市		37年前	ベットタウン、 古い駅舎に開 の踏切り、田 畑、さえずり の蛙、小魚の なにし、蛙の に驚く。小泥 れば道は泥ん と化し大閉口 大雨降れば松 原、弥栄など 洪水騒ぎ。朝 は電車の大ラ ッシュ。	仕事	沖縄の本土復 帰、日中国交 正常化、狂乱物 価、円の変動相 場制へ移行。
小林光男	東京都中央区	台東区根岸	18歳の頃、こ 先 と、千住から はさっぱり。	39年前と 22年前	平屋建てだった 東武蒲生駅の時 長選挙の満員電 向かい手をふ 島村さんの姿が 有。(下りホム ムから)	ゴルフを覚 え始めた頃 は後年知 らぬ。	39年前：駅東 口のケーキ店 の楽しみの一 つ。22年前： ローンが始ま り、子供は南 の一年生。お やかでした。
古谷一雄	東京 当時(府)	越谷市大相模	大相模地区とは 現在の越谷レ イクタウンの 近くであり、 長閑な田園風 景が広がって いた。		まさに昭和33 大相模地区と 増城谷呼回 が合併し「越 谷中学校」と された。第一 の卒業生であ る。	卓球やバレー ボールが行な う大会に 加わった。	ドルが360円 、ラーメン30 円、「コッペ パン」にジャ ムを塗って もらい、パン を買った記憶 あり。
青山榮吉	東京都足立区	足立区	「草加・越谷・ 千住の先よ」と いう言葉がある ように、相当 な田舎だと思 っていた。			映画が好きで、 脚本も書いて 送った。会社 で「無銭リッ カー」の返 り金で、腰 を動かした。	学生運動が激 しくなってきた 。受けた。社 会(特にメー カー)の米英 から、技術導 入により、生 産を本腰を入 れ始めた。
天井 実	東京都葛飾区	東京都葛飾区	草加、越ヶ谷、 千住の先よ、 いどです。	20年前		仕事 仕事 仕 事	学生騒動

樋口武介	長野県	東京神田	大泊に家を建てたのですが、せりげん台駅の全くの道でした。(武里団地が出来たばかりでした)			仕事に熱中	当時は「物」を売れば何でも作れる状況で、絨織関係でしたが、皆ん良く働いて、飲みました。
小原勲三郎	東京都文京区	東京都文京区		40年前	越谷駅を発着する電車が東に、朝な夕な富士山が西に見えた。	大江戸しらべ、囲碁、写真。	・警察官職務執行法で世論、国会紛糾 ・大相撲6場所制と成団地族 ・東京タワー ・流行語＝有楽町曲 ・歌謡曲 ・まじょイーストセラー ・大江健三郎『飼育』 ・テレビ＝事件記者 ・映画＝鉄道員、無法松の一生 ・大卒公務員初任給1万200円
宮川 進	滋賀県	滋賀県	知らなかった	25年前	生まれ育ったところ（近江部の農村部）で、異和感があった。	滋賀県の田畑で土器破片の探集をしていて、土器破片の跡と破片がまらなから土器を見つけたのを楽しみました。	石原裕次郎の時代の日常生活は週2回封切りをずらして見ました。そそしみでした。
笠松陽子	大阪市	大阪市	ぜんぜん知らない所です。	41年前	すごい田舎だと思いました。	子育て	浅間山荘事件
川端孝夫	東京	東京		33年前	道路が舗装されなかつたので、通勤に（東京）苦勞した。	スキー、映画鑑賞。	第一次オイルショックで石油について国民が注目した。
堤竹宏吉	栃木県下都賀郡	東京都杉並区			旧日光街道は歩行者が多く、商店も繁盛している様子です。また、越谷駅西側には農地、畑も多く残ります。	バブル時代で、毎日仕事を汗流した。政治や経済について考えた余裕はなかつた。（彼方此方にアタックして返答は返ってこなかったです）	夢中に仕事に追われ、毎日を送る日でした。仕事に追われ、政治や経済について考えた余裕はなかつた。（彼方此方にアタックして返答は返ってこなかったです）
阿辻正義	東京都	東京都中央区日本橋	地下鉄、日比谷線が乗り入れの情報ぐらい	昭和39年	東武線の両端が見渡す限り田園の風景でした。	自営業のために仕事が多忙で一年を500日で過した。ヒマはなし。	高度経済の成長期

宮内和代	旧満州国 新京	東京都 荒川区		38年前	不便なこととし の寒さに閉 ました。	冬 新築住宅の中 で子育て等互 いに協力し合 いました。	越谷に来て2年位 で石油ショック に見舞われ、事 業体系が変わ り、経済的に困 窮しました。
大須賀治郎	福島県 いわき市	東京都 江東区深 川	「草加・越谷一 千住の先だ 社休みの将 棋の相手が云 ったので知 った程度。	28年前	・家の廻りは田 園だったが、現 在は住宅地で埋 め込まれていく 。・川が豊か く、水と緑が かきで住み心地 が良い。・東武 越谷駅以南で 高架複線とな り、都内へと 通る。・日光 筋にあり、宿場 町として、名所 が多くある。	・スポーツ（野 球・バレーボ ル・バトミン トン）・趣味（水 墨画・書道）	海外：ソ連軍ア フガニスタン侵 攻。モスクワ五 輪日本不参加 (65ヶ国)。米 大統領レーガ ン氏。韓国大統 領が金大中一 斗に。イラクの 開始。冷戦た の東西間、各 暗雲。国内：大 平首相内閣が 善した。銀座で 生風呂敷包み に1億円の札 を拾う。王選 引退。長島百恵 辞任。山口百恵 結婚。世相語： それなりに。カ ラスの勝手で しょう。ピカ カの1年生。み なで渡れば...
小原裕美	横浜市	横浜市		37年前	田園風景の静 かな町	子育てで夢中 でした。	
福井勝衛	青森県 八戸市	北海道 札幌市		28年前	急激に膨らんだ 宅地開発も峠を 越し、完全な ベッドタウンの べで、工業団地 ない所。私の ころは未だ田 畑が残って、 ほっとしてい た。	もっばら会社 人後で、未だ は拡張して いかなかった か。	オイルショック を乗り越え、 未だ企業た ち着いて来 たかと思 った。
浅川恵子	岡山市	越谷市	越谷の街は宿場 町の残る商店 あり、旧国道、 新国道（現旧4 号）が走り、ま わりはまだまだ 田園風景豊かな 農村地に囲ま れていました。			高生。中央中 学校の前身は 谷の沢中越谷 の合併で中央 のとなりまし た。	高度成長時代 に全活気あ る世の中。高 義務教育から 進学する者 が増え、教 育に少 な が む け ら れ て き ま し た。
谷岡隆夫	大阪府	東京都		45年前	道路の未舗装 が多く、雨天 歩行は難渋し ました。	登山	テレビの普及

山崎 清	越谷市	越谷市 大袋地区	大袋駅時刻表は午前10時～12時ごろ1時間1～2本でした	45年前	当時は田や畑がたくさんありました。	柔道 切手・古銭	
土川博子	東京都	東京都		20年前	黄砂が無い、まだ広がった地から将来田園都市誕生かと。	歌声喫茶に初めて行っ て感 激 盤 通い。	安保条約反対の 若者たちが 強く感 じた。 岩戸景 気のはじまり。
寺田一代	滋賀県	滋賀県		38年前	宅地開発に急増。電話がな か な か 少 な く 道 路 も 舗 装 さ れ て い な い 所 が 多 か っ た。	子育て	
加藤幸一	東京都 足立区	東京都 足立区	草加の先に越谷があることを知らなかった。	35年前	25年前に越谷に移住。特に越谷は初めての勤務地。越谷の印象が田舎風。増田舎なま丸坊主。	めんこ、ちゃん ごっこなどの 子供の遊び。	テレビ、力道 山、皇太子殿下 のご成婚。
松浦節也	高知	大阪		36年前	水田の中にあと家が建つていき、風景が次々変わっていった。	マージャン、仕事。	ベトナム戦争反 対だ、革新都 だと大衆運動に エネルギーがあ った。
高橋初枝	大沢町	越谷市	高い建物は無 く、駅舎は平屋 建て。貴賓が おりました。日 光街沿いにお 店が点在し、 日々の生活に 不自由はあり ませんでした。 また、大沢橋 から越谷駅入 り口まで二日 が近隣の集 まり、植木・種 衣類等を求め てきました。			シャンソン、学 生グループのマ ンドリン演奏 なども楽しみ でした。	我家に初めてテ レレビが入り ました。
坂巻絹江	東京都	東京都	何も知識はありませんでした。	38年前	地方としては大 きな町並みと 思った。	子育て	経済的には元 気があり、パート も一時金が出 ました。

古川由二	秋田県	東京都台東区	静かな田園地帯	46年前	道がせまく田舎の感じ。	へら船釣り	
西川峰雄	滋賀県	滋賀県	越谷という名、知らなかった。	40年前	結婚して越谷に住んだが、町は静かで少し歩けば田園が有り、公害の無い良い町だと思いました。	野球	通勤電車が混み合った。
天野 武	静岡市	東京都		33年前	今では住宅地ですが、当時周辺は田園が広がっていて、田植え時には道路に蛙やザリガニがあふれ、のどかな場所でした。	企業戦士でしたから、特にありませんでした。	石油ショックなど、厳しい時代でしたが、人間関係は今よりゆったりとした世の中であったと思っています。
高崎 力	越谷市	越谷市大沢	4年前に町村合併で「越谷町」となったが、全然変化見られず旧態のまゝ。			越谷の郷土史研究のグループの結成	農村から都市への動き（当初は工業都市を目指した）
酒井 正	東京市(都)本所区(墨田区)	東京都中野区		23年前	武蔵野線（南または西）浦和駅から西船橋間を時々利用したのことで通過駅の一つ。当時は沿線全て本当に田園のみが多く、駅前のみビルが立ち始めていた。	TVで野球、週一で映画鑑賞程度。	産業経済が上向き。商業美術の業界にいたの時代で、忙しい時代、幕開けの感。働いていさえすれば、他に不安はなかったという幸せな時代。
菅波昌夫	東京都下谷区	東京都下谷区現台東区		43年前	昭和40年5月越谷へ引越。東京への通勤に蒲生駅を利用した。駅前の道路は“ダート”なので、雨の日は長靴を履き靴を持って会社に行ったこと。夜は自宅の近辺は田園も多く夜な夜な蛙の合唱が賑やかだった。まだ並みもまだ発展途上だ。スーパーはなくて商店は頑張っていた。	歴史読本を読むこと。会社で野球。旅行好き。夜は楽しくお酒を飲みビリヤードで遊んでいた。	①昭和40年ベトナム戦争で米国が北爆を始める。②2人目の女子誕生。

佐藤光夫	群馬県	北千住	千住一草加の先だよ	47年前	現住地は道が悪かった。	ガソリンエンジン2級整備士取得中	日比谷公園で自動車ショー開催。スバル360誕生。
石川辰三郎	栃木県 山村です	栃木県 田舎	一日一日発展して町は変わりまじた。若い人活気が有りました。	35年前	①駅前には賑やかでした。②お祭りも盛大でした。③商店も賑やかでした。	ボーリング ゴルフ	小学生が多く学校では仮校舎が多い。駅では通勤客が多く後押しがありました。家の前にもザリガニがいました。
坂本誠一郎	広島県 福山市	広島県 福山市		18年前	まだまだ田畑も多数見受けられ、ほど良い田園風景と思えました。	硬式テニス部 (高校生)	現天皇美智子皇后のテニス結婚披露宴で明らかになりました。(男子テニス部に俄かに女性達も入部し、にぎやかになりました)
市川巴隆	愛知県	東京都 荒川区 日暮里		45年前	越谷市制施行50周年になるが、移住して来た時はまだ若い市であり、越谷駅、蒲生駅に近い所より一戸建て平屋(4畳半、6畳の間取りに簡単な台所、トイレのみ取り桶付き。土地20坪で)100万円台で手に入る低所得用の建築ラッシュでした。	当時、会社の勤務に熱中していました。	初の日米宇宙中継の映像。グラスネからの悲報殺のニュースです。
小嶋千代	越谷市	越谷市	9才でした。			れんげ草畑でゴムとび、ドッチボール、手ぬぐい袋を作りながらを入れてボールにしました。	給食がありませんでしたので、もみ干しときんぴらとか、切干大根などのおかずでした。
大川 博	足利市	横浜市 金沢区	久伊豆神社の藤を見に行ったことしか記憶がない。今の市役所はあし原だった。			大卒初任給ほどの二眼カメラを買って、写真を撮りにあちこち出かけた。	東京タワーが初冬のころ完成した。建築物に関心があり、当初から完成まで5、6回ほど足を運びその都度変化する夕日に聳える姿がすばらしかった。
山本希八	東京都	神奈川県 横須賀市		25年前		ゴルフ	

野口祐許	越谷市 谷中町	越谷市	田園地帯。見渡す限り田んぼと一部に樹木が見えた状況でした。			なし	
飯塚多摩子	入間郡 越生町	埼玉県 越生町		30年前	住まいの周囲は草原が多かった。隣は駐車場。当時、住宅が4軒。	遠くまで通勤していましたが、花やお祭り等活習って家が少なかった。	近くにスーパーがなく、個人商物で買いだ。
山本 昭	東京都 中央区	宇都宮～ 名古屋市 に移住		28年前	東武線の混雑がひどく、早く復々線が完成しないかと思つた。(計画より相当遅れていた)	ゴルフ	第一次、第二次石油ショック後の停滞期で、今にして思えばバブル景気前夜だったか。
三宅宗議	宮城県	宮城県 石巻市		14年前	特色のない平凡なまちだと思つた。『市史』を読んで、その一端を知つたが、文化的活気が乏しいのが現在の市民の責任だ。居心地は悪くない。	板碑の考古学的研究(埼玉県に移住した目的がそれだから)	政治・経済・生活etc、悪いものに尽きる。悪くはなつたが、これからは越谷だということではない。
角田 久	群馬県 渋川市	群馬県 渋川市		14年前	首都圏に近く、交通の便、自然環境にも恵まれた大変生活するのに良いところ。	週末のジョギング・書道・読書等です。	自由党・新党みらい旗揚げ。また年に3回首相が変わり、政界混乱し安定がなかった。
伊佐馬悦子	東京都 足立区	東京都 足立区	かなり田舎			定時制高校に在学中なので、仕事との両立で精一杯でした。	昭和32年 南極に昭和基地設置のニュース
松本マツエ	茨城県	東京都	田舎にきちゃって何をしたらいいのか不安でした。	20年前	駅の階段の木にふしの穴があいていて面白かった。		今になって見れば子育ての最中が大変だったが、一番いい時期だった。
田中かよ子	越谷市 蒲生	越谷市	自宅や回りも木々が多く、田畑・稲作が盛んで空気が澄んでいた様に思いました。(工場も少なかった)			少々ファッション関係に興味がありません。	電気製品など出てきて、生活向上の時代の様に思われた。

遠藤和夫	東京都調布市	東京都調布市		35年前	<p>地区には、ルエつとり。がタ利区群まみ覚 里にカ牛住り。水ホ古地方ゴでい澄に 地がエガみ。清の平ナ泳水鮮明 大に。に。びのは遊び川はてた。も 廻りが庭に。うても無遊び川はてた。も 田が。に。びのは遊び川はてた。も 住夏合がウき鳴した増沸ル根でれし今 当時水初のルき鳴した増沸ル根でれし今</p>	<p>高校よりの活動を 高和弓(3段)を でしてました。</p>	<p>の論宅ユ地め建生ル価こ 相造住シ里埋宅。ユイ物起 首改が谷大がれショクめ 栄島ラッ水らッはショク占 中本列築越水らッはショク占 日で建てた築活シ買る。</p>
簗 高道	東京都	東京都中野区		43年前	<p>駅にたり道であ雨履雨入替事にま 生あに時はれが、をてにきた象り 箱が象に装い所、靴迄靴履し象り 蒲が象に装い所、靴迄靴履し象り 下駄が象に装い所、靴迄靴履し象り 当が象に装い所、靴迄靴履し象り</p>	<p>当時、学生でし 映画・音トしま が、コよく鑑 をした。</p>	<p>アルたてて パートしま手当 が、1日の手が が300円でした。</p>
鈴木タカネ	新潟県高田市	新潟県高田市		22年前	<p>とたる見か、げ下御民正かとし さんい見か、げ下御民正かとし 屋見て初めが、親住儀ばそ住 産を見初めが、親住儀ばそ住 不家を見て初めが、親住儀ばそ住</p>	<p>編物</p>	<p>なまは、田長移めら待野用安 景も良く足り、面もより求か番野 気手不足り、面もより求か番野 景も良く足り、面もより求か番野</p>
酒井達男	東京都墨田区	東京都墨田区	越谷駅のホーム眺めらみ 越谷駅のホーム眺めらみ 越谷駅のホーム眺めらみ	43年前	<p>現在、草加に住聞ふって 居。越谷弁のわ 居。越谷弁のわ 居。越谷弁のわ</p>	<p>野球と歴史探訪</p>	<p>えっねしき展育 教なはをま発教 少年に首覚が、に 軍国敗戦、首覚が、に</p>

鈴木政子	越谷市 大成町	越谷市	道路はジャリ道で、自動車が移動の手段として増え、越谷まで行かなくなった。			地域婦人のためのPTA活動など、生活改善に力を入れている。	典型的な農村地帯で、嫁の地位向上など生活改善が必要な情勢であった。
仲井美知子	富山県	東京都		21年前	緑と川が多く。高いビルが少ない。空気がきれい。	ジャズダンス 卓球	大島三原山大噴火、チェルノブイリ原発事故災害・社会不安。明るい話題は利根川博士のノーベル医学生理学賞を受賞。
近藤ユキ子	山形県	東京都	市がある事も知りませんでした。	30年前	大変な田舎だと思った。	ゴルフ	
木村 正	越谷市	越谷市				スポーツ (中学生です)	
渡辺和照	郡山市	郡山市		25年前	当時越谷駅は木造の駅であったと思う。駅事務所のトイレを通勤時に気持よくお借りできたこと。今でも感謝できません。	受験勉強中であつたと思う。	昭和36年大学1年の時だっと思いが、安保にかがらされた、弁当が出たと思うが間違っていないかもしれませんが。
中澤元紹	旧樺太		昭和44年当時(引越してきた当時)	39年前	萎びた純田舎町で人口は3万人ぐらいか。市内も未舗装で道路はぬかるみ、長ぐつが一番。市役所も現ヨーカ堂付近の村役場だった。	新聞記者として半人前、飛びまわっていた。	右肩上がりの明るい経済情勢と労働運動、極左運動、浅間山荘事件が起きた。
内藤録次	越谷市	越谷市	日光街道における越ヶ谷宿の面影をとどめ、毎月二と七の付く日には市が立ち、近辺から人が集まり賑わった。			電力会社の社員で、当時市の主催の駅伝大会に出場するなどした。	私は19才で現役兵として20年満州で終戦、復員しました。戦後の名残りで政治は不安定。市役所前に赤旗があった。

展示作品一覧

越谷市郷土研究会では越谷市で実施する文化行事に参加して、会員の研究・調査した資料の展示を行い好評を得ております。平成19年から平成21年の展示作品を一覧にまとめました。以下の展示のほかに、イオンレイクタウン開館記念展示会と市立図書館展示会に参加しました。

越谷市民文化祭

越谷コミュニティセンター 大ホール ホワイエ

第40回 平成20年11月	1) 50年前の越谷を訪ねる (市制50周年を迎えて)	原田 民自
	2) 越谷地域の町村の変遷 (")	加藤 幸一
	3) 川口市のお女郎仏と大沢	岩瀬 静江
	4) 新発見! 越谷在住の絵馬師たち	木原 徹也
	5) 越谷市内の渡し場	篠原 陸郎
	6) 越谷市内の草創期の小学校	菅波 昌夫
	7) 花田のスナッカラ地蔵	秦野 秀明
	8) 越谷市民がほこれる「中島の鷲山」	山本 泰秀

越谷市民まつり

越谷市立中央市民会館

第34回 平成20年10月	なつかし50年前! くらしと遊び 渋谷コレクション展示 (市制50周年を迎えて)	渋谷 正芳
----------------------	---	-------

こしがや文化芸術祭

越谷市文化連盟 平成20年度

越谷コミュニティセンター ポルティコホール

平成19年度 平成20年2月	1) 新川の岩槻古道 - 新川は古綾瀬川だった	加藤 幸一
	2) 今はなき不動道	〃
	3) 越谷古道	〃
平成20年度 平成21年2月	1) 葛西用水に架かる平和橋 (旧称・瓦曾根橋)	高崎 力
	2) 江戸時代の増林村の千間堀に架かる橋	加藤 幸一
	3) 絵図と古地図と写真でたどる大沢橋	原田 民自

越谷市郷土研究会 会員名簿

敬称略・五十音順

2009年5月22日現在 345名

1	会田 清	42	井橋 義夫	83	小野 則子	124	甲田美恵子
2	会田 俊	43	今野 光子	84	小野 博康	125	小島 千枝
3	会田 克之	44	岩沢 明	85	小野 了子	126	小島 千代
4	青山 栄吉	45	岩瀬 静江	86	小原勘三郎	127	越村 英雄
5	阿久津弘江	46	岩根 富子	87	小原 祐美	128	小島 久枝
6	浅井 明	47	岩間 弘行	88	柿沼 孝行	129	小沼登茂子
7	浅川 恵子	48	上田 直之	89	笠松 陽子	130	小林かつよ
8	浅子 定子	49	植田 芳子	90	片桐 薫	131	小林 清子
9	阿辻 正義	50	上野 勉	91	加藤 幸一	132	小林 孝義
10	阿部 緑	51	上野 英子	92	加藤富士代	133	小林 静夫
11	阿部 光江	52	上原 保夫	93	加藤 雅子	134	小林 登
12	阿部 文治	53	江川 洋子	94	香取世志男	135	小林 光男
13	天井 実	54	榎本紀美子	95	金子 寛	136	小松崎登美子
14	天野 武	55	江森 峰子	96	金子 三郎	137	小山 淳子
15	荒井 邦夫	56	遠藤 和夫	97	金子 美子	138	近藤ユキ子
16	荒井 敏浩	57	遠藤 久子	98	金田 宏	139	後藤千代子
17	新井美代子	58	遠藤 洋	99	亀田すみ子	140	斉藤 英夫
18	荒金 照登	59	大石 ふく	100	川上喜代蔵	141	斉藤 博道
19	荒木 恭子	60	大川 博	101	川上 金蔵	142	斉藤 幸裕
20	有元 淳子	61	大川 昌三	102	川島 喜代	143	酒井 正
21	安西 利夫	62	大崎 葉子	103	川添ハルミ	144	酒井 達男
22	飯島 信吾	63	大沢 茂	104	川原 文子	145	坂巻 絹江
23	飯泉 信夫	64	大須賀治郎	105	川端 孝夫	146	坂本 梅香
24	飯塚 英志	65	大関たつ子	106	菅野かよ子	147	坂本誠一郎
25	飯塚多摩子	66	大谷 達人	107	菊池 三郎	148	桜田 洋子
26	生出 弘三	67	大塚 国治	108	岸 サク	149	櫻庭 弘康
27	池田 仁	68	大西 チエ	109	北江 千代	150	佐々木一磨
28	伊佐馬悦子	69	大野 紳一	110	北川 義男	151	佐竹 春江
29	石井 敏夫	70	大野 浩	111	北澤 萬司	152	佐藤 弘二
30	石川辰三郎	71	大橋 浩子	112	木原 徹也	153	佐藤 修實
31	石黒 茂	72	大港 信作	113	木原もと代	154	佐藤 光夫
32	石渡 ミチ	73	岡井三枝子	114	木村 恵仲	155	佐藤 陽子
33	泉 雅彦	74	岡野 助夫	115	木村 正	156	篠塚 義雄
34	和泉 守	75	岡本 金夫	116	久木田順子	157	篠原 英弥
35	磯谷 知子	76	小川 康治	117	楠原 昇	158	篠原 陸郎
36	伊丹 常和	77	小川 正雄	118	熊谷 正博	159	柴崎己代子
37	市川 巳隆	78	荻野 功夫	119	倉持唯枝子	160	渋谷 正芳
38	伊藤 キク	79	押切ナヲエ	120	栗田 勝行	161	島根 岱助
39	伊藤 貴美	80	小曾川弘美	121	黒田 恵子	162	清水 初江
40	伊藤 靖二	81	小野 肇	122	黒田 信子	163	霜田喜美枝
41	井上璣久江	82	小野田吉秀	123	小泉平八郎	164	神保邦士郎

165	管 清子	211	田村 芳枝	257	花町 文美	303	峰 孝久
166	須賀 弘	212	土川 博子	258	浜 富雄	304	箕輪 三郎
167	須賀 慶子	213	土屋 清江	259	浜島はじめ	305	宮内 和代
168	菅波 昌夫	214	堤竹 宏吉	260	林 知子	306	宮川 進
169	菅原 貞良	215	角田 久	261	林 佳子	307	三宅 宗議
170	須賀由紀子	216	津山 正幹	262	原田 秀一	308	宮下 孝雄
171	杉浦 健之	217	寺田 勝彦	263	原田 民自	309	武藤 淳次
172	鈴木 進志	218	寺田 一代	264	樋口 武介	310	村上 劉治
173	鈴木世津子	219	寺田 桂子	265	平田 博子	311	村山 初枝
174	鈴木タカネ	220	照井 春吉	266	深井 久子	312	室橋 和子
175	鈴木 照子	221	東條 悦子	267	符金 俊治	313	最上 忠二
176	鈴木 秀俊	222	東條 時久	268	福井 勝衛	314	森田 傳一
177	鈴木 正男	223	殿山 悦三	269	福井 恵子	315	森田 三男
178	鈴木 政子	224	富沢 康雄	270	福田 朋子	316	森中 重樹
179	鈴木 弥七	225	外山 澄子	271	福田 ふく	317	守屋不二夫
180	鈴木 裕司	226	豊田 重	272	藤井佐登子	318	八木下邦夫
181	関 幸保	227	内藤 録次	273	藤川 吉洋	319	矢口 博孝
182	関根 和夫	228	仲井美智子	274	藤田 浩行	320	谷塚由紀子
183	染谷 耕司	229	中尾 浩久	275	藤原 治郎	321	柳田 明雄
184	染谷 勇蔵	230	中沢 元紹	276	古川 由二	322	藪 高道
185	染谷 高行	231	中沢 正夫	277	古田 美雄	323	山内 繁男
186	高木 正次	232	中島 栄子	278	古谷 京子	324	山口 正夫
187	高久 昌代	233	中島美代子	279	古屋 賢一	325	山口美津江
188	高倉和嘉子	234	中野 鉄雄	280	堀井 和由	326	山崎 清
189	高崎 力	235	中村 梅子	281	堀井 静枝	327	山崎 弘治
190	高田すみえ	236	中村 栄子	282	堀井 博之	328	山崎 孝二
191	高田 哲夫	237	中村 幸夫	283	本田 ミヤ	329	山崎 定治
192	高梨 和信	238	永井 勇雄	284	本銚 文子	330	山崎 治子
193	高野栄次郎	239	永作 公道	285	本間 清利	331	山崎 ミツ
194	高橋 とき	240	長瀬由木夫	286	坊野 清之	332	山本 昭
195	高橋 初枝	241	名倉三津枝	287	前野 靖夫	333	山本 希八
196	高山 はつ	242	新野トモ子	288	牧瀬 富美	334	山本 泰秀
197	瀧田 雅之	243	西川 信徹	289	増岡 武司	335	吉井ミチ子
198	田口 典子	244	西川 峰雄	290	増田 好子	336	吉田 和子
199	田口 正信	245	西島 孝	291	松井 久明	337	吉川 輝男
200	竹谷フミ子	246	沼倉 セツ	292	松浦 節也	338	吉田 忠雄
201	竹村 克男	247	根岸 久子	293	松岡 利器	339	吉田 文子
202	橘 ふさ	248	野口 玉枝	294	真継 幸男	340	吉野夫美子
203	田中かよ子	249	野口 祐許	295	松沢 開作	341	蓬田 敏晶
204	田中きく子	250	野沢 陽子	296	松澤喜代子	342	渡辺 和照
205	田中 利昌	251	橋本ミツエ	297	松原 茂樹	343	渡辺 景子
206	田中 直子	252	長谷川敦子	298	松本 謙一	344	渡辺 久剛
207	谷岡 隆夫	253	長谷川久一	299	松本マツエ	345	和田 尚之
208	田沼 隆司	254	長谷川義夫	300	松本 瑠美		
209	田端 功政	255	花田 秀虎	301	間野 栄一		
210	田端 嘉雄	256	秦野 秀明	302	水上 清		

NPO法人 越谷市郷土研究会 役員

— 平成21年(2009)7月～平成23年(2011)6月

常任顧問	谷岡 隆夫	高崎 力		
顧問	増岡 武司			
会長	宮川 進			
副会長	加藤 幸一			
幹事長	藤川 吉洋			
常任幹事	中村 幸夫	上野 勉		
幹事	永井 勇雄			
常任理事	青山 榮吉	安西 利夫	小泉平八郎	
	小林 光男	篠原 陸郎	原田 民自	
	水上 清	渡辺 和照		
理事	荒金 照登	岩瀬 静江	生出 弘三	
	北川 義男	木村 恵仲	渋谷 正芳	
	田端 功政	福井 勝衛	藤田 浩行	
	古谷 京子	宮内 和代	山本 希八	
監事	峰 孝久	吉田 忠雄		

NPO法人 越谷市郷土研究会 実行委員

— 平成21年(2009)7月～平成23年(2011)6月

新井 敏浩	大谷 達人	田中 利昌	角田 久
長谷川義男	浜 富雄	山口 正夫	山崎 清
山崎 弘治			

NPO法人 越谷市郷土研究会 会友

会田 俊	池田 仁	小原勘三郎	木原 徹也
鈴木 秀俊	堤竹 宏吉	本間 清利	山口美津江

会報「古志賀谷」掲載基準

会報掲載の混乱・異同をさけるため、基準を設ける。

一、会員・会員外の原稿を受けつける。

原稿は、越谷につながるもので、原則として独自性のあるものとする。

二、原稿の字数は次の各号とする。

(ア) 調査・研究の記録は、字数制限はしない。

(イ) 紀行・随筆は、二千字程度とする。

三、次の各号に該当する原稿は編集委員会で掲載の可否を審議する。

(ア) 特定の政治的主張、または政党勢力拡大を内容とする原稿。

(イ) 特定の宗教を流布し、または勧誘する内容を含む原稿。

(ウ) 営利を目的とする内容を含む原稿。

(エ) 差別の内容を含む原稿。

(オ) 戦争賛美を内容とする原稿。

(カ) 他人への中傷を内容とする原稿。

(キ) その他、特定の意図を含む原稿、または穩当を欠く原稿。

四、第三者の調査・研究・報告・書籍を引用するときは原則として著者名・書名・出版社名・出版年度を明記する。

五、会員名簿は、氏名のみを掲載する。個人情報保護のため、住所・電話番号は掲載しない。

六、本基準の変更は、理事会の議決を経るものとする。

付則 本基準の施行は、平成二十一年六月三十日とする。

あとがき

会報「古志賀谷」第15号を多くの皆様のご投稿により発刊の運びとなりました。史跡めぐりでは多くの方に執筆の依頼と写真撮影をしていただきました。ここに編集者一同厚くお礼申し上げます。今号は越谷市制施行50周年特集として「聞き書き」と「アンケート」を実施しました。この会報は地域同人誌として楽しく読んでいただくことを心がけております。ご支援をお願いいたします。

編集委員

青山 榮吉	和泉 守	加藤 幸一
篠原 陸郎	浜 富雄	原田 民自
福井 勝衛	宮内 和代	山本 希八

会報「古志賀谷」第十五号

発行日 平成二十一年(二〇〇九)七月十五日

発行者 NPO法人 越谷市郷土研究会

埼玉県越谷市千間台西二ノ十七ノ十六

代表者 宮川 進

印刷所 三光堂印刷所

埼玉県越谷市大沢一ノ十五ノ十四